

浜松市民文芸

62



浜 松 市

平成29年度 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

●講座

講座名	講師	開催時	受講料円
文学講座(春) -「雨月物語」の魅力に迫る-	松 平 和 久	4/5,12,19,26, 5/10,17 毎週水曜日(5/3除く全6回) 9:30～11:30	3000 (別途テキスト代800+税)
文章教室Ⅰ -文章の達人をめざして-	たかはたけいこ	4/16,5/21,6/18,7/16 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2000
川柳入門講座 -風刺やユーモアの センスを磨こう-	今 田 久 帆	4/23, 5/28,6/25,7/23,8/27 第4日曜日(全5回) 9:30～11:30	2500
現代文学講座Ⅰ ようこそ向田邦子 の世界へ	河原みち代	5/24, 31,6/7,14,21 毎週水曜日(全5回) 13:30～15:30	2500
短歌入門講座 -想いをみそひと もじで詠う-	村 松 建 彦	6/3,10,17,24,7/1 毎週土曜日(全5回) 9:30～11:30	2500
俳句入門講座Ⅰ -十七文字の自分詩に挑戦-	九鬼あきゑ	6/3,10,17,7/1,8 毎週土曜日(6/24除く全5回) 13:30～15:30	2500
歴史と文学講座 “眼から鱗”日本近 現代史を読み解く	金 原 増 吉	6/4,11,18,7/2,9,16 毎週日曜日(6/25除く全6回) 9:30～11:30	3000
朗読教室 -声であらわす文学の世界-	堤 腰 和 余	6/13,7/11,8/9,12,10/10,11/14 第2火曜日(全6回) 10:00～12:00	3000
夏休み絵本づくり講座 -絵本の中から何が出る? - 3～6年生対象 付添不要	井 口 恭 子	7/29(土) 13:30～16:00	500
文章教室Ⅱ -文章の達人をめざして-	たかはたけいこ	8/20,9/17,10/15,11/19 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2000
文学と歴史講座 -漱石の素顔に迫る-	折 金 紀 男	9/3,10,24,10/1,8 毎週日曜日 (9/17を除く全5回) 9:30～11:30	2500
現代文学講座Ⅱ -時代と共に変わる家族像-	河原みち代	9/16,23,30,10/7,14 毎週土曜日(全5回) 9:30～11:30	2500
文学講座(秋) -「雨月物語」の魅力に迫る-	松 平 和 久	9/4,11,25,10/2,9,16 毎週月曜日 (9/18を除く全6回) 9:30～11:30	3000 (別途テキスト代800+税)
俳句入門講座Ⅱ -十七文字の自分詩に挑戦-	笹 瀬 節 子	10/7,14,28,11/4,11 毎週土曜日(10/2除く全5回) 13:30～15:30	2500
文学散歩 復活! 晩秋の新居・ 雄踏の名勝を訪ねて	和久田雅之	①11/ 9(木) 事前講義 10:00～11:30 ②11/16(木) 現地見学 9:00～16:30 ①②セットで	4000
文章教室Ⅲ -文章の達人をめざして-	たかはたけいこ	12/17,1/21,2/18,3/18 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2000
古典和歌講座 -古今和歌集に親しむ-	松 平 和 久	2/14,21,28,3/7,14,21 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3000 (別途テキスト代+税)

展示 9:00～17:00 5階 展示室

●企画展 収蔵展

企画展「井伊家と遠州の城砦ー直虎公ゆかりの地や人を訪ねてー」 3月5日(日)～6月25日(日)
企画展講演会:4/29(土)14:00～15:00 講師 小林佳弘 定員50名 参加費500円 先着順
企画展「版画でつづる井伊直虎公の物語」 7月2日(日)～9月3日(日)

*以降の収蔵展、企画展は計画中

●講演会

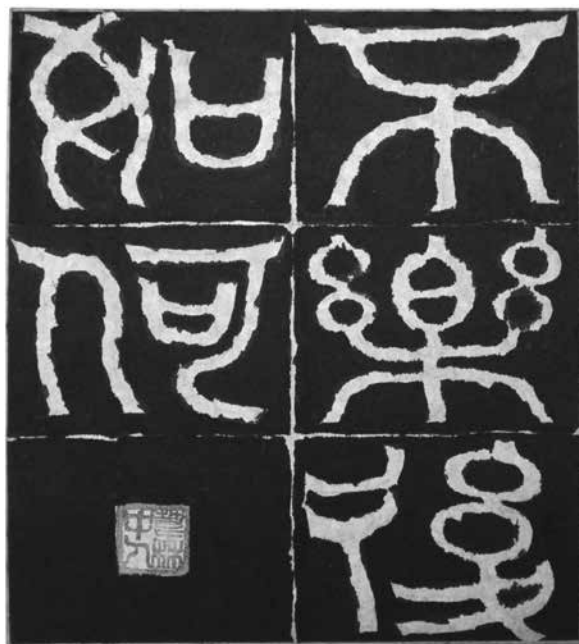
「歴史と文学探訪」 金原増吉 5月14日(日) 13:30～15:30 500円
「井上靖と浜松」 和久田雅之 8月6日(日) 13:30～15:30 500円

●朗読会

「夏目漱石を読む」 堤腰和余 10月22日(日)14:00～15:00 500円
「賢治さんを読む」 やたべ駿 12月24日(日)14:00～15:30 500円

浜 松 市 民 文 芸

第 62 集



不樂復如何

楽しまして復（また）如何（いかに）せん

（相生垣瓜人）

浜 松 市

選者		小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
		竹腰幸夫	柳本宗春	那須田稔	中西美沙子	たかはたけいこ	埋田昇二	村木道彦	九鬼あきゑ	鶴田育久
										今田久帆

☆ 表紙絵

酒井 伴 治

平成28年度浜松市芸術祭「第64回市展」

芸術祭大賞受賞作品 工芸部門

題「表裂刷毛目紋壺」
ひょうれつはけめもんこ

十kgの粘土を、径で二十cm、高さ五十五cmまで轆轤で引き上げます。白化粧をして、回転させながら刷毛を下から上へと三回、しかも上下させながら付けます。後は、ただひたすら描いた形へと膨らませて完成です。爆ぜと刷毛目の線の動き、変化等も楽しんで制作しました。

「浜松市民文芸」第62集 市民文芸賞受賞者

部門	受賞者
小説	幸田健太郎
児童文学	小杉康雄
評論	住吉玲子
随筆	河島憲代
詩	中谷節三
短歌	中津川久子
定型俳句	大庭拓郎
	竹内としみ
	清泉陽子
	遠藤ゆき
	猫田伸
	高畑かづ子
	鳥井美代
	松本重延
	平幸子
	杉本たつ子
	中村瑞枝
部門	受賞者
定型俳句	山本ふさ子
自由律俳句	吉野民子
	松永真一
	山田眞二
	松本憲資郎
	大平悦子
	木俣とき子
	中津川久子
	岩城悦子
	竹山恵一郎
	鈴木千代見
	しおくろう
	竹川美智子

目次

小説

市民文芸賞

万石の夢	幸田健太郎	10
希望という名の施設	小杉 康雄	21

入選

触れる	内山 文久	37
-----	-------	----

Little Cocoons	馬場 純平	51
----------------	-------	----

符合	鈴木 篠千	67
----	-------	----

何も言わない	名倉 民子	82
--------	-------	----

住吉の森語り…古墳	鈴木 啓之	94
-----------	-------	----

選評

選評	竹腰 幸夫	110
選評	柳本 宗春	111

児童文学

市民文芸賞

イチヨウの葉っぱのてがみ	住吉 玲子	112
だいこんちゃんのおうえん	河島 憲代	118

入選

金魚の国の色エンピツ	遠藤 ゆき	126
------------	-------	-----

カッパのモ太郎	金指美美代	135
---------	-------	-----

小さなめだかの大ぼうけん	宮島ひでこ	144
--------------	-------	-----

評論

市民文芸賞

続キリシタン大名高山右近	中谷 節三	165
--------------	-------	-----

大化の改新の謎	滝澤 幸一	172
---------	-------	-----

選評	中西美沙子	179
----	-------	-----

随筆

市民文芸賞

片瀬の思い出	中津川久子	181
家族通信	大庭 拓郎	183

入選

痛みが転移	石山 武	185
-------	------	-----

一人勝手に直虎フィーバー	北山 七生	187
--------------	-------	-----

四国遍路	サルン カムイ	189
------	---------	-----

一病息災	阪口佳寿子	190
------	-------	-----

隣のお爺さん	前田 繁喜	192
--------	-------	-----

選評	たかはたけいこ	193
----	---------	-----

詩

市民文芸賞

ゆずりは …………… 竹内としみ …… 196
 ママとパパへのQ …………… 清泉 陽子 …… 197
 ミイちゃんの雨 …………… 遠藤 ゆき …… 199

入選

青い海 …………… 石黒 實 …… 200
 障害者 …………… 加藤貴代美 …… 201
 伐採 …………… 金子千江子 …… 202
 想い人 …………… 久野 悦郎 …… 203
 ハミリムービー …………… 滝澤 幸一 …… 204
 はりねずみ …………… 早川奈美江 …… 204
 ごめんね ミミちゃん …… 松田 健 …… 205
 夢 …………… 水川亜輝羅 …… 207
 白い魔女 …………… 花 信 栖 …… 208
 選評 …………… 埴田 昇二 …… 209

短歌

市民文芸賞

猫田 伸 高畑かづ子 鳥井 美代
 入選

杉山 勝治 福田美津子 岡部 政治
 高橋 幸 宮本 恵司 知久とみゑ

鈴木 壽子	松浦ふみ子	野島 謙司
中村 弘枝	安藤 圭子	飯田 裕子
石原シズカ	石原新一郎	犬塚賢治郎
今駒 隆次	岩城 悦子	内田 一郎
内山 智康	鶴原 伸代	太田 静子
小笠原靖子	岡部 博和	岡本 蓉子
織田 恵子	恩田 恭子	河合 和子
倉見 藤子	小林 和子	佐藤 彰一
寒風澤 毅	清水 紫津	新谷三江子
すずきとしやす	鈴木由紀子	鈴木 芳子
滝澤 幸一	橘 すず音	田中 貞夫
寺田 久子	長浜フミ子	浜 美乃里
松島 良一	峯村友香里	宮澤 秀子
村木 幸子	山田 文好	赤堀 進
渥美 進	あ ひ る	飯尾八重子
池 蜻蛉	石井 泰子	石黒 實
伊藤 友治	伊藤 美代	井浪マリエ
内山 文久	太田あき子	太田 初恵
大庭 拓郎	岡本 久榮	加賀の女
影山 ふみ	加藤貴代美	神谷 敦史
川上 とよ	川島百合子	河田 琴栄
北島 はな	木下 文子	久保 静子
畔柳 晴康	近藤 茂樹	佐野実佐代

清水 孜郎 白井 忠宏 鈴木 和子
高橋 紘一 高山 紀恵 竹内オリエ
土屋香代子 手塚 みよ 鴫多 健
戸田田鶴子 中村 淳子 中山 和
新田えいみ 野中 睦己 袴田 成子
橋本まさや 坂東 茂子 飛 天 女
平井 要子 平野 旭 藤生 好則
堀内 独行 前田 繁喜 水川あきら
森 安次 八木 若代 柳 光子
矢野 重夫 山本 勝彦 吉野 正子
米澤寿鶴子
選 評 …………… 村木 道彦 …… 227

定型俳句

市民文芸賞

松本 重延 平 幸子 杉本たつ子
中村 瑞枝 山本ふさ子 吉野 民子
松永 真一 山田 眞二 松本憲資郎
大平 悦子
入 選
松本 重延 平 幸子 杉本たつ子
中村 瑞枝 山本ふさ子 吉野 民子
松永 真一 山田 眞二 松本憲資郎
松永 真一 山田 眞二 松本憲資郎

大平 悦子 安間あい子 澤木 幸子
小川 恵子 岩崎 芳子 鈴木 智子
佐久間優子 大村千鶴子 渡辺きぬ代
長谷川絹代 金子 典子 勝田 洋子
池谷 俊枝 金田 みき 梶村 初代
袴田 吉一 縣 裕子 浅井 裕子
阿部 盛司 池田 智子 池谷 和廣
池谷 静子 一 灯 伊藤 久子
伊藤 齊 岩城 悦子 岩崎 五郎
岡部 博和 岡本 久榮 小楠恵津子
刑部 末松 加藤貴代美 加藤 新恵
神谷知恵子 川口八重子 河嶋美智子
川瀬 慶子 金原はるゑ 倉田 たか
倉見 藤子 佐藤たえ子 佐原智洲子
柴田ミドリ 清水よ志江 白井 宜子
白井 忠宏 鈴木 和 鈴木 利久
鈴木 秀子 鈴木由紀子 鈴木 嘉子
高橋 久子 高林ちゑ子 竹内 定八
竹田たみ子 竹平 和枝 土屋香代子
徳増 貴子 戸田 幸良 中津川久子
長浜フミ子 西尾虹之助 西尾 わさ
二橋 記久 野島 謙司 能勢亜沙里
野中美美子 浜 美乃里 林田 昭子

伴 周子	藤田 節子	藤本 幸子
古谷 とく	堀川千代子	松本 賢藏
松本みつ子	宮澤 秀子	森 明子
八木 裕子	矢野 重夫	山口 久江
山崎 暁子	山下美恵子	山田 知明
横井弥一郎	和久田雅広	和久田りつ子
赤堀 進	あ ひ る	飯尾八重子
飯田 裕子	池 蜻蛉	石井 泰子
石塚 茂雄	伊藤アツ子	伊藤サト江
伊藤しずゑ	伊藤 俊夫	伊藤清太郎
伊藤 美代	井浪マリエ	犬塚賢治郎
今駒 隆次	岩崎 良一	右崎 容子
内田 一郎	内山 恭子	内山 文久
梅原 栄子	大木たけの	大田 勝子
太田沙知子	太田 静子	大屋 智代
岡本 蓉子	小楠 達司	小野田みさ子
影山 ふみ	春日さかえ	糟谷 修子
加藤 和子	加藤 政子	金取ミチ子
金子千江子	金子眞美子	神谷 敦史
加茂 桂一	川合 妙子	川合 泰子
川島百合子	川島 泰子	北村 友秀
切畠 正子	久野 悦郎	畔柳 晴康
後藤 とも	斉藤三重子	坂田 松枝

佐藤 彰一	佐野 朋旦	しおくろう
清水 孜郎	清水 康成	下位 満雄
不知 火	新村ふみ子	新村八千代
新村 幸	菅沼 静子	鈴木 節子
高鳥 謙三	高橋 常子	高橋 敏彦
高林 文博	高林 佑治	高林よ志子
滝澤 幸一	竹内オリエ	竹下 勝子
竹田 道廣	竹山すず子	田中美保子
黒葛原千恵子	坪井いち子	鶴見 佳子
手塚 みよ	寺田 久子	鴫多 健
徳澄 英樹	徳田 五男	利徳 春花
戸田田鶴子	鳥井 美代	永井 眞澄
永田 恵子	中村 貞子	名倉みつゑ
西尾 淳子	猫田 伸	野嶋 薦子
野末 法子	野末 初江	野田智恵子
袴田 定代	橋本まさや	浜名湖人
晴 詩	平野 旭	藤生 君江
堀内 独行	松江佐千子	松本 緑
馬淵 文夫	水川 放鮎	宮本 恵司
山岡 照彦	山口 英男	山下 静子
山下 昌代	山中 伸夫	山本晏規子
横田 照	和久田しづ江	和田 有彦
渥美 進	川上 とよ	紺田みどり

自由律俳句

市民文芸賞

木俣とき子

中津川久子

岩城 悦子

入選

生田 基行

伊藤 有美

河合 文子

木俣 史朗

戸田 幸良

飯田 裕子

岩城 悦子

大庭 拓郎

小笠原靖子

木俣とき子

倉見 藤子

竹内オリエ

長浜フミ子

橋本まさや

藤本ち江子

岩本多津子

大道くにを

嘉山 春夫

畔柳 晴康

鈴木あい子

周東 利信

竹田 道廣

手塚 全代

寺沢 純

戸田田鶴子

中津川久子

中村 淳子

浜 美乃里

原川 泰弘

水川 彰

石田 珠柳

伊藤 美代

太田 静子

岡本 蓉子

花 信 栖

神谷 敦史

河村かずみ

しおくろう

白井 忠宏

選評

山下 宏

和 季

九鬼あきゑ：265

川柳

市民文芸賞

竹山恵一郎

鈴木千代見

しおくろう

竹川美智子

浅井 常義

有本 千明

恭 子

馬淵よし子

伊熊 靖子

内山 敏子

竹川美智子

山口 英男

山田とく子

石田 珠柳

伊藤 信吾

木村 民江

小島 松太

鈴木 覚

鈴木千代見

竹平 和枝

竹山恵一郎

中津川久子

中村 雅俊

馬淵 征稍

水川 彰

宮澤 秀子

荒木いつか

金取ミチ子

河村 幸

畔柳 晴康

斉藤三重子

しおくろう

鈴木すみ子

鈴木 均

高橋 博

高柳 龍夫

竹内オリエ

鶴見美佐子

寺田 文子

徳田美知子

選評

山内久美子

渡辺 憲三

鶴田 育久：275

選	戸田 田鶴子	戸田 幸良	堀内まさ江
評	谷野 重夫	渥美 進	飯田 裕子
	池田みのる	伊藤 美代	猪原 萱風
	岩城 悦子	太田 静子	太田 初恵
	大庭 拓郎	岡本 蓉子	影山 京一
	加藤貴代美	加藤 典男	加藤 弘
	金子眞美子	神谷 敦史	川上 とよ
	久保 静子	倉見 藤子	櫻町すなほ
	佐藤 彰一	佐野つとめ	白井 忠宏
	高鳥 謙三	高橋 紘一	高山 功
	高山 紀恵	田中 恵子	辻村 栄市
	手塚 美誉	寺田喜代子	寺田 久子
	遠江 竹庵	どぜう	戸塚 忠道
	仲川 昌一	中村 楨次	長浜フミ子
	名倉 太郎	野末 法子	橋本まさや
	浜名湖人	浜 美乃里	晴 詩
	平野 旭	馬塚 五朗	松永 真一
	山下 宏	米澤寿鶴子	
	今田 久帆		

288

「浜松市民文芸」第63集作品募集要項……………289

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作
品は選考順または五十音順としました。

第62集の作品応募状況

部 門	作品点数	部 門	作品点数
小 説	一六	短 歌	五一四
児童文学	九	定型俳句	一、一一七
評 論	三	自由律俳句	二五〇
随 筆	三五	川 柳	四六一
詩	二五	計	二、四三〇

小説

「市民文芸賞」

万石の夢

序

「私は戊辰瓦壊^{まま}の節には、右京太夫と申しまして、幕府に勤めておりました。大澤と申す家は、持明院の末流で高家の初めでござります。旧記は散逸いたしまして何もござりませんが、徳川家の初めあたりに、当時二条関白某公と図り、足利時代の諸札式を調べ、式部の一職を設けんとて、大澤・吉良の両家をあげ高家と称し、諸札式を司どりましたが起原でござります。その後、高家を称えまする家も段々に増加いたしました。今川氏の末か、織田氏の後で位階を高くし、ことごとく有職を以て世襲の役といたしました。

大澤家は遠州^{ちゆうしゅう}の堀江、堀川の二ヶ所の城を持ち、今川に属しましたが、家康公の時に徳川氏に従いました。高家のうちで高禄なのは畠山の五千石を第一とし、小禄なのは品川の三百石で、私の家は三千五百石でした。高家の知行はみな地

方^{かた}でござりました。

王政維新まで、公武の間ことは高家の役と決まっております。幕末には御所と二条城の間の往復は、すべて高家が達しておりました故、大政奉還の時には私が慶喜公の辞表を御所へ持つて参りました。その時の私の官位は従四位下の侍従で、昇殿のできる訳でありました。

公武の間ことは、何でも伝奏の公家に照会いたしました。京都には上使屋敷又は高家屋敷と申すがござりました。大政奉還の御書附は、飛鳥井中納言へお渡ししたと思えます。口宣^{くせん}案^{あん}も位記^{いぎ}も淳和奨学^{じゅわしょうがく}両院^{りやういん}の別当^{べつどう}などもすべて……」

(以下省略)

幸田健太郎

〔明治中期に刊行された雑誌『旧幕府』に「高家の話」〕

として掲載された、元堀江藩主・大澤基寿^{もとしばきひさ}氏の語った史談の一部を抜粋。」

※1 現在、電鉄会社が経営する館山寺温泉・遊園地バルの場所である。

※2 慶応四年（一八六八年）の政体書により設置された中央政府機関のひとつ。後の太政官の前身である。

※3 密教の五大思想（空・風・火・水・地）を具現化したもので、中国が起原で日本で立体化したものである。

※4 宝篋印陀羅尼經を納めた塔。
中国が起原で鎌倉時代に日本に伝来し、塔を拜めば、一切の罪が消え極楽往生できるという。

一

慶応四年（一八六八年）の夏は、殊の外暑かった。二百六十五年間続いた徳川の世が終り、九月八日に「明治」という新しい時代に入った。が、これからどんな世になるのか皆目見当がつかず、国民は不安な気持と酷暑の中で喘いでいた。

又左衛門は浜名湖庄内半島の西側（内山・和田・村櫛地区）

で、藩が進めている大規模な干拓工事の現場にいた。この工事は元・家老である父・安間新右衛門が、藩の所領を一万石にするという計画の元に始めたものだが、中風に倒れて臥せってしまった。その為、息子である又左衛門がこの工事の責任者となって、采配^{ふく}を揮っている。

又左衛門もまた、今後の世の成行きには一抹の不安はあったが、元来の生真面目さから目の前の仕事に没頭していた。着物の胸を開け、湖面を渡ってくる涼しい風を受けながら、目を細めて沖の工事^{はた}を眺めている。快晴の空からは、ギラギラとした残暑の太陽が照りつけ、浜名湖の西岸には、湖西の山並が青く霞んで見える。

この辺りは、遠くまで浅瀬が続いている。水際から二町程の沖合に、赤い布切れを付けた杭が、横一列に延々と打ち込んでいる。禪一丁の大勢の人夫達が、もつこと手押し車で、その杭に向かってどんどんと土砂を押し込んでいる。赤胴色をした人夫達の体が、汗で光って見える。この工事もあると二年もすれば完成し、立派な田んぼができる見込である。又左衛門はそれを最大の楽しみとして、毎日ここに通っている。

突然、後ろから、

「安間さま……」

振り向くと、殿の身边に努める石塚という若侍が立っていた。

「殿が、用事があるから至急城に来るようにと仰せですが……」

「おつ、そうか。分かった、すぐに行くから先に戻ってそう伝えてくれ」

又左衛門は井戸で顔を洗い、身支度を整えた。城までの距離は一里程である。歩きながらいったい何のご用かと、しきりに考える。いかに小さな藩といえども、殿が直接自分に話があるとは、今迄には無かったことだ。又左衛門は不安な気がした。

唯、詳しくは知らないが、此の頃、駿府藩との間で何か難しい交渉事が起きているらしいとの噂が、藩内に流れてはいた。しかし、元・家老の息子とは言っても、単なる作事方に過ぎない自分には全く関係のないことだ、と気にも止めないでいた。

俗に、「大澤御殿」と言われる堀江城に着くと、汗を拭いて先ず石塚の所へ行き、案内されて殿の前に出た。殿は書院におられ、寛いだ恰好で本を読んでおられた。南側の障子は開け放され、庭には白い百日紅が咲いている。

「殿、又左衛門で御座います。遅くなりまして申し訳御座いません。至急の御用とは……」

「おう、又左か御苦労じゃ。もつとこつちへ来てくれ」。殿はこちらを向くと手招きをされ、本を脇に置いて座り直された。

「実は又左に折り入って頼みたいことがあるのじゃ、よく聞いて欲しい。過日新政府から、一万石以上の大名・旗本は、華族に取り立てるというお達しがあったのじゃ。」

又左も承知のとおり、我が藩は名目三千五百石だが、実高は五千五百石ある。これは旧幕府時代からみんな承知のことじゃ。そのうえ今、又左が担当している庄内の干拓工事が完成すると、丁度一万石になる計算じゃ。そこで重臣共と相談して、駿府藩には一万六石という上申書を提出させたのじゃ。ところが駿府藩からは、今それを早く引き渡せと、矢の催促なのじゃ。重臣共が代る代る対応したがどうにも苦しく、ほとほと困り果て、その役目を是非とも若い又左に命じて欲しいと言うて来ているのじゃ。私は是非とも、華族の一員に成りたいと思うておる。難しい役目だが、引き受けて是非成功させて欲しいのじゃ……」

又左衛門は驚いた。

全く考えてもみなかったことだ。家老の家に生まれたが、政治向きのことは全く苦手で、興味もない。今のように現場に出て、大勢の人夫達とわいわいやっている方が好きなのだ。とんでもない、自分の性格とは真反対のことではないか。藩内に流れていた噂が、まさか自分の所に回つてこようとは……。

無理だ。それに石高を誤魔化して、華族になるというのは、天子様を欺くことになるのではないか。殿の話聞きながら、又左衛門は強い疑念を感じた。幼い頃から、自分は天子様こそが国の中心で、それをみんなが協力して守り立てていくのが、本来の姿ではないかと思ってきた。

又左衛門は両手を畳につき、頭を下げたままにいる。額か

ら脂汗が滲み出て眼に染みる。痛い、眼を強くつむる。殿の姿がぼやけて見える。とても自分には務まりそうもない。断りたい。が、今ここで直接断ってもいいものだろうか。家臣として如何なものか……。頭が困惑し言葉が出せない。時間だけが流れていく。

突然、殿は腿に手を当てて一言、

「頼む——」

上目づかいにそれを見た又左衛門は、驚くと共に、咄嗟に頭を畳にすり付けて、

「微力ではありますが……」と、反射的に答えていた。

重い足を引き摺りながら、又左衛門は城を出た。頭は火の玉のように熱い。何も考えられない。工事現場に戻る気にもなれない。どこか静かなところで、頭を冷したい——。

城の北側に、館山たかやまというこんもりとした小さな山がある。

浜名湖に突き出た形で、その中腹には曹洞宗の古刹、秋葉山・館山寺がある。そこから北東に向かって、草木の生い茂った狭い山道を二町ばかり行くと、湖岸に出る。対岸の大草山とは至近距離で向い合っており、内浦湾の入口にあたる。

この水辺に、茶褐色をした大きな岩がある。真偽の程は知らないが、その昔、西行法師がこの岩の上に座して修行したと伝えられ、地元では「西行岩」と呼ぶ。

確かに西行には、

「館山の巖の松の苔むしろ都なりせば君も来て見む」という

歌がある。

その岩に登った。

内浦湾は鏡のように静かで、どっしりとした大草山の姿を、見事に映し出している。聞こえるのは、蜩の声と風の音だけだ。

殿とのやりとりを、静かに振り返る。

駿府藩はこの度の御一新で、田安亀之助様が徳川宗家を継がれ（徳川家達いえさと）、駿府七十万石を与えられた。駿府・遠江二国の大名、旗本の所領は全て家達様のものとなったのだ。我が藩にとっては大恩ある旧主であり、そのうえ規模においては、比べものにもならない。

そことの交渉である。

とても対等にはゆくまい。しかも、非は当方にあるのだ。殿のお気持も分からぬ訳ではないが、これをうまく纏めろと言われても、それは難しい相談だ。自分たちで都合のよい数字を出しておいて、行き詰まったらその交渉役を私に押し付けるとは、どういうことか。この理不尽さも腹に据え兼ねる。

私には私の信条もある。

新しい時代に入ったこの時期に、新政府の御達しを謀り欺くとは、如何なものだろうか。下命を受けた以上全力を尽すが、万策尽きたその時には……。

暫くして、殿には比度ひたびの上申書に対して、行政官※2から次の

ような藩屏に列する旨の通知が届いた。

大澤侍従

其ノ方領地ハ先般有高ノ本領安堵ヲ仰セ付ケラレタ
ガ、従前ヨリ旧幕府ニ於テ外様ノ列デ臣属デハナイノ
デ、以後諸侯列ニ仰セ付ケルカラ、藩屏ノ任デアル武備
ヲ充実シテ専ラ勤王尽忠ヲツクシテ御奉公致スヨウ御沙
汰スル。

行政官

殿は新政府からのこの通知に接し、大変な喜びようだった。待ちに待った華族の一員になれたのだ。職務上、朝廷をよく見てきた殿としては、長年の夢が適えられたのである。しかし、此所ここのにきて駿府藩との一万六石の所領の引渡しが出来ないとすると、全てが頓挫してしまう。殿はこの苦境を、何としても乗り越えなければならぬと、必死になっているのだ。

一方、又左衛門もまた苦しんでいた。

毎日、干拓の現場には出ても工事のことは上の空で、頭の中は駿府藩との件で一杯だった。先方から見れば、当方は家来筋にあたる。どんな筋書で話をもっていけばいいのか、いくら考えても堂々巡りである。

しかし、いつまでも放つとく訳にもゆかぬ。兎に角腹を括

って、先方の方と一度会ってみるしかあるまい。あれこれ考えないで、初回は白紙の状態であつてみて、そのうえで今後の対応を考えることにしよう。長く迷った末に、又左衛門は平凡な結論に辿り着いた。

明治二年（一八六九年）二月一日、快晴。又左衛門は意を決して、中遠・見付にある駿府藩の出先に、掛官の大竹庫三郎氏を尋ねた。覚悟したはずの訪問だが、やはりこの場に立つと、弱気の虫が出る。しかし、殿との約定がある以上、決して逃げては通れぬ途だ。

覚悟を決め、大きな声で案内を請うた。

通された部屋は、真ん中に火鉢がひとつあるだけの、質素な八帖間である。下座に座り室内を眺める。小さな床に椿の絵の軸が掛かり、地板の上には名の知らぬ花の一輪挿しが置いている。又左衛門は大きく息を吸い目を瞑る。

やがて静かに襖が汙り、大竹氏が現れた。「お待ちせ致しました」、静かな声である。又左衛門は両手を広くつき、大きな声で、

「この度は、いろいろと御雑作をお掛け致しておりまして、誠に恐縮に存じます。某は安間又左衛門と申す若輩者で御座います、今次、主人大澤の命により、例の所領のお引渡しの件でお伺い致した次第で御座います。何卒、宜しくお願い申し上げます……」と、深々と頭を下げた。

大竹氏は四十歳ぐらいの、落着いた雰囲気きずなの能史という

感じである。

又左衛門は、隣に置いた風呂敷包みの中から、紐で綴じた和紙の書類を取り出し、

「これがその高帳で御座います」と、そつと差し出した。

大竹氏は黙つて受取り、さつと眼を通すと、「では、この引渡しは何日になりますか？」

「はつ、誠に申し訳御座いせんが、いろいろと事情がありまして、いま暫くの御猶予を……」と、言いかけた途端、

「否、それは出来ませぬ。今迄の人も、唯待つて欲しいの一点張りで、理由を訊いてもさっぱり要領を得ず、困つておりました。実は当方も新政府に対して、正確な数字を報告せねばならず、もうこれ以上の猶予はできません。本日、確たる引渡しを頂けなければ、当方から実地調査に出向く所存であります」

と、きつい語調で断言された。

「……」

又左衛門は頭が真っ白になり、返事ができない。自分の考えの甘さをいきなり突かれた形で、心が激しく揺れる。大竹氏は優しい顔をされてはいるが、こと交渉事に於いては非常に厳しい態度だ。畳に目を落したまま又左衛門は頭が上がりず、時だけが流れていく……。

暫く沈黙が続くと、大竹氏はそれを見兼ねたのか、がらりと口調を変えて、

「これは、今すぐには引き渡しのできない理由があるのでは

御座らぬか。前の人達の態度を見ていて、そんな思いを持つようになりました。——どうですか、当方もこれ以上はもう待てないのですから、この辺で決着つけましょう」と、諭すように言われる。

困つた、返事の仕様が無い。先方からこう切り出されては、拒絶する術もない。殿の顔が頭に浮かぶが、どうすることもできない。大竹氏は、既にこちらの事情を感じ取つておられたのか……。さすれば最早これまでと、覚悟を決めた又左衛門は畳に頭を擦り付けて、

「申し訳御座いせん。今までの御無礼の段、心からお詫び申し上げます。何卒ご容赦下されますよう伏してお願ひ申し上げます……」

又左衛門は現在の実情を説明して深く詫び、実高での引渡しをした。情けない気持と共に、ある種解放された気分にもなった。

「但し、虚偽の上申書を出された以上、いずれ何らかのお咎めがあると、ご承知おき下さい」。大竹氏は最後にこう付け加えられた。

城に戻ってから、どういうことになるのか不安だが、ここ長らく悩んでいたことが一応決着し、又左衛門はさっぱりとした気分で帰路についた。この地方特有の空っ風が、心地よく肌を撫ぜた。

その頃、殿は東京に居られた。

又左衛門は、留守を預かる金澤利勝に報告した。

「馬鹿な事を申すなっ！これでは我々がせっかく丹誠込めてやった事が、全て水の泡ではないかっ！殿に何と言ってお詫びするっ！」

金澤家老は太い眉を吊り上げ、顔を真っ赤にして怒鳴りつける。口から唾を飛ばし、膝を激しく貧乏揺すりしている。又左衛門は頃合をみて、大竹氏との遣り取りの詳細を説明しようとするが、それさえもさせず家老は唯一方的に罵るだけである。又左衛門は観念して、ひたすら耐えて下がった。

情けない気持と共に無性に腹が立つ。

自分たちのやったことの尻拭いを押し付けられ、しかも、先方は既にこちらの魂胆にお気付きだったのだ。どうやって、こちらの希望どおりにはゆく筈が無いではないか。

「すまじきものは宮仕え」と言うが、今日の事は本当に堪えた。

真つ直ぐに家に帰り、又左衛門は自分の部屋に籠った。父上の寝ている部屋も一寸と覗いたが、老衰が激しくもう相談をかけられるような状態ではない。今回のことは、自分ひとりで乗り越えなければならぬ。今迄、割と呑気に生きてきたが、人生最初の大きな試験を迎えたことを、又左衛門は痛感した。建具の隙間から漏れる冷たい風が、又左衛門の心を余計に冷した。

それからというものは、藩内に物凄い嵐が吹き荒れた。その矛先は全て又左衛門に集中した。重臣達は藩存亡の危機とばかりに、口を極めて又左衛門を糾弾する。下臣達の多くもその尻馬に乗って、又左衛門を罵り暴行にまで及ぶ者もでた。果ては、又左衛門を亡き者にしようと相談しているのを、たまたま風呂屋で耳にした下男が、慌てて又左衛門の家に駆け込んだということもあった。

茲に至って又左衛門は、身を護るため関連する書類を持って、一時遠くの親戚宅に身を隠した。暫くして自宅には戻ったが、このままでは如何ともし難く、熟慮の末、大澤家の本家筋にあたる持明院家に対して、又左衛門はこの顛末を手紙でもって相談した。

同家からは、次の如く達しが届いた。

今般、当家庶流大澤家ノ奸臣共政權ヲ専ラニシテ容易ナラザル陰謀ヲ企テ、既ニ家の捐亡ニ関リ申スベキ処、其ノ方身命ヲ投ゲウチ誠忠ノ段感ジ入ツタ。尚、早々ニ奸臣共ヲ退ケ上下安穩ニ治メルヨウ、力ヲ尽シテ精忠ニ励ムヨウ、右ノ通り執達スル。

明治二年七月十九日

持明院家雑掌 高田大炊直弘

安田将監高則

安間又左衛門殿

又左衛門はこの御判物を得て、殿に朝廷に対して謝罪してもらい、何とか穏便な措置が願えられないかと画策するが、重臣達は全く相手にしない。

逆に重臣達の専横はますます酷くなり、藩内はばらばら状態となって混乱していった。このままでは收拾はおろか、自力での解決は不可能と考え、又左衛門は思い切って民部省に訴え出た。

原告・又左衛門が裁判で主張した主な点は、

一、被告・大澤基寿堀江県知事（明治二年六月の版籍奉還で、呼称のみが知事となる）及び元・堀江県重臣・金澤利勝他三名は、明治二年に原告が一万六石の虚偽の上申をしたと言っているが、明治元年九月十八日、既に一万六石の高帳を出して、大澤基寿氏は藩屏列になっていること。

二、自分は、父・安間新右衛門が始めた庄内半島西側の干拓工事に専念しており、駿府藩に提出した一万六石の上申書には、全く関与していないこと。

三、明治二年二月一日に、中泉に於いて堀江藩の村毎の高を、実高で駿府藩に引き渡したのは自分であること。

等であり、それらを詳細に記述した書面を提出した。

明治四年（一八七一年）七月十四日。

政府は体制固めのため、重要な制度改革を行った。即ち、廃

藩置県である。

この際には、堀江県も正式に誕生した。

ところが十一月十五日、堀江県の虚偽の上申書の提出及び民部省への提訴等に鑑み、政府は堀江県を廃し、浜松県に併合させる措置を断行した。つまり、堀江県は誕生して僅か四ヶ月で、消滅してしまったのである。

更に、これに追討ちをかけるように、十二月三日、左の判決が下された。

元堀江県知事 大澤基寿

右ノ者ハ藩屏列出願ノ節、旧臣共ノ申立ニ任セ篤ト事
実ヲ取り正シモ致サズ、旧地先ノ海面等開墾見込ミマデ
ノ地ヲ詰メ込ミ、一万石余ノ高附帳ヲ差シ出サレ、遂ニ
願イ通り仰セ付ケラレ、尚、上地ニナツタ場合虚飾ノ高
附ヲ差シ出サレタルハ不埒ニツキ士族ニ下シ、禁錮一年
ヲ申シ付ケル。

元堀江県大参事

同 小参事 金澤利勝
同 同 浜野従親
同 同 木部直昭
同 士族 内田貞男

右ノ者共ハ大澤基寿ノ藩屏列出願ノ折、一同相談ジ現

高ノ外二領分地先ノ海面等ヲ見込ミ、追ッテ開墾スルツモリダトテ永荒欠崩ノ名目ニテ書キ表シ、一万石余ノ高附帳ヲコシラエ差シ出シ、遂ニ藩屏列ヲ仰セ付ケラレ、追々上地トナル高附帳ヲ引渡ス場合ニ至リ、尚マタ虚飾ノ高附帳ヲ差シ出シタコトハ不埒ニツキ禁錮一年半ヲ申シ付ケル。

元堀江県士族 安間又左衛門

右ノ者ハ大澤基寿ガ藩屏列出願ノ砌、金澤大参事他三名ガ相談ジ疑問ノ高附帳ヲ差シ出シタコトハ承リナガラ、存意申シ述べ藩屏列ヲ仰セ付ケラレ、追ッテ上地相成リ高帳引渡シノ節、浜野元小参事ノ申シタコトヲ受ケ、虚飾ノ高帳ヲ差シ上ゲソノ上藩庁ノ書類ヲ携ヘ脱走シタコトハ不埒ニツキ禁錮一年ヲ申シ付ケル。

この判決に対して、六名は承伏して服罪した。明治五年春、大澤基寿氏は刑に服するため東京へ旅立ったが、見送る人は少なく、淋しい出発だった。

三

禁錮を終え、堀江に戻った基寿氏の姿は、酷く憔悴^{やつ}していた。

眼はくぼみ、皮膚の張りはなく、身体全体に生気がなかった。高家肝煎^{きんせん}として気位高く生きてきた基寿氏が、たとえ一年と雖も刑に服するということが、いかに心身共に堪えたか、想像に難くはない。

大澤家は、藤原鎌足を遠祖に持つ。

鎌足から数えて十三代目の頼通（摂政関白）、そこから分かれた頼宗（右大臣）の十二代目基秀が、十四世紀の半ばに遠江に下向し、旧地の地名「大澤」を名乗った。以来、約五百年間、二十代に亘って堀江城主としてこの地に君臨してきた。そのうち約三百年は徳川氏に仕え、主に朝廷との間において、高家肝煎として重要な役割を果たしてきたのだ。しかし、今回の事件によってその過去の栄光や權威は完全に失墜し、唯の中年の男となって戻って来た。

浜名湖の冬は、明るく開放的である。

満々と湛える青い湖水、それを囲む緑の山並、空に浮かぶ白い雲、こんな光景が毎日のように続く。

しかし、基寿氏の心は暗く、沈んでいた。豪奢な大澤御殿の中で、毎日をただ無為に過ごしているだけだ。やるべき事は何もない。尋ねてくる人もない。出掛ける当てもない。唯、ひっそりと世捨て人のように生きている。

だが、やがてそれよりもっと深刻な問題が浮上してきた。維新は歴史的な大変革である。政府の高官や大・大名ならいざ知らず、五千石程度の旗本にとっては、経済的な打撃が大きかった。もちろん多少の扶持はあるが、今までの生活を維

持するのはとても無理だった。

使用人を減らし、生活を切り詰め、売れるものは売るなどして、有らゆる手立てをしたが、所詮は時間の問題だった。とうとう限界に達し、基寿氏はこの御殿を売却して、東京へ行くことを決断した。

家の処分は、元・藩の金庫番で信用のおける山崎に託し、明治二十年の春、基寿氏の家族は東京へと旅立った。五世紀もの長きに亘って、この地を支配してきた大澤家の歴史が終った。堀江の歌人、石塚治平は、

「国の名は遠しといえど故里の家は忘れず君が行方を」と詠んだ。

大澤御殿の処分には、長い時間がかかった。それは大澤氏の個人資産であり、公正を期するため、各棟毎に競争入札の形が採られたからだ。売却の決まったものから解体し、搬出しなければならぬ。そのために膨大な時間と手間が掛かった。

大手門は寺院の山門に、家屋は近辺の学校の教室や宿直室にという具合にばらばらにされて、非常に安く叩き売られたというのが実態だった。材料や細工が一流で人が羨んだ御殿も、いざ売却となると廃材同様だ。売却で得たお金は山崎が東京へ送ったが、基寿氏はこれをどんな気持ちで受け取ったのだろうか。

その後の東京での大澤家の生活は、困窮を深めていったようだ。折にふれ堀江の住民に対して、生活資金の援助を求め手紙が届いた。又、理由は不明だが基寿氏はその後、平民

に下げられたという噂も流れた。

永い歳月が流れ、明治の御世もだいぶ落ち着いてきた明治四十四年十一月、基寿氏が亡くなったという知らせが東京から届いた。堀江を離れてから、もう二十年余が経っていた。

時代が変り、地元での関心もすっかり薄くなつてはいたが、又左衛門はこの知らせに、非常に深い感慨をもつて接した。若い頃に、地元で謂うこの「万石事件」に深く関り、その後の大澤家の命運にも大きな影響を与えた自分としては、複雑な思いが交錯する。果してあの時、裁判にまで訴え出たことが、本当に良かったのかどうか。それ以外に採るべき途は全く無かったのか……。又左衛門の気持は大きく揺れた。

又左衛門は勧めてくれる人があつて、今、地元で自転車店を営んでいる。最初は世間の目も冷たかったが、真相が明らかになるにつれて徐々に変わってきた。細々とではあるが、約しきく食べていく分には、何とかやっていけるようになった。先ほどから店先で、油に塗れた黒い手で頬杖をして、半時ちかくも思いに耽っている。来店するお客様はいない――。

人生とは不思議なものだ。

生きている当人にとっては頗る重いようでも、過ぎ去った後から振り返ってみれば、実に軽いものだ。大海に浮かぶ木の葉のようではないか。由緒あるあの大澤家が、あんなに急激に凋落し、日々の暮しにも事欠くようになるとは……。

世の中が続くかぎり新しい生命が生まれ、古い生命が消えて

いく。そして、生きている生命が社会を構成し、それぞれの人生の幸、不幸を演出していく。恐らくこれは、永遠に繰り返されていくだろう。華族への夢を見たばかりに悲運に散った基寿氏の心境は如何許りであつただろうか——。享年五十九、合掌。

又左衛門は既に父も亡くなり、老境の域に入つた。人生は自分の力で拓ける部分もあるが、それだけとは限らない。刻々と変わる外部の環境にも応じて生きてゆかねばならぬ。

自分としては、本来あんな事件には関係したくは無かつた。単なる作事方として維新を迎え、平凡な一市民としての一生を送りたかつたのだ。今、又左衛門はこの生業で細々と食べていけるだけで、良しとする心境になっている。限りある人生だ、焦らず、欲をかかず、あるがままに生きてゆくのが一番だと思っている。

珍しくお客様がひとりお見えになつた。又左衛門は慌てて席を立つた。

跋

浜松市西区庄内町に、曹洞宗の古刹、藤谷山・宿禰寺がある。鬱蒼とした樹木に覆われた長い石段を登りきると、広い平地に出る。正面には椎の木や孟宗竹の山を背景にした、四注造のどっしりとした本堂がある。古い和瓦葺きで質素だが、周囲の自然と調和して落ち着いた趣を醸し出している。

この寺は、室町の初期・文正元年（一四六六年）に命天慶受和尚が開き、開基はこの地にあつた佐田城の城主・堀江下野守久美という。

基寿氏の十一代前の基宿が堀江で死去した際、ここに埋葬して以来この寺が大澤家の菩提寺となつた。基宿から基寿氏の父・基暢までの十一代の見事な墓がある。

この墓は、真ん中に長方形の墓前祭祀域を設け、それを十一基の五輪塔と宝篋印塔がぐるりと囲んでいる。高家としての気品を漂わせていて、実に美しいものである。全国的にみても、これだけ長期間に亘る立派な石塔が、完璧な姿で残されているのは珍しく、浜松市の史跡に指定されている。

寺の前住職の話によると、大澤氏の子孫は現在横浜におられるらしいと聞くと、音信はなく、墓参にもお見えになつたことはないようだ、とのことだつた。

（中区）

希望という名の施設

小杉 康雄

天竜川の河口にはど近い処に海老町と呼ばれる小さな集落がある。

海老町の位置は、天竜川とその支流が合流する中洲であり、言わば両方の河川が造る土塁に周囲を囲まれた砂礫の町でもある。

民家の屋根よりも高い堤防のせいで、日没が早く日照の短い、囲われた集落である。

農家ばかりが狭隘な土地に軒を連ねて、密集して建てられた古い住宅の角地に、私が毎日通う通所介護施設『エスペランサ・7』がある。エスペランサとはポルトガル語で、希望と言う意味である。7はセブンと英語読みである。ちぐはぐな名称はこの際不問にしても、この施設を運営する会社は、市内にあと六店舗開業しているのだと思われる。入所の際の会社概況の説明では、4と言う数字は語呂が好ましくないの

で省いた。と言ったのを覚えていた。しかし、私が通う処はセブンであるが、エイトやナインも存在しているのかも知れない。実際のところは、何店舗在るのか、施設名の数字と店舗数が一致しているのかは、私には解らない。と言うよりも私には少し前の記憶が全く欠落していて、単に憶えていないだけの事かも知れない。

介護施設と言っても名ばかりで、元々は廃業したコンビニエンス・ストアの店舗を改装しただけの、簡易で小規模な平屋造りの見慣れた建屋である。その店の面影が、玄関先の構えに『家族市場』と訳す、大手コンビニ会社のアルファベットの標記が、薄れ消えかけた青色の塗装跡と緑のラインの残滓から、微かに読み取れるのである。

現在の介護保険制度に従えば、デイサービスとは、『介護予防通所介護』を指し、介護予防を目的に要支援者や要介護

者を対象にした、心身の機能低下を改善させる目的の共通のサービスに加え、選択的サービスを利用できる場なのだろう。介護サービスにも種類があることは何と無く理解できるが、気に入らないのは、名詞の頭と尻に介護を付けてサンドイッチにするなど、厚労省の官吏が自慢げに創った法律用語には、何とも虫唾が走る思いである。

マイクロバスが施設の駐車場へ到着するとヘルパーの女が入り口から飛び出してきて、私達を案内誘導してくれる。女は勤務体系によって異なるが、いずれも三十代から四十代半ばである。私にしてみれば彼女たちは閉経前の豊穡な肉塊であり、しかも私とは三廻り以上も年齢が若いので、腕を絡めての誘導は願っても無いことである。

白いスカーフで髪を覆うイスラム圏出身の女、ザイド内海さんの出迎えには、咽かえるほど髪に焚き込められた芳香で、私は脚がもつれた振りをして、よろめきながらの態勢で、褐色の首筋に唇を押し当てたこともしばしばである。その時の印象は強く、たとえば桜花の散る晩春の光景と重なり、甘味でアンニュイな雰囲気、なぜか梶井基次郎を即座に想い浮かべてしまうのである。別に彼の小説の『檸檬』や『愛撫』といった粗筋の連想では無く、全集に載っていた死の前年に撮影したという、椅子に腰掛けている梶井本人の真影である。短髪に刈り込んだ頭に着物姿のいでたちで、けっして美男ではない男の顔が鮮明に浮かんでくる。彼の少し尖った顎や厚く膨らんだ下唇が、私の眼前に意味も無く迫ってくるの

である。その後は決まって、私の咽喉の奥深くに苦い液汁が拡散して、たちまち厭な気分が陥ってしまうのが常である。彼の異様に張り出した両の頬骨が、偏屈で無頼の素行を象徴しているかのように思われ、彼と同じく積極的に周囲に解け込むことができない自分の姿に、重ね合わせてしまうのだろう。悪戯の代償は立ち直れない程の後悔と、ボディーブローを喰らった鈍い痛みを伴って、中枢神経まで痺れさせるのである。

介護施設の朝は、アサーション・トレーニングから始まる。アサーションとは自分の気持ちやきちんと相手に伝える伝達表現技法のことである。挨拶や会話などを通して、その場に合った適切な自己主張を促す為の、訓練方法のひとつなのである。自己表現の苦手な老人達は、明らかに不条理と思われる指示や命令に対して、相手の威圧的態度の強弱や社会的地位、年齢等の条件をともしれば優先させがちで、反論や拒絶ができないと考えているのだろう。その結果、自己の感情や信念さえも心の奥底へ抑え込むことになり、ストレスを蓄積させて鬱や孤立の要因を助長すると言うのである。

アサーションはベトナム戦争当時のアメリカで提唱されたコミュニケーション手法のひとつで、大義なき戦時下の絶対的服従に抗する為の、自己主張のトレーニングだったのかも知れない。これが今頃になって、極東の片田舎の介護施設で実践されているとは、教育理念の伝播の凄さを、改めて考え

ずにはいられない。

通所介護施設『エスペランサ・7』のスタッフの陣容は、ヘルパーの女、介護福祉士の女、盲目の機能訓練士の男、パート従業員で管理栄養士の女、そして皆から店長と呼ばれている女責任者の計五名の陣容である。朝夕の送迎バスの運転手の菅野智君は、本店に居て送迎ルートの途中に立ち寄るだけなので、常駐ではないが、消えた天井灯の交換や浴室の剥がれたタイルの補修など、顔を見れば容赦なく雑用を押し付けられている。

入所者の定員は十名で、全員が医師から認知症と診断を下された、要介護度二から四と公に判定された者達ばかりなのである。

脳の萎縮や頭部外傷などによる脳の損傷に起因する精神的な障害を、器質性精神障害と医学では分類する。この器質性精神障害の代表的疾患が認知症である。認知症の症状から世間では永らく痴呆という呼称で、蔑すむ傾向が続いていた。最近まで、耄碌爺さんなどと不快な言葉を浴びせられることもあった。近頃では認知症という呼称が一般に定着しているようだが、私達にとってはどの呼称で呼ばれても、決して自分の好いものではない。

認知症の中でも、脳の萎縮の程度が進行しているものを、アルツハイマー型と呼ぶ。本人の自覚症状が無く徐々に進行してゆき、やがて人格の崩壊に至る。それとは別に、脳卒中や脳梗塞の発症が原因で起こるものは、区別して血管性認知

症と呼ぶ。こちらは時によって症状に波動があり、一応人格は保たれている場合が多いとされている。両方の特徴的な症状を示す場合は、複合型認知症に括られる。ともあれ、医学的治療では改善の見込みが無く病院から見放された老人や、家庭で本来面倒を見るべき身内の者が、介護放棄した為など、或いは身寄りの無い独居者が、行き場を求めてやむなく通う施設なのである。

平易に言えば、我が妻が昼間に居て騒がれ、近所に迷惑を及ぼすよりも、施設で過ごして貰う方が、余程有り難いと近所にこぼしている始末である。何とも呆れ果てた話ではあるが、施設のケア・マネージャーなる者によれば、各々が受け取る年金の範囲内で、介護メニューを考えて呉れるらしいのである。妻にとっては、受給年金額の枠内と言うキーワードと煩雑な諸手続きの丸投げが出来て、この上ない慶事と捉えている節がある。

介護福祉士の高橋由乃さんの「皆さん、元氣良くご挨拶しましょう」の一声が玄関脇のホール全体に響いて、毎朝のトレーニングが始まる。始まりは耐え難い苦痛そのものである。高橋さんは、紅い口紅を引いて、上下均等で肉厚の唇が濡れて光っている。その長身の彼女は、一人ひとりに姓名を名乗らせた後に必ず「今日は何年、何月、何日の何曜日でしょうか？ 西暦でお答えください」と問うてくる。すると今までざわ付いていたホールに緊張の波が押し寄せ、老人達は狼狽え始めるのが分かる。正確に答えた者だけが、大円

卓の椅子に腰を降ろすことができる決まりになっているのだが、誰ひとり腰を降ろす者はいない。誕生日は覚えていたが、曜日が出てこないと言いつける者や、西暦で無く昭和なら答えられると弁解する者もいる。認知症の特徴は、弁解が上手で、その場を言い繕うことである。会話の内容が破綻しようとも、言い訳に終始固執することが認知症の特徴のひとつに挙げられる。

私は、この数分間が持ち堪えられないのである。多分この間に意識を失い、床に崩れて倒れ込んでしまうようなのである。意識が戻り気が付くと、パーテーションで仕切られたカウンセリング室の、ソファに横臥しているのである。

「坂本勇さん、アサーションのトレーニングは終わりましたよ。今日も皆さんと参加できませんでした。又、明日頑張ります。坂本さんが初めて訪れた日から、毎日欠かさず倒れられているので、初日は癲癇の発作が起きたのかと心配しました。でも、もう十分に慣れましたから安心して倒られて。いや、後頭部を打たない程度に気を付けながらね」とひとり声を出して、笑いながら室の扉を乱暴に閉めて彼女が退室して行った。

高橋さんは、毎朝繰り返される私のアクシデントを、恰も慣例のルーティンを淡々とこなしているような態度で、またその成り行きを密やかに愉しんでいるようでもある。

私が毎朝倒れるのは、ナルコレプシーのせいである。ナルコレプシーとは睡眠障害のことで、私の場合は強烈な怒りの

感情が誘因となって、情動脱力発作（医者はカタプレキシの継続は見られますかと診察の度に訊いてくる）が起きて、金縛り状態で卒倒するのである。日中に場所や状況を選ばず起きる強い眠気の発作は、始末に悪いものである。たとえ脳疾患による睡眠障害で在ったとしても、周りの人に説明もできないで時には大いびきで応答無し。偶然にも居合わせた人に与える衝撃は、かなりのものである。全く恥ずかしい限りである。過去のどうでも良い些細で本人自身も想い出すことも無い、小さな怒りの感情が芽生え始めると心臓が急に収縮し、こめかみ辺りの血管が波打ち、自身の感情の抑制が続いて来る過呼吸で息が出来なくなってしまうのである。当然ながら脳はレム睡眠状態なので、その状態の記憶は一切残らないのである。仮に微かに残っていたとしても、夢の中の出来事でしかないのである。しかし、その事が私にとっては重要で、むしろ唯一の救いとなっているのは確かである。

ホールでは相変わらず『梅千体操』なるものが繰り返されている。イスラム圏出身のザイド内海嬢は、褐色の細い腕と窪んだ眼窩を大きく見開きながら、両腕を前後に突き出し、肩を廻して模範演技を続けている。そして、皆に追従する様掛け声を上げながら、動作の模倣を皆に促している。首筋に直垂る汗や、ピンと伸ばした指先の反り具合などの何気ない仕草が、一層艶めかしさを増幅して私の視線を捉えて離さない。

体操の時間は、私ともう一人の女を除き、入所者と職員全

員がカセットデッキから流れるリズムに合わせて、この室内体操を真剣に取り組んでいる。

『梅干体操』に用いられている、うめぼしのうたは、明治から大正時代の尋常小学読本に掲載された芳賀矢一の詩が元で、近年になって曲が付けられ、民放テレビの子供番組で放送されたものである。その後、歌に振り付けや主人公のキャラクターなどが付加され、映像化された商品が、年寄り関連ビジネスのアイテムとして全国へ出回ったものである。言わば隙間グッズの典型的な商品と言えるのであるが、詩の内容は青梅の摘果から升売りされて、紫蘇漬で赤く染まり夏の土用干しを経て、世の為人のため、ましてや戦には無くてはならぬこの私、で終わっている。結局、富国強兵の国策に沿って児童の父や兄でもある兵隊さんが、梅干ひとつで頑張っていることを、間接的に愛国の醸成を目論んで、国語の時間に振り当てたと考えられる。幼い心への擦り込み行為が明治、大正の永きに亘って画策されて来た所以である。ところが今の平和な時代になって、あるうことか公共放送局がみんなのうたという番組で、児童合唱団の歌唱に乗せて、全国に再び流し始めたのである。平和ボケした時代に何か底知れぬ魂胆が隠され、作画的に放送されているのでは無いかと、勘ぐってしまふのは穿ち過ぎなのだろうか。国中がマインド・コントロールされていた時代の、軍国少年の心情を鼓舞する内容が、けなげで頑張り屋さんの唄として復活する意味を、ひねくれ者の年寄りは、経験という触覚で不穏な臭いを、いち早

く嗅ぎ取ってしまうのである。

兎に角、ホールに居ながら一切梅干体操には参加しない老女がいる。名を阿部しんと言いい、彼女は自分の年齢を九十九歳だと皆に吹聴している。女の年齢程判り難いものはないが、高齢になれば成る程、自分の年齢を大目に言う傾向があるようだ。彼女は私を見つけると「貴方はお誕生日が来て、八十一歳になるのね、とてもお若いわ。で、お誕生日はいつなの」と毎回尋ねてくるので、私は其の度に彼女の前で指を折りながら、自分の誕生日を教える羽目になってしまうのである。

私は阿部しんの問い掛けを、反応無しでただ聴き流している。両手に掂げたスポーツ新聞の巨人戦の結果に視線を落として、逆転負けした昨夜の先発メンバーの成績を確認するのに忙しく、白寿だと言いい張る老婆の、昔話に付き合う気は、毛頭ないのである。

誰も聴いていないのに、虚ろで定まらない視線を投げかける老婆は、立ち尽くした儘の姿勢で、灰色の壁に向かい抑揚のない声で念仏を唱え始めた。その声はまるで嗚咽のようにも聞こえ、海老町の周囲を取り巻く土塁に茂る葦原が、木枯らしに曝され擦れて奏でる低周波音の、ざわめきに似ていると感じた。

「皆さん、ここで十五分間休憩します。トイレ誘導は入り口に近い方から始めます。それでは、入り口にいる阿部さんから行きます」

と施設責任者の女が、室内体操の終わりを告げて、老婆の袖を引きながらトイレ介助の誘導に行った。ここでは一時間の内、四十五分を訓練の為の日課に費やし、残り十五分をトイレ・タイムに設定しているのであるが、この十五分間でヘルパーの職員は、粗相した年寄りの紙オムツ替えや、入所者全員の抹茶出し、次に行なう演題の準備作業などで大忙しである。メニューどおりに役割分担で振舞う姿や動作は、無駄がなく実に機械的で、如何にもマニュアル通りであった。

午前十時の時報が鳴ると、次は図画工作の時間である。この演習は各自の能力毎の作業を強いられることになる。白寿の婆さんは切り紙が日課になっている。食紅で色付けされたスルメの煮付けを、露天屋台で売り捌いていた、元香具師の長野義久さん。彼はここではブレイ・セラピーの要観察者である。施設側が設定した特別メニューに応えようと、彼なりに工作の課題を頑張っているのである。

阿部しんさんの切り紙細工は、利き腕の右手が麻痺しているため、機能回復訓練が目的で、和鋏で折り込み広告を切る作業である。新聞チラシの裏面を使って、職員が予め銀杏の葉形を輪郭線で描いていて、彼女は震える指先で鋏を滑らしてゆくのである。切った銀杏の葉は竹箆に収納されてゆく。秋口に入ると入所者の芸術祭が本部で開催されるので、その催しに阿部さんが創っている樹のオブジェを、出品する計画なのだろう。

毎日の作業療法を継続するクライエント自身が、遊戯を通して作品を完成させ、時によっては受賞というおまけに預ければ自尊心も高揚して、本人の抱える不安や恐怖の原因を霧散できる、と彼女達職員は単純明快に捉えている節がある。まあ、クライエントには幾分かのカタルシス効果が期待できるのかも知れない。しかし、白寿を迎えた認知症患者にそれが自覚できるとは、私には到底思われないのである。

工作作業で、長野さんが取り組むブレイ・セラピーとは、遊戯療法と訳せば良いのであろうか。彼は施設内ではちよーさんと皆から慕われている。彼の作業内容は、専ら箱庭づくりに専念することである。元々香具師が生業であったため、露天で売る林檎の飴菓子造りや、百パーセント粟で出来ている捻りおこしの製造、縁起物の薬味唐辛子の自作販売まで、数多くの際物販売をこなして来た経歴からして、手先は元来器用な方であったと思われる。ちよーさんの箱庭制作は、三十五分の制限時間内に仕上がってしまう。ところが彼の作品は、毎回風変わりな出来合いに創られているので、私はそれを愉しみにしているひとりでもある。

浅黒い体躯と堅牢な筋肉を誇るちよーさんが、この施設に通所する訳は、彼の病歴がクロス・アディクションと診断されている故である。クロス・アディクションとは多重嗜癖のことで、アディクションそのものは、多かれ少なかれ誰でもが人生の中で、一度は経験する依存癖のことである。青年期の煙草やアルコールの飲酒癖など、絶ち難い悪癖には寛容な

世間でも、賭博や思春期における日に数回も営む自慰行為、或いは万引きの常習などの嗜癖には誰もが非難する。たとえそれらが精神障害による発症が要因であつたとしてもである。世間の人々は激しく非難することはあつても、手を差し伸べることはしないのが常である。どこかで、精神異常者とは関わりを持ちたく無いと思つてゐるのだろう。善良な自分の生き方を顧みると、彼らの汚れた経歴と重ね合わせたくないと思ふのは、尤もなことかも知れない。

「店長の村田さん、木箱を貸しておくれ。おう、いつものサイズでいいよ。幅七十二センチ角のやつだよ。木箱の内側に貼る青い模造紙も一緒に添えておくれな。絵の具は引き出しの中で、砂袋は掃除道具を入れるロッカーの下段に置いてあるから、急いで揃えて早く出して頂戴な……」と村田さんと呼ばれる施設責任者の女に、甘えた声で暗に支援を求めてくる。二人の軽やかな遣り取りを聞いていると、前科三犯で服役した過去を持つ男の言動とは思えない程、とても柔和で自然な会話に、私は好感が持てるのである。

プレイ・セラピーで行なう箱庭療法は、スイスに留学中の河合隼雄が、ユング派心理学者のカルフ博士から手法を学び、わが国に普及させた心理療法で、不思議なことに日本では急速に広まったという。

箱庭療法では、木箱という小さな世界にクライエント自身が制作した、個性的で創造的な世界を完成させることに、さほどの意味は持たないのである。つまり、作品としての芸術

性を問うものでなく、人形、動物、電車、建物、工場、商店とその店で売る商品などのフィギュアを、箱であり自己の世界感とも言ふべき心の領域に、模型をどのように配置したのか、そのバランスはどうであるのかを判定する為の道具である。箱庭はカウンセラーであり施設責任者の村田修子店長が、クライエントの今の精神状態を見極め、助言を与える判定ツールに過ぎないのである。

ちよーさんの箱庭は、世界の真ん中に海を配置するのが特徴である。そして、周囲に白砂を敷き詰め陸地を造るのである。当然海は池に変容してしまうのであるが、フィギュアの建造物を岩陰に置いて、彼は日銀本店だと指差するのである。最後に戦車をいくつか配して、戦車の砲身を全て日銀本店側に向けてから、掌サイズのバービー人形の衣服を剥ぎ取り、逆様にして砂地に突き刺してゆくのである。バービーの金髪は砂に埋もれて、異様に長い裸の肢体が、陸上に林立する異様な光景を視る事になってしまうのである。当然、作者の傍らには、迷彩服で身を包んだG.I.ジョー人形が数多く置かれているのだが、彼は見向きもしないのである。ちよーさんは完成した箱庭作品を誇る様子でもなく、労役がやっと終わった四人のように、顔面に皺を寄せて笑みを浮かべそそくさと、煙草を吸いに屋外の喫煙コーナーへ向かつて、脇目も振らずに大股で歩み出して行くのである。

すると、彼の退出を眼で追っていた阿部さんが、壁に向かつて念仏を唱えていたかと思いきや、ちよーさんの箱庭に近

づいて、いつになく俊敏な動作で、彼の作品に手を加え始めるのである。砂浜の空き地に玩具のトラクターを置き、周りに砂を増して畝を起し、畑を造成し始めるのである。畑には小さな造花の向日葵を無数に植え込んで、日銀本店の屋根まで覆い尽くしてしまう程、黄色一面の向日葵畑を瞬く間に創出してしまふのである。彼が戻って来る頃には、阿部さんは疲れ果てて、いつの間にか円卓に片頬を突っ伏し、瞳を閉じた姿に変身しているのである。

「長野義久さん、箱庭制作の制限時間が過ぎましたので、作品を拝見しますよ」と、カウンセラーでもある村田店長が、カルテが作業日誌なのかは不明であるが、記録用紙を挟んだ板を脇に抱えてチェックに入る。「長野さん、今日の箱庭のテーマを私にお聴かせ下さいな……一面の黄色は何を表わしているのでしょうか。ストーリーを語って下さいな……貴方の気持ちの内での不安な事象や、警戒や心配事の種など、いや、芽生え又はシコリみたいな実が膨らんで来たと感じましたか……」

ちよーさんは、店長の白衣が弾けんばかりの胸元を凝視しながら、

「俺は、大儲けを企んだのさ。日銀の金庫を破って奪った札束を、ケイマン諸島の銀行に送金して、マネーロンダリングとタックス・ヘイヴンの恩恵に浴するのさ。奪った金は全てカジノで使う。一ドルたりとも所得税を納めねえっていうのが、渡世人の仁義さ。最後はメキシコのアカプルコで、酒池

肉林の豪遊たあ、たまらねーときたもんだ。股間が疼くよなあ、村田店長よっ」

「向日葵畑の中央にトラクターが一台配置ですね。壁際の方に葉や実を落とした、とうもろこしが植栽されていますね。申告ストーリーと表現の乖離。妄想とフィギュアの不一致が激しくて。こりゃあきまへんな長野さん、何かしら心の底にまだ打ち明けられない、悩みがお有りなのでしょうね。もうしばらく此処へ通って、箱庭づくりをして貰いますわよ。息子さんには、連絡しておきますから心配しないで。きっと回復しますからね。貴方も諦めないでもう少し続けてみましょうね」と言って、彼の肩を軽く叩いて、箱庭を片付け始めた。二人の囁み合わない会話と悪意のないカウンセリングの結果である。

元々は白寿の老婆の不作為から始まった診断の結果であるが、当の本人は幼女の如きうたた寝の最中で、花園で戯れる夢でも見ているのか、穏やかな表情で微かに軒を立て、罪の無い顔をこちらに向けている。

次は、主に漢字や言葉の書き取りの時間である。この時間帯は午前中最後の演習メニューとなり、曜日によって、書き取りが計算に置き替わるのである。例によつてこの時間帯も、各自の能力に沿った課題が与えられ、自分の水準毎のプリントに挑むことになる。

つまり、この時間帯は意味性認知の進行度を、チェックす

るのが主な目的なのである。アルツハイマー型認知症の者は、自分の住所や家族の名前、せいぜい歴史上の人物名などを幾つか書いて、予定の演習を終了するのである。それ以上は書く事を継続できないし、絞っても何も出てこないからである。過度の負担は、逆に本人のやる気を削ぐことにも繋がるので、この施設職員達の配慮と見るべきである。それはそれで仕方の無いことでもある。飽いて落ち着きを失くした、大円卓に並ぶおよそ半数の者達は、機能訓練の為に席を離れて、一人づつ隣室の機能訓練室に向かって、マッサージを受けに行くのである。

残る半数の者達は、問題用紙に濃い目の鉛筆を握って、レベルの違いこそあれ、空欄を埋める作業に集中するのである。その中のひとりである原辰さんは、意味性認知と診断され、両下肢の麻痺もかなり進行して自立不能なため、車椅子での移動は欠かせないものになっている。原辰さんは私の半分くらいの年齢で通所者の中では一番の若さである。その為、皆の「可哀相に、その若さでこんなでは……」と言う憐憫の情を、一手に引き受ける羽目になっているのである。

通称、原辰さんと呼ばれる原辰代さんは、前頭側頭葉変性症と診断され、この病は生を授けられてから獲得した言語の意味を、病気の進行と共に失念していくと言うのである。言葉の意味が解せ無くなることは、即ち失語ということや、やがて会話が出来なくなることを意味している。

「辰代さん、以前覚えていた出刃包丁の意味は解りません

か。先週書けた肉じゃがも今日は出てきませんか」と介護福祉士の高橋由乃さんが、彼女の耳元で大きな声を掛けて、やる気を誘おうと懸命である。日毎に失われていく語彙の数々に、担当の高橋さんは歯がゆい思いや、やる気を失くした原辰さんの態度に、悔しさを募らせているのだと思う。高橋さんの叱責する大きく響く声に反応して、ヘルパーのザイド内海嬢が、原辰さんの傍へ近寄って跪き、彼女の目線に合わせる。

「今日は、キッチンで使う言葉の意味を尋ねる訓練をしているのですよ。辰代さんは調子がイマイチですね。それでは、貴女の得意な文学でやってみましょう。まだ時間がありますから、ワタシと一緒に始めましょう」とヘルパーのザイド内海さんが仲介を買って出てくれた。

「辰代さん、四月はこの上なく残酷な月／死の大地からライラックを育て上げ／追憶と欲望をかき混ぜ、春の雨で／……この詩の続きを書くことができますか」ザイドは、キッチンから詩の暗唱へと、より難解な方向へ彼女を導いてゆく算段のようである。原辰さんはうな垂れていた頭を持ち上げて、ザイドの黒い大きな眸と白く輝く強膜を見据えながら、小声で呟やくように言った。

「それは、T・Sエリオットの荒地という詩の中の第一章、死者の埋葬という冒頭の三行ね。よく覚えてるわ。諦めることはできても筆写は無理ね。この指先の震えが止まらないもの。エリオットのこの詩はエズラ・パウンドの添削を受

けているのね。荒地という表題は中世の漁夫王伝説に由来していると言われているが、正確には聖杯物語が正しいのよ。彼は病める西欧文明、荒廃する人間社会を不毛の地に擬えて、救いの慈雨を渴望する精神を歌い上げたものの。ザイド、貴女もカラチ大学でケルト語文学を専攻したのだから、何もかも既にお判りの事よね」

「いいえとんでも御座いませぬ。辰代さん程の該博ではありませんが、母国バキスタンの大学で学んだのは、ケルト語ではなく古ウエルズ語でした。話を戻しますと、荒地の最終章で主人公が水のない岩山に辿りつきますよね。でもそこには聖杯はおろか、苦悩と幻想があるのみです。そして雷鳴が不意に轟きます。布施や慈悲、牢獄の鍵などが暗喩として語られ、遂に天は恵みを授けようとはしませんでした。救いの無い世界というか、エリオットは、四百三十三行に及ぶ詩の結末を、敢えて読み手の解釈に委ねてしまったようにも思われます。なぜでしょうか。辰代さん」

「私には解らないわ。ただ考えられることはパウンドの存在が大きいと感じられるの。エリオット自身は、未来の道具立てを色々散りばめて、救済をもっと明瞭な形で示して、終わらせたかった筈よ。彼はセント・ルイス生まれの合衆国人よ。より力強いメッセージを好んだはずに相違ないわ。二人の往復書簡を読むと理解できるの。荒地の生原稿はパウンドによって、半分の長さに縮めるよう厳命を受けたのよ。半分も削除するエリオットの気持ちを察すると、私まで哀しくなっ

やうのよ」と、二人が交わす真剣な遣り取りが延々と続いていく。脳の萎縮による言語野の崩壊で、言葉を実に失っていく原辰代さん。このような周囲を土塁で囲まれた、砂礫の町の貧弱な通所施設に居ては、言語の回復はおろか、現状のキープすら儘ならないであろう。私は以前、お節介のついでに、彼女の本音を知りたくて尋ねたことがあった。彼女曰く、「ケ・セラ・セラ」とひと言だけ返ってきたが、その瞳は涙に包まれて歪んでいた。なるようにしかならない。と呟くだけの彼女の諦観は、余りにも強靱で哀し過ぎると思った。しかし、彼女に対して、誰ひとり慰めの言葉を掛けることは出来なかった。

食事の後の片付けは全員でやるルールである。家でもやらない事を、何で金を払ってまでしなきゃなんのだ。と言いつける言葉も聞こえてくるが、皆与えられた作業をこなしている。私は三時のオヤツの時間に出すおしほりを、畳んで形作っているところである。乾いた矩形のタオルを海苔巻き状に丸めて、プラスチック製の収納ケースに入れて、厨房へ届けるだけの単純な作業である。ただケースには、付箋紙が貼ってあり、その日の来客者と入所者そして職員の数を書かれていて、加算しないと総数が出ない。数を間違えると、管理栄養士の小林誠子さんに叱られることになるのである。このお姐さんの尻に触れたりすると、頬に倍返しのリントで報復されるので、恐れられているのであるが、往復ビンタも稀には

好いと想う時もある。尋常小学校に入りたての頃、悪戯が発覚して教師に殴られたことを想い出す。教師や誠子さんのビンはちつとも痛く無いのに、軍事教練で叩かれたビンは今もって鳥肌が立つほどの、恐ろしい悪夢として刻印されている。それに比べれば彼女のビンはなど、まるで愛撫のように芳しい柔らかなものである。

午後一時の時報がホールに鳴り響くと、音楽の時間が始まる。この時間帯は、ボランティア団体が演奏する軽音楽を聴いたり、唱歌などを共に歌って愉しむ時間になっている。施設側はこの時間帯の豊富なメニュー作りに精力を注ぎ、近隣の他の施設との差別化を図ろうとしているようだ。入所者は家に帰ると開口一番で、「今日はどうでした。何が一番楽しかった。オヤツは何が出たの」などの矢次ぎ早の質問を浴びるらしいのである。施設から帰ったばかりの爺さん婆さん達は、今日のイベント風な催し物の断片的な印象と、オヤツの品目しか答えられないのである。午前の訓練に基づいた演習内容や、機能訓練で頑張ったことなどの感想は、答えられ無いのである。家人の求める問いは、楽しかった事とオヤツの中味についての質問である。ましてや、毎日繰り返して行なわれる訓練の経緯などは、印象が薄くなって記憶から遠のいてしまっているのである。その為、施設運営会社はこの時間帯をより魅力的な出し物を提供することで、金を払う側の顧客満足度を、より高めようと目論むのである。それが通所者の獲得に繋がり、会社の業績に反映するからであらう。しかし、

支出は極力抑えたいので、チンドン屋も南京玉すだれや草笛演奏家も全てボランティアによる、詰まらない素人芸の演目に堕ちてしまうのは当然である。但し、地区の幼稚園児の来訪だけは、皆が午前中からそわそわして、一緒に遊ぶ為のシヤボン玉液や、紙風船の準備に余念がない。当の私も口臭を和らげるうがい薬を、わざわざ自宅から持参して来るのである。

この時間帯は、大衆演劇まがいの娯楽時間かと言うと、そうばかりとは言えない。午前中に遣り終えていない機能回復訓練が待っているのである。皆がロシア民謡を合唱している間をぬって、機能回復訓練室の扉を押し開ける。鍼灸師の免状を持つ澤村拓美さんが手招きをする。機能訓練士としてのこの施設に配置されていて、バス通勤しているのである。

「坂本さん、いらつしやい。ところで貴方は散歩を日課に取り入れていますか。先週お伺いしたところでは、ひきこもりだなんて自嘲めいて語っていましたが。でもね、人間脚力が弱ると身体全体に悪影響を及ぼしますからね。膝関節や内腿の筋力強化を図ることは大切なことなのです。今日はこのトレーニングで筋力アップを試みましょう」と声を掛けながら、私を体操競技の平行棒みたいな器具の真ん中に通して、両脇の丸棒に手を添えての歩行訓練が始まる。膝を胸に届く程高く折り曲げて、振り出す一步は大腿筋がピンと張るまで伸ばしての歩行訓練が。棒の端から端までの往復を、三十回繰り返すのである。

この間に、澤村さんは、次の機能訓練を待つ人を室内に招き入れて、黒革を貼ったベッドにうつ伏せに寝かせ、バスタオルの上から背骨や肩甲骨、腰椎辺りのマッサージを施術するのである。

「お姐さん、おや、カルテを間違えて持ってきていますね。

駄目ですよ、気を付けて下さいな。カルテには個人情報が入っていますから、不用意に他人の目に触れてはいけませんです」澤村さんは全盲である。彼は、両眼の視力の和が0.01以下で、第一級の視覚障害者認定を受けているのである。その為、彼が作成するカルテは点字記載で、この施設の者は誰一人読むことはできないのである。しかし、機能訓練を受ける際に、各自カルテ持参で入室する決まりになっている為、村田店長がカルテの余白に、漢字で名前を書いて識別可能にしてある。それを杉内俊矢さんが間違えて、他人のカルテを持ち出したようなのである。

「アホ抜かすな。間違えておらへんでえ。よく見ときい。自分の名前忘れてもうたら、おしまいや。ヘボ按摩のおっちゃん」と口汚く罵る杉内さんは、最近この施設を利用するようになった通所者である。彼は今年還暦を迎えたと、自己紹介の中で披露していたので、年齢は間違い無いだろう。頭は白髪交じりの角刈りで彼曰く、潮来笠ヘアースタイルだと説明して呉れた。昭和三十年代生まれの人が言う潮来笠ヘアーとは、往年の流行歌手であった、橋幸夫のデビュー当時の髪型を模したもので、今この髪型を街中で見かけるのは、そう容

易い事ではない。杉内さんは小柄でしかも撫で肩であるため、若衆顔と一見女性のような身体付きが、不釣り合いな印象を与えている。カラーゲンたつぷりの頬の皮膚は、歳に似合わず皺もなく、引いた眉墨が釣り上がり気味の重瞼を際立たせ、仄かに童顔の様相を漂わせ、むしろ幼ささえ感じさせる。施設内では、宝塚少年と呼ばれているが、初老を迎える男の容姿とその愛称に、どこと無く違和感を抱いてしまうのは、私ひとりでは無い筈であろう。

「ご免なさい。杉内さんでしたか。いや、どうも。私は常に光の当たらない世界に居ながら、陽光を浴びて仕事をしています。私の頼りは記憶と音、そして指先に伝わる感覚がすべてです。マッサージで押さえた貴方の骨盤や臀部の肉付きがてつきり、その何と形容したら良いのか……いえ、これ以上は申しません」と弁明する澤村さんの狼狽振りを見て、秘め事を自ら暴きそうになり、守秘義務違反に問われ兼ねない状況で、失態に動揺する場面であることが、私には直感できた。

「澤村のおっちゃん、もういいんや。来所者の皆も薄々感じ取っておるがな。俺は今でこそ男として生きとるが、離婚する前は女やったしな。平成十六年の性同一性障害者特例法の施行が、俺の人生の再出発の原点になったんやさかい。平成二十一年に家庭裁判所の審判が下って、戸籍の性別を女から男に変更したんや。それまでは久保裕美で生きてきた。平凡な名前や、おっちゃん。子供も三人立派に育てて既に成人したとるでえ。孫かておるんや。しかし、戸籍を変えるのって、

並大抵の労力があるんだぜ。俺に審判が下った年は、全国で四百六十六件の提訴があつて、四百四十八人の性別変更が認可されたのさ。驚くなかれ却下はたったの三件で、残りは審議継続中なんやて」

「久保さん、裁判に持ち込むにしても特定の要件をクリアしなければ、難しいでしょう。例えば、精神科の医師二名以上の医学的知見書の提出とか、性適合手術などもやらないと駄目なんでしょう」

「そうなんや、法律が定める特定要件とは、今のところ五項目有つてその第一が二十歳以上の者だつて、俺は楽々クリアだぜえ。次が未成年の子を養育してないこと。第三が生殖機能が永続的に欠く状態にあること。こいつも、三番目の子を出産した後に子宮筋腫でそこいら辺を掻き出してるから、一応問題無しやねん。第四が少々厄介だったな。現に婚姻をしていないこと、だつとよ。俺は父ちゃんに泣いて詫びて大喧嘩の挙句、同意も貰わずにほぼ一方的に、離婚届けを南区役所へ出したんよ。だから今は独身で呪縛からの解放を堪能してる身や。そして、五項目中最後の要件でえのが難儀やつた。ほんま、苦勞の連続やつた。生殖器が在るところに、性別に見合つた性器と近似する外観を備えていること、だつとよ。法律も裁判所もアホや。俺は物心付いた頃から、自分の性に凄いと違和感を感じていた。確かに生物学的な女であることに疑問を抱いていたのだ。思春期の頃になって、同性の女の子と過ごす時間に、かけがえの無い豊穡な精神の安らぎを、覚え

るようになってしまつたんや。おっちゃん、そこんとこ間違えんといて、同性愛とちゃうでえ。そんな気持ちとちゃうねん。なんちゅうか、心が求める性と違うねん。不一致や。そこんとこの乖離が大きくて、ずっと悩み続け自分を嫌悪し責め続けてきたんや。なして、法律は外観上の一致を求めているんやろう。俺が求めるのは、心の性に戻りたいだけなんや。それは俺のアイデンティティの問題で、身体の性と違つている事実を認めて欲しいだけなんや。そして、戸籍上でも男として、自分の心に従つて生きたいと願つていただけなんや。そんなんで、男性ホルモン注射を打つ訳や。乳房の切除もやらなあかんねん。乳頭は残したつたでえ。過去の証やさかい。極め付きは、男性器を形造らなあかんこつちゃ。睾丸なんか付けられるかいな。気色悪くて。ただ、子供の頃から陰核が発達しておつたから、ホルモン注射とシリコン注入で見応えのある一物にしよつたのさ。おっちゃん、比べて見いへんやろか。ちよつとやそつとで負けへんがな」

「いやいや、ご勘弁下さい。杉内俊矢さんはジェンダー・アイデンティティーの勝利者なんですわ。それでも、ご主人と別れてお寂しくありませんか。今は息子さんの処へでも、身を寄せているんですか」

「おっちゃん、訳の解らん事抜かしおつて。なんで俺が父ちゃんと別れなあかんのや。今もつて愛しているのは、父ちゃん一人だけなんや。毎晩同じ布団で手を握り締めて寝てまんねん。俺のかけがえの無い、この世での最大の理解者や。な

んも不足ないでえ。それはそれで現に審判が下ったんやから、法に則って表札は旦那の久保姓の隣に、俺の杉内姓を並べて打ち付けてあるんや。仰さん錢掛けて勝ち取ったんやからって、父ちゃんが新品買って取り付けて呉れたんや」

誇らしげに明るく語る杉内さんの、壮絶な生き様は比べようの無い重たいものを引き摺っているようである。彼は紅い舌をペロツと出して、歩行訓練を続ける私に、片目を瞑ってウインクを送ってくる。お茶目で実にチャーミングな男性だと思う。

町の周囲を土塁で囲まれた、砂礫の地に建つ小さな介護施設に通う者達は、いずれ殆んど記憶を失くし、言葉の意味すらも忘れてしまう認知症を患う障害者達なのである。皆誰しも安寧な余生を送りたいと願っているのである。ただ、家庭の事情や経済的な理由でこの施設に通わされ、昼間の時間を遣り過ごしているのである。家に戻れば、介護放棄をした娘婿に蹴飛ばされて、廊下を這いつくばっている者も居る。金曜の夜から食事が与えられず、月曜の施設の昼食が頼りの老人が、娘を庇いながら、「私が、ご飯や汁をこぼすので、汚いってね。私が悪いの、だから仕方ないのね。娘が悪いんじゃないわよ。私が汚すから皆を不快にさせて……」と声を詰まらせて、ヘルパー職員の聞き取りに、ご免なさいと何度も謝まる老婆もいる。真に謝まらなければならぬのは、間違ひなくネグレクトの娘夫婦の方である。

この施設は週末は休業である為、月曜の朝は大忙しとな

る。介護度が高い者ほど下の世話が行き届いていない。パンツの中は糞尿にまみれ、汚物が臀部にべったり状態で、家庭から送り出されて来るのである。中には、明らかに土曜から履き詰め、糞が乾燥していても、施設で清拭して貰えば好いと考えている、放漫な保護責任者もいる。子供達は育ててくれた老親の養育が、義務だという事をもはや忘却したかのようだ。このような保護責任者に人間の尊厳を問うてみても、いた仕方ないことである。

私が歩行訓練を終えて、吹き出た汗を拭っていると、管理栄養士の小林聖子さんが扉を叩いて、声を掛けてくれた。

「オヤツの時間ですよ。皆さんテーブルに集まって下さい。今日の献立は牛蒡チップスと手作りの杏仁豆腐ですよ。スプーンを持って席に着いて……」彼女の明るく透き通った声が施設中に響き渡る。どよめきと待ちわびた老人達が叩く拍手の音も聞こえてくる。小林さんの声は施設にいる人を明るくする魔法の声でもある。

私は盲目の機能訓練士である澤村さんの腕を取り、もう片方を杉内さんが支えるようにして、テーブルの自分の席へと歩んでいく。この時間帯は怨念や悲しみなど何もかも全てを忘れ、ただひたすらオヤツを目差して進むのみである。私はこの妙な悦楽を、ほんの一瞬であつたとしても堪能したいと思う。

海老町の介護施設エスペランサに集う老人達に、明日への希望はあるのだろうか。彼等にとって希望とは、どのような

意味を持つのだろう。ひょっとして、施設経営者がアイロニーで『幸福』と名付けたとしたら、余りにも虚しく哀れである。また、来春にはここに通う顔ぶれの半数近くが、新しいメンバーに変わっていることだろう。私を含めて確実に断言できるのである。

「あんだ、いつもわしの隣に座っているね」

「帰りのマイクロバスが同じ方向なので、ここでもいいですよ」と帰宅の車を待つ二人の会話が聞こえてくる。施設では家族の要望に応え、希望する時間帯に入所者を送り届ける契約になっている。家族の不在時もあり、時により送迎ルートも送る順番も変わるのだ。

会話の脇谷夫妻は、互いが夫婦であることを認識できないでいる。六十余年も夫婦生活を営んできたのに、顔も声も仕草にも連れ合いの面影を見出せないでいるのだ。

「あんだはいつも、人の不幸を喜んでその芽を手揉みして探しているに違いない」

「いいえ、お宅様こそ人の死を金銭に換算しているでしょう。何とも醜悪な行為だわ」

「あんたの栽培する自慢の白菊は、葬儀の祭壇用に育てているのだら。それが確たる証拠じゃあねえのか」

「お爺さんこそ、朝刊の死亡欄を丹念に読み耽けり、メモを執っていたわ。先程もオートバイで転倒して事故死した若者の記事から、住居先を探していたじゃないの。それって、ま

さしく商売に結び付ける魂胆だわ。人は何故こうまで浅ましくなれるでしょうね」

「いや、白系の若菊苗をビニールハウスで栽培して、秋になって陽が落ちてても、夜遅くまで煌々と照明を照らして、クリスマスが近づく頃まで夏の日照時間を維持するなんて、天をも恐れぬその姑息な考えがわしは気に入らないのだ。雪が舞い降りる頃を見計らい、仙台の花市場へ大輪の白菊を出荷する。花の入荷が少ない時季を狙っての金儲けたあ、恐れ入ったもんだ。強欲なベニスの商人の金貸しシャイロックその者だね」

「菊はね、日照時間が短くなると開花し始めるのよ。吹雪の季節に白菊を届けるのは、送り人が望んでいるからよ。菊の開花時の管理が出来る様になって、海老町の農家は救われたでしょう。それまでの貧しさからやっと人間らしく生きることが出来る様に成ることがそんなに非難される事かしら。金儲けなんて言いがかりもよいとこだわ」

二人の非難合戦は益々興奮の度合いを高めていった。脇谷夫妻の夫の方は、パーソナル障害の強迫性人格障害で、物事の些細な事象に拘り協調的な考えに至らない。同じく妻の方は、妄想性人格障害者群に属し猜疑心が強く、嫉妬深く他人を信用できない性格なのである。夫婦のどちらにも異常という自覚がなく、振る舞いや態度の修正を図るための治療等は難しいとのことで、ここでは口論に介入しない、どちら側の味方もしない方針で対処しているとの事である。つまり犬も

喰わない喧嘩はほったらかしで良いと、施設サイドは決め込んでいたのである。

「ああ、何しやがる……」

突然の叫び声がホール全体に轟き渡った。帰宅を待つ入所者や、施設職員は一斉に声のする方角を凝視した。あろうことか脇谷夫妻が、互いに向き合い仁王立ちしていた。妻は両手で自分の口を押し当てていた。夫の方は充分に脂肪を溜め込んだ、立派な腹部から血が滴り落ちて、シャツを紅く染めていた。その足元には凶器と思われる植木鉢が落ちていた。夫は顔を苦痛に歪めて、苦しそうな呻き声を発していた。妻は紅潮した顔で開いた指の間から、微かな笑みを浮かべているのが垣間見えた。

その瞬間、傍らにいた白寿だと言い張る阿部しんさんが、先端に血が付着している植木鉢を拾い上げたのだった。間もなくサイレンを鳴らし救急車が到着し、夫は隊員に応急手当を受けながら運ばれていった。妻の方も駆け付けた警察官によって、事情聴取のため警察署へ連行されていった。

三ヶ月後、施設は何も無かったかの様に平穏な日々が続いていた。誰もが事件の事を忘れていた。私は相変わらず梅干し体操が出来ずにいた。ソファに横臥しながら手に取った新聞に、私の目の前で起こったあの忌まわしい出来事の結末が、小さな記事になって載っていた。記事によると、凶器とされた植木鉢は脇谷夫妻の夫の所有物であることが分かつ

た。また、凶器には夫の指紋と凶器を床から拾い上げた阿部しんさんの指紋しか付いていないとあった。更に被害者の脇谷さんは誰に刺されたのか、全く覚えていない、思い出せないと言言しているのだ。

後で判明した事なのだが、あの植木鉢を突き刺した場面の目撃者は、阿部しんさんしか居なかったのである。私も叫び声で振り向いたが、近くには脇谷夫妻と阿部しんさんの三人がいて、血の付いた鉢が床に落ちているのを、単に目撃したに過ぎないのだった。

何とも不可解な話である。体調を崩して近頃ごろは施設を休みがちな阿部さんの証言は「見ていない、何も解らない、全く覚えていない」の一点張りで、警察も参考人聴取を断念したようなのである。脇谷夫妻も施設には来なくなつたけれど、噂では夫婦共に家で相変わらず、口論に明け暮れて過ごしているようだ。もう一つ驚いた事に、記事によれば阿部しんさんの年齢は、七十九歳であることが判明した。

植木鉢の指紋から、腹に突き刺したのは二人の何れかになる。被害者自らが刺したのであろうか。否、阿部しん婆さんのお節な犯行であつたのかも知れない。事の真相や動機が全く解らない、不可解な事件であつた。

脇谷夫妻の生き様を思いやると、私の胸の内の小さなシリガ、瞬く間に大きく腫れ上がり胸部を圧迫して苦しくなる。夫婦の絆とは如何なるものなのだろうか。記憶を司る脳の前頭葉の萎縮が、人の尊厳をかくも無残に破壊してしまふ

ものなのか。壊れた人はもはや人とは呼べなくなってしまうのか。

二人が出会い、子育てに費やした無数の時間や親の死を見届けた事など、共に暮らし微笑んだり涙を流したり、二人が築いた全ての記憶を喪失することは、とてつもなく不幸なことであろう。夫妻の性格が偏っていて、自己の偏狭な信念が精神を支配して、他人を思いやる事ができず、周囲の人に多くの迷惑を掛けることを、単にパーソナル障碍患者という診断の元に括ってしまったて良いのだろうか。

この希望という名の施設では、何も治癒しないし、誰も救うことはできない。ただ無為な時間を過ごすための、老人達の止まり木のような存在の場所なのかも知れない。

「坂本さん、うたた寝しないでもう起きてくださいな」とザイド内海さんの、甲高く澄んだ声が耳元に届いた。部屋の天窓を見上げると、秋の濃い蒼穹が広がっていた。

「明日はきっと晴れていい日になるわ」と屈託のない声で、私を抱き起してくれたのは、村田修子店長であった。少し口臭が感じられたが、私は何も気にならなかった。不快な臭いや髪の毛の香りなどがとても愛おしく思え、むしろ生きている実感に包まれている喜びの方が、ことのほか嬉しく思えた。きつと明日は晴れに違いないと私はその時思った。

(南区)

「入選」

触れる

内山文久

I

吉岡公男は現在験を閉じたままである。

「意図を持って、ものが見えない事が、どのようなものであるのか」

五十六歳の公男は自らをそのテーマの実験台にすべく今日から少しずつ行動を始めた。どうやら公男は今迄見てきた空間を失った時の、もはや空間とは言えないであろう空間を実感しようとしているらしい。

(これは友人でもある私が直接彼から聞いたことなのだが公男には視覚についてどうも解せないところがあるという。つまり見えるということ、ものがあるということが最近、特に信用できないというのだ。馬鹿な事と自分でも思っているようなのだが、どうにもその事に憑つかれて落ち着かないイライラするという。それでこんなことを始めたらしい)

公男は十二畳のリビングの中央に、ニスの禿げた茶色の木製椅子を置き座っている。わざわざ部屋の中で一番広がりの

ある場所に椅子を持ってきて、そこから公男は「実験」しようとしているのだ。妻も子供もぐっすり眠り、静まり返っている夏至に近い朝の四時半―公男は眼を瞑る―

まず眼を閉じた瞬間、冷静に判断すると、周りにあるものが視界から消失してしまったことで、自分の居る物理的位置がまるつきり不明となっている事に気づく。ものが見えている者・健常者にとつてみればこれは当たり前の事なのだろうが、目の前に広がっていた、見慣れた（公男はこれこそが曲者と考えているようだ）クリーム色の天井、濃い茶のフローリングの床、一部剥がれたベーズリー柄の壁紙、サッシの窓を覆うベージュ色の厚手のカーテン、高さ六尺の食器戸棚、パソコン、食卓、テレビ受信機、ステンレス製・ノブの壊れかかった緩いドア……それらが全く見えない。確か闇の中には存在しているはずなのだが、視覚がない以上それが見えない、つまりあると確信できないのだ。

公男は素直に驚いている。位置の記憶を空にすると、それが右にあるのか左なのか、上にあるのか下なのか解らない。ただ「あつた」としか判断できない状態が続いている事に公男は初めて気づく……。

「今俺は本当に座っているのだろうか先程まで見えていたものは一体どこにあるのか」

今まで何の疑問もなかったのだがよくよくこの状態で自らをよく観察すると、とても不安な気持ちで一杯になっているのが解る。何も見えない、どうすればいいのかという心理的

不安はもとより、視覚がない状態ではまさに私という身体が見えなくなっていると気づくのだ。ここには私という意識ではなく、身体のない身体とでもいうつまり視覚にとつて非存在の身体としての私の意識だけがあり、その「身体」を捜すうにも伝手が無くなってしまうている。つまり、私は私を感じているのだが私はどこに在るのだろうか……記憶上は確かに此処にあつた椅子に張りのなくなつたお尻を載せて、瘦せた両手を膝の上に静かに置いて座っていた。でも今は、もう見えない身体はどこからか出入りする空気の流れ、それを「これは呼吸なのだ」と初めての事のように思い、規則的に膨らんだり縮んだりする？ 感覚を「お腹の呼吸と連動する運動」と判断している私がいる。またそれとは別に様々な音が向かってくる、なにかが纏わりつく感覚・先程まで視覚で確認していた六月半ばの朝ということもあつて空気の冷たい気持ちよさが取り囲むように感じられること、バッテリーが程よく溶け焼けた、お気に入りのトーストブレッダーのいい匂いも、見えないもののなかにあるようなのだ。

視力のない状態では意識のみがあるのだとさえ思われる。更に公男は時間を探すことに忘れていた自分にも気がついた。目を見開いていると様々な距離、様々な色合い、運動するものによって時間の流れを感じていたように思われるのだが暗闇の中では時間の流れが持続している事を、確かに音があれば音を介して感じてはいるのだが、そうでない場合沈黙そのものの継続といった思いのみに駆られ続けているだけな

のだと。盲目で生を受けた人は無意識的にこのような雰囲気からその人にとつての絶対的状况・つまり普通の人生を始めるのだらうと公男は思う。

公男はそれでも直前まで記憶していた、座つたという状態から、動物の習性上？ なんとか動こうとする、移動しようとするが自分の記憶に頼らず、まっさらな状態から始めようとするどこに向うのか解らず逡巡する。

《方向》が解らない。《方向》？ そんな概念はどこへ行つたのだと自分に言い聞かせる。そうこれでもいい、つまり既知の場所、記憶にあつた場所へと進んではいけないと思う。視覚が働いていた時のように行動してはいけないのだとも。視覚と記憶の虜であつてはならない。俺は「おぎゃー」と泣き叫ぶ、生まれたての赤ん坊の行動をとるのだ。そうだ。しかし赤ん坊の行動とはどんなものなのか。長女が生まれた時自分が見ていたように、ただ手足をくにゅくにゅと動かすことなのか、よく解らない。それでも動きたいと生命としての身体は要求している。そうすることが動物であるお前、お前という人間の宿命なのだともいうように……自分は無理にこうしようとしているのか、いやそうではないようだ。どうすればいいのだろうか？ 仕方がない、見えない身体の要求通りともかく動こうと、本当はこれではいけないのだと思いつつ、見えた時の記憶をたどつて、いや無意識的にと嘯いておこう、見えていた時そう呼ばれていた両手を、見えていた時そう呼ばれていた両腿に当て、見えていた時にそう呼ばれて

いた膝を伸ばす。こうしてつまり、これも見えていた時そう呼ばれていた状態だが、よろよろと？ すくくと？ とにかく立ち上がつて？ みる少し体？ がふらつくような感じ。

公男は立っている？ とはいえ視覚が失われているから辺りは依然、全くの暗闇である。見えていた時そう呼ばれていた状態・ただ立っているのだらう。明確に体感じられるのは見えていた時そう呼ばれていた（眼を瞑り、座っていた時も感じていたのだが）臀部と足裏にピツタリと纏わる重力だけのように思える。またその際動かせるのは見えていた時そう呼ばれていた、もぞもぞ動く？ 両手、両膝、首、口、そして腰の捻りぐらい……しかもお互いその部位が何処にあるのかはつきりとは解からない。それでも触つてみれば何かがあるようなのだが、見えていた時のようにそれら同士がくっついてゐるのかさえ解からないのだ。どういうことなのだらう。

頼りになるのは？ 見えていた時にそう呼ばれていた二本の触手つまり両手なのだが、それを公男はゆっくりと見えていた時そう呼ばれていた髪から顔、首から胸、腰から膝、そうして足先へ見えていた時の表現（撫ぜる）ように動かしてみた。ふんわりとした髪感触から顔に移るときはちよつとした暖かさと凹凸でザリザリと音のする不精髭から首の極端な変化・へこみ？ 胸から腹に向かう衣服？ のなめらかな滑り、更に足へと向かう際の下方への重力とそれに反発し戻ろうとする力を感じながら床と思ひ、頑丈な冷たい場所へ

（止まっている状態ではもうこれ以上は動けない地点まで）
両手は移動？ したのだった。

こうなると見えていた時はあたりまえの身体が臆げにでもあるのだらうと、視覚を失ったとはいえ解るような気持ちになる。不安はさほどでもないと思ってしまふ、というより記憶が不安を払拭しようと暗躍しているのだらう。でもこれは真実ではない、緩すぎるというか、もともと視覚があつたため不完全な感覚に陥っているのだ。自分に嘘をついているのだと公男は全き盲目となりえない自分を少し残念に思っている。

どうやら立ったままの状態では身体は重力に向かつての力学的強度以外知覚できない。見えていればゆっくりと膝を曲げ伸ばすことで高い低いが解かるのだが、この状態では曲げ伸ばすことは足の裏に向かつて、つまり地球の中心に向かつての順重力・反重力感としての強さの違いのみ感じられるだけなのだ。確かにこの移動によって何かを考えている頭の部分は足裏とは違う位置にあることが解かる。少なくとも、見えはしないが、おおよその位置関係は判るのだらうという事を公男は実感した。つまり視覚の五〇cmは盲目の状態では別の次元の五〇cmとなることを……。

いつものように瞼を開けていれば自分の位置が分かる。おおよそ右の窓から三m、背後にある机から五〇cm、左の扉から一m位に自分があるなど知覚する。つまり（何か）との相対的な距離・遠近法で自らの位置を知り得るのだ。眼を瞑る。

方向が不明となる。ただ辛うじて重力のお陰で身体？ の質量は意識できる。（そうかといって、身体を浮かす事は、飛び跳ねるといった時くらいにしか使わない為目を閉じている場合、行動をするのには殆ど役に立たないように思われる）

今ふと思ったのだが（もし視覚があれば自ら掴んだ、褐色の左腕の上にささくれだった右手の四本の指と半分隠れた親指が見え、その視覚に支えられた触覚がそれを補うようそれぞれの手は温かさ・冷たさも感じているのだが、目を閉じていると掴もうとするものが掴まれようとするものが何なのか分からない。温度差こそあれとにかく何かに触れ触れられているといった風なのだ。つまり圧力と反圧力を同時に直感すると言う事なのだ）ここではものの有り無しということが曖昧模糊としていて而も、視覚以外の知覚によって、ものはあるのだ。

この身体にとって重要な動きとは何なのだろう。それは視覚が在った時ごく普通に言われる横（水平方向）に、つまり重力と直角方向に移動する、ゆっくりと這い蹲ってでもその方向にある起伏に沿ってつまり重力に寄添って、または逆らいよじ登ってでも進む？ ことのようなだ。蝸牛あるいはヤモリ、あるいはロッククライマーのように。また自動車のように、高速フェリー、ジェット機のように……素早く移動することもこの時代絶賛されるのだ。

「そうか、足裏に感ずる重力が俺と地球の絶対的接点なのだ」公男は少し安心して微笑みこう呟いた。（この現象を鳥

瞰的に捉えてみると地上の酸素に依存する殆どの生物は大気圏より外には自力で出ることとはできずそれも海底から恐らく二十km位の範囲で生息しているのだが有機物の発生以来、海を含め地球に密着したその表面上を、我ら生物は自らの欲望のもと四方八方に移動してきたのだ。地球という直径一万二千kmの球体の五百分の一程度の薄い空気膜の中でこれ見よがしに？ 時折跳躍して動いているのだが、いつも右往左往し這いつくばって動いているのが生物の現状なのだと公男は考え始めていた)

さて、ものが見えて居た時に手・足と呼ばれていた部位の周りには今のところ障害となるものがないように思われる。それはこの見えない身体を動かしている？ という事によって理解される。触ると温かい、或いは冷たいが圧力のある塊を持った身体と殆どなんの抵抗・圧力も感じないそれ以外の部分(空間)が存在しているようなのだ。眼を瞑っている状態ではそもそも空間とはなんぞやだが……。

例えば手という部位が移動し直接？ 膝という部位に辿り着く、そこにあたる迄の間に自分の身体とは異なる極端に弱い強度がある。それは見えていた時にそう呼ばれていた空間・空気圧だ。何の保証もないのだが、見えない身体はそちらに移動する、出来るように感じられる。だからなんとなく移動？ してしまうのだろう。

ではここで瞳を閉じたまま、記憶を辿って両手と呼んでいたものを「鬼さんこちら」の鬼のように(この場合恐怖を避

けるため触手として)前に突き出し両足と呼ばれていたものを使って「よしよし歩き」をする事としようとか男は決めた。ただどの方向にどのくらい進む？ などというのは解からないし、また全く意味をなさない様に思える。視覚を持った輩はゲラゲラ笑うかも知れない。また変な仕草として軽蔑の眼差しを投げかけるかも知れない。

「大丈夫さおまえの記憶が安全を確保するさ」
—公男の中の悪魔が囁く—

視覚を取り除いた個体にとって見えて居た時の移動は闇の中の物理学では存在しない。歩いている距離よりも動き回った疲労の方がその個体にとって実存的かつ重要な要素なのだろうとか男は思う。どこまでいっても距離はないというより視覚がないから測定することができないし見えている者が何kmといってもまったく見えない距離としての実感はないのだ。

「歩いた距離は実感でなく実感が歩いた距離なのだ」と見える者に向かって言えばきつと変な顔をされるのだろう。そう、アインシュタインの言う・FイコールMCの二乗ではないのだ。盲目状態でもFは解るMも解る、しかし光速としてのCは空間を無くしてしまつてはそのベクトル自体がどこに向かうのか不明となる。あらゆる方向に進もうとするという事はどこにも進まない、またすでにそこに到達しているという事でもあるのだ。そうであればF=M? C? というへんてこな感覚を抱く。

(ただ自らの身体らしきもの? が地球重力の上で、もそも

ぞと移動？ している、あるいはもやもやと変化？ しているという意識）

これは完全に「観念論」と言われても仕方がないのだが視覚がない場合、すべてが今ある知覚、あるいは繋がりしか持たない直観以外何物でもない事、つまり絶えず流れていくこの「現直覚」がすべてであるという事。自己もさることながら他者は存在しているらしいのだが全く見えないものとしての自己であり他者であり、触れれば認識できるがそうでない場合まったくの不在であって、物理的・光学的には測定不可能なのだ。―ただ、もし全てのひとが視覚のない人類であればひよっとすると盲目のインシュタインがそれとは異なった方程式を披露するだろうという推論には逆らえないのだが―よく考えてみると不思議なことだ。相対性理論など全く異次元の理論に思えてくる。対象となる《光》がないのだから。生物は何の為に動くこうとするのか。おそらくそれは先程の理屈に準ずるのだが自らの身体の底に在る地球から来る重力に沿って移動すること他者・自然と出会う為である。また遭わない、避ける為である。身体があらゆる感覚・知覚を駆使して他者を探し迎え味わう事、あるいは他者から逃亡し自らを守ろうとする事それが目の見えないものたちの行動なのだ。しかも、「視覚という空間」なぞありはしないのだ。瞳を閉じた人間にとってじぶんの髭をなでる事と宇宙の果てに辿り着く事の差異がないのだ。自分がどの方向に進んでいるのかは皆目解からない。

公男の身体はともかく鬼さんこちら状態で歩を進める。騙されている―不安ではない―今迄の視覚が邪魔をする。傍から見て五、六歩そうやって進む、指先と思われる部分が何かに触れる。あるものに突き当たる？ 解っている自分はずい。解らないふり、不安でいっぱいな気持ちだと自分に言い聞かせる。目を開くとシルバー色、四段構成、開き扉と引き戸の大きな箱が見えた。

「そうだここに冷蔵庫がある」

ひよっとすると、視覚・見ることは俺を暗示にかけているという事なのではないか、見ることを話すことを同じレベルで操作している俺は、あたかも見ているものに向かってそれはあらかじめ知っているのだと知りもしないのに言っているようにも思える。他者を理解することは観念的なもの・言語的なものであるはずはないのだ。そうだ、見ることに慣れている俺は本当に（もの）さえ見ていないことになる。この六〇kgにも達しない体重・身体の全てで感じないとそこにいる、そこにあるものを把握することはできないのではなからうか。その反応はすべて抽象的、非実存的となってしまう他はないのだろうか。

現実には会社で仕事をしている時、そう感じることはよくある。例えば現代の職場ではビジネスライクに考える傾向が強いが、これはすべて極端なことのように思える。―極度の効率化・生産性・省力・功利性―「極端なこと以外これからの道はありませんよ」と言い切っている人々もいてビジネスチ

ヤンスはそういった発想から生まれると吹聴さえするので。無限という仮想空間への希求。そこには不可思議な光景が広がっている。ヴァーチャルな世界イコール現実の世界として、そこに命が無意識的に息づいているのだ。これは厄介な問題だ。現代の状況はビジネスライクの名のもと、活動している親とその親から生まれて来るであろう子供にとっても最新共同幻想として注視しなければいけない問題だ。このことは人間の終末かそれともまったく新たな人類を生み出す破断面になるのだろうか。錯綜する意識の中でさらに混乱は増大するだろう、この症状は地球上の全ての人に拡散していくだろう。「仮想空間と現実」双方ともあるいは（ひと）の構築した切実さと静かな狂気の流れなのだろうか。

それを解決する為にある可能性だけが残されている。公男にはそう信じていることがある。

そもそも現在瞳を閉じている自分の肉体について――まずそれはどこにあるのだろうか――と公男は考える。見えていた時そう呼び親しんできたやや中年太りの、お腹や腰を触ってもどうやら何かがあるという感覚があるだけで空間・距離という感覚は視覚の記憶を取り除くと無いようにも思える。瞳を閉じている時は自分の知覚を司る位置も、どこにあるのか皆目見当もつかないで、ただ見えずある。場所は脳のある一部がそうであると脳科学者は言いたいのかもしれないが、実際のところ見えないのだからそんなお決まりの饒舌では毛頭ない。確かに手足がもぞもぞ変化する事と違って知覚を集約す

る位置は違うようにも思えるのだが。つまり目を閉じ考えている公男にとつて脳の其の部分はその感覚を纏め配分するための集積地以外の場所ではない様に思われる。五体がその知覚の場所である、すなわち身体のあらゆる表面が知覚の直接的本源的現場なのだ。公男は思う。末端の反射神経といひ、あたかも脳で判断しているから脳の判断力の方が優れていると大方の人はそう教育されてきたし、公男もそう思ってきたのだが、脳は躊躇し時間稼ぎをしたり、また時には間違ったことさえ体に命令したりするようだ。脳を持つことはそういうこと、脳は反射的行動による危機を回避するため、瞬時に行動することをやめ、遅らせる、弱肉強食世界の中で危機を回避するための時間と空間を作り上げる。そのうえ視覚を介して距離と時間を測つて体に行動させようとする。物質でありながらほかの部位に指令を出す妙な器官なのだ。何十億年という生物の歴史の蓄積である夥しいシナプスの群れ、それらが意識的無意識的に私の身体すなわち私のすべての行動に指示を出して、自らの身体が判断することを援助するのだ。

先程も思ったのだが生まれつきの視覚障害を持った赤ん坊は初め、ほかの赤ん坊と同じように泣き叫びながら母親が差し出す乳房に本能的あるいは強制的に口をあてがわれ、乳を吸う。しかしほかの赤ん坊がその乳房を口と手、目と鼻を介して意識に達するのは違って、見えない赤ん坊は口と手、鼻から意識へ・その意識も映像を持たないイマージュとして記憶するだろう。闇の中のイマージュ。だとすれば視覚は見

えるものにとつてのイマージュとそうでない場合のイマージュの差異はあつてなきが如く、なくてはなるが如くとなる。視覚のありなしとは別に知覚は成立するのではないだろうかとも公男は思う。

例えば本来視覚を持たない原核細胞は酸素を嫌うあるいは避ける。彼らにとつて老化から死へと至る迄の顕著な現象とは「酸化」である。つまり酸素は彼ら（その身体を覆う被膜から始まり内臓に至るまで）にとつて毒なのだ。元々酸素は生まれたての地球には少なかった。様々な原核細胞が初めに発生した。原始的な藻類のそれも、である。しかも藻類の大繁殖によつて、光合成が始まり彼らが二酸化炭素を吸収して酸素を排出する事で酸素の量が飛躍的に増えた。それに対応すべく原核細胞はあまりにも強い酸素の攻撃を避けようと、細胞は自ら大事かつ脆弱な細胞全体を防御しようと、その傘として酸素に断然強いミトコンドリアというパートナーを見つけ、寄り添いその特技である酸素濃度減少力の下、いつの間にか酸素をわがものとして細胞は最後にはパートナーも自らの内に取り込み巨大化、つまり成長し始めた。つまり巧妙さと忍耐によつて酸素という毒を薬に変えていったのだ。命を繋ぐために自らを守り個体の内部に必要なものを蓄え成長し繁殖させそれを次の世代に渡していくこと、それが細胞の意思であり姿なのだ。そこに視覚はなく、未分化な何かに突き動かされているとしか思えない状況があるのだと公男は考えた。（細胞の皮膜が役割を持つこと）それは全て接触する

ことから始まる。原子であつても原核細胞であつても触れる、触れられることによつてすべてが始まる。人間のあらゆる表面もまさにそれであつて、そこでは生死を分けるかも知れぬ情報が絶え間なく発信受信されそれを基として絶え間なく行動に移しているのだと。

脳が判断するのは確かに全身的ではあるが絶対的ではない。ライオンに襲われるインバラが反応し逃げようとした時、喉元に牙を入れられ絶命する際には喉の皮膚の先端から気管支・肺・脳・心臓へと瞬時であるが徐々に死んでいくのだ。従つて第一の感覚は触覚であると公男は定義づけた。全くもつて（手前味噌ながら）これで納得がいく。触覚は原始的なものであつて、知覚がそれを束ねていると言うかもしれない。しかし知覚が脳細胞に潜んでいない生物はどうだろう。彼ら脳神経のない？細胞は恐らく表面の触覚の強度のみによつて絶えず行動する、例えば人間の視覚が目を開けていれば四六時中瞼を閉じる時以外眼前の対象を映し続ける鏡として対応している様に。傍から見ているとつまり絶えず全身で生死を繰り返しているのだが、五感が同じ強度・圧力つまり無意識で移動する場合は、脳が感覚・知覚を騙しまるで身体上何も起こっていないようにさしむける。実際各細胞はその身体が死に至るまで永遠に生死の動作を繰り返す。対自としての世界の変貌に対して四六時中細胞の表面は反応する。知覚から来る、したたかな集積地としての記憶的意識はそれをオブラートでくるみ麻痺させる。ヒステリーにならない

いための緩衝材、まるで触覚は何も活動しないともいう様に……。しかし活動しているのだ。本当の所は個々の細胞の先端の部位で激しく対自に対し手探り状態で触れて続けているのだ。取込むもの、回避するものが表面に当たるとつり細胞被膜に在る部位に衝突する。その時々強度が行動を能動的あるいは受動的なものにするだろう。知覚が主体となつて制御するのではなく、知覚は触覚を補助するのだ。或いはこういうえるかもしれない。瞬時に捉えるものは触覚であつて、それは偏在する。世界に窓がないとすればあらゆる変動するものとそれに対応するものが同時に動き続けること。(触れ合うこと)それが全ての世界である。つまり見えるもの見えないもの全てが不可分の状態で現前しているのだと……。

視覚は触覚よりもずっと後に出来たものと思われる。視覚は遠近を獲得、更に色の変動を脳に送り続けることによつてアナログで且つ鮮明な対自を捕らえることに成功したと言える。しかし知覚よりも感覚それも単なる触覚の強度の差異があらゆるものを無意識・意識的に突き動かすのではないだろうか。こういったら分かり易いだろう。進化? していない動物の動きは触覚を媒介に他者? と接触した際それを取り込むか、取り込まれるか瞬時に判断しそれで成立する単純なもの繰返してあつて、それを蓄積し複雑化した? 動物は知覚によつて触覚が受けるであろうダメージを増幅したり緩和させたりするだけであつて(これが進化のメカニズムという人もいるのだろう)公男にとってはほとんど変わらな

い事なのだ。

夜行性動物は視覚を持つている。だが彼らは夜のうちに殆ど視覚を使わない、嗅覚と聴覚それと振動を感じる触覚で暗い野山を駆け巡る。獲物を捕獲する、それを食べるのだ。味がいいのか悪いのか、それは解らない。ともかく彼らは満腹になると、眠り始めるのだ。

再び公男は目を閉じた状態で座っている。

公男の脳髓の中には錯綜し対立し混じり合う夥しい(線Ⅱことば)の群れがジェットコースターのように上昇・下降・回転・ねじれを繰り返していた。

II

私、村野夫美子は二十歳・視覚障害者です。

私は生まれてきた時からこうであつたし、もちろん今もこれからもそうであると自然に思っています。それは私にとって何の違和感もありません。確かに私の周りには所謂健常者・つまり目が見えている人たちがばかりでまるで自分のみが不幸・憐れむべき保護されるべき、介護されるべき存在なのだという感覚を味わい続けてきたことは確かなのです。悔しく、悲しい日々はなんどもありましたが、周りの障害であることを理解してくれている人達から「視覚以外は健常者とは何の変りもない身体だよ」と言われて、私はこの状態が普通なのだと思うし、またそうでしかないのだとも思っています。私はいつも思っています。私が生まれてからここまで、私の体と

心は視覚以外の知覚を駆使して私を作り上げてきたのだと。確かに眼が見えないことはあってもその部分は両親を介して、知人あるいは他の人の補助によって、情報によって補われている。例えば視覚のないことで移動するときの困難さはあっても、それは足の不自由な人と状況自体は違わない、むしろ条件さえ整えばずっと早く、つまり効率的に目的地に辿り着けるのだと。それはほんの少しの差異なのだと。

初めは触れる事から母をそして父を親戚・周りの人々を知ったと考えています。更に母の優しい匂いと語りかける声にまたその乳房から出る乳を吸うことによつて匂い、味わいを知ったのでしょう。その存在が私を守るのだということを身体が把握し、母なしでは生きていけないことを無意識的・本能的に理解したと思います。生まれてから間もなくの期間は殆ど健常者と同じだったと思うのです。

それでも体が少し大きくなつて健常者の所謂ハイハイ、タツチ状態ともなると本当に難儀し始めたようです。重力はハイハイするまでの間に体が自然と覚えていたと思います。つまり重力を全時間無意識的に学習し続けていたから問題はなかったのですが体全体の移動ということになると自分の体の位置がほかのものと、どういった位置関係になっているのかは盲目ゆえ解るはずありません。知力も十分でないから健常のこともさえ見てハラハラされるであろうに、ましてやこの私が移動しようとするのだから母を初め、周りの人達はどう程気を使ったのだらうと思います。母は私が少しでも自由

になれるよう、親心として私を床に置く。当然お腹を下にした私が両手を交互に床にバタバタと手をつき、前？に進もうとする。少し進む。するとすぐ出来たての小さな指が固く冷たい家具の角に当たる。私は驚きと痛みにわつと泣く。そういつたことを繰り返してハイハイの仕方を覚えていったのでしょう。そこには言葉というものを理解する能力というものがあったかどうか記憶の中には見つかりませんし、思い出せません。行動が先にあつて母を始めとする多くの人達の「触れる」という介添えによつて安全にその過程を過ぎることができたと思えます。歩き始めもきつとそんな感じだったと思います。赤ん坊だから、言葉で命令されそれに従ったことはないと思います。繰り返しにはなるのだけれど重力に対する感覚は教えられたものではなく生まれた時から重くなる傾向と軽い傾向を絶えず体自体が私に教えていた様に思われます。意識がハッキリとしてきた頃には、健常者の言う〈下〉が、足が大地に着く部分であつてそれは言葉が聞こえ、他人を理解していると思つていて頭の部分からは殆んど一番遠い場所にあるということも教えられ位置関係を無意識で把握したのでしょう。あらゆる位置関係はそうやって教えられ自分の知覚・手足という部分はもとよりありとあらゆる細胞、つまり全身が確認し脳へと絶えずその状況を送っているのだらうとも今は思っています。つまり視覚を触ることから獲得したといつてもいいのでしょうか。「でもそれは変な気がする」そう思つていただけで三歳年上の兄が（兄は目

が見える) 昨日こんなことを話してくれました。

「夫美子 最近読んだ本の中にこんな一節があつたんだ。――視覚は触覚の進化したものである――とね」

兄は哲学が好きで良く本を読んでいる。思えば私が生まれてきた時からいつも近くにいて私の仕草や言葉に敏感だったと思う、健常者の兄から見て私が違った角度からものを見ていると思えたのかも知れない。その事と同時に、兄からすれば近くにどんな状況に置かれるか解らないハラハラドキドキする対象としての私があつたのだから、この私を見続け考え続けてきて考えるところも多かつたのだろう。

「この考え方どう思う?」

私はその事を聞いて初めてはつきりと(全身で)自分自身を全肯定出来たのでした。なんの躊躇いもなく自分として生きていいのだという喜びを感じたのです。人間として他人とは違うことに引け目を感じていた自分から完全に開放されたと思いました。私は嬉しさを隠し切れないで、

「やっぱりそうなの、私にとって見えないで遠くにいるお兄ちゃんより手をつないでくれて遊んだり、それから泣いたりした時ぎゅっと抱きしめて慰めてくれるお兄ちゃんの方がずっと真実って思っていたし、今でもこれからもずっとそう思うよ」

子供の頃は何かと人に依存せざるを得ない自分を当たり前のように思っていたのだが今は幸運としか言いようがないと思っている。世の中では平気で子供を虐待して、命まで奪う

ということもあるのだから盲目だということの私を愛しみ育ててくれた両親に心から感謝しなければならない。ともあれこの年代まで生きることができたのは恐らく、動物・生物学的には奇跡であるが倫理・宗教的側面からいえばごく普通の事なのだろう。どうやら強者と弱者の論理がそれぞれ表面に躍り出て反転しているらしいのだ。

「私の周り」という感覚で私は空間を意識している。この状況で聴覚は私にとって重要なものだ。ある大きな音がすれば近くそれが次第に小さくなれば遠ざかって行くといった単純なことから、言語という様々な音差からあるいは言語の蓄積? でもある記憶から近い遠い恐らく何メートル歩いていけばいいのだということ教えられ実感したのだろう。でもそれは正確ではないようにも思える。

「いまの夫美子だったら一歩歩いてほしい五十センチ位だから十歩でドア迄着けるよ」

そう言われて、歩いて見えない距離を進んだことは全くない。母の声に誘われてよちよちと夢中であるいは速足、あるいはゆったりと進む、その歩く度合いを体が覚えてその結果そこに着いたというのが真実なのだ。確かにものがあることは実感する。例えば触れば暖かい自分の頬があつてそれは少し冷たい掌にとって暖かなものだし、それはごつごつしたものでなく滑らかなものだということ。確かにそれらは殆ど教えられ命名されたもののだが……。見えない私にとって像で推測することは不可能なのだがわたしのからだの感覚はも

のに対し全力を挙げ向かっているようだ。

ものがあるということは解っている。

大きさも形も教えられてなんとなく箸は箸、茶碗は茶碗と理解しそこに盛られたご飯も舌と鼻で暖かさとその味と香りを十分に味わえる。ただそこに行く過程が見えないことによって困ることが多いのだ。身体に密着したものは解るし、確かに一度ある位置が分かれば体の記憶つまり総反射神経によって、そこに到達できるのだが、それが長い距離ともなると、記憶を辿ったとしても、厳密に言えば本当に目的地に着いたということが百%確信できないのだ。確かに白杖をついて記憶と聴覚・嗅覚を使って辿り着ける。例えば新宿・新宿という例の車内放送によってあるいは人混みの臭い・雰囲気ですらに着き、目的の盲学校に向かうことはできた。(確かに日々状況は変わっているが、友達の声、周囲の匂い、雰囲気そして手話するときの人の手触りを感じ、そこにいると信じている私がいるのだ)とはいえない見ることの素晴らしさ、喜びを感じる事ができないのは本当に不幸なことと思う。各感覚が一つでもなくしてしまった状態では人間として十全なものを与えられないと思うのも無理はないと思ったりする。私の場合、母の顔も父の顔も、もしかして運よく結婚した時の、愛する人の顔も見ることではできない。ただそれでも言える事は、私は母に父にそして「彼」に触れる事ができる。たとえば顔が見えなくともその人の息遣い言葉、触れてくる優しさ暖かさを感じることが出来る。私にとってその喜び以上に何を

望むというのだろう。ハンディを認め乗り越えようとするところそこには必ず果てしない広がりというかじつくりと味わえる深み・つまり圧倒的な喜びがあり体に充滿すると私は感じている。それは不思議なことだと夫美子は思う。視覚を失った私が他の感覚を総動員させて少なくとも世界を味わっている事を。何がそうさせるのだろう。私にはよく解る。私の体がそう教えてくれ、私の大脳、脊髄反射神経などを介して私自身がさらに運動つまり行動しようとし続けるからなのだと。止まっているように見える状態でも体は絶えず新陳代謝を繰り返している。でもその事は科学的な表現なのではない。科学はどうやら動いているものをいったん止めて分析解析するようだ。(二時間と三時間を足すと五時間です)といわれる。確かにそうだしそれはそれでいいと思う。ただその時間の中で「私」がどのような心の軌跡を描きつついるのか心理学は知らない。生きているという不思議さの中、科学はその手前で頓挫しているのだ。

私は絶えず私を感じている。視覚のないことで人間としては、不自由なのだが……少なくとも健常者と呼ばれている人々は、恐らくは私を感じている身体という囲いを視覚によってまぎまぎと見せつけられて、やむなくそこで妥協して自らを慰めそこで安らいでいるようなのだ。私に絶えずあるのはまさに「自虐と思われてもいい、繋ぎ目のない私の意識」が絶えるまでの掟えられない「時間に沿って生きている事への実感」と共存している事を味わい続けている事なのだ。そ

こにはただ単に常識的に生きていることからくる喜怒哀楽をも抱きしめるような素晴らしさがあることを私は自然の事として、「発見した」と思っている。

「私は見えない事でナメクジの動きが解るようになった。私は見えない事で脳のない草木の生きざまも理解した。私は見えない事で石や水といった有機的生命を持たないものの中に私との連帯を見出した」

私はそんな感覚にいつも満たされるようになった。

ものが見えない事にはどんな特徴があるのだろう。まず人の表情、仕草が（教えられたことでしか）理解できない。それは短所・欠点のように思われるかも知れないがそうではない。色が識別できない事は厳粛な事実でしかない。

例えば人種問題があるのだが、私にとって黒人も白人も黄色人種も同じとしか判断できない。視覚というものがないから眼で見た違いがそこにはないのだ。つまり色による人種差別は風評に近いものなのだろうとさえ思う。それが目の見えている健常者達を争いの渦中に巻き込む原因となっているとしか思えない。見える差に取りつかれて狂ってしまうのだろう。自分とはより自分以外の私と同じ境遇の人にとって、ものが存在している事は何の理由もなく素直に同じレベルだから違和感はないはずだと思う。あるとすればさっきも言ったように教えられたことが災いしている。

《人間の平等》というスローガンを歴史上偉大あるいは高貴とされる人物が声高々に宣言してから平等が当たり前とい

う感じが広まったのだろうけれど、本当はこんなことを言うために言ったように思われる。

「あのうですね。色の違うことから始まって、貧富の差、生まれた環境の差は厳然とありますよ。でもそれを克服することによってですね、不平等はなくなっていくかなければならないのですよ」

こういったことが言われ初めてから何百年、健常者の多くが、平等を目指しあるいは悪用して様々な状況を作り出してきたのではないだろうかとさえ私は思っている。科学的に、厳密に考えると目が見えない人にとって少なくとも色の違いは（概念）の中にしかなく実際にあるのは同一のトーンだけなのだ。だからそれに対して私はこう言う。

「あの、それ間違っています。色で差をどうしてつけるのですか。初めからあなた方はそう考えているから克服できないんです。私には色がありません——盲目だからです。ですから色に差などありません。克服するというよりその次元が違うのです。あなたの言う平等という言葉は欺瞞でしかありません。盲目の私にとってあなたの言う平等が存在しないと様に見える事による違い・差別感なんてないんです」

ただこう言っても差異は感ずる、不平等感もある。ただそれは視覚からくる差異ではない。ただ幸いなことに見ることからの先入観はかなりの部分で免れていることは確かなのだ。見えていることによって人は騙される、また見えない事によっても騙される。見えない事で違いがなくなるかという

とそうでもない。匂いによって、温度によって、おたがいの圧力によって自分と他のものを感じる、つまり何のことはない意識ではなく体が感じているのだ。でも体もまた騙される。行動とは確かにそれだけでは何の意味も担わない。つまり行動は純粹なものだ。騙されるのは運命としか言いようがないのかもしれない。ひよつとすると、ひとは見えることによつてその時代、一つの安心を得ていて、それをほかの人と共有することによつてその一つのヴィジョンから抜けようとしなのではないだろうか。生きていくことは不安の連続なのだろうけれども、そこに安らぎを得ることは見えることによつて、一度止まってしまうことなのではないか、うまくはいえないけれども、私が安心した状態を考えると、どうも人々は（見た状況）の残りものを借りて安心しているように思える。

私という動物⇨有機物つまり生命体とは一〇〇%行動をするために生まれてきているように思える。つまりこうしてベッドに座っていると視覚を除いて、他の感覚は途切れなく周りの状況を感じるために動こうとして動き続けている。——ちよつとした物音、部屋の匂い、温度、布団の手触り、齧った煎餅の味、昨日優しく話しかけてくれた満君を思っている事——それらの感覚全てが受・能動的に同時に私の全身で働いているのだ。全ての人がもし盲目であつたなら（こんなことはありえないのだが）「道具を作らないひと、言葉を話さないひと」として厳しくも静かに肅々とその生を繰り返してい

くことになるのだろうか。
 今、夫美子は強く思う。
 「明日私から満君に話しかけよう」と。

（中区）

「入選」

リトル コクーンズ
Little Cocoons

馬場純平

俺は目がどうかしてしまったのだと思った。ピントが合っていないのに違いない。それが最初のリアクションで、だから、目を細め眉間にしわを寄せて、もう一度中をのぞき込んだ。

それは、久しぶりにアパートに戻って、電気カミソリでひげを剃ろうとしていたときだった。待てよ、もう一か月も使っていないから、まずひげの粉を掃除しなければいけないと考えた。

俺の部屋は真東に面した二階で、夏になると朝の七時から三十度を超える。エアコンはついていない。雨戸はあるが、面倒だから閉めたことはない。だから、汗びっしょりで目が覚める。安いアパートだから、自分の部屋にシャワーはない。

俺の部屋には俺の体臭が充満している。おまけに、毛布や汚れた洗濯物や洗っていない食器や、俺が毎日踏みつけている畳からも俺の匂いは漂っている。消臭剤なんて買ったことはない。ここは俺の汗が醗酵して俺の匂いが染みついた俺の部屋なのだ。

俺は昨日の夕方、実家からこの部屋に戻った。ふすまを開けると一か月間熟成した俺の匂いが俺を包んだ。俺はこんな匂いなんだとその空気は語っていた。それは親父の匂いとも、とっくの昔に死んだ祖父の匂いとも違う、俺だけの匂いだった。俺は、自分の空間に帰ってほしかった。

しかし俺は、この部屋を出なくてはならない。それは半年後だ。大学を卒業したら、俺の匂いが染みついたこの部屋はまた新たな学生のものとなる。

俺がアパートに戻ったのは大学のゼミのミーティングがあるからだ。夏休みの途中で教授は学生たちを招集した。英語教員採用の一次試験の結果が出たので、二次試験に向けた作戦会議をするのだという。教授は就職に向けた学生指導に熱心だった。教授のゼミの就職率は百パーセントだというのは誰もが知っていることだった。就職ではなくて学問を優先すべきだと講義中に批判する教員もいたが、学生たちはみな教授の熱意をありがたく思っているようだった。

俺にはそれが迷惑だった。俺はあれやこれやと世話をされるのが苦手だった。そして何より、俺は就職しないことに決めていたのだ。だからミーティングをするという電話があった時、俺は断った。もちろん相手は教授なのだから、ていねいに断った。でもそれは許されなかった。みんなで集まることに意味があるというのが教授の説明だった。教授は、俺が就職をして社会人になるのが俺の将来の幸福につながると、心から信じているのだ。だから、多分今回のミーティン

グも、みんなが一次試験に受かったという事実を俺の目の前に突き付けて、俺の心を変えさせるためのものなのだ。

ミーティングは九時からの予定だったから、俺は七時半に目覚ましをかけておいた。壁の端から端に広がった四面のガラス窓からは、すでに真夏の太陽がざらざらと俺の部屋を侵略していた。この部屋には、小さな押し入れが付いていた。

それは、ふすま一枚分の縦長の空間で、ふすまなのに取っ手がついていて開き戸になっていた。木の棚で二段に分かれた下の段に、俺は着替えの入った段ボール箱や冬用の布団を押し込んでいた。上の段はニクロム線の電熱器を置いて調理に使っていた。そして、食器や調味料や乾物の入った箱が電熱器を取り囲むように並んでいた。

俺は汗まみれで七時半に目覚め、電熱器のスイッチを入れてフライパンを乗せた。サラダ油をひいて、ひと月前に置いていったはずの卵を探した。それは記憶の通りに、机の引き出しの一番下に、髭剃りや三角定規や捨てずにとっておいた小さな箱や頭痛薬や腹痛薬や布製の袋や年賀状の束の上に、茶色い紙の袋に入って載っていた。卵は三個あった。ひと月も経つから少し心配だったが、とりあえず焼いてみることにした。三個のうち一個の黄身がつぶれていた。焼けてから、つぶれていなかった二個を、ソースをかけて立ったままで食べた。二個を食べると空腹感が増した。我慢ができなくて黄身がつぶれて不規則に広がった卵も食べてしまった。たっぷりソースをかけたので、味は何ともなかった。

ひげを剃ろうと思った。その前に髭剃りの掃除をしないといけないと気が付いた。ひと月分くらいのひげの粉が中にたまったままだったのだ。真正面から太陽が射す窓に向かつて机を置いていたので、プレスの花柄が一面に広がったガラスを通して容赦なく熱線が差し込んだ。俺はその光を正面から浴びながら、机の上にティッシュペーパーを一枚敷き、その上で、数年間使い続けた、滑らかな金属が手になじんだ、塊感のある機械から刃を外した。そしてプラスチックのブラシで中に詰まったひげの粉を掻き出そうとのぞき込んだ。しかし、そこには俺が予期していた俺の体の分身である黒い粉末はなかった。

俺は自分の目が信じられなくて、中をじっと覗き見た。俺のひげが入っているはずの空間には、俺のひげの代わりに、俺のひげではない何かが入っていた。俺は剃刀の刃をティッシュペーパーに軽くたたきつけ、その中に入っていたものを落そうとした。そうすると、確かに何かがぼろぼろとこぼれ落ちたが、それはその柔らかい紙の上に達すると消えてしまった。

そんなことはないはずだと、俺は息を止めて目を釘づけた。すると見えていなかったものに焦点が合い、何かが積み重なっているのがわかった。

それは、一つ一つが純粹に白い、十個ほどの丸いものが集まった塊で、白いティッシュペーパーの上で緩やかに絡まりあっていた。そして凸凹の模様の入ったガラスを通して朝の

光を満遍なく浴びているから、影さえもほとんどできていなかった。だから、全部が真っ白なのであり、そこに何らかの実体があるということを確かめ続けるために、俺はさらに目を近づけなくてはならなかった。

それは、繭なのだった。一つ一つの形はまさに蚕の繭そのものでありながら、長さはたった二ミリしかない、ミニチュアの繭の塊なのだった。

ストーリーは一つしかなかった。俺が留守をしている間に窓の隙間から数ミリの蛾が入り込み、消えたままの蛍光灯の下をぐるぐるとしばらく飛び回る。餌を探しているわけではない。探しているのは子孫を残すために卵を産む安全な場所なのだ。それは天敵がおらず、卵からかえった幼虫が成長するのに十分なエサがあり、なるべく環境が安定した場所であってほしくない。蛾はその小さな脳に組み込まれた本能を駆使し、部屋の中のような場所から透明な湯気のように湧き出している、様々なものの匂いをその触覚で嗅ぐ。そのほとんどはベッドから漂う俺の体臭だ。押し入れから流れ出した醤油や油だ。本の匂いかもしれない。

本ならば、ふさわしい空間さえあれば、私の子供たちはペー지를かじりながら成長できるかもしれない。畳の繊維のすき間に詰まった、この部屋に住んでいる男の足の細胞のカスでもいいかもしれない。でも、私の子供たちには楽をさせてあげたい。私がイモ虫の時は大変だった。産み付けられたのは屋根瓦の下の隙間の、死んでしまった雀のヒナの羽の間だ

った。餌は十分だった。でも競争がすさまじかった。いろんな虫が卵を産み付け、いろんな種類のウジ虫やイモ虫がひめき合い、わたしは生きた心地がしなかった。

そしてその蛾は、机の引き出しの隙間から湧き上がる生卵の匂いを嗅ぎつける。その匂いに吸い寄せられて、その蛾は引き出しに飛び込んでぐるぐると飛び回る。そして卵の表面に張り付いて、それが自分の卵を産む環境であるかどうかを探る。しかし、残念ながら堅い殻で覆われている。親は焦る。

自分の命が終わりに近づいているのに気づいたからだ。ウルトラマンのランプのごとく、ピーコー、ピーコーと死期が近づいている。気が付くと、食欲をそそる強烈な匂いではないが、餌にできそうなものの香りが金属の機械から立ち上っている。最後の力を振り絞って親は俺の髭剃りの刃と胴体の隙間から中にはいりこむ。

そうしてそこに卵が産み落とされ、幼虫が生まれ、俺のひげを餌としてすくすくと成長し、ちようどひげの粉を全部食べ終わった時にその小さな口から糸を吐き、刃と本体の隙間で純白の繭となったのだ。

俺の顔と首からは汗が吹き出している。寝間着代わりのTシャツはあばらの浮いた胸に張り付いている。繭の塊は机の上で日差しを浴びて輝いている。俺は机に顔をくっつけて、真横から俺の分身の繭たちを見ている。このままじっとこいつらを見つめていたいと思う。部屋がどんなに暑くなっても、ずっとこうしていられるような気がする。

つまり俺は大学に行きたくないのだ。繭のように部屋に閉じこもっていたいのだ。大学に行きたくないのは、就職させられたくないからだ。自分が教員になって、大人のふりをし、子供たちを指導している姿が想像できないのだ。生まれ育った町で高校を出て、県庁所在地の大学を出て、転勤はあるとしても、同じ県内で退職まで暮らし続けるのが嫌なのだ。どこか自分の知らないところに飛び出してみたいのだ。見たことのないものを見て、ずっと新しいものに触れ続けて、驚き続けたいのだ。そして、今の自分に考えられうる、唯一ワクワクできることは留学なのだ。英語の教員になるために英語を修行にアメリカに行く友人には言っている。でも、それは半分はウソだ。俺はこれまで経験したことのないさまざまなことを経験したいだけなのだ。広いところに飛び出したいだけなのだ。

でも俺は大学に行かなくてはならない。出たくないミーティングに出なくてはならない。

俺はティッシュペーパーで繭を包んだ。四隅を合わせてねじり上げ、十分な空間を作り出した。そして、肩から下げる長い持ち手のついた幌布のトートバッグの底に入れた。今日はミーティングだけだから、財布と携帯と筆箱しか入っていない。繭たちは押しつぶされずに済む。

おっと。タブレットは必要になるかもしれない。メモだけならばスマホで十分だが、ミーティングには必携だったな。どうせ使うことはないだろうけれど。

「もともと受験していなかった高田君を除いて全員一次合格ということ、まあ一安心だな」

聞きよによつては嫌味だ。今日も熱心さの故のおせっかいが続くのか。やっぱり俺は来ない方がよかった。俺がいるおかげで、四人の学生も教授も表情が硬い。病気で葬式でも、なんでもいいから理由をつけて休めばよかった。そうしたら今頃は「みんなおめでとう。まあ高田君はああいいう人だから仕方ないとして、みんなちゃんと就職して、恥ずかしくない人間として社会貢献をしていくんだ」なんて、情熱に満ちた視線を学生一人一人に向けてながら語っていたはずなのに。

「ところで高田君は本当に就職するつもりはないのか」

四人の学生たちは、俺のせいで雰囲気はずくくなり、進行が遅れそうだということを絶対に意識している。けれど、小教室の何も書いていない黒板を、背筋を伸ばして無言で見ている。着ている服も就活モードバリバリだ。夏のさなかだからさすがにスーツを着たやつはいないけれど、ジーンズを履いているやつもない。男も女もピシッと襟の立った白シャツにしっかり線の入ったスラックスだ。四人は教卓の前にして、左右対称に座っている。俺はジーンズとTシャツだ。後ろのドアから教室に入っても、誰も振り向かなかった。俺には背筋を伸ばしてまっすぐ前を向くことがどうしてもできない。わざとらし過ぎる。俺は机の上に両手を乗せて背中を

丸め、いつもするように座る。青木と小野と徳永とメグミは、手は膝の上だ。すでに立派な社会人だ。

「はあ」

「本当に留学する気なのか」

「はあ」

「どこのなんていう大学に行くんだ？」

「まだ決めてないです。ってか、よく分かんないんでこれから探します」

「高田君。大学の情報網とかいっぱいあるだろ。で、留学して何をしたいんだ？」

「それもよくわからないです」

「まだ何も決めていないのに、就職だけはする気がないということなのか？」

「まあ。はい」

教授は呆れているに違いない。でも、表情は硬いながらも相変わらず穏やかで、五十代半ばの渋い中年の頬には笑みさえも浮かんでいる。微動だにしない学生たちの背中は、さつきから「早くしろ。早くしろ」と俺にメッセージを飛ばしてくる。

「こんなことは言いたくないがな、高田君……」

『じゃあ、言わなければいいのに』

……そもそも君は社会に甘えているんじゃないか。何不自由なく暮らしてきて、やりたくないことはやらなくていい、やりたいことは何でもやっていいって、私がこう言ってもそれ

は君の中に染み込んでいて、多分、君も私が言っていることの意味が理解できないと思うけれど、しかしね、人間は自分一人で生きているわけではないんだよ」

教授はそれでも微笑んでいる。俺にムカついているんだったら、怒ればいいのに。

「別に、これ、自分がどう納得するかって問題ですから、このまま就職したら絶対いつか後悔すると思うんで」

「高田君。私の考えではね、就職しなかったら、君はきつと後悔することになると思うよ。私立だったらまだ間に合うから、私が紹介してあげるから、なあ、君ならきつと合格するから」

『ごめんな。こんなところに連れてきて。髭剃りの金属の刃の中で静かにのんびり眠っていたかっただろ』

隣の椅子の上に横にして置いたトートバッグに俺は目を落として、繭たちに無言で語りかける。繭を包むティッシュペーパーがタブレットに押しつぶされていないか、体を傾け、トートバッグの口を持ち上げて確かめる。

「先生には青い言葉に聞こえるかもしれませんが、自分を試してみたいんです」

「だったら、教師になったって自分を試すことくらいできるだろ」

「そんなことじゃなくて、自分の限界を試してみたいんです」
ああ言えばこう言う、俺は本当にむかつく学生だ。それくらいわかっている。でもそれが俺なんだから、仕方がない。

「悪いこと言わないから就職しなさい。教員は楽しいぞ。留学したって三か月で尻尾巻いて帰ってくるかもしれないんだぞ。そしたら、就職が一年遅れるということになる。それがどういふことか分かるか。一年就職が遅れたら、将来、校長にはなれないということなんだぞ」

「俺、校長になるのが人生の目的ではないですから」
「じゃあ、何が目的なんだ」

「わかってたら苦労しません」

ごめんね、繭ちゃんたち。生まれる前から人間なんて変な生き物の、価値観の押し付け合いを聞かせてしまつて。この先生つて、ほんと人の心の中がわかつていない。きつと、その白い繭の中に入つたサナギくんたちが、自然の摂理と云うものをもつとわかつているんじゃないのかな。君たちの母親であるせいぜい二ミリほどしかない、そして多分とても地味な色の、普通ならば世の中で忌み嫌われる「蛾」という名前を付けられた生き物は、本能に駆り立てられて俺の部屋に飛び込んで、卵を産む場所を探したんだ。そして、不思議にも俺のひげの粉を見つけてそれを君たちの餌に選んだ。それにしても君たちは、どうやって水分を取つたんだ。俺のひげなんて乾ききっているからどんなにおいしくうとも、のでは乾いただろう。それとも、真夏の湿気に満たされた俺の部屋の空気から吸い取つたともいふのか。

「高田君。ちよつとこつちを見てくれなやか。君は荷物を隣の椅子の上に乗せているが、社会人ならば床の上に置くもん

だ。そして、こんな大事なミーティングにひげも剃らずに來ているみたいだね。君は元々ひげが濃いから、大学生の間はいいとしても、社会に出たら相手に失礼にならないように心掛けなければいけないことくらいわかるだろう」

繭の中のサナギちゃん。君たちは本能に制約されて、遺伝子が命令することのみを忠実に実行している。でもね、君たちは不幸じゃない。不幸なのはこの教授だ。そして、俺に背中を向けて神妙に時間が過ぎるのだけを願っている四人の大学生もそうだ。こいつらは理性を本能に優先させて生きようとしている。本当にやりたいことよりも、こうした方がいいとかこうした方が自分のためになると、小学校から六・三・三と積み上げてきた教育の成果を見事に成就して、理性を駆使して社会人になろうとしている。

俺はバッグの中に手を滑り込ませ、丸まったティッシュを手のひらで包んでそつと取り出す。どうしても繭が見たくて、机の下で開いてみる。しわだらけのティッシュの中に白い糸の塊が張り付いている。俺はその一つを人差し指の先端に突く。

『おい、メグミ。俺はお前をバカにしているわけじゃない。怒つてもいい。がっかりしているだけさ。教員になるなど言っているわけじゃない。去年、俺がこれからどうしようかと悩んでいた時、夢を追いかけて何度も言ってくれた。あのとき、輝いていたお前の瞳が俺を押してくれたのに、お前は今、就職試験に合格することばかり考えている』

「高田君。聞いてくれている?」

「あ、はい」

「君はものすごく迷惑をかけているということはわかってい
るんだよな」

俺は再びティッシュを丸める。

教授は深くため息をつき、教卓の上の資料に目を落として
何かを考える。

「高田君。君はもういいよ。帰りなさい。君みたいな学生は
初めてで、どう扱えばいいのかがよくわからない。なんで君
は高い壁を作って、誰も中に入れようとしないうちだろ」

自分の気持ちに素直なだけだと、俺は勝手に思っている。
だから社会性がないと言われても、こっちが困る。卵が幼虫
になり、そして繭を作ってサナギになる。サナギは一度完全
に溶けて、細胞が組み替えられ、それが完成すると成虫にな
って殻を破って繭から出てくる。サナギは大人になる方法を
教わらなくても大人になる。

俺はちょっとしただけ会釈をして、後ろのドアから廊下に出
る。立ち上がったとき、椅子の足が床に擦れる音がした。前
列に座ったメグミの肩がびくつと、痙攣した。振り返ればい
いのに、我慢していた。

本屋に寄った。蛾の本があつたら買おうと思ったけれど、
小学生用の図鑑しかなかった。洋書コーナーの前に立つて分
厚いペーパーバックのタイトルを目で追っていく。パール・

バックの「The Good Earth大地」が目に入る。なぜかその題名にひかれ
て手に取ってみる。昔の中国の話らしい。ノーベル賞を受賞
したと日本語の帯に書いてある。値段もそんなに高くなかつ
たので、思い切って買った。店の外で、バックからティッシ
ュの包みを出して本を入れ、横の小さなすき間にまた戻し
た。こんなことだったらタブレットはおいで来ればよかった
と後悔した。

アパートに帰っても暑いだけだから、川沿いの公園に行っ
た。途中のコンビニでアイスコヒーを買って芝生の上で胡
坐をかって読み始めた。

まず、単語が難しかった。だから飛ばし読みをした。それ
でも作品の魅力は伝わってくる気がした。昔の中国で暮らす
人たちの息遣いが聞こえるような気がした。でも、作品の中
に入り込んで、その世界に没頭することはできなかった。日
本語を読むように英語が読めるようになりたいと思った。英
語の教師になるために毎日英語を勉強しているのに、自分の
英語力はその程度なのだった。

呼び出し音が鳴った。バックの中からスマホを取り出す
と、丸まったティッシュも一緒に出てきて風に押され、ころ
ころと芝生の上を転がった。その先には川があつて、手前の
急な角度の斜面に向かって白いかたまりは転がっていった。
俺は立ち上がって追った。呼び出しのチャイムは鳴り続けて
いた。ティッシュはそのまま転がり続け、あつけなく斜面か
ら川に落ちた。のぞき込むと川の水は浅かった。でもティッ

シユは五センチほどの水の中に沈んでしまっていた。欄干で隔てられた川の底までは二メートルくらいあって、降りて行く気にはならなかった。

俺はあつてなく分身の繭たちを失って呆然とした。とぼとぼと芝生に戻って座り込んだ。本を閉じバッグに入れ、コーヒーを飲み干して転がっているスマホを立ち上げて着歴を確かめた。メグミだった。すぐに発信した。着信音を聞きながら目を落とすと、芝の間の土の上に白いものが見えた。腰を曲げて目を近づけると繭だった。こぼれ落ちたのに違いなかった。

「ハジメ。今日、飲み会ってこと覚えてる？」

「ああ。場所は決まった？」

「うん。いつもの、コクーン」

「わかった。七時でいい？」

「うん。ハジメ……」

「なに」

「今夜、泊まってもいい？」

甘えた声に真剣さが漂っている。

「いいけど」

「朝の暑いのと、あなたの汗の匂い我慢するから」

俺はスマホをバッグに入れて、ハンカチを取り出して広げた。そして地面から、右手の親指と人差し指で繭をつまみ上げハンカチに乗せてくるんだ。ほかにもこぼれ落ちたものがあるかもしれないと、目を地面につけるようにして、ティッ

シユが転がったあとをたどっていった。六個の小さな白いかたまりを見つけて俺はほっとした。

コクーンは学生に人気の個室居酒屋だ。繭コクーンというその名前の響きが俺は好きだ。本当はコクーンではなくてカクーンのほうが発音は近いらしい。でも、ネイティブが発音するのを聞いたことはない。俺は、この単語の正しい発音さえも知らないのだ。

社会人の模擬演習である白いシャツを着た青木と小野とメグミは疲れた顔をしていた。徳永はこれから塾講のバイトで来れないのだという。

コクーンと言う名前にするからには、もっと凝って、壁を白くすればいいのに。壁を通して光が入るようにすればいいのに。昔の居酒屋を壁で仕切ったまんまだし、流れている音楽は民謡とか演歌だし、どこからかたばこの煙もしみてる。それは、ただ個室だからというだけで付けた名前なのだ。これでは本当の繭がかわいそうじゃないか。

「参ったな」青木が天井から下がった竹かこの電灯を見上げた。

「きようは、ちょっと辛かったな」小野の声にはため息が混じっている。

「俺のせいかな？」

「ばか、お前じゃないわ。教授だよ。なんであいつ、あんなに熱いんだ」

「待てよ。お前らが、一次試験受かったからわざわざミートイングしてくれたんじゃないんか」

「それが迷惑なんだよ」

青木は何を言っても怒っているように聞こえる。細い顔に切れ長の目が刻まれている。

運ばれてきた生中のグラスがでかい。だから、雰囲気はあまりよくないけれど、学生に人気がある。無言でグラスを当てるのが俺たちのしきたりだ。メグミだけは左手を添えている。

「おまえら、いい子ぶってたな」

一気にジョッキの半分を飲む。メグミも三分の一をのどに流し込み、唇の泡を左手で拭く。

「当たり前だろ。ぼくたちは社会に出るんだ。高田君はいいよ。自分の好きなことができて」

小野はすでに中学の教師の風貌だ。そう思うのは俺の中学一年の時の担任にまるでそっくりだからだ。眉が濃くて、大量の髪の毛が立っている。眼鏡は、目や鼻と同じ顔の一部であり、これがないと小野ではない。大学生だというのにいつもワイシャツを着ている。別に馬鹿にしているわけではない。それが小野だ。そして小野は絶対に物事の核心はつかない。彼女がいるのに、彼女とどこまでの関係かは絶対に言わない。中学の教師を目指していて、多分情熱を持っているはずだ。なのに、本当に教師になりたいのかどうかがよくわからない。「どうだ」と聞くと、「まあ、なりたいよ」と答えて、

絶対にそこから先にはいかない。腹の底がわからない。だから、だれも突つ込まない。

その小野にしては強い口調だった。

「ぼくは覚悟してる。教師であろうがなんであろうが、社会に出たら辛いことや腹が立つことは必ずあると思う。それに耐えるために、いろんな情報を手に入れてるし、今日のミートイングも、高田君がいなくなってから教授の講話が熱いとかかしつこいとか、二次試験のテクニクよりもぼくたちに対してたまっていたものをさらけ出したみたいな、でもぼくは必ず得るものがあると思って最後までちゃんと聞いてたよ」

結局、小野は小野なのだ。

「相変わらず優等生の小野ちゃん。ハジメはどうするんだ。メグミとは結婚するんじゃないのか。お前、本当に留学するんか」

俺は最初に出てきた焼き鳥のセットからレバーの串を取ってメグミに渡す。メグミはレバーが好きなのだ。メグミは上を向いて大きな口を開け、インドのストリートパフォーマンスが剣をのどの奥まで突つ込むように、串の真ん中くらいまでを口の中に垂直に突き立てる。串にささったレバーの半分が一気になくなる。そして左手でジョッキの胸を握り、ビールを飲み干しながら、右手で残ったレバーを俺に返す。

「メグミな。だからハジメに捨てられるんだろ。お前な、それさえなければ、ナイスバディーだし、丸顔で垂れ目の、

男の心をくすぐる顔してるからもてるのにな」

細い顔に切れ長の目をした青木は遊び人なのだ。彼女はとつかえひつかえ。風俗でも遊んでいらしい。大学で知らない者はいないから、誰も付き合おうとしない。バイト先をどんどん変えることで彼女を作っているらしい。

親がどんな育て方をしたのか、もともとそんな遺伝子なのか、青木は付き合っている彼女の体の特徴とかセックスの仕方なんかを、聞いている側の迷惑も考えずに克明に解説する。

「お前、教員になったら大変なことになるぞ」

そういった俺の言葉に、「俺は大人だ。大学時代に遊ぶだけ遊ぶんだよ。人間はな、様々な段階を経て成長する。生まれたころはなんでも口に入れるだろ。それも一つだ。次に泥遊び、そして虫を殺す喜び。その段階を通らないと、大人になつたら残酷な人間になる。虫を殺して命の不思議を体で覚えた人間は人殺しにはならない。女遊びもそう。遊ぶだけ遊んで、その段階が満たされれば、人間は次に進むことができる。俺なんて、あらゆる女と付き合ったから、人の心の中が手に取るようにわかるようになった。それって、教師の最高の資質だろ」と真顔で答えたことがある。本当に心からそう信じているらしい確信さえ感じられて、俺は頭を殴られた気がした。俺はそれを知った時から青木の言葉が空しく聞こえるようになった。

俺はメグミのそんなところが好きなのだ。自分が一番おいしいと思う食べ方で焼き鳥を食べる。俺は合コンというもの

に行つたことがない。でもきつと、合コンにはメグミのような女子は来ないのだと思う。見え透いた演技を見え透いてできる技術がないと、合コンではもてないと誰かが言っていた。メグミはどんな時にも自分であることをやめない。それがメグミの魅力だ。

そのメグミが最近変わった。二人でいるときの目の表情に輝きがなくなった。

誰が頼んだのか、手羽先やらポテトフライやらサラダやらホッケの開きやらが次々と出てきて、テーブルがいっぱいになる。ビールもお代わりをする。

メグミは黙々と箸を運んでいる。小野はにこにこしながら料理を見つめている。青木は細い目の焦点が合っていない。何かを考えている。

「ハジメ、結局、お前何をしたんだ」

青木その聞き方に、歯の治療で神経に触った瞬間の痛みを感じる。俺の体はぴくっと反応し、青木と青木の質問を拒絶する。

「留学してから自分がやりたいことを見つかるって変じゃないか。お前、四年間何してたんだ」

「お前に言われたくない」

自分の小ささに俺は傷つく。その点で青木は正しい。でも、俺は受け入れられない。

「昔の言葉で、自分探しつてのがあったらしいけど、それか？」

「俺にもわからん。わからんから、わからんまんまで就職したくない」

これ以上しゃべりたくない。どんだけ言っても無駄だと思ふ。

「本當言うとね。みんな高田君のことを羨ましいって思っているんだよ」

「何が？」

小野の言っていることがよくわからない。

「就職したくない。だから日本を飛び出そうって思つて、本當にそうできる行動力は高田君しか持つてないからね」

やつぱり小野もわかつていない。

俺は考えに考えて、それで答えがわからなかったから、そして、日本を出てみようって思つたら少し苦しさが減つたからそうすることにしただけなのだ。

でもそれは結局現実逃避に過ぎない。だから、青木のほうが正しい。でも、そうやつて計算して生きていける青木に俺は吐き気がする。細い顔にすっきりした目に、短い髪をぴんぴんに立てて、さわやかな若者と突つ張つた愚か者のちょうど紙一重の境目で、心の中は定年を前にしたオヤジにしか見えない。

メグミは右手に箸を持ったまま俺と青木を見ている。小野は下を向いているが、それは場の雰囲気を感じ配しているのではなくて、これから言おうとしていることをまとめているのだ。

「僕も高田君のように、留学ができるんだつたらやつてみたいなあ」

小野は目を少し上げて、油で光るホッケの開きを見つめている。その中途半端な視線が小野らしい。

「金はどうする」

青木がおせっかいな質問をする

「今、バイトで貯めてる」

「親は出してくれないのか」

「当たり前だ。卒業するころには百万は貯まる」

お前みたいに女と遊ぶのに使っていない、と本當は言いたい。

「百万くらいで留学できるのか」

もちろんもつと要る。

「高田君。僕が本當に考えていること、言ってもいい？」

小野はグラスに口をつけるが、ビールはほとんど減らない。「留学つてさあ、いま無理していかなくてもいいんじゃない。教師になって何年か経てば、文科省からお金を出してもらつていく制度だってあるし」

だから、俺が留学をしたいのは、そんなことじゃないんだつて。

「あのな、ハジメ。やつぱりお前は小野の言う通り、今は残つとく方がいいんじゃないか。無理してつらい思いしなくても、生活を安定させるのが先じゃないか」

青木は社会を知った人間であるかのように、俺を諭してい

る。何人もの女たちをその体だけの目的でだましてきた男がだ。真剣なその目が、滑稽でたまらない。

こいつら、苦しくないのか。今まで生きてきて、自分というものが嫌になったことはないのか。このままではいたくない、今の自分と違う自分になりたいという、耐えられない焦燥に襲われたことはないのか。

俺はずっと繭たちのことが気になっている。あの完璧な形をした美の象徴が、こいつらの言葉を聞きながら、人間の愚かさを笑い、微小な蛾として生を受けようとしていることを喜んでいるような、そしてその声が聞こえているような気がしていた。

俺はバッグを引き寄せた。青木も小野もホッケを見つめている。メグミは背中を壁につけて体育座りをしてビールを飲んでいる。右手で飲んでいながら顔も右を向いている。左手を左の膝にのせて、頭をのけぞらせてぐいぐいとビールをのどに流す。自分を取り戻そうとしているように見える。

俺は白いティッシュの塊を取り出す。皿のすき間に置いて開こうとするが、こぼれたビールを吸ってしまい黄色い染みが広がっていく。俺は慌てて小皿を一つ手元に寄せて、その上で塊を開く。繭たちがぼろぼろと小皿に落ちるが、エアコンの風に全部飛ばされてしまった。メグミも青木も小野も、それが何か気づいていない。メグミはビールを飲み干しながら俺の動作を見ているが、興味はない視線だ。青木と小野は、まだホッケを目で食べている。

「ハジメ。知りたい？」

俺の動作には関係なく、メグミがぼつりと言う。俺は繭を探してテーブルを占領した皿を一つずつずらす。そして一つ見つけるたびに、また飛ばされるといけないから、深いコップの中に入れていく。

「私たち、あなたがなくなつてから教授に頼まれたのよ。頼まれたというか、脅されたつて言った方がいいかもしれない」

俺は三十センチくらい離れた、カーリーポテトフライの皿の下に二つかわいく並んだ繭を見つつけ、指でやさしくつまんでコップに移した。

「ハジメを説得できたら、私たちを必ず合格させてみせるんだって。どんな手を使うのかわからないけれど、ずいぶん自信を持ってそう言つてた」

俺は何とも思わない。教授は教授で一生懸命なんだろう。本人はそれを善意であると信じているのだらう。

「俺を説得できなくても、どうってことないんだろ」

「多分ね。でも、心配は心配よね。できなかった場合」

メグミが指先でぶら下げたカーリーフライは、三本くらいが絡み合っている。それを構わず、口を上にあけてパクパクとかみ砕くと、いい具合に揚がった音がする。

「見てくれよ。こいつら小さな繭だぜ。すぐくないか。この中に命が詰まっていって、もうすぐ変身して、小さいけれど空を飛ぶんだ」

ガラス越しにのぞき込むと、繭は少し歪んで見える。斜めにする底を滑って片方に集まる。繭が仲良く寄り添っている。このままコップごとバッグに入れて持ち帰れば大丈夫だろう。店員に訳を言えばコップぐらいもらえるだろう。

青木が無言で右手を差し出す。俺はテーブル越しにコップを渡す。天井から下がった竹かごのランプが丸い側面に反射した。青木は中をじつとのぞき込む。

「これって俺たちか？ そう言いたいのか？」

青木は自分の言葉で人が動かせると思っているのかもしれない。きつとこれまで、いろんな言葉を使って巧みに人を操ってきたのだろう。

「別にそんなつもりはないけれど、その中にも命が息づいていると思っただけで興奮しないか？」

「もしかしたら、この繭の中でお前だけが羽化して外の世界に飛び出していけると思ってるんじゃないか」

「だから、そんなつもりはないって」

「お前は、お前だけが特別な人間だと、自分でも気づかずにそう思っているんじゃないのか」

繭を見つめたまま、青木はつぶやくように言う。

「うざいな」

「お互いにな。多分」

青木は、街角で配っている、女の子の胸から下しか映っていないキャバクラのティッシュをテーブルに置いた。そして、取り出した紙を、幅が二センチほどに数回割いた。それ

をコップに入れて、いつの間にか取り出したマッチをすり、中に落した。俺が立ち上がるよりも早く薄い紙は燃え上がり、自らが作る上昇気流で空中に浮きあがって燃え尽きた。

しかし、底に残った紙は燃え続け、繭たちを襲った。

青木は俺をわざと刺激した。俺がその行動に反応し、青木の胸ぐらをつかんで殴れば、青木はその状況を利用するつもりだった。俺が無抵抗の青木の顔を殴り、鼻血が出ればそれは青木にとつて願ってもないことだった。俺はそんなことは分かっていた。こんな計算と打算で生きている男を相手にする価値がないことは分かっていた。でも俺は、青木が望んでいた通りに青木をにらみつけ、左の肩を立ち上がった青木の肋骨の真ん中あたりにぶつけた。でも、手ごたえはなかった。それは青木が巧みに体を斜めに傾けて、俺の肩の圧力をそらしたからだ。なのに、青木は大げさに吹っ飛んだ。吹っ飛び方がまたリアルだった。後ろの壁に背中をぶつけ、ついでにちよつとだけ後頭部を当てて、そのまま部屋の隅に積んであった座布団に倒れこんだ。

青木は気を失った。その演技は完璧だった。慌てた店員が店長を呼び、店長が救急車を呼ぶように店員に指図したその時に、うーんとうなりながら意識を取り戻したのだ。大丈夫ですか、救急車を呼びましょうか、と店長はパニックだった。なぜこんなにあからさまな演技が見破れないんだ。青木は、大丈夫ですと弱々しくつぶやき、そのせいで店長はさらにパニック、叫びまわった。もちろんそれは、青木の容体を心配し

たからではなくて、責任者としての務めをマニュアル通りにやりながら、万一手抜きがあった場合に自分の感情が高ぶっていたせいにするためだった。

何がどうなっているんだ。

小野は手筈通りに進んでいる芝居を、舞台裏から眺めている目線で、立ったまま見下ろしている。メグミは表情がヒンズーの女神のままに固まっている。

俺はコップを目の前に持ち上げて、横からのぞき込む。テイスシユの焦げカスがコップの底にたまっている。そして、その中には真つ黒な繭が絡まりあつて軋がつている。俺は青木を見下ろす。この卑怯な男は目的を達成した満足感で、横になったまま目を開けて、薄い笑みを浮かべている。店の騒ぎは収まり、大丈夫ですねと、店長は二十回くらい確かめて、青木がそのたびに仰向けのまま軽く頷くのを確認してから部屋を出て行った。

俺は青木の横つ腹を蹴飛ばさなければ気持ち収まりそうにない。それを悟ったか、メグミは俺に寄り添い、小野に目配せをして、自分のバッグと俺のトートバッグを拾わせる。メグミは俺に体をくっつけたまま部屋の外に俺を導き、店の外へと押し出した。

「あなた、何てことしてくれたのよ」

途中のコンビニで買った安い白ワインをガラスのコップに注いで、メグミは目を上げる。俺のコップには注いでくれない。

い。俺たちはいいつもそうだ。こうしてくれて当たりまえだろうという関係は俺もメグミも嫌いだからだ。自分で注いだ方がよほど気楽だし、おいしいと思う。とにかく相手に気を使いたくないし、使つてほしくない。

だから、俺は自分のコップには自分で注ぐが、その色から、それがワインとは名ばかりの、深みのないスカスカの味であることが読める。メグミもそれは知っていて、目をつぶつて一気にとに流し込む。それは酔うために買ってきたワインなのだ。

「仕方ないだろ。あそこで何もなかったら、繭があまりにもかわいそうだろう」

俺はすねる。

「留學つて、どこに行くつもりなの」

「言うて恥ずかしいから黙つてたけど、アメリカ」

「卒業したらすぐ？」

「本當言うと無理。まだ金が足りない」

メグミのコップに露がついてすりガラスになっている。メグミは床に座り込み、膝を抱えて体を前後にゆすっている。

「教授や青木君の価値観で私は就職しようとしてたわけじゃないけど、自分を封印してたのに気づいたの。あなたのせいで」

「どういふことだよ。人のせいにするなよ」

俺はベッドに寄りかかって、怒ってみせる。俺が決して怒っていないのをメグミは知っている。

「英語って、教えるものである以前に使うものでしょ。満足に使えないのに、学校で教えるってことに前から抵抗があったのよ」

「なんだ。俺といっしょか」

「そう。悔しいけど。あなたの頑固さに私は反省したのも、ハジメのまねはしないからね。私は私の進みたい方に進んでいくんだからね」

俺は露のついたコップからワインを飲み干した。空になったのを見て、メグミがボトルを片手で持つて注いでくれた。

「どうしたん。めずらしいじゃん」

「同志の乾杯をするのよ」

メグミは体を傾けながら、自分のコップにも注いだ。俺たちはコップをぶつけあつて喉に流し込んだが、安いワインはやっぱり不味かった。

「あたしね。本当は翻訳をやってみたいの。何を翻訳するかもわからないけど、日本で教わった英語で齒が立つわけないよね、きつと。イギリスでもアメリカでもいいから、ありとあらゆる文章を読んで修行してみたいのよ。英語の息吹みたいなものはやっぱり日本では無理でしょう。わかつてたんだけれど、今日までちよつと勇氣が足りなかった」

久しぶりにメグミのメグミらしい瞳を見ている。

二人で飲んだからワインはすぐに空になった。俺が提案して、もう一度駅まで出て、専門店で赤ワインを買うことにした。手をつないで歩いていたら、まっすぐ歩いているはずな

のに時々肩がぶつかった。イタリアがいい味出していますと言われて、何もわからないままに金を払い、ちようどボトルが一本入る紐のついた半透明の袋に入れてもらった。メグミがそれをぶら下げて、いろんなことを考えながらふらふらと歩く姿に俺はちよつとドキツとした。それは誰にもまねができないメグミの後ろ姿だった。メグミはいつも考えていた。俺に氣遣うよりも、自分の生き方を考える姿に俺はこれまでひかれてきたし、今もそれを確認した氣持ちだった。

「ねえ。あの小さな繭ってどこで見つけたの？」

メグミは肩をぶつけたはずみに思い出したかのように聞いた。

「じゃあ、帰ったら見せてあげるよ」

言つた後で、髭剃りを見せている自分を想像した。なぜか恥ずかしかつた。でも、そう言つたからには見せないわけにはいかない。コップの底にたまつた、燃え尽きてはいないまでも、黒焦げになつてかたまつた繭を思い出した。あのまま髭剃りの中に戻しておけばよかつたのだ。そつとしておけば、いつかは羽化し空っぽの繭だけが残されるだろう。そして二学期が始まつたら、ちよつと掃除すればまたもとのように使えたのだ。

アパートの階段を上がり、ドアを開け、メグミが先に靴を脱いで部屋に入るところを俺は背中から抱きしめた。メグミの香りがした。メグミは振り返つて俺の腕の下から手を入れて力を込めた。体温が伝わつてきてほつとした。

ワインの蓋を開け、コップに注いで乾杯をしたら携帯が鳴った。教授からだった。メグミもすぐにそれがわかって、困った顔をして、ペロを出して微笑んだ。

「高田君。青木君に連絡をしたら、今日大変なことがあったんだそうですね」

うざいと思っていた教授が、ますます面倒に感じた。

「明日もう一度私の研究室に来てもらえないですか。いろいろと話したいことがあるので」

しつこい話し方が耳に残る。

「どうせ答えはノーですが」

「まあいいじゃないか。ゆっくり話そうよ」

仕方なく俺は同意した。実家に帰るのを遅らせる羽目になった。バイト代がその分減る。

「じゃあ、私も一緒に行くとするか」

メグミの声を聴くと俺は安堵する。

「教授、びっくりするな」

「まあね。私も就職はやめましたって言ったたら、あの教授もついに怒りはじめるかしら。それとも降参する？」

ワインの味はよくわからないけれど、口の中で転がしてもまずいという感覚がない。ということはおいしいということなのだろう。俺はワインの味がわかるほど長く生きていない。

「ねえ。見せて」

テーブルの向こうから身を乗り出して、グラスを片手に俺

にせがむ。俺は立ち上がり机の引き出しを開けて銀色に輝く男の道具を取り出してメグミに渡す。

「なにこれ？ ひげそり？ こんなもんで剃ってるんだー。やってみてよ」

「この刃の部分にね……」

俺は人差し指の腹でそこを撫でる。

「薙がいっぱい入っていたんだ」

そして、ボタンを押す。すると、金属的な音がしてその部分が外れる。メグミは目を丸くして見ている。

「もしかしたら世紀の大発見かもしれないのに、全部焼けて死んじゃった」

俺はため息をついて、外れた刃をテーブルの上に二度三度軽く叩きつける。それは、たまった髭の粉を掃除するときにもいつもやっている、癖になってしまった動作だ。

すると黒いテーブルの天板の上に、白いものが転がる。俺とメグミは目を寄せてのぞき込む。それは二つの小さな真っ白い薙だ。

「残っていたんだ」

メグミが叫ぶ。

「こいつら、しぶといな」

俺は微笑んでいる。

「ちゃんと羽化して飛び立ってくれるかな」

メグミはワインを一口飲んで、膝を両手で抱きかかえ、両目を寄せて、薙を見つめる。俺もメグミを反対側から見つめ

ている。メグミは真剣な目をして息をひそめている。俺も繭が飛ばないように、息を殺す。

まだ早い。でも、もうすぐだ。もうちよつとでこいつらは大人になる。ちっちゃいけど、成虫になって繭を破って這い出してくる。そして部屋の中をぐるぐる回って窓の隙間を見つ、外の世界に飛びだしていく。俺は、何色かもわからない小さな二匹の蛾の姿を想像し、ドキドキしながらメグミを見る。メグミも俺に目を向けて微笑んでいる。メグミの瞳は熱い思いに輝いている。

(愛知県知立市)

「入選」

符合

鈴木篠千

その時はよくわからないが、後から考え直してみると理解できる、という事がたまにある。出来事の一つ一つは独立していて、一見、全く無関係に見えるが、それがまるで一編の詩のように関係し合っていたのだ。

車の製造工程を思うと良いかも知れない。

一つのパーツを見れば、何なのかわからないが、組み合わせると自動車になる。そこで理解する。

『ああ、これって車の部品だったのだな』と。

そんな事がある。いや、あった。

去年の夏、俺は奇妙な体験をした。

一つ一つはバラバラで何も関係が無いように見えたが、今思えばそれはある一つの出来事の断片を連続で見ただけのようだった。そして、俺自身が動く事で、問題は解決されたのだ。

去年の夏、俺は冴えない日々を送っていた。派遣で勤めていた南区の工場を七月末で契約解除され、仕

事と収入源を一度に失った。三月からその工場で働いていた俺が雇用保険の給付を受けるには一ヶ月ほど、足りなかった。全くの無収入になった。

そして、次の仕事はなかなか見つからない。解除になって一週間、ハローワークに通いつめ、自分の出来そうな求人に手当たり次第に履歴書を送ったが、書類審査で落ちた。

俺はハローワークに行くのを止めた。

今年で三十八になる。そして未婚だ。いい年齢の息子が朝から自宅にいることを母は快く思うはずがない。

俺は朝から遠鉄電車に乗り、街中のファミリーストランで求人誌を読み耽るのが日課になった。

他にいく場所がなかった。浜松の中心部にあるファミレス、そこが職を失い、家庭にも居場所の無い俺の「逃げ場」だった。

そこに三日と空けずに入り浸った。行かない日は図書館で時間を潰す。注文は二百九十円のドリンクバー。たまに四百九十円の格安ランチを頼む。それで午後の四時半まで粘る。求人誌の出る日は必ず行っていた。

店からすれば回転率を下げる迷惑な客だろうが、俺には他に行く場がなかった。

それは八月に入り、盆休みが近づいていたある日だった。俺はいつものようにそのファミレスのいつもの席で、いつものように求人誌を眺めていた。盆休みを挟む為、求人誌は二週間分の合併号になっていて分厚かった。

だが、俺が出来そうな仕事は無い。

ため息を吐いた。時間はすでに午後の一時。窓の外は当たれば燃えてしまいうような暑さだ。

また、ドリンクバーで粘るか、と思った。ネットの求人を見ようと思い、スマートフォンを出した時だ。

向かいの席が眼に入った。女子高生四人組が座っていた。学校は夏休みに入っている時期だが、制服姿なのは夏期補習か何かなのだろう。

それ自体は大して気を引く事では無かったが、俺は彼女らの会話に興味を持った。

「アサト君、惜しかったね」

壁際に座る一人が大きな声で言うのと、何故か他の三人が「キヤハハッ」と爆発するように笑い声を出した。その大きさと「アサト君」という言葉に引く掛かった。

「アサト」とは、先月、高校野球静岡県大会で準決勝まで進み、話題になった浜松学術高校のエース、村越安里の事のようにだった。

『浜松学術高校』

俺が高校生の頃は『信聖学園』という女子高だった。二十一年前に男女共立になり、その野球部が今年の静岡県予選で意外な躍進をしたことは県内スポーツのニュースを見て知っていた。

それに寄れば県内の古豪や、有力選手を集めて毎年予選の上位に残る私学校の中で、共立になって二〇年ほどの浜松学

術高校野球部がここまで勝ち上がったのは投手の彼の力によるところが大きいらしい。

確かに浜松学術の名が甲子園予選で聞こえたことは今まで一度もなかったと思う。

ベスト4で敗れたものの、その好投手の名は知れ渡っていた。

彼女たちはその浜松学術の生徒のようだ。

俺としては輝くような十代の若者の姿はただ眩しかった。自分にもそんな時期があった気がした。そう思うと、不思議と彼女らの話が気になった。

彼女らの話に寄れば、学術高校はエース・村越安里を擁し、決勝まで上り詰めた。しかしその決勝の静岡第一高校戦。村越はいつものようにはいかなかった。ボールは走らず、四回に打ち込まれ、打線は踏ん張ったが結局二対六で敗れた。『惜しかった』とはその意味だった。

だが、少女の中の一人はその不調の理由を知っているようだった。村越とは小学校からの知り合いで自宅も近いらしい。決勝の迫っていた夏休みのある日、村越家から騒音が聞こえてきた。

『アッコ』というその村越安里の幼馴染は近所の噂話からその騒音が村越の両親が起こした夫婦喧嘩だと知った。その理由は村越安里の五歳下の弟、雄介くんの事らしい。ある朝からその雄介くんが部屋から出て来なくなったらしい。それが喧嘩の理由という。夏休みということもあり、小学校は登

校の必要が無いが、このままでは夏休み明けの二学期からどうなるかが、近所の噂話の主題になっているらしい。

安里と雄介くんは仲の良い兄弟だった。「よく二人でキャッチボールをしているのも見たわ」とアッコは言った。そして決勝での不調がその弟の「引きこもり」にあるのではと予想した。

俺はまるでスポーツ番組の感動裏話を聴いたような気持ちになった。

その後、少女らは学内の男子生徒の話をして、一〇分もしないうちに席を立った。

俺は腕時計を見る。まだ午後の二時を周ったところである。時間だけはまだ嫌と云うほどあった。ドリンクバーでもう少し粘ることにした。店内のエアコンで冷えた身体に苦いホットコーヒーは沁みた。俺は弟の事で塞ぎ込むエースの姿を思い、同情した。

そんな俺の想像を打ち破ったのは、今まで学術高校の少女たちが座っていた席に座った年配の女性二人の話しだった。

「ダメ、ダメ！ そんな事じゃ……」

「いや、私は……」

何か口論をしているようだった。嫌でもその声が耳に入ってくる。

一方の女性ももう一方の女性を諭すような雰囲気だった。年齢は俺の母親より少し下のように見えた。

「そんな事を言っているから、あなたは駄目なのよ」

「でも……」

「それよ。そうやって口応えするから駄目なのよ。わかる？」
 そう言われた若い女性は口を噤む。言った年配の女性は得意気にカッパを啜った。どうやら二人の女性の立場は一方が上司、もう一方が部下のようだった。

俺はメニュー表をめくり、一番安いデザート注文した。バックの中から文庫本を出したが、女性客の声の方が耳に入って眼前の文字が頭に入ってこなかった。

「私はね。そうは思わないわ。……きつとあの人もそう思うはず……」

「いや、ワタシは何も……」

「だから、そうやっていちいち言わないの。わかってんの？」
 目の前の相手をひたすら罵倒するようなその言い方は、聞いている俺でも腹が立った。

年配の女は相手が何か抗弁しようとするのを嫌がり、「だからアナタはダメ」を繰り返した。

言われた若い女は、何か言いたげな言葉を吐くだけで、後は押し黙っている。

客が騒がしい昼下がりのファミレスでもその声はよく聞こえた。『上司と部下』ではなかったように思えてきた。

俺の頭には以前、テレビ番組で見た詐欺商法の手口が浮かんできた。

商品を買わせたい相手をファミレスなどに呼び、ひたすら罵倒、説得することで買わせるように仕向ける、あのやり方

だ。

だが、聞いている話に商売の話は無い。ただ年配の女が一方的に不機嫌に怒り、若い女は諦めたよう『聞き役』に収まっていた。

『何の話だ。こりゃ？』

俺の中では、もうそれが何なのか、わからなくなった。すると、若い女が席を立った。トイレらしい。

騒いでいた年配の方がさすがに静かになった。と、おもむろに携帯を取りだし、話し出した。小声だが、その小声がこちらまで漏れ聞こえる。

「……あ、は、はい。大丈夫です。……はなんとか。……ですが、……うまく、……は、はい」

内容はわからないが、携帯越しの誰かに頭を下げている。目上の人物と話しているものと思えた。

文庫本の内容が入ってこない俺の頭に『新興宗教セミナー』と、以前にワイドショーで見た芸能人がハマった『洗脳』騒動を思い出した。

若い女が戻ってくると、年配の方は携帯を仕舞い、再び怒り始めた。

ああいう風に相手を頭ごなしに否定する事で、自分の意のままに動くようにしてしまうのか。俺ははす向かいの二人に目を向けた。

年配の女と目が合い、思わず相手が反らした。急に年配の女の声色が変わる。

「ま、あなたも大変よね。わかる、わかる。……私はね、分かるの」

先程までとは逆に、相手を庇うような発言をしているようだ。横目で見える若い女の表情が少し明るくなる。

俺は背筋が寒くなった。あんな風に巧みに相手の心を『捕らえて』しまうのか。

しばらく年配の女は暖かな言葉を吐き続け、二人は満足気にファミレスを出ていった。

どちらが会計するか、気になったが、俺のいる位置からレジは遠く見えなかった。

時計を見れば、午後の四時前だった。本屋で立ち読みでもして少し時間を潰し、帰宅することにした。その頃には六時過ぎになっているだろう。

明くる日、俺はまたそのファミレスの同じ席に座った。同じ席になったのは偶然だが、俺は他に行く宛がなかったのだ。

昨日、学術高校の女子高生と怪しげな女性らが座ったはず向かいの席には、子供連れの女性二人が来た。時間は午後二時。パート終わりか、夏休みで預けていた子供に甘いものでも与えるついでに、愚痴と噂話の言い合いになっていた。

また聞く気はなかったが、耳を側立ててしまった。それは、その女性の片方から『村越』という名前が漏れ聞こえたからだ。

こんな偶然が有るのか。二日連続で同じ席に座った人間が

同人物の話をするなんて。

「近所にね。村越っておウチがあるのよ」

「むらこし？」

「ほら、野球の……。夏に活躍した。その村越さんの下の子、なんか荒れてるらしいわよ……」

片方の女性が「うんうん」と興味深く相槌を言う。

なんでこれくらい年齢の女性はこういう噂話が好きなのか。その声はかなり大きく、俺の耳には丸聞こえだ。

「下の子はウチのタダシと小学校が一緒なの。あつ、タツくん。ダメよ、騒いじゃー」

タツくんは母の退屈な話を聞きたくないのか、話し相手の子供と一緒にテーブルの周りを走り回っていた。周囲の迷惑を省みない行為だ。母親は形の上でたしなめるが、村越家に起こった事件の説明の方に躍起のようだ。

「なんかね。下の子、……雄介君っていうんだけど、部屋から出てこないらしいのよ。……タツくん、ジュースは待ってね。……大変よねえ。上の子は野球で活躍したのに」

「なんで、その雄介君は引きこもっちゃったの？」

「さあ、わからない。そんなに厳しいおウチじゃないと思うんだけど……。タツくん、雄介君と同じクラスでしょ。何かあったの？」

ドリンクバーの注文を止められ、若干ふて腐れ気味のタツくんは、少し考えた。

「んー？ わかんない。ユースケ、あんまし喋らないし

……」

「まさか、イジめたりしてないでしょうね……」

母親が凄む。タツくんは首を振って「ねえ。ジュースは？」とねだった。

「嫌あね」と母親は話し相手に同調を促した。俺からすれば何が嫌か、さっぱりわからない。

そして、何故か話題はパート先の社員の話が変わった。

「カネコさん、ワタシばかり怒らない？ ……頭に来ちゃう、もう」

相手の女性がそれに頷く。タツくんの母親は続ける。

「今日もさ、ワタシが少しオーダーミスしただけで、『何度言ったらわかるんだ！』って。何でワタシばかりに言うのよ、ねえ」

また、相手の女性が頷く。

「ほら、あの先週入った大学生の女の子？ あの子がミスしても何も言わないどころか、『まあまあ頑張ってるね』とか言うくせに……」

愚痴を聞いていた女性がお茶を口に含みながら笑った。

それを見て愚痴を言っていた方も笑う。ファミレスのその場が微かに和やかになる。

その雰囲気壊すように、女性の怒声が響いた。

「タツくん、そんな所に寝ちゃダメー」

母親達の愚痴話に飽きたのか、タツくと連れの子供は母親の座る席の下に寝そべってしまっていた。

「ねえ。ママ。ジュースは？」

「はいはい、分かりました」

タツくと母はドリンクバーの機械にジュースを求めに行き、すぐに戻ると再び噂話と愚痴をこぼし合った。

その間も、タツくんらは退屈に任せ、母親達の周りを動き回り、時折、ふて腐れて通路に寝そべった。

その度に母親の怒声が飛ぶ。そして再び噂話に夢中になる。二回ほどそれを繰り返した三回目。遂に母親は怒りが頂点に達したのか、「もうタツくん、いい加減にして！ もう連れてきませんよ！」と店中に鳴り響く声で怒鳴り散らした。途端、タツくんは静かになり、鼻をすすり上げて泣き出した。

「もう、この子には毎日言っているの『静かに』って……」

共感を誘うような言い方で、怒鳴った言い訳をした。

無理な話に思えた。タツくんが村越安里君の弟と同じ学年なら、その頃の子供に母親の愚痴話を静かに聞くような心持ちは無い。『静かに』というのは無理だろう。

事実、タツくんは母親に叱られた数十分は静かだったが、すぐに元に戻り、再び母親に叱られた。

母親らの気が済んで、ファミレスを出ていったが、自宅に帰れば母から再び叱責されることは容易に想像できた。帰り際、母親は「……もう」と、憤懣やるかたない視線を息子に送っていたからだ。

俺は少し辟易とした。聞いたことのある名が出たので聞き

入ってしまったが、ありがちな主婦の愚痴話だった。しかも息子は落ち着きなく、あんな風に頭ごなしに怒られては、タツくんが果たしてどんな感情を母親に抱くのか。

それを考えると、俺は彼の将来に一抹の不安を感じ、自身の子供の頃の母親との関係性を考えた。

(今日は早く帰るか……)

俺は注文したドリアを手早く平らげてファミレスを出た。

次の日もまたそのファミレスに行った。求人誌を片手に向かったのは午後の四時。いつもなら帰宅を意識する時刻だ。

この日の俺は珍しく忙しかった。

朝からハローワークに行き、そこで見つけた求人先から「すぐに面接したい」と言われ、北区のＩＴ会社に出掛けていたのだ。

午後二時に終わった面接の結果は改めて後日に聞かなくとも分かった。俺の履歴書を見て、言葉を聞いた担当者の表情から再就職が難しい事はすぐに予想できた。

会社の玄関から出たが、まだ日は高い。俺は面接担当者の冷やかな視線を思い浮かべながら、またもこのファミレスに来ていた。他に寄る場所など無いのだ。いつものようにドリアとドリンクバーを注文した。

いつもは昼前に入店するファミレスは、時間が違うだけで少し雰囲気違った。

まず、客数が少ない。午後の四時から六時は一番客足が鈍

るらしい。いつもは立ち去る時間だけに新鮮に映った。

そして、六時を過ぎた辺りから客が増え出す。夏の街は昼間の焼け付くような気温を和らげたが、まだ熱気はある。

俺が見た事がない店員が、来店した客を次々と席に促す。

求人誌を読み終えた俺は何となく席を立つタイミングを失った。『オススメ煮込みハンバーグ』を追加注文した。

時間は既に八時を過ぎた。このハンバーグを食べたら帰ろうと思った。

と、見覚えのある年配の女性が目の前を通過して、隣の席に座った。

先日、連れの女性を罵っていた、あの年配の女だ。

その後に見たことの無い若い男性が続いた。歳は二十代半。仕立ての良さそうなスーツを着ている。

女はこの前と違い、強張った表情をしていた。肩を縮ませ、申し訳なさそうに俺の前を過ぎた。たまたま見上げなければ、分からなかっただろう。

後ろのスーツの男性はまるで年配の女に導かれているようだった。

二人は俺の座る席の二つ向こうの、店内で一番隅の席に向かい合って座る。男性がスーツの上着を脱いだ。ウェイトレスが注文を聞きに席に近づき、男性のみが注文を告げる。女にも注文を促したが、首を振った。何故か、それに男性は満足気だった。

ウェイトレスが去ると、男性が猛然と話し出した。その音

量は辺りが聞けるギリギリの量だった。

最初は意識をしなかったが、先日の子のの様子を知るだけに、俺は数回、ゆっくりと首を振って素早く隅の席を見た。年配の女は、俯いて所在無さにスーツの男の言葉を受ける。

「スーツ」の方は、丁寧ながらも威圧するような感じを受ける言葉で話していた。

「……さんが、そんなだから……で、……なわけですよ。

……でも、……と思わなきゃ、……に……で、やっていきませんよ」

途切れて聞こえる「スーツ」の言葉は女に向けられていて、女はそれに時折頭を下げる。この前の若い女の立場が逆になっている。

ただ違うのは、「スーツ」の言い方には、若干の抑揚と統制があり、先日のように相手の抗弁を押さえ込ませるような威圧は無い。声も張らないから、周囲の客は二人に注視しない。

ただ俺だけが二人に意識を向けていた。

この二人はどんな関係なのか。

会話を聞かなければ、親子に見える。

会話を聞けば、年上の女性部下を叱る上司だ。

この前のこの女の剣幕を知っているだけに、俺は、俯きつつ、「スーツ」の言葉に耐えるようなその姿が横目にも驚きだった。この前、この女に叱責されていたあの若い女性がこ

れを見たら、なんと思うだろうか……。

三十分ほど、「スーツ」は一方的に話すと、「じゃ、これからも頑張らしよう」と言って、話を切り上げた。女は小さい声で「有り難うございました……」と呟いたようだった。注文は、「スーツ」が最初に頼んだコーヒードrink。まるで、女を叱るためにこのファミレスに来たようだ。

二人が出て行き、しばらく時間が空いた。

俺は席を立たなかった。

とある考えが浮かんだ。

この後、俺に何も予定などない。帰宅するだけ。

ただ、たまには帰宅を遅くしようと思った。いつも夕飯時に帰る三十後半の長男を見る母親の気持ちになったからだ。

財布の中身と相談し、一番安いアイスを注文し、食べ終わると、窓の外は暗くなっていた。

これで、母親には「夕飯は済ませた……」というつもりだった。

今日の面接を思い出し、再び求人誌の近所のページを眺めているうちに時間は、午後十時前になっていた。慌ただしい一日を母親にアピールするのは頃合いの時間だ。

ソワソワし出した俺の向かいに若い男性客が三人座った。仕事の帰りなのか、疲れた顔を私服の上に並べ、メニューに目を落としていた。

歳は三人とも俺より年下に見えた。そして、俺が今、一番苦手な人種だ。俺も一般成人男性なら彼等のように、働き、

仕事帰りに同僚らと食事などして愚痴などを吐きつつ、労を労い合うものだ。俺も数年前まではそうだった。それが今は懐かしささえ感じてしまうほど隔たりを覚えた。向かいの彼らの疲労を漂わせた姿が妙に眩しかった。

席を立とうとしたが、今立つとなんだか、負けた気分がするので止めた。

飲み終えたコップの水を意味無く見つめて席に留まった。

注文を終えた三人が、関を切ったように喋り出す。

まずは上司とこの場にはいない同僚への悪態だ。

「あの人の発注は甘い……」「いつもアイツのミスの尻拭いをするのは俺だ……」などよくある愚痴が続いた。

職無し中の俺には、発注の甘い上司もミスばかりする同僚もない。羨ましい話に思えた。話の流れから、三人は駅前の百貨店内に勤めているらしいと判明した。どこの部署なのか分からなかったが、社内では言えない話もあるのだろう。

一通り愚痴を吐き出したが、三人の内、リーダー格らしき男が勢い込んで怒り始めた。

「あのババア。ったく、しょーがねえよ。何回言ってもミスるしよ」

隣の同僚が苦笑する。

向かいの同僚がたしなめる。

「カネ。おまえ、ホリウチさんに怒りすぎだよ。昨日、カネに怒られてから、ホリウチさん睨んでたぞ……」
同僚にそう言われても、カネは引かない。

「そんなもん、あのババアが悪いんだよ。……睨まれる筋台いは無いね。八つ当たりも良いとこだ」

頭の中で、ホリウチというパート女性を怒鳴り付ける彼を浮かべた。

社員がパートに怒鳴るバワハラ、もしくは本当にホリウチは扱い辛いパートなのかもしれない。

どちらにしろ、有りがちな話だ。無職の俺にはなんとも無縁。そろそろ帰宅すべきか。腕時計を見た。

「一昨日なんてよお……」

その時、浮かしかけた腰が止まった。

『カネ』

たしか……。

そう、昨日、この店で聞いた。あのタツくん〴〵のママが言っていた嫌な上司カネコ……。

思わず、頭を上げ、向かいの席のカネを見た。二十代半。半袖のシャツを着こなして悪くない身なりだが、パートの悪態を吐く彼の口は歪み、性格はよく見えない。

(こいつが……)

頭の中で、カネとカネコが繋がった。

ふと、数日前の浜松学術校生らの噂話、さらに先程の年配の女を思い出す。

世間は狭いものだ。叱責された人間と、した人間が時間を違えて、同じ場所で愚痴を言い合う。タツくんの母も、そのカネもまさかそんな事とは知らないだろう。

俺は込み上げる小さな笑いを堪えた。

この事実を知っているのは、俺だけだ。思えば、昼間の怪しい二人組と昨日の若い女もそうだ。その女は年配の女に何故か怒られ、その年配の女は若いスートの男に怒られていた。

考えてみたら馬鹿らしい話だ。

誰かは、誰かに怒られている。

『弱いものは、さらに弱いものを叩く……』

何処かで聞いたことがあるフレーズが浮かんだ。

確かにそうだ、と思った。

誰かに叩かれたら、『叩けそう』誰かを叩きたくなる。そんな気持ちを俺が一番分かっている。

今、隣でタツくんの母親をなじっているカネコも別の誰かに叩かれているに違いない。人は頭ごなしに言葉を浴びると、それに抗えなくなる。その誰かの話の中でしか、自分を出せなくなる。「あなたはそうは言うけど……」何て言ったら、もう駄目だ。相手の手の内に自ら乗りにいくようなものだ。

あの若い女もきつとそんな事で年配の女の術中にハマっているのだろう。

そこで不意にバラけていた事柄が繋がりました。

隣のカネコが、パートのタツくんの母親を叱る。タツくんの母親はそのストレスをタツくんにつける。タツくんはそれをクラスメートの村越雄介くんにつける。連鎖するストレスの行き止まりである雄介くんにはストレスの逃がし場所

が無く、自分の部屋から出てこなくなる。それを見た兄の安里くんのピッチングがおかしくなる。そして浜松学術高校野球部の快進撃は止まってしまった。

そう言う事かもしれない。

ならば、全ての原因は隣の若い社員のせいだ。

だが、この男もまた誰かに叩かれているに過ぎない。

なら、どうすれば良いのか。雄介くんはいわれのないストレスの連鎖に苛まれながら過ぎなければいけないのか。

「そんなもの、気にするな」と小学生の彼に言いたかった。世の中に出ればもつと嫌な事がある。クラスメートのイジメなど、後から思えば、何の事は無い。

しかし、俺には彼にそんな事を言う術も義理もない。ただ、街中のファミレスで小耳に挟んだ話を繋いでみただけなのだ。

だが、俺は一回も会ったこともない、その雄介くんの窮地を救いたくなくなった。

自分自身の境遇と重ねてしまった。社会に出ていて、何者からも損なわれないが、無職で未来への希望が見えない。しかし、雄介君は社会に出てもないが、他人から損なわれ続けている。夏休みが終わっても、彼が自室から出てくることは無い気がした。

自由だが、何もない俺。

何があるかわからないが、自由ではない雄介少年。そんな彼を救うことはできないか。

小さな事なのだ。心の持ちようだけで世界は違って見えるハズだ。

雄介くんの自宅を探し、外から切々と諭すか。そんなことすれば、この夏、球場を沸かせたエースの家族に警察に通報されてしまう。

というか、そんなことをする力は俺にはない。

大声で愚痴を垂れる社員の男性に忠告するか。

だが、何と言うか。

「突然だが、あんたがバートのおばさんを弄ると、そのおばさんが自分の子供を叱り、その子供が学術高校のエースの弟を苛め、登校拒否になりそうだ。だから止める……」とでも言うのか。

そんなバカなことをファミレスの隣に座る見知らぬ他人から言われたら、絶対に怒る。

「その証拠はあるのか」とでも言われたら出せる証拠などあるはずがない。ただファミレスで小耳に挟んだ話を繋いだだけなのだから。

というか、やはりそんな力は俺にはない。

しからば、例のタツくんを見付けて忠告するか。

だか、これも上手くはいきそうにない。いきなり見知らぬおじさんに「同級生の村越君を苛めるなよ」などと言われたら、見知らぬ大人が同級生の名を知っている不可思議さより、間違ひなく親に「変なおじさんに怒られた」と告げる。

あの親は警察に通報し、瞬く間に警官が俺の自宅のドアを

叩くだろう。

無職の長男が警察騒ぎ。母親の悲しみはさらに増すに違いない。

そもそも、やはりそんな事をする力は俺にはない。

俺はドリアが空になった皿を見つめて考え込んだ。隣では社員の男性たちが好き放題しゃべっている。

その声が黙り込んで考えていた俺の耳に入ってきた。

「あの話、どうする？」

社員らしき男性の中の一人が思い出したように言った。

「ああん？」と、また一人が聞き返す。

「あの通達だよ。ほら、先週、業務メールで来たじゃん」

「ああ、あれか……。ま、従うしかねえら。社内規定、つか、お国の決まりだしな」

さつきまで、タツくんの母親をなじっていたカネコが渋々という雰囲気を出して答える。肩が下がるのが隣にいてわかる。本音では嫌らしい。

「そりゃそうだけだよ。そんな都合よく採用できるわけ無いだろ……。第一、求人募集してもくるのは、普通の奴だし……」

「だからよお……」と言って、カネコの声が少し軽くなり、小さくなるのがわかった。

「募集しておけば良いんだよ……。『ウチは障害のある方でも雇いますよ』ってアピールになるだろ。どんな人が来て、雇う、雇わないはこっちの自由なんだから……。そうい

うアピールでもしとけば、『ウエ』は何も言わないさ」

先程までと違い、辺りを憚るような声のトーンだったのが、隣の俺にははつきり聞こえた。

それを聞いた時、俺の頭の記憶の中から、ある話が掘り返された。

あれは、小学生の頃だ。

給食の時間に聞いた校内放送だ。

毎回、聞きたくもないクラシックや合唱、道徳じみた昔話が流されたが、その中に酷く思い出に残る話があった。

昔、ある橋作りの名人がいて、川の氾濫で困っている村に橋を作る事になった。

何度か立てようとするが、その度に川が洪水し、失敗に終わる。

占い師に見てもらったところ、『申の年に生まれた男女を生け贄にすれば、橋を完成させることができる』と言われた。

随分と前時代的な結果だが、『申の年に生まれた男女』がちょうどその橋作りの名人とその妻だった。

すると、名人と妻はあつまり生け贄になることを了承し、夫婦で荒れ狂う川に身を投げた。

そしてめでたく橋は完成した。

その身を捨ててまで人々の役に立とうとした名人夫婦の高尚な気持ちや小学生の俺たちに訴えたかったのだろうが、小学生の昼食の放送にしては『身投げ』というショッキングな行為や、夫婦があつまりそれを決意する件がなかなか寛容

できず、心に残っていた。

子供ながらに思ったのだ。

（人は、人の為にここまでできるのだろうか……）

その時は名人夫婦の行動を理解出来なかった。

いや、その後も、大学生になっても、社会に出て、分かなかった。

その時まで、そう思っていた。

だが、その時に思ったのは『俺はこのために脳腫瘍から復帰したのかもしれない』ということだった。

「鈴木君、何やってんのー」

金子が怒鳴った。その声の鋭さが人影のなくなった食堂に響く。俺の手が止まる。思わず声の主を見て、うな垂れた。

「だから、その皿はその位置じゃないって、この前言っただろ……」

ため息を混ぜたように俺に言う。俺は何も言えないので、また下を向く。

そして、そのまま少し首を回すと、カウンターの掃除をしていたタツクんの母親である堀内が哀れんだ表情でこちらを見つめていた。そこには少しの安堵の感覚が入り混じっていることが分かる。

金子は、いつものように諭すような口調に変わる。これは彼が悦に入った合図だ。ミスしたことよりそれを注意し、そこから「接客業とは何か」という彼の持論を展開するのが常だった。

『……だからさ、鈴木君もさ、口が不自由だからって自分を信じないってことはないんだよ……』

話は何故か『自身の実力をどう出すか』という自己啓発セミナーのような結論に至って終わる。ここまでくれば、金子の気持ちは一段落する。それは、ここに半月ほど勤めて分かった。金子は自身の論説を言いたがる自己主張強い傾向の男だった。

何度か金子に怒られたが、最後は必ず精神論的な帰結で終わる。

さらにこういうのも忘れない。

「口が不自由な事は変なことではないんだ。俺はそんなことで君を差別しない」

そういうことで己の発言を正当化し、俺への同情を示しているのか。

だが、俺からすれば、この状況が『ある意味』願っていた事であるから、金子の説教など戯言のように頭には留まらず、抜けていく感覚だった。

「鈴木君、ほら、床、モップ掛けして」

堀内が言う。俺への哀れみ半分、侮蔑半分といった感情だろう。俺は無言で頷き、掃除用具のある倉庫に向う。

もう九月だ。

雄介くんは部屋から出て、学校に通っているだろうか。

あのファミレスには最近行っていない。例え行っただとしても、ちょうど村越家の事を話す同級生には会えないだろう

し、今、邪険な眼で俺に掃除を命じた『タツクんの母』に「村越さんのところの雄介くんは学校来てますか」とは聞けない。

金子も堀内も、俺がああファミレスの近くにいた事には全く気付いていない。

ただ、職にあぶれた口の不自由なトロ臭い三十八の独身男としか見ていないだろう。

俺が言葉を失ったのは三年前だった。

病気だ。脳腫瘍のステージ2だった。発症したのが大脳と小脳の間で、命は助かったが、二度の除去手術で言語中枢を損傷し、発音に障害が出た。

正確に言えば、言葉は失っていない。

発音はできる。ゆっくりと話せば言葉になる。事実、家族とはかなりスローモードだが言葉を交わす事ができた。

だが、現実社会で他者と会話するのはかなり難しい。病気の説明をすれば理解してもらえが、そうすれば金子のように、欲しくもない同情の視線を浴びる。

手術後、リハビリの甲斐もあり、身体機能は元に戻った。

だが、声だけは戻らなかった。発音のリハビリを担当した理学療法士はようやくゆっくりとなら発音できるようになった俺に言った。

「ここまでで、後はどこまで回復するかわかりません。明日、戻るかもしれないし、十年後かもしれない」

俺はそこで声のリハビリを止めた。

もう俺は『大丈夫だ』と思った。声以外は手術前の通りだ。車の運転もすぐ許可が下りた。病気で職など多くのものを失ったが、すぐに取り戻せる。新しい仕事もすぐに決まり、俺は『人生の再スタート』をできると思った。

だが、現実が甘くはなかった。

病気をした三十過ぎの男に、なかなか就ける仕事はなかった。履歴書を送れば『選考の結果、残念ではございますが……』と断られ、面接まで漕ぎ付けても、俺の声を聞いた担当者は同情の眼差しを向けて、数日後には同じ書面が自宅に来了。

「障害者手帳、取る気は無いのか」

たまに聞かれることがあった。

だが、その気は無かった。それに術後の検診の際に主治医も「手帳を取るレベルではないよ」と言っていた。

「企業には従業員の数パーセントは障害者を雇わなければならない義務がある」

そんな事を聞いても何も思わなかった。

こんな病気になっても俺は元の自分のつもりだった。何も失っていないし、失っていたとしても自力で取り戻す気でいた。

仕事が決まらず、派遣会社に登録して今年の三月に南区の工場に入った。やはり声のことで同情され、敬遠され、七月に契約を解除された。

『人生の再スタート』はなかなか始まらなかった。

完全に自信を失っていた。この口から出る言葉には何の力も無いと思っていた。

そして俺は、誰を呪えばいいかわからなくなっていた。そしてあのファミレスで求人誌を見ながら思っていた。

『これから俺はどうなるのか』

誰も助けてくれはしない。『再スタート』などいつ切れるのか。

それが一ヶ月弱前の夏の日、金子の話聞いて、お昼の放送の昔話を思い出し、全てが繋がった。いや、思い付いたと言ってもいいだろう。

その直後、手元に丸めていた求人誌を開き、金子らにわからないように彼らの店の求人を探した。『ホール調理補助』の求人があった。彼らの話す内容から、それが彼らの働く店だろうと思った。

俺がそれを見つけた時に、金子らは朗らかな笑い声を上げて支払いのため、レジに向かっていた。

その求人誌は同じ会社が作る求人サイトにアクセスでき、そこから登録すれば、求人に応募が出来た。俺はすぐに応募した。店に送るメールの備考に『言葉が少々不自由ですが、勤務には問題ありません』と打った。

次の日、金子らしき男性から電話があった。そこで昨日、隣で愚痴を放っていた男の名が、金子であるとわかった。

俺は、言葉がもつれないようにゆっくりと話した。すぐに翌日の面接が決まった。

金子らが働いていたのは、あのファミレスから程近い、県内でも有名な百貨店の社員食堂だった。その食堂の調理を金子の会社は請け負っているようだ。

明くる日、百貨店の十階にあるその食堂に向かった。

午後の三時で既に社員達のランチタイムは終わっており、入口から顔を出すと客らしき人影は無かった。

入口付近で食卓を拭いていたタツクんの母親が「何のご用で……」と聞いてきた。

ゆつくりと面接の約束が有ることを告げながら、母親の胸にある名札の名前を読み込む。

「堀内」はファミレスで向かいにいた俺を覚えていなかった。

それは、堀内に呼ばれて厨房から出てきた金子も同じだった。

食堂の片隅で面接が始まる。

持参した履歴書を元に一通りの確認が済んだ。

金子は俺の言葉を聞き、「大丈夫。全然話せるよ」と今まで出会った人間と同じ同情を示し、最後に俺に聞いた。

「あの、障害者申請みたいな事は考えている？」

俺は、小首を傾げながら「まあ……」とわざと曖昧に答えた。本心では障害者手帳など取得する気はない。また主治医がいうように取れる障害のレベルではない。

だが、俺のその答えに金子は満足したらしい。本社からの要求を俺が満たし、皿洗いくらいなら雇って良いと判断した

ようだ。次の日には採用の連絡が来た。

あのファミレスから三日で再就職が決まった。

金子が俺を「標的」にするのに時間は掛からなかった。入って一週間もすれば、何かと俺をなじるようになった。

ホールを担当するパートのおばさんの中の一人、堀内は金子の的が自身から離れ、俺に移動したのを喜びつつ、俺には侮蔑の念を送ってきた。

俺からすれば、それは慣れたことでも良かった。

彼女を助けるために金子からの嫌味や無駄な主張を受けているわけではない。

金子からの攻撃を受けない事で、彼女が息子を攻撃せず、さらにその息子が近所の村越雄介くんを虐めなくなり、兄の村越安里のピッチングに精彩が戻るのが目的なのだ。

そして、そろそろ一年が経つ。

俺は今、新聞やネットの県内スポーツの情報を毎日見ている。

浜松学術高校野球部の二年連続の躍進と、それを牽引する三年生エースの好投を願っている。

もし『浜松学術高校、今年も快進撃！』などという見出しを見たらどうするか。

金子と堀内に、俺がここで働く理由を告げようか。いや、止めよう。理解できまい。

そして、この一見、奇妙で不可解な連鎖と符合が色んな人間のつながりである事を静かに楽しもう。

(浜北区)

「入選」

何も言わない

名倉 民子

――
流れるように日々は過ぎてゆく。これ迄、これといった罪を犯した事がないので、七十才を過ぎた今、償わなければならない事は何も無い。

ただ、それでも少しは悩んでみたり、そんなふりをする事はあるにしても……。

しかし、今回の出来事は私にとって、あまりにも非日常的な事だった。私は決してその事を、人に話したりはしなかった。夫にうち明ければ、本当は一番良かったのだろうけれど。それができなかつたから、そのあと、私は恐怖の中でひとり、でしばらくを過ごさなければならなかった。

ある日、私はカラオケ喫茶ビオの殺人事件の第一発見者になつてしまった。ビオは四日市にある。浜松に住んでいる私は、たまたまビオに行つただけだった。前日から一人で四日市に出かけ、近くのホテルに泊っていた。

ビオには二回しか行っていない。しかしその二回目にビオ

のマスターが殺されているのを発見したのだった。

ずっとあとになって、マスターの妻と名乗る女性と電話で話した事がある。私は彼女に会つた事がない。少なくとも電話で話す迄はそう思っていた。マスターや彼の愛人について、私は全く知らなかつたわけではないが、妻に教えてあげられる程の事ではなかつた。そういう意味では、彼女が私に電話をかけてきた事は、彼女にとって、何の意味もなかつたと思う。

私は、マスターとその愛人とは、前の日、ほんの一時間一緒だったにすぎない。その時、愛人は一曲だけ歌を歌つたが、大して上手ではなかつた。それでもマスターは、「いいんだよ、上手だよ、それでいいんだよ」と、目を細めて言つた。

彼女がマスターの愛人だと教えてくれたのは、その日、ビオと一緒にいたあべちゃんという女性だった。客はその日、私の他にはあべちゃんだけだった。もちろん、私はあべちゃんとも初対面だった。彼女は小太りの中年女性で、明るい顔つきで、短い髪にカールがかかつていた。彼女は、私の身体にひつつくぐらい近づいて、

「あれ、マスターの愛人」

と、耳元でささやいたのだった。殆んど聞きとれないぐらい小さな声だった。私達四人は、四時から約一時間ぐらいステージで順番に歌いながら一緒に過ごした。私が歌い終えてステージから戻つて来ると、

「上手やねえ」

と、あべちゃんが感心した様に言った。

「ほんとうだね、歌手なのかい？ どこかで歌ったりしているの？」

と、マスターも真顔で言う。

「いいえ、とんでもない、ちがいますよ」

と、私は小さく言った。

私は、カラオケがそれ程好きという訳でもない。しかし、私には、東京でレコーディングをしたオリジナル曲「津軽ぬくもり」がある。それは、浜松のカラオケ喫茶が企画したコンテストに合格したからで、オリジナル曲ではあるが、他の県で、地元の歌手が自分の歌として歌ってもいいという類のものである。東京からの有名歌手の前座をつとめる時は、私は、もちろん「津軽ぬくもり」を歌う事になっている。

五時近くになって電話が鳴った。マスターは、あわてる事もなく受話器を取る。

「はい、はい、分かったよ、はい」

「お孫さんからよ、いつもこの時間になるとかかってくるの、愛人の事、奥さんも気づいているからね、まっすぐ帰る様、孫を使って電話させるのよ」

「それじゃあ、寄り道できないわね」

「あら、そんな事あらへんよ、今日でも見ててごらん、きつと愛人の車で帰るんだから」
あべちゃんが小声で言う。

五時になり、私とあべちゃんは一緒に立ち上がった。

「明日、もし来てくれるなら、少し早く開けておくよ、十時半頃にでも」

「来るでしょ？」

と、あべちゃんがふり返って言った。

「たぶんね……」

外へ出ると、街の騒音がまだ熱い空気の中を揺れ動いていた。

「どこ？ 送ってあげるわ」

私は手を横に振って断った。

「じゃあ、あしたね」

私はホテルに向かって歩き出した。

二

穏やかに青みがかって、窓の外は暮れていった。ホテルの部屋は三階で、窓は遠くの海の方を向いていた。コンピナートの明かりを見ようと、私はレースのカーテンを開けた。しかし、明かりは見えなかった。きつと遠すぎるのだろう。私はガッカリして、少し悲しい気持になりながらカーテンをしめた。

四日市は、私が新婚の頃、三年間過ごしたなつかしい街である。昭和四十年代の四日市は公害の街だった。かつては海だった所に、コンピナートが立ち並び煙突から排出される煙が、街をおおっていた。喘息で命を落とした人もいた。私達が住んでいた社宅は、郊外にあった為、空気はそれ程汚れて

はいなかった。

外が徐々に黒みがかつた青に変わっていった。私は再びレースのカーテンをあけ、窓から下を眺めた。建物と建物の間に広い道があり、車のライトがヒヨヒヨいと、そこを通り過ぎた。近鉄四日市駅からJRへ続く道である。私はなつかしきで胸がいっぱいになった。その道ぞいに小さな喫茶店があった。私と夫はよくそこへ出かけたものだった。その頃流行っていたウインナーコーヒータや、ホットジュースが私は好きだった。

私はベッドに仰向けに転がり、目をつむった。新婚時代の思い出は、幸せにきらめいて、一瞬丸くふくらんだかと思うと、パツと、あっけなく消えてしまった。

「愛人か……」

私はビオの事をふと思ひ出した。マスターの愛人は、昔、私がほんの少しだけ知っていた女性にどこか似ていた。時々、家に電話をかけてきた女性に。パーマツ気がなく、お化粧をしているわけでもない。平凡な、でもどこか清純な感じの女性。彼女は電話で、いつもなぜか

「おりますか？」

と、という言葉を使う。

「誰が？」

と、私は聞き返さなかった。

その頃、夫と私は夫の転勤先の東北に住んでいた。私はうす暗い夕ぐれ、少しさびれた街の中を、さまよい歩いた事

がある。風が吹いていて、私はたぶん、少し泣いていたと思う。噂というものは、閉め忘れた小窓からひそかに入り込む雨の様に、静かで、気づいた時には床がすっかり濡れてしまっている、そんなものである。

でも、そんな事は遠い昔の事で、今、ホテルの部屋で白い天井をながめている私の前を、その時の事は、まるで影の様に流れ去って行った。

翌朝、私はゆっくり目を覚ました。駅前のアーケードの中にある喫茶店で、サンドイッチの朝食をとり、一度ホテルに戻り、ビオの開店時間に合わせてホテルをあとにした。ビオの一階の貴金属店は、定休日の札があり、明りがついていなかった。私は裏側にまわり、薄暗い階段を上った。一二三段上ったところで、シャッターが半分だけ上に上がった状態で、止まっているのが見えた。私は妙な胸騒ぎを覚えた。そして登りきった所で、倒れているマスターを発見したのだった。

マスターの背中にはナイフが刺さり、床は身体から流れた血で赤く染まっていた。

「あっ」

私は思わず声をあげた。その声はすい込まれる様に奥に消えて行った。その時、奥でカチツと音がした。暗くて何も見えない。どれだけの時間そこに居たのか分からない。気がついた時、薄暗い階段を、転がる様にかけ下り、街の中をホテルに向かって走っていた。曲り角で、危うく人につつかりそ

うになった。

「すみません」

とつさにそれだけ言い、私はホテルに向かって走り続けた。

私はホテルの階段を一気にかけ上がった。フロントで錠を受け取る事は忘れなかったものの、エレベーターに乗る事など考える余裕は無かった。何とか三〇一号室にたどり着けたものの、手が震え、なかなか錠をあける事ができなかった。

赤いジュータンが敷かれた廊下は、無気味に静まり返っている。ようやく中に入り、私は初めて「ふうー」と、大きな息を吐いた。左側の鏡に、青ざめたみじめな顔が映った。一瞬大げさな演技のように見えたが、すぐ口びるが震え、その震えはやがて身体全体に広がり、私はその場にしゃがみ込んだ。しばらくして、私はようやく立ち上がり、洗面所に向かった。血はついていないと分かっていたが、流れる水で、手を何度もゴシゴシ洗った。

街の中をどう走ってきたのか思い出せない。一一〇番しなければと頭の中では分かっている、動作が伴わない。私は足元のバッグを引っぱり上げ、中身をベッドの白いシーツの上に放り出した。携帯電話が、最後にボンと枕の前に転がり出た。第一発見者という言葉が、頭の中をグルグル回った。

三

私は前日から、白石一枝という偽名を使ってホテルに泊っていた。そもそも偽名を使わなければならない理由は何も無かった。

その朝、夫は社内旅行で、四泊五日の予定で中国に出かけて行った。旅行が決まった時から、私は、その日が来るのを心待ちにしていた。家事や夫から解放される、それは、主婦なら誰でも思うごく普通の事である。夫は普段はやさしいが、なぜか時々機嫌が悪くなる事がある。先日も

「家の中を走るな！」

と、言われたばかりである。その声は、どこからか突然とんできた。いつも怒っているわけではなく、たいていは私の言う事を何でも聞いてくれる。だから、私はそういう時は、夫の声を黙ってそのまま聞き流す。言い返した事など一度もない。

私にしてみれば、今回の事は、偽名でホテルに泊った事が問題ではない。第一発見者になってしまった事も仕方がない。

「四日市に遊びに行ってくる」

と、夫に言えなかった気持が問題なのだった。言えざきつと嫌な顔をする。機嫌が悪くなるかもしれない。黙っていれば分からない。偽名を使う事にひそかな喜びさへ感じていた。今更夫に話す事はできない。

私は一一〇番通報をしなかった。第一発見者になるわけにはいかない。洋服を着がえ、サングラスをかけ、ホテルを解約し、浜松に逃げ帰ったのである。あの日、あの時の私、結城夏子は存在しない。

四日市から浜松に帰り着く迄、私は帽子を深くかぶり、口元を手でかくし細心の注意を払った。犯人は私の顔を見たに

ちがいない。口封じの為殺しに来るかもしれない。どうやって身を守ればいいのか。私のまわりの景色が一変した。

浜松駅に着くと、すぐ私はタクシーにもぐり込んだ。運転手が荷物をトランクに入れてる間、ひざをかかえ、じっとうずくまっていた。

「どこ迄ですか？」

運転手の声に、一瞬頭が混乱した。真すぐ家に帰ってはいけない。

「浜松学院大学まで」

とつさに私は答えていた。

「分かりました」

と、運転手が落ちついた声で言った。

浜松学院大学は、私の家から歩いて五、六分の所にある。その向かい側に、アジアンスタイルのカフェ「ドロップ」がある。とりあえずそこに行こうと、私はタクシーの中で考えた。私はたまにそこへコーヒーを飲みに行く。マスターとは、顔なじみである。

小さな門を入ると、ガーデンテラスの白い半透明な屋根をつき破って上に伸びているアメリカンデイゴの花が少しだけ目に入った。サンングラスを通して、それは、いつもの南国的な赤ではなく、赤黒い不気味な大きなトゲの様にうつった。ドアを開けると、チビちゃんと呼ばれているマスターの奥さんが、

「あら……」

と、不思議そうに首をかしげた。

「あ、夏さん、いらっしやい。どこかお出かけだったんですか？」

マスターが奥から出てきて、さりげなく声をかけた。マスターの縁の無いメガネの奥の目が、かしこそうに輝いている。

「ええ、ちよつと……」

声が少し震えた。私は窓際のいつもの椅子に腰を下ろした。背の高いスタンドが、テーブルを明るく照らしている。私は落ちつきなく、ガーデンテラスの向こうの通りに目をやる。

「あいかわらず忙しそうですね」

水を運んで来て、マスターが言った。ドロップでは、いつもそそくさとコーヒーを飲み、すぐ帰るからである。マスターは短パンで、上着はいろいろな模様の入っているTシャツ姿である。夏らしく若々しい。まだ三十代である。

「何か冷たいもの……」

「何でもありますよ。グアバジュースなんかも」

「グアバジュースって？」

「グアバのジュース」

「じゃ、それを」

チビちゃんが奥で笑っているのが見えた。その時、ドアのベルがチリンと鳴った。私は思わずその方を見た。しかし、常連客だと分かっただけで胸をなで下ろす。時々カウンターにパソコンを持ち込んで来る客である。ジュースが、ストロ

ーの先の氷の中でズ、ズーと音をたてた。ふいに、倒れていたマスターの横顔が思い出された。ガツチリした石の様な丸い顔、グアバジュースは甘く冷たかったが、私の気持を落ちつかせてはくれなかった。私は、ソワソワしながら立ち上がった。床には、やわらかい布が敷かれている。それでも、キヤリーバッグがコツンコツンと小さな音をたてた。

「ごちそうさま、また来ますね」

強烈な日ざしをさえぎられたガーデンテラスは、柔らかに光をためこんでいた。門から顔を出し外をのぞいたが、人の姿は無く、バスが駅方面に向かって走り去った。

私は静かな住宅街をさけ、大通りを歩いて家に帰った。玄関のドアは、階段を四段上った上の広いポーチの先にある。まわりにたくさんの花が咲いている。その大半はペゴニアで、その赤いおちょぼ口が、熱い日ざしを受けうるんで見えた。私はあたりを素早く見渡し、人が居ないのを確認するとドアを開け中に入り、錠をしっかり締めた。

全ての部屋のガラス戸から、少し傾いた日が斜に射し込み、熱い空気に支配された部屋の中は息がつまりそうだった。私は、クーラーをつけソファアに転がった。ホッとすると同時に涙が溢れた。

「今日、こんな可愛い事があったよ」

と、子供みたいに話せたらどんなにいいだろう。私は知らない間に眠ってしまった。

目が覚めた時、自分がどこに居るのかすぐには分からな

かった。いきなり青い空と、ピンクの雲が目に見え込んできた。私はそろそろと起き上がり、寝室に行き西の空を見た。思った通りの夕焼けだった。西の空も東の空も、真綿のようにふわふわした雲が浮かんでいた。私はリビングに戻った。これからどうすればいいのだろう。テレビをつけると、いきなりビオの駐車場が映し出された。

「今、私はカラオケ喫茶ビオの駐車場にいます」

男性レポーターが、横にいる女性にマイクを向けた。首から上は映っていないかったが、それがあべちゃんだという事がすぐにわかった。

「私がビオに行った時、マスターが背中ナイフが刺さった状態で倒れていたんです。びっくりしました」

「これが単なる物盗りなのか、そのあたりはまだ分かっていません」

と、レポーターは言った。

四

私が逃げたあと、あべちゃんが発見して通報したのだろう。姿を消した私の事を、今頃変に思っているにちがいない。しかし、彼女は私の正体を何も知らない。

日が落ち、庭はすでに暗くなりかかっていた。私はあわてて部屋のシャッターを下ろし始めた。その時、屋根をかすめてコオモリが飛んで行った。もう何年も見た事が無かったのに。なにもこんな日に、私は思わず身震いした。自分がひどく神経質になっているのが分かった。問題はキッチンの出窓

である。そこにはレースのカーテンしかかかっていない。部屋に明かりをつければ、外からは丸見えになる。もちろん、しゃれた手さげカゴ、造花などで少しは見えにくくしてはいるが。いつもは何も考えていないのに、今は、誰かがじっと見ている様な気がして、恐ろしくて仕方がない。私は手当り次第に紙袋に食べ物を取り込み、寝室にとじこもった。廊下にくぐりドアの錠がきちんとかかっているか、何度も確認しなければならなかった。夫が帰る迄の三日間、私は夜になるとそんな風に過ごした。私はいろいろな事を考えた。もちろん、夫に話した方がいいのではないかと考えてもみた。夫は時々気むづかしくなるが、頼りがいのある人である。でも、やはりそんな勇氣は私にはない。四日市のホテルに偽名まで使って泊っていた自分の氣持を説明するのはむづかしい。

私が夫に何も話せないからと言って、それは夫のせいばかりではない。確かに夫は厳しすぎる面もあるが、私の性格にも大きな原因がある。私が結婚したばかりの頃、親友が私に注意してくれた事がある。彼女はあの頃、まだ英文科の学生だった。

「夫婦は、平等な立場でなければいけない」と、彼女は言った。彼女は、サルトルと、ボーヴォワールが好きで、

「女性は男性に従うのではなく、しっかり意識的に自立をしなければいけない」

という考えを持っていた。私は、サルトルの本を読んだ事も

なければ、ボーヴォワールについても全く知識はなかったが、彼女が言っている事は私には分かった。今では、それが正しい事だと分かるけれど、どちらにしろ、私にはどう仕様もない。私の母も、自分の意志をはっきり言わず、夫に従っている女性だったのだから。

姉について、その理解しにくいその性格について、私は時々考えてみた事がある。私が生れた時、姉は二才だった。私が物心ついた時から、姉は少し気が強く、私は姉に逆らう事ができなかった。

私が夫と婚約中、姉は夫に近づくそぶりを見せ「ぼんやりしていると、アリヨシヤの日記」みたいになるわよ」

と言った。その言葉を私は今でも忘れてはいない。『アリヨシヤの日記』とは、妹の婚約者を姉が奪い、その為妹が自殺してしまうという内容のフランスの小説である。姉は、鼻がツンと高くて美しく、顔立ちがとても良かったので、自信があったのか、あるいはただの意地悪で言ったのか、私には分からない。私は婚約者である夫と仲良くやっていたので、別に気にはしなかった。姉は、私に決してガミガミ言う事はない。でも私は姉に逆らう事はできなかった。

時間が遅くなつて、私は姉について考えるのをやめた。きっと恐怖のために今は頭が混乱しているにちがいない。事実、姉は私をとてかわいがってくれているし、どんな時でも、私の為に惜しみなく力を注いでくれているのだから

……。誰のせいでもなく、私は生まれた時からはずきり言わない性格で、これから先もきつとそう。あまり聡明な女ではないと、私は思った。

五

夫は私に、スワロフスキーのペンダントをおみやげに買ってきてくれた。

「あーありがとうね」

と、私は言った。

「どうだった？」

「うん、良かったよ」

夫は元来、無口な人なので、

「食べ物はおいしかった」

という程度である。しかし、写真はいつも私に見せてくれる。

楽しげな笑顔で写っている夫の姿を見て、私はいつも良かったと思う。

「こちらは、全く変わった事なかったわ。少し暑かったけどね」

私は事件の事を何も言わなかった。

まだ八月のお盆も終わらないのに、私はもう蝸^{ひぐらし}の声を聞いた。事件は依然として解決していない。私には気がかりな事があった。十月に歌謡ショーの予定が入っているのである。ポスターはすでに出回っている。前座で歌う歌手の写真の中に、私の顔写真もある。ショーに出演するのは危険すぎる気がした。危険だと思いつながら、私はショーに出演する事を

決意していた。私は外へ練習に出かけるわけにはいかなかった。どこで犯人と出くわすか分からないからである。家で、ひとりで練習しなければならなかった。しかし、今迄のように歌の主人公になりきる事はできない。

冬の津軽のぬくもりが

忘れられずに来た女

……………

……………

……………

同じホテルの部屋で見る

ああ津軽の

津軽の海よ……

ホテルという歌詞のところで、私はきまって四日市のホテルを思い出す。その向こうに津軽の海など見ることができない。それどころか、暗い中にビオが浮かんで消えるのである。殺されていたマスターの顔まで浮かぶ。全席座席指定。私はがんばって練習するしか無かった。

リハーサルが終わわり、いよいよ歌謡ショー本番である。幕が上がる、出演者ひとりひとりが、舞台の少し高くなつたところから中央に進み出る。

「浜松出身、結城夏子」

という風に紹介される。

.....

ああ津軽の

津軽の海よ……

目の前には、すっかり津軽の海が広がっていた。歌っている間、暗い客席で、携帯で写真を撮っている青白い明かりがあたりこちらに見えた。

その日、会場迄、夫が迎えに来てくれた。以前ほどではないが、私は今だに夫に氣を使う。

「悪いわね」

と、言いながら、私は衣装の入った大きなバッグと共に、後部座席に乗りこむ。夫はカラオケが嫌いである。私は黙っている夫の背中に、そうしなければいけない様に話しかける。

「今日は、とても楽しかったわ」

窓の外を、対向車のライトが、後へ後へとび去って行く。

六

ショーが終わって一週間たったある夜、それは私がリビングでテレビを観ている時だった。電話のベルが鳴った。私は無意識に受話器を取った。

「はい、結城でございます」

受話器の向こうからは何も聞こえない。

「もしもし」

やはり無言である。気のせいか生温かい息づかいが伝わってくる様な気がした。私の背筋を、冷たいものが走った。無言のままブツンと電話は切れた。

「間違いだつたみたい」

と、私は夫に言った。私は全ての部屋の錠を確認する為、廊下を走った。そして、最後にキッチンの出窓に目をやった。そこは、ブラインドもなくレースのカーテンだけである。暗い闇が広がっている。木々がソヨソヨと揺れた。

その日から、夜になると、いつも無言電話がかかる様になった。きまつて九時頃である。

やわらかな、ため息の様な秋の日が、私をそっと包みこむ。何不自由のない生活。しかし、大きな秘密をかかえながら夜になる。

「また無言電話か？」

と、さすがに夫も不審に思う様になった。

「ただの間違いよ」

私は、受話器の向こうの様子を探ろうと、強く耳を押し当てる。何か音が聞こえないか、テレビの声でも聞こえないか。

しかし、何も聞こえない。歌謡ショーに出るべきではなかった。いったいいつ迄続くのだろう。私は、時々恐ろしい夢を見る。かけ忘れた錠。忍び込もうとしている男の姿。私もいつか殺される。

夫の前で、私はいつもの様に、何も無かった様にふるまう。

「おかえりなさい」

何でもない振りをして夫を迎える。それは私にとって簡単な事のはずだったのに。例えば雨が降ってじめじめした日が続いて気分がすくねなくとも、「気持のいい日ね」と言うように。決して嫌ねとは言わない。私がネガティブな言葉を使うと、夫の気嫌が悪くなるのを、私は知っているからである。ただ演技をすればいいだけなのに。いつもの様に……。

でも、私は少しずつやせていった。食料の買い出しには行かなければならないけれど、それ以外の外出を控えていた。そんなある日、今迄も、時々出かけていたカラオケ喫茶のママから電話があつた。

「夏ちゃん元気？ 電話しようと思ひながら、今になってしまったんだけど……」

「元気ですけど……」

「それなら良かったわ。誰かが夏ちゃんが病氣だと言つてたもんだから」

と、ママが言つた。

「えっ！ どうしてそんな」

私は驚いて言つた。

「安心したわ、また出かけて来てね」

ママは、とてもやさしい人である。私はママの電話がありがたかつた。しかし、その時、それは全くはずれていない事に、私は病氣ではないまでも少しやつれた事に、誰かが気づいているかもしれない事に、恐怖を感じたのだった。私は危うく孤独になりかかつていた。私は鏡に向かい髪をとかし、

赤い口紅をつけた。

あの日からもう二ヶ月が経とうとしている。何が悪かつたのだろう。もし四日市に行かなかつたら、もし偽名を使わなかつたら、いや、そんな事ではない。夫に何も話せなかつた自分の性格が問題なのだ。

しかし、最近になって、少し変化があつた。姉からかかつてきた電話の時だった。その時、どういう話をしたか今は思い出せない。

「この頃、話していると、いつもけんかみたいになつてしまふわね。ごめんね」

と、姉が言つた。長く電話でしゃべっていると、なぜかいつも私が責められる事になる。性格が悪いような事も言われる。

「夏ちゃんの事は、何でもよく知ってるんだから」

と言う。よくと言われて、私はわけが分からなくなる。何でも知っているつてどういう意味なのだろう。真面目に生きているだけなのに。聞けばいいのに黙っているの、いつも言われっぱなしになる。

「けんかみたいになつてしまふわね」

と、姉が言うことは、私も、少しは言い返しているという事である。そうでしょうよと、私は心の中で思う。今までけんかのようになつた事はない。それはただ、私が何も言わなかつただけなのだから。でも、そういう変化は、私自身、自分の事なのにあまり期待できる事ではないと自分に言い聞かせた。しばらくして、ほとぼりがさめた頃、悪いと思つている

のか姉の方から電話をかけてくる。

「元氣？ 少し涼しくなったわねえ」

そして、私は今迄と変わらず、何でもなかった様に楽しく話す。結局、私は姉の事が嫌いではない。ただ少し苦手なだけなのだと、自分を納得させる。事件の事を、もちろん私は姉に話さなかった。

七

レモンバームの下に、雪の下肉厚な葉がしっとり敷きつめられている。セミの抜け殻を、私はそっと手に取る。風がささやく様にすり抜ける。

ある朝、新聞を開いた私は、思わず声を上げた。犯人が捕まったのである。それ程大きな記事ではなかった。私はすい込まれる様にその記事を読んだ。

犯人は四十七才の無職の男。強盗目的で一階の貴金属店に押し入ろうとしたが、定休日だったため二階に上り、犯行に及んだという。

事件はようやく幕を閉じた。私はふと涙が出そうになった。マスターのやさしい顔を思い出した。一一〇番をしなかった私。夫に話せなかった私。

「四日市のカラオケ喫茶のマスター殺されたの知ってた？」

「ああ、何かそんな事あったな」

知っていたんだと、私は思った。

「犯人捕まったんだってね」

そんな風にして、私は少しずつ少しずつ自分の心の中の荷

物を下ろしてゆく。

忘れた頃、電話が鳴った。九時近くである。私は恐る恐る受話器を取った。

「あのう……」

聞こえてきたのは、低い女の声だった。

「結城夏子さんですか？」

「そうですけど……」

「わたくし、ビオの……ビオの妻ですけれど」

ビオと聞いたとたん、忘れかけていた恐怖が私の心をおそった。

「電話を……時々かけたのは私です……。申し訳ございませんでした」

私はあまりの事に声を出す事ができなかった。

「夫が殺されたあの日、ビオの方から走って来られたあなたと、ぶつかりそうになりました。とっさの事でしたが、私は、あなたの顔をはっきり覚えていました。四日市では見かけない背の高いステキな方でしたから。でも、私、あなたの事を犯人だと思ったわけではありません。これだけは本当です。そのあと何日かして、浜松の友達に歌謡ショーに誘われたんです。私が落ちこんでいるのを心配して、友達がポスターを送ってくれました。私はカラオケが嫌いでしたので、ビオには一度も……あ、もちろん開店の日には顔を出しましたが、それ以来一度も行った事が無かったんです。そのうちある噂が耳に入りました。あの日、いつもより三十分も早く出かけ

た夫のあとをつけたのです。様子がいつもと少しちがっていたので……。あとになって、私は、あなたが夫の愛人かもしれないと思いました。私は、あなたとゆっくりにお話ししたかった。たとえ愛人だってもかまわない。寂しくて、夫を知ると話があった。それだけだったのです」

途中から彼女の声は涙声に変わった。

「本当に申し訳ございませんでした。いざ電話をかけると、声を出す勇気がありませんでした……」

私は、どんな言葉を言えいいのか分からなかった。私の目にふと涙があふれ、あたりがぼやけて見えた。

「私は前の日に、初めてピアノに行っただけです。ピアノの看板がまたま目に入って……」

私はそれだけ言うのがやっとだった。

「本当に申し訳ございませんでした……」

そして、電話は切れた。突然夫を殺された妻。そして、第一発見者の私。私の事を、彼女はこう思っているのだろうか。私は、もっと何か言うべきだった。

——私は愛人ではありません。でもあなたの気持ちが分かりません——

愛人に会って話してみたい気持ちが私にはよく分かる。私は今でも思い出す事ができる。私より若く、清纯そうに見えた女性の顔を。

私は次の日、少し考えてみながらドロップに行く為、家を出た。あいにくドロップは定休日だった。その日が木曜日だ

という事を私は、すっかり忘れてしまっていた。それは、十一月の少し灰色がかった静かな日だった。ドロップでコーヒを飲みながら、ゆっくりに考えようと思っていたいろいろな事を、私は家に帰る道すがら、歩きながらせわしく考え始めていた。風がススツと耳元を通り過ぎて行っただけ。

もう二、三日も経てば、今度の事は全て霧のように消えてしまおう。でも、ほんの少しだけ頭の片すみに、ほんの少しだけ影を残して行く。それは、出番を待っていた様にタイミングをはかって現われ、私の心をチクチク刺す。

今回のでき事は、私にとって非日常的な事だった。私はどうしていいか分からなかった。しかし、夫に話さなかった事は、償わなければならぬ事ではないという事だけは分かる。

私はどうしていいか分からず少し悩んでいたけれど、そんなふりをしてただけだと自分に言い聞かせる事もできる。全ては流れてゆく、流れるように日々は過ぎてゆく。

(中区)

「入選」

住吉の森語り：古墳

鈴木啓之

浜松市街を見わたす。三方原台地の東縁部にその古墳はある。台地の東側斜面に沿って帯状に点在する古墳群の中でも、特に目立った特徴も無く、旧陸軍墓地に近接し、戦後は、墓苑公園や浜松市立青少年の家の敷地として、高度成長期の開発に翻弄されずにかろうじて残った古墳だ。

埴輪や鏡の出土もなく、土師器のかげらのみが少量出ただけの、見た目にもぱっとしない円墳だが、五世紀前半からここに鎮座されるものと推定されている。古墳の頭頂部にはヤマモモの巨木が自生し、この古墳が長いこと人々から忘れ去られていたことを物語っている。

それでも古墳が一角を占めるこのあたりの森は、「住吉の森」として地域の人々から親しまれている。四季折々に野鳥や草花が、森を彩り、台湾リスが枝を行きかう姿を目で追うことで、森の変化がより身近なものとして感じられた。

十月の半ばのよく晴れた日、ツリガネソウの花先をかすめ

るように、古墳の道を行く女性がいた。三十代半ばに見えるその女性は、髪を無造作に束ね、化粧気のない顔で物思いにふけていた。寂しげな表情は秋晴れの空になじまず、百舌の鳴き声がいつそう彼女の孤独を際立たせた。

弱くなりつつある陽光を浴びて、心地よい眠りの中にあつた蛇は、古墳がわずかに胎動し、ヤマモモの葉がさわさわと揺れる音で目覚めた。眠りを妨げられて蛇は機嫌が悪かった。そのとき蛇は古墳のうめく声を聞いた。それはここに葬られた王の声であることを蛇は知っていた。

「こんな所に！」と思ったら、「ホトトギスが！」と声がついて出た。花影の薄い秋の森で思わず出会った赤紫斑の花に、みのりは一人「すてき！」とつぶやいていた。秋の花はおしなべて彩りも見えた目も控えめなのだが、ホトトギスは日陰にひっそりと彩を放っている。

住吉の森には久しぶりに来た。浜松市中心部の近くにあつて、開発を免れて奇跡的に残った森なのだが、この森の一角で青少年の育成施設「浜松市立青少年の家」が運営されている。だから地域の人々はこの森を青少年の森と呼んでいる。

そしてこの青少年の家の一部を借りて、一般の小中学校になじめない子どもたちの、支援教室が営まれ、みのりの一人息子の樹（うゑ）もその「ふれあい教室」に通っている。

別れた夫のことや、ひとり息子の樹のことを、取り留めもなく考えながら歩いていたので、気づくのに遅くなったの

だ。「ホトトギスの赤い口を想像させる」と、いやがる人も
いるのだが、みのりは子どものころから好きな花だった。

バイリンガルという言葉が世の中に認知され始めた頃、みのりも父親の赴任先のシンガポールから帰国した。父の次の赴任先は、東京から新幹線で二時間ほどのこの田舎の町であった。そこで借りた一軒家の庭先にホトトギスが咲いていた。

慣れない学校で友達もなく、「言葉づかいが気取っている」「空気が読めない」といじめられた。家に帰ると一人でこの花を眺めていた。父親の転勤や赴任地の人付き合いに翻弄され、自分を守ることで精一杯の母親に悩みを打ち明けることも、甘えることもできずに、一人でその状況に耐えていたもののりにとつて、日陰にあつても凛と咲くこの花を、自分に重ねて耐えていたのかもしれない。

エリートコースから外れ、田舎町の出張所長に赴いた父親は、職場にもなじみずに日々荒んでいった。挫折感と虚栄心が仲間を遠ざけ、孤独感と焦燥感が、父を狂わせていった。家では母親とのいさかいが絶えなくなり、ついには暴力へとエスカレートした。暴力は母親の精神を苛んだ。ほうけたように床に座り込んでいるかとおもえば、ヒステリックにだれかれと無く当り散らすことも多くなった。

みのりはそんな父母の相克から逃れるために中学生になると、家出を繰り返し返した。高校も中退してコンビニや飲食店でアルバイトをしながらその日をしのいでいた。

そんな中で知り合ったのが別れた夫だった。寡黙でまじめ

な目立たないタイプの悠太に、父親にない安心感を求めたのかもしれない。十九才で結婚して二十才で樹が生まれた。樹は一才半検診で言葉の遅れを指摘され、やがて高機能自閉症と診断された。

保健師や医師から、樹が集団生活になじみづらいことや、言語的な発達の遅れなど、この障がいの特徴を聞いたみのりは、人生のすべてが閉ざされたように感じられ、樹を受け入れられずに疎ましく感じることをさえあつた。

しかし保健師の勧めで、小児精神科を受診し、カウンセリングを受け、また児童発達支援所の同じ症状の子どもを持つ母と接する中で、少しずつみのりも落ち着きを取り戻していった。「あなたねえ、子どもを一人で育てようなんて思いなさんな。子どもは社会や友達が育ててくれるものよ。一人でくよくよしないこと」母親たちは快活でよくしゃべり、よく勉強した。子どもの障がいをそのまま受け止めて、出来るところを伸ばそうと、必死に活動もした。いつしかみのりも樹を憐れむ気持ちではなくなり、治療や習い事を一緒に楽しめるようになった。

夫はみのりの話を熱心に聴き、理解に努めようとしている様子だったが、やはり受容には時間がかかっていた。「仕事に逃げないで！」と迫るみのりと諍いも多くなった。樹といえば、「ふれあい教室」に通い、友だちもでき、ずいぶんと成長してきていた。「ひまりちゃんとね、話した」「ひまりちゃんね、お弁当食べた」など親しい友人のことを、嬉しそ

うに話し、みのりを和ませた。鳥類や植物に対する興味が深く、「カラスの飼育観察」の研究で県知事賞も受賞した。

そんなおり、夫は働いていた自動車部品工場をリストラされた。夫の失意は大きく、酒やギャンブルへと、その憤懣を向けていった。深酒をして帰ってきた夜、「玄関を開けるのが遅かった」と、夫の暴力が始まった、酒が抜けた翌日には「悪かった!」と卑屈なまでに謝るのだが、しばらくして酒が入るとまた、同じ様に些細なことから暴力にエスカレートすることが繰り返された。

そんな夫ではあったが、みのりは懸命に夫を支えようとした。責任感の強い夫が、家のローンの返済や樹の教育費などで悩み、苦しんでいることは分かっていた。「ねえ、がんばろう。仕事なんて何でもいいわ。三人でいっしょに貧しくても仲良く暮らしたらそれで十分」そんな言葉に夫はいっそう荒れた。家具が壊れ、樹のおびえる目から光が失われかけた。

言葉を忘れてしまったかのように、まったくしゃべらなくなった樹を見て、みのりは夫との決別を決めた。父の暴力の連鎖が、夫から樹に伝わることは、何としても避けたかったのだ。初めて夫から暴力を受けた日、みのりの脳裏には子どもころの父親の暴力がフラッシュバックした。何も言えずに涙を流しながら固まっている母親の姿が自分と重なり、頭を真っ白にして、いさかいの状況を見ないようにしていた自分の姿が樹と重なった。「この呪縛からのがれなければ……」

そう決意するとみのりは母親仲間のつてを頼って、近くの

薬局に就職を決めた。ハンディキャップについて理解のある店主の店だった。離婚についてはあっさりとして夫が応じ、樹の親権は、争うこともなくみのりのものとなった。

「これで良かったのかしら?」心の片隅にいつも滞っている疑問に、思い悩みながら森の小道を歩いていたみのりは、気が付くと二抱えほどもある、立派な木の前に立っていた。見上げると枝が幾何学模様を描いて広がり、その上の葉は空を覆い隠している。葉影からこぼれた光が森の冷気に当たって子鹿のようにほじけ飛び、幹の周りをやさしく銀色の光で包んでいる。そこにかげられた木札には「コジイ」と記されていた。

「コジイ? コジイ様」思わず口をついて出た言葉だったが、その木はたおやかに静かにそこに立っていて、何を話しても温かく受け入れてくれそうに思えた。

「コジイ様、私はこれで良かったのでしょうか?」とその木に問いかけてみた。コジイは黙って動かない。みのりの長い回想が始まった。『私は物心の着くころから「変わった子」と言われていた。周りの子達は一緒に遊んではしゃいでいるのに、私は一人で花や虫を見ていることが多かった。どうしたら皆とうまくやれるのか分からなかったの。』

子どもが生まれて私と似た成長をたどる様になって、自分は、本当は皆と遊びたかったし、風変わりな自分から抜け出したかったことを思い出したの。何を言っても反応の薄い、そのくせ頑固な私に父や母は業を煮やし「変わり者」のレッ

テルを張って、私と向き合うことを辞めてしまった。でも私も普通の子どものように、父や母にも愛されたかったし、甘えたかった。そんな思いをうまく伝えられずに、いつか「風変わり」を表の私にして、もう一人の私は自分の世界に閉じこもったの。

だから樹にはそんな思いはさせたくなくて、私はいろいろなところに出掛けたわ、のんびりしている夫にいら立って、きつい言葉も使ってしまった。樹には自分らしさを封じ込めてほしくなかったの。他の子どもとはちよつと違う自分をありのままに受け止めて、時間はかかっても、自分の言葉で自分の思いを語れる子どもに育ってほしかった。

夫の暴力が始まった時には、父から母への暴力がよみがえって、悪寒が走った。私はこの暴力の連鎖を断ち切ろうと夫との離婚も決めた。暴力の辛さをかわすために「自分が悪いから」「自分に我慢が足りないから」「自分がいなければ夫は救われない」そんな風に自分を責めて、自分の心を空っぽにして嵐が過ぎ去るのを待つことを、子どもの樹が真似し始めたときにやつと気がついたの。これが連鎖なのだと。

だけど私や樹に伝わる風変わりな性質、暴力を受けやすい体質は、もつと深いところにあつて、ぬぐうことのできない、止めようもないもの。子どもの障がいも、夫の暴力も自分につながる血の流れ、育った環境のせい。つまりは私自身が原因なのだという思いもあった。自分のせいだと思えば思うほど、私は周りが忌まわしく思えた。父や母、夫、健康な子ども

もを持つ親、仲のよさそうな夫婦、親切に対応してくれた医者や心理士さえも……。

笑顔の下に激しい嫉妬と憎悪を隠しながら。またそんな自分を嫌悪し失望しながらも、いい母、いい妻を装って来たの『「だからそんな私の決断や判断はきつと間違っているに違いない」

みのりは涙を流しながら「苦しい！」とコジイに訴えた。コジイの幹がグラツと揺れたように感じたとき、コジイのしわがれた声がみのりの意識に直接話しかけてきた。

「お前の生まれたのはどこじゃ？」と声は聴いてきた。「父と母は諏訪の生まれ、私も五歳までは諏訪で育ったの」そう答えた途端、みのりの意識は清水のにじみでる森の岩の隙間に吸い込まれた。光の粒となったみのりは、湿った暗い空間を、速いスピードで移動した。

「キツキ王、ヤマトからの使いがまたやってきました」王は眼下の田園風景から顔を上げ、一瞬目を空に向けると、ものうげに「今いく」と家臣のタミに応えた。

田にすきを振るう領民の姿や、遠くにまだ雪をかぶるフジの山、対岸で畑を焼く煙のたなびき、空高く輪を描くトンビの姿など、今まで見ていたのどかな風景が一気に色あせたものとなった。

ヤマトからの使いは朝廷への恭順のしるしとして、このアリタマの小国に貢物や苦役を強要するもので、米や麻布はと

もかく、庸として苦役に十人の若者を差し出すことに、強い反発を感じていた。

遠いヤマトの都では、大王の墳墓作りに全国から労働力として、若者を集めている。それはヤマトに恭順を誓った国ばかりでなく、領土を定め民を治め始めたばかりの小国へも、例外なく及んだ。

この地を通り過ぎる着の身着のままの若者が、行く先々で物を乞いながらヤマトを目指す姿は、あまりにも痛ましく、キツキの胸を痛ませた。

「王、私が追い払います」と弟のイサハヤは猛々しく叫ぶと、いまにも飛び出していきそうな勢いだ。「まあまで」キツキはイサハヤを止めると、芽ぶきの接待所に足を向けた。「今日こそは、よい返事をもらうぞ」と声高にせまるヤマトの使は、薄暗い屋内でもよく光る目つきでキツキを恫喝した。

囲炉裏の種火に目を落としながら「隣国の王たちともよく相談をしたうで……」と、その場を取り繕うとするキツキに「聞き飽きたわ」という声が降ってきた。小屋の外からはイサハヤたちの、武具の音も聞こえてくる。

冷や汗をかきながらも、昨年来のはやり病で亡くなるものも多く、苦役に若者十人を取られることは、国の存亡に関わることなどを、くどくどと説明してキツキはその日の折衝を終えた。慥然として帰ってゆく大和の使いを送ると、キツキは大きなため息をついた。「キツキ、もう俺は我慢がでん。

ヤマトなんかにへつらうことはない。戦じゃ」と息巻くイサハヤの目が、そのヤマトの使いの後姿を追っていた。キツキを後継となし、父がみまかつて一年半が過ぎようとしていた。

「なぜ父王は、自分を後継者として指名したのであるか？」死の間際キツキを呼び寄せ「この国の民を本当に守れるのはお前しかない」と言い残した父王の言葉を図りかねた。キツキはイサハヤの肩に手を置き、「イサハヤは勇敢で知恵にも長けているし若者からの受けもいい。父王は選択を間違えたのじゃ」とつぶやいた。

天竜川をはさむこの地域には、数千名規模の小国が点在していて、王たちのヤマトに対する対応も、主戦派と穏健派に二分されている。キツキは穏健派と目され主戦派のイサハヤとも国内で対立している。「国の若者をむざむざ奴隷にされてたまるか。戦いもせずヤマトの言いなりになるのは負け犬だ」と叫ぶイサハヤに付く若者も多い。

イサハヤは体軀も豊かで精悍な顔つきは、亡き王ウサによく似ている。ウサは厳しく、身の始末もよく、武術に秀で、大王と呼ばれた。イサハヤはそんな父親が大好きで、狩や領地の見回りにもよく一緒に出かけていた。時には無茶もして、隣国の娘をさらい、あわや戦争にという事態に陥ったこともあったが、今はその娘と結婚し子をなしている。

キツキは戦闘訓練で、若者とまみえる時にも胸が高鳴ってしまい、イサハヤから「キツキ、腰が引けておる。まるで女子のようじゃ」と笑われていた。キツキにとって荒ぶること

は苦手であった。その半面で荒ぶるものに心を惹かれる自分が不思議でもあった。

兄弟の母親は、台地の西側の大きな湖のほとりに広がるイナサの国にいた。イナサの国は早くからヤマトとの交渉に臨み、緩やかな関係を築いている。イナサで生まれた二人は幼いころはツクヤ・ナギと呼ばれ母の元で育てられた。穏やかで争いの嫌いな母は長男に「月夜」弟を「風」と名づけ、信頼の厚い奴婢の古老ツグに二人の教育をまかせた。ツグは山や海の知恵に長け、川や海での漁り、鳥獸を捕える罫の仕掛け方、風の向きや天候、星の動きと季節など、湖の自然と共に生きるすべを教えてくれた。

ツグは遠くシナノ国から子どもたちのころに売られてきて、イナサの館で奴婢として苦役に耐えてきた。同じ奴婢と結ばれ子や孫も奴婢として働いているが、この国の最長老であり、王からも信頼されていた。「運命はあらがうことより受け入れるもの。人とは争うより分かち合うもの」というのがツグの口癖だった。

春の湖で漁をしていたとき、突風でツグとツクヤの小船は流された。穏やかだった湖に白波が立ち、船は風に翻弄された。「ツクヤ、恐ろしいか？」船べりにしがみついてじっと耐えていたツクヤにツグが聞いた。「嵐はじきにおさまる。

この嵐の中で今お前は何を感じ、何を思った？ 生死の境目でお前の心が感じたもの、それがこれからのお前の生き方じや」ツグはさおを操りながらツクヤに問いかけた。

不思議にツクヤに恐怖心はなかった。ツグに対する信頼感と、「ツグを死なせない」という強い思いが、嵐の湖でツクヤの心を満たしていた。

母はナギが五歳、ツクヤが九歳のときにみまかり、母の死を機に、二人は父親のウサの元に引き取られ、イサハヤ・キツキと改名され、武術や馬術で鍛えられた。小さいころには泣きじゃくってばかりいたイサハヤは、次第に猛々しい青年へと成長した。キツキは父の国になじめず、何事にも控えめな、もの静かな青年になった。

「イサハヤ様が兄で、キツキ様が弟なら良かった」キツキのほっそりとした体躯と優しい顔立ち、おっとりとした物言いをみて、村の男たちはささやいた。「キツキ様は女子どもにもとてもやさしい。きっと立派な王になられる」と女たちはうっとりキツキを眺めた。

しばらくその空間移動に身を任せていると、急に世界が明るくなって、そこには二層の屋根の立派な神社がそびえていた。境内にそびえ立つ杉の巨木がみのりをいざなっている。みのりの意識は、しめ縄の飾られた御柱の横を通りぬけて、巨木の幹の内部に到達した。そこは毛細管を伝って流れる水音がさらさらと子守唄のように聞こえ、暖かく浮遊感のある心地よい空間だった。

大樹は静かに語り始めた。「三千年ほど前、ここに住み着いていたのは、石の斧や石のナイフを使う人々だった。森

で拾った木の実や、少しばかりの穀物、湖で捕れた魚を土の器で煮炊きして、平和に暮らしていた。貧しかったが、両足が不自由で歩くことができない子も、年老いて命が尽きるまで、面倒を見てもらえた。ここでは弱い者をみんなで守ることは、当たり前のことじゃった。

しばらくすると米を作る人々が、この地にやってきた。すると米作りに条件のいい場所や、採れた米をめぐって争いが起こるようになった。前から住んでいたものたちは、追いやりられたり新しい集団に取り込まれていった。やがて村は大きくなり争いに勝った集落は他の集落を従え、大きな墓を作るような地域の王も誕生した。戦いに敗れ、川を下って新たな土地を求めて出て行ったものもおった。

全国を統一する大王も現れて、国を治めるようになる。都は栄え、都を治める者は強い力を手に入れ、このあたりも貴族や寺院の荘園になったこともある。自分たちの土地なのに、かってに区切られ、年貢と称して、採れた米を容赦なく取り立てるので、荘園を逃げ出す者もあった。

わしにとってはまだついこの間の事じゃが、都の貴族に取って代わろうとする地域の王が、武士団というものを作った、そこかしこで争いをしたこともある。農民を武士に仕立てたり、畑も田もかまわずに戦ばかりしおるので、農民はえらく難儀をした。

長い争いの後、徳川という者が天下を収めてしばらくは平和じゃったが、百姓はいつだって生きていくのに精いっぱい

の生活じゃ。生かさず殺さずというのが、国を治める者の考え方じゃ。戦がなかったのは束の間で、この国はまた争いを続けた。今度はよその国相手じゃ、たくさんのお金と人間の命を犠牲にして、得られるものは何もなかった。

みのり……こんな国の歴史の中で、お前の先祖はどんな暮らしをしてきたのだろう？ たぶんささやかな成功や喜び、小さな悲しみや苦しみを重ねてここまで血を繋いできたのだろう。

この国に生まれた人々は、地震や台風、火山の噴火や津波といった自然の脅威にもさらされてきた。災害や凶作、戦争で多くの命を失いながらも命を繋いできた。その中であつてたくましく必死に生きぬいてきたのが、お前や息子の樹につながる人々の連鎖じゃ。

恨みや憎しみ、嫉妬や裏切りもなくして、この過酷な生の連鎖が全うできたと思うか？ お前につながるどの人にも喜怒哀楽の物語があつて、その壮大なストーリーの一コマに、お前の人生があるのじゃ。ありのままに一日一日を必死に生きぬいてきたからこそ、今のお前や樹があるのだろう」大樹はそう語りかけた。

みのりはその幹の中にあつて、胎児のように身を丸めて声を聴いていた。母や父、自分につながる太古からの命の連鎖のストーリーが脳裏を巡り、いつしか双眸からは涙があふれ出ていた。

最後にみのりの脳裏によみがえった風景は、諏訪湖にそそ

ぐ川べりの、田園風景だった。みのりは母の胎内にいた。母親は歌を口ずさみながら、橋を渡って菜の花の咲く農道を軽やかに歩いている。向こうの丘にたたずむカヤぶき屋根の我が家へ向っているのだ。時々立ち止まっては臨月のお腹にさわり、嬉しそうに微笑んでいる。母の歌声に呼応するようにシジュウカラやヒワの鳴き声も聞こえる。軒先に立つと遠くに雪をまとった八ヶ岳がそびえている。田起こしを手伝っていた父が汗を拭きながら手を振っている。

みのりは言いような幸福感到に包まれながら、母の目を通してこの光景を見ていた。

「さあ、みのり帰きなさい。またいつでも帰っておいで」やさしく大樹がささやいた。みのりの意識は住吉の森に向いた。すると意識は樹を抜け出て、諏訪神社の泉から、もと来た地下水脈をたどった。来た時と同じように暗くて暖かい長い道を抜けると、コジイの下にうずくまる自分の肉体に戻った。

みのりは立ち上がってコジイの木を見上げた。その先に広がる青い空は、先ほどと変わらず輝いている。コジイは揺るがない姿勢でそこに立っていた。

「コジイ様、私は天竜川水系に導かれて、自分の原風景に出会えました。春の風がやさしくほほを撫でる、山さとの小道で母と共に感じたあの幸福感。幸せに満ち満ち、愛されて生まれてきたのが私だった。その地で営々と生き抜いてきた、私につながる人々の魂に触れることもできました」

「コジイ様、私は愛され望まれて生まれてきたことを知り、生きる自信がわきました。樹もそうであつたことを伝えた。また私に繋がる人々がそうであつたように、自分に正直に、ありのまま生きていこうと思います」

するとコジイが答えた。「ついこの間の事じゃ、その古墳にそびえる、ヤマモモばあさんの所に男が来てなあ、ばあさんに自分の先祖の話を聞いて帰った。遠い昔のその男につながる少女の話じゃ。その子どもは、江戸という時代が始まったころ、この地が飢饉に襲われ、口減らしのために売られそうになったのじゃが、山深くまで逃げ延びて、その地で心やさしい仙人達に助けられ、立派に家族を作り子をなした話じゃ」

「その男はな、仕事をリストラされ、やけになって家族に暴力をふるったあげく、家族から見放されて、現実の自分にはずいぶん絶望していた。しかし、自分につながる人々のたくましさや、やさしさに触れて胸を打たれた様子だった」

「どんなに現実が厳しくとも、みんなが敵というわけではないぞ。心優しい人、生きることと真摯に向き合っている人は、必ず周りにいるものじゃ。そんな人々に支えられて人は生き延び、歴史を綴ってきたのじゃ」

「男の周りにも、妻や子ども、父や母、友だちなど、男を愛し、信頼し、支えてくれる人々がたくさんおった。そのことに気づいて男は、えらく自分を恥じた。しかし立ち上がる勇氣も得たようじゃった」

「男の目は輝いていた！ 足はしっかりと地面を踏みしめていた！ そう教えてくれたのはヤマモモの木から飛んできたシジュウカラじゃった」

みのりは途中から話の男が夫であることを確信した。母親のお腹の中から見た、みのりの原風景に、樹を妊娠中の自分の姿を重ねてみた。そこには確かに、夫とまだ見ぬ子どもへの愛おしさと、こぼれるような幸福感があった。

式は挙げなかったものの、二人がすみ始めたのは安間川のほとりのアパートだった。築年数は立つものの、清潔なきちんとした部屋が気に入っていた。夫の悠太は二交替のきつい勤務だったが、文句も言わずによく働いた。

みのりもパートではあったが、お年寄りのグループホームで働いていた。認知が進んでもその人の生き方が、生活の仕方や、集団への交わり方に反映されて、とても興味深く、楽しい職場だった。

すぐに子どもが出来て、みのりは嬉しかった。つわりも軽く、毎日の食事でもそれまでより熱心に作るようになり腕を上げた。周りのちよつとした自然の変化にも目が向くようになり、まつげをゆする風にも季節を感じた。安間川の堤防で、野の花を摘んでテーブルに飾ったりした。

樹の胎動が感じられるようになると、一層散歩は楽しくなり、ミモザや菜の花に顔を近づけては、お腹の樹に語りかけた。桜の花びらの中を歩いた時には、夫がカーディガンをかけてくれ、幸福感で思わず涙ぐんでしまった。

夫もみのりも待ちに待って、ハナミズキの頃に樹が生まれた。

「このことを樹と夫に伝えなきゃ！」そう思った時、丘の上から子どもたちの声が聞こえてきた。

石清水をのんでいたシジュウカラが「ツイー」と鳴いて飛び立った。

「キツキ、そっちに行つたよ。早く捕まえて」村の子どもたちとドジョウ捕りに夢中になっていると、イサハヤを先頭に騎馬の集団があぜ道を帰ってきた。昨夜ヤマトの東征軍を北の隣国アラタマにまで偵察に出かけた騎馬団の中から、「キツキ、戦が始まるかもしれないのに、いつまで子どもらと遊んでいるのだ」とイサハヤの声がかかり、亡き父の苦笑が逆光に垣間見えた。

その夜二人は国の主だったものを集めた。「アラタマの王も大和との闘いを望んでおられる。アラタマの国も同盟を結んで一緒に戦うべきじゃ」イサハヤが最初に口を切った。「ヤマトの軍は強そうじゃ。鉄の剣に鉄の甲冑では勝ち目が無い」「キツキ王、何を弱気な。われらはそのために若者を鍛えてきた。アリタマの国と共同で立ち向かえば、勝機も見えるはずじゃ」イサハヤはキツキに詰め寄った。その精かな顔つきとたくましい二の腕を見ながらキツキはつぶやいた。

「足元のカマキリを踏みつけるのさえ躊躇する若者を、人を殺しても何も感じない人間にくるわせ、殺した人の数で勝

ち負けが決まることで、本当に領民を守れるのだろうか？」
「私は……戦いは好かん。イナサの国のように大和に恭順したとしても、領民の生活は守れる」「だからキツキは女子のようだとされるのだ。庸としてヤマトに送られる、アリタマの兄弟たちはどうなる」イサハヤの声が耳朶を震わせた。
「われらを育ててくれた奴婢のツグを見よ。運命にあらがうことなく、貧しいながらも人々から尊敬され、子もなして生きておる。ヤマトに送られたからといって必ずしも不幸になるとは限らん」「キツキは甘いわ。意気地がない」

いくら時間を費やしても、兄弟の意見は交わることはなかった。イサハヤの言葉にひざを立てて強いまなざしを送る若者の一方で、長老たちは瞋目してキツキの言葉にうなずいていた。

しかしイサハヤの意見に引きずられるように、アラタマの国との合同のまき狩りが決まった。天に昇る竜の道とされる川の原を、両軍の騎馬と勢子を取り巻くように獣を川岸に追い込み、弓矢で射止めるのが、この日の訓練であった。

キツキはアリタマの大将として、騎馬の先頭を担わされた。アラタマの大将はスワといってアラタマ国の王の長男で、イワミズに神に仕える巫女として育てられた。男子であるにも関わらず、巫女として神託を聞く霊力を持ち、騎馬にまたがるその身体からは芳香が香り立ち、頭に赤い布を巻き、白無垢の絹布をまとった姿は、見るものに感嘆と畏怖の念を抱かせた。

「あなたがキツキですか。一度お目にかかりたいと思っていました」語りかける声にさえ気品が漂っていた。キツキが目を見張っていると、「こんな訓練、意味ないですよ。ヤマトは強大で、我らは熊に挑むあります」「しかしあなたの国はヤマトと戦う準備を進めているのでは……」「父、チノ王だけが一人戦いを望んでいます。それとあなたの弟のイサハヤ……さん」

思わぬ展開にキツキは言葉を失った。その間にも勢子たちは原野を走り回って、獲物を追っている。「キツキ、早く前に出る」イサハヤの声が聞こえる。「それではまた」スワはきびすを返した。

その夜、キツキは眠れなかった。スワのか細い腕や、口元のほくろを少しだけゆがませる、はにかんだ笑いが脳裏をめぐった。スワのしなやかな体からは、かぐわしい香りが漂っていたようにも思われる。「スワは好戦的な父王に変わってどんな国造りを考えているのだろう。あつて話してみた」その夜からキツキの脳裏からスワが消えることはなかった。

居ても立ってもいられぬ思いでキツキは国境まで馬を走らせた。国境を流れる、ウチノ川の川べりまで駒を進めたところで、向こうから手を振るものがある。「スワだ」思わずキツキの顔に朱がさす。手を振り上流に移動を促すと、スワの馬はいないで走り出した。遅れまいとキツキもくつわを川上に向けた。途中で松の葉をむしりとると急いで、ほおばっ

た。松の葉は口の匂いを消す。

二人は岸辺の大岩に腰を下ろした。やはりスワからは芳しい香りが漂ってくる。「キツキ。私は剣を握るよりすきや鉞を手にしたほうがずっと楽しい。春の野は華やいで心を躍らせてくれる。夏の夜の星ぼしに先祖たちの御霊が見える。こんなすてきな場所を、踏み荒らしたり、血で染めることはゆるされない」「私はアラタマの国の長になるものとして、ヤマトとの争いは避けたいと思っている」キツキは思いもかけぬスワの告白にたじろいだ。そんなキツキに注がれるスワの瞳は美しく澄んでいる。

巫女として人々から恐れ敬われているスワ。普段は人々に顔を見せることも無く、岩の宮にこもって神に仕えていると聞くスワが、こんなにも自然な言葉で、国や人々への思いを語ることが信じられなかった。

その瞳に促されるようにキツキは語りだした。「私は幼いころから相撲や狩がきらいで、女子^{おんな}どもと綿毛を飛ばしたり髪をすきあつたりする事に興味がありました。領家の長男としてそんな自分を隠して生きてきましたが、戦争を目の前にして父や弟のように勇ましく振舞うことに我慢がなりません。もし母や私を育ててくれたツグだったらどうするだろう、としか考えが及ばないのです」「母の気持ちで領民を見ると、領民を生きたがえさせることのみが私に与えられた使命だと思っています」スワがうなずく。「私はヤマトを受け入れ、この地の民を、民の血を守る」なぜこんなに思

いのままに心情を語ることができたのだろう。キツキは顔が上気するのを覚えた。

「私は思うのです。男は勇ましげに狩や争いごとを好みますが、本当は臆病で弱いものです。女の支えなしでは赤ん坊と同じ、一日とてまともに生きることができません。飢餓や戦の中でも女たちは命を生み、つないできました。平和こそが女と子どもの命の糧なのです。遠い昔から村や国を守ってきたのは女の力です。男は為政にうつつを抜かし、命をつなげるということに気づこうとしません。幸い私もあなたも身体は男として生まれてきたのだけど、心は女のそのようです」「今、国の存亡のかかるとき民を守ることができるのは、私たちかもしれません」

スワの言葉に「女であること」を隠し、暴力や野卑な言動にも耐え、従ってきたキツキのまづげが震えた。「この方は同じような性の下に生まれても、ありのままの心で王たらんとしている」女として国を守る決意にキツキは打たれた。

「スワ、だけど私は弱い王、優柔不断な王なのです」「だからこそ知恵としたかきで自分らしく臨むのです。私は父の強い力に逆らうことはできません。だからキツキの国がヤマトと組んで、アラタマを併合してくれればいいと思っています」

あまりにも唐突なスワの申し出に、キツキの心は揺れた。「私の国にはイサハヤがいます。イサハヤがヤマトに恭順するとは思えない」「待つのです。優柔不断を貫いて、待つて

いれば、イサハヤはきつと私の父の元に走ります。父はイサハヤという力を得て、いつそう武力を持つて大和に臨もうとするはずです」「それでは戦になります」「三方みかたの松原でアリタマがヤマトと対峙したとき、南からアリタマがそして北からはイナサが立ち上がります。内からは私です」「圧倒的な量と力で父とイサハヤを封じ込めます」「それではあなたの父王とイサハヤの命はありません」「国の安寧を守るためには仕方ないことです」

思いもよらないスワの提案はキツキの想像を超えていた。「自分たちの領民を守るために父や兄弟を犠牲にすることを神は許されるだろうか」キツキは一瞬、恐れにおののく自分の心に目を向けた。

しかしその恐れさえも打ち砕くような、燃える瞳が目の前にあり、キツキの逡巡は一瞬にして吹き飛んだ。それは「民のため」と言う理屈を通り越して、「好きな人のため」という理性の及ばない感情であつた。

これまで理知の人として、領民から慕われてきたキツキにとって、重要な決断を感情に任せる恐ろしさは、神のたたりを危惧する思いとは別の、甘美ささえも伴う自我の崩壊でもあつた。

「キツキ王、この頃顔色がさえません、何か……」重臣のタミが問いかけた。「この頃はイサハヤとの争いが絶えず、国も二分してしまった」キツキの顔がさらに曇つた。「王、

気持ち強くお持ちなされ」タミの子どもトキもイサハヤと行動をともしにしていた。イサハヤが国を出てアラタマと組めば、父と子が戦うことにもなりかねない。「これが民のためと言えるのであろうか？」そんな思いを見透かすよう「領民のためです」というタミのゆるぎない言葉が聞こえてきた。

イサハヤが若者数十名を引き連れて、アリタマに向かったのはその日の夜であつた。キツキは闇を透かして、その後姿を見送つた。「この夜、国のいくつの家々で、子の無事を祈る親の涙が零れ落ちたのだろうか？」キツキの胸は張り裂けそうであつた。「あの若者たちを死なせるわけにはいいかない。」キツキは梅雨に煙る森の向こう、アラタマを深いまなざしで見つめ、心に誓つた。

アラタマの国が戦争準備に入つたことが、聞こえてきた。「この情報はすぐにヤマトにも伝わるであろう」キツキもイナサの国に頻繁に使いを出した。イナサの国からはヤマトが「自軍の主力を補佐して、アラタマの包囲網に加わるように」との教唆があつたことを知らせてきた。

アラタマにイワタの国が加勢するという話が伝わってきた。キツキはイワタに使いを出した。竜の登る川を渡つてイワタに自重を促しに行った使者は、怪我をして戻ってきた。

「イワタ国の王ミツケは、この地にヤマトに匹敵する国家の建設をするのだと、意気盛んです」使者はひどい矢傷に顔をしかめながら報告した。

ヤマトからの使いは途絶えていた。秋になるとヤマトでは

大王がみまかり、喪に服しているとの使いが来た。「キツキ王、アラタマ、イワタはこの機に近隣国を従えて勢力の拡大を狙っています」タミが情報を伝えてきた。

春以来スワから遠ざかっていたキツキは、ウチノ川の上流に馬を走らせた。「スワこのままでは戦が始まってしまう。

私は民に血を流させたくはない」「私の国では早くも戦勝気分だ。だがヤマトはいつまでも喪に服しているとは思えない。すぐに次の大王が決まるはずだ。キツキ、待つのだ。優柔不断にアラタマやイワタと交渉を重ね、時を稼ぐのだ」

スワはキツキの手に自分の手を重ねた。スワの言葉によりみはない。確信に満ちた顔つきを見ると、キツキの心から杞憂が消えた。そしてまたスワの芳香が鼻先をよぎるのを感じた。

イワタからの使者は強く恭順を迫ってきた。のらりくらりと交渉を長引かせるキツキの態度に業を煮やした使者は「望月が欠けて闇夜になった日が期限じゃ」そう言い置くと、肩を怒らせて帰っていった。

秋の月は日ごとに姿を変え、かすかに弓形を残すころになって、物見から報告があった。「キツキさま、イワタにたくさんいたいまが見えます。戦の準備かと思われます」翌朝には、アラタマでも動きのあることが報告された。

「タミ、いよいよ戦の支度じゃ。イナサに使いを走らせろ」タミは国中にふれを出すとともに、イナサとの協議に当たった。この日は事前に予期されていたために、戦いの準備は滞

りなく行われた。ヤマトに出した使いからは何の返事もなかったが、アリタマとイナサの連合軍は国の西北に広がる三方の原に終結し、時の声を上げた。一方イワタ軍は竜の登る川を渡ってアカスナの川原でアラタマ軍と合流した。

早霜の降りた朝、竜の登る川から湧き出た霧にまぎれて、両軍は国境のウチノ川まで軍を進めた。時折、馬のいななきが静寂を破るものの、それは静かな行軍だった。ウチノ川を見わたす、高台に来たとき霧が晴れ、竜の登る川のススキの原を進むアリタマ、イワタ軍の全貌が見わたせた。

最新の鉄の武具で身を固めた、アリタマ、イワタ軍は質量ともに、キツキの軍を凌駕していた。しかしその先の竜の登る川に目をやったとき、キツキの目に驚愕の情景が飛び込んできた。「ヤマト軍だ」なんと数知れないヤマト軍の船団が竜の登る川を埋め尽くすように、さかのぼってくるのではないか。アリタマ、イワタ軍はそれにも気づかずウチノ川を越える勢いで突き進んでくる。

「タミ、私はこの状況をアリタマに知らせ、和睦をといてみる」キツキ王、それは無理じゃ、ここにいたってアラタマ、イワタが矛を収めるとは思えん」「しかし、流血を避けるためにはこれが最後の機会じゃ」これまでのキツキの表情が一変して、何かに取り付かれたかのように見える。「それでは、私も一緒に参りましょう」身を案じたタミは数名の護衛とともに、キツキに従った。

ウチノ川の大岩まで来ると、キツキは歩を止めた。ここは

スワと将来の両国を語り合った場所。キツキがスワに深く惹かれた場所であった。あれから約二年の歳月が流れた。「今はこの戦いの両雄として対立してはいるものの、平和への思いに変わりはない」そう確信して駒を進めようとした時、一本の矢がタミの胸を貫いた。

がけを駆け下りてきたのは、アラタマの戦士たちだった。

その中にはイサハヤタミの息子トキの姿もあった。偵察隊として川沿いをさかのぼってきた兵の一人が放った矢は、キツキの前を守っていたタミを襲った。「キツキ、何でもこんなところに？」そう叫ぶとイサハヤはタミの下に駆け寄った。

タミの目は紺碧の空を写し、そこに生氣は感じられなかった。「タミ！」そう叫びすがりつくトキの声に一瞬正気を戻したタミは、苦しい息の下から「トキ、誰を恨んでもいい。ましてや自分を責めることもだ」滝のしぶきがさらさらと舞い落ちてタミの目は静かに閉じられた。

イサハヤたちの案内で、キツキはスワと向き合った。「ヤマトの軍団が背後に迫っているいま、この戦いにはもう意味がない。私たちと共にヤマトと良好な関係を築き、国の安寧を得よう」そう説得するキツキに、スワがうなずき居並んだ重臣を見回す。「我らはヤマトと戦い、この地に強大な新国を作るのじゃ」とイワタの王が応えた。イサハヤとスワの父王チノが強くうなずく。

「イワタの王、父王、この戦は無益じゃ。前にアリタマとイナサ、後ろにヤマトの大群では、いたずらに領民の命を無

駄にするばかりです」こう訴えるスワに「われらはイワシミズの神々に守られておる」とアラタマのチノ王が吼えた。交渉は長時間に渡ったが、一向に進展の兆しは見えない。この間に上陸したヤマト軍からは頻繁に使者が訪れ、降伏を促すのだがチノ王は「ヤマトに一泡吹かせるまでは降伏はしない」と一歩も引かない。

「命を懸けても……」とオロの呟きが聞こえた。スワの目が異様に輝き、キツキは不安を覚えた。「スワ、何を考えているのだ？」問いかけると、スワは低い声で「私の愛するあなたと、あなたの国、私の国そして民を守るためには命を懸けてもおしくはない」その確固とした言葉に、キツキの心はさらに震えた。

ヤマト軍は兵をさらに進めた。キツキ、そしてイナサのツグの息子ネバなど主だった将は、ヤマト軍の前線にいて、アラタマ、イワタ軍に今一步のところに迫っていた。突然葦原を分けて何者かが、キツキの前に飛び出した。とつさのことにキツキは槍をそのものに向けた。腕から鈍い衝撃が伝わり、それからずぶずぶと弱い振動が手を震わせた。目の前に倒れた男はスワであった。「スワ！」ぬかずくキツキの耳朶にあのスワの、かすれた声が聞こえてきた。「キツキ、私を斬首してアラタマ軍の前に掲げるのです。それでアラタマ軍は総崩れです。私はイワシミズの神の子なのですから……、アラタマの神は死んだと伝えるのです」キツキは言葉をかけることもできずに、ただ涙にぬれた顔を、子どものように振

りじゃくるだけであつた。

「王、スワ様の言葉に従うべきです。このものは自分の宿命に従つたのです」その声をかけたのはネバであつた。イナサのツグの子ネバは父親の教えに従順であつた。運命は受け入れるもの。個人が抗うすべも無き、大きな意思には逆らえないことを知っていた。同じツグの教えを受けたキツキにもスワの意思は伝わつたのだが、スワの身体をこれ以上傷つけることには耐えられなかつた。

「王、この国の未来はあなたの決断にかかっています」ネバの容赦のない言葉が降りかかつてくる。キツキは力なく頭をたれた。「よし、スワ様の首級を切り取つて三方に乘せよ」ネバが部下に命令した。

三方に乘せられたスワの首級は、竹のさおでさらに高く掲げられてアラタマ、イワタ軍の王のいる陣地へと運ばれてゆく。神の子の死にアラタマ、イワタの兵士たちはすっかり戦意を失ひ、地面にひれ伏している。

戦いは、タミとスワ、二人の死で終結した。ヤマト、アリタマ、イナサ、アラタマ、イワタのそれぞれの兵は国に戻り、農民の生活に戻つた。キツキの交渉でそれぞれの国はイナサと同様にヤマトと緩やかな関係を築くことができた。

イサハヤはチノ王に押されて、アラタマの新国王になつた。だが、新たに軍を整えたりして、ヤマトの不評を買っている。

眼下からは田植えにはしゃぐ子どもの声が聞こえてくる。青く澄み切つた空を切り裂いてツバメが飛んでゆく。川向こうで畑を焼く煙が、まだ雪をいだいたフジの山を霞ませている。人も自然も生き生きと季節を謳歌するなか、キツキの心だけは塞いでいた。「愛するスワやタミの命を犠牲にして私にもたらされた平和は、本当の安寧といえるのだろうか？」キツキの心は晴れず、スワの葬られたウチノ川近くの高台の墳墓で、長い時間を過ごすことが多かつた。

キツキは大王と呼ばれるようになった。妻を娶ることもなく年を老いて、スワが死んで四十二年後にみまかつた。人々は悲しみ、領地を見わたせる台地の丘に手厚く葬つた。キツキの遺言で棺はウチノ川の方に向けられた。

みのりは古墳の前に来た。見上げると大きなヤマモモが、古墳を覆い隠すほどにためらいなくそびえ立っている。その上に広がる空はどこまでも澄み切っている。日の光に一瞬目を伏せた後、みのりは古墳に向き合つた。古墳は悠久の時を経てそこに泰然と座つていた。巖のようにひそやかな存在感をしめすだけで、特別にあげられたり祭られたりするわけでもなく、その懷でやすや鳥たちを遊ばせている。

足元にはツリガネソウが咲いていた。天道虫が葉先から飛び立つのを観た。そういったみずみずしい感覚を得たのは何年ぶりのことだつたらう。そのことが嬉しくてみのりは古墳に向けて一人微笑んだ。口元のほくろがわずかに動いた。「あ

りがとう」自然と呟きがもれた。「わたし、もう一人あのひとの子どもを生むわ。それから母と父にも、もう一度向き合ってみる」

蛇は古墳の声を聞いた。「スワ！」目の前で微笑んでいる女性はまさにスワそのものであった。先ほどここを通り過ぎたときに、似ていると感じて胎動した古墳だったが、今はもうその女性をスワだと確信していた。

その凜としたたたずまい。慈愛に満ちた瞳、長い黒髪。口元のほくろ。千数百年のときを経てスワが目の前に立っている。「私は間違っただけなのではないか。スワにつながる命はここにあり、また次につながるとして」

古墳から深い吐息が漏れた。それと同時に古墳は、土と石の堆積物と化した。ヤマモモの枝からシジュウカラが青空に飛び立った。

(東区)

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

小説選評

竹腰 幸夫

今年の応募作品は十六編。歴史小説二編、老人物語二編、障害・弱者を扱った物語四編、自伝一編、スリラー・通俗小説三編、青春ファンタジー二編、青春小説三編。分け方にはご不満もあるのかと思われるが、大略そのような傾向であった。一時隆盛を誇った歴史もの、老境ものは影を潜め、現代ものが中心となってきた。その中で今回、選考に若干戸惑いを感じたことがあった。創作のエネルギーは、強い表現への「思い」だろうと思う。是非読んでほしい、知ってほしい、解ってほしいという作者の願いが筆を動かしているはずなのだ。それが読者の反応と一体となつたときに「創作」は完成する。従って、作品には読者をそこへ導くような構成・表現等の工夫・配慮が必要となる。作者の単なる自己満足、自己中心的表現では読者は反応できないということだ。とくに、小説においては登場人物の会話は重要だ。作品の良しあしを大きく左右する。冗漫な会話は、たつた一行二行であつても一切を幻滅させることがあるというのを肝に銘じてほしい。今回、評価した作品には、いずれも新しい試み、挑戦の熱が感じられた。問題点はあるものの、興味深く読ませていただいた。

「触れる」眼を閉じ続けて「ものを見る」ことが何物なのかを考える。視力を失うと、意識・時間・方向・記憶など、自分の存在感そのものを失うことを発見する。視覚を除いた個体にとって唯一の自己認識の方法は触覚であることに気づき、元来視覚は触覚の進化した形であることを発見する。視覚を用いないで獲物を捕獲する動物がいるではないか。視覚と触覚の感覚を様々な観点から

追及。後半、みずみずしい感性の女性視覚障害者の実感を交えて、この問題に、鋭くしかもふくよかに迫る。意欲作。

「希望という名の施設」「デイスーパービス」に通う81歳の老人の独り語り。彼は認知症ということになっているがその語り口はそうではない。いわば漱石の「吾輩」である。知的でユーモアもある猫の視点から、現代の「介護予防通所介護」施設の現状をあばき、皮肉る。認知症老人がその表面・表情とは打って変わって知と毒舌とで現代を切り刻む落差が、挑戦的な試みとして楽しめる。

「万石の夢」浜名湖畔、バルバルの地は元、遠州大澤家の居城堀江城であつた。大政奉還の折、当主大澤基寿（従四位下侍従）は高家として、その「御書附」を宮中の飛鳥井中納言に届ける役目を仰せつかつてゐる。その基寿が、維新後の華族の地位を得たために、自領の石高を偽って申告する。その不正が発覚して大澤家は滅亡への道を歩んだ。その顛末を描く。歴史の襞に埋もれようとする史実を拾い上げようとする労作。

「リトル・コクーンズ」卒業後の自分の在り方が定まらず、漠然と留学を考えている大学四年生。ゼミの教授は自分の教え子の一〇〇％就職に使命感を燃やす人物。夏休み中に大学に呼び出され、支度のため久しぶりにアパートに戻ると電気カミソリの中に蛾の繭が巣くつてゐる。この時代、若者の自由な命の燃焼は可能なのか。構想は面白く問いかけも読み取れるが、教授始め人物が類型的なのが残念。

「符合」脳腫瘍手術の後遺症で発語障害を得た青年。そのため次々と職業を失う。ファミレスに通ううちに隣席から聞こえる会話がやがてひとつのストーリーになって行く。その話の中に割り込むようにアルバイトの身を投じる。コミュニケーションの苦手な身が受ける世間の侮蔑、それへの反発が自虐の仮装とともに描かれる。着想が秀逸。

小説選評

柳本宗春

十六作品を読ませていただきました。例年と比べて、一作当たりの紙数が少ない作品が多かったようです。それは、それぞれの内容に見合った分量の作品が出来ているということと、好ましいことだと思います。題材もいろいろで、楽しく読むことができました。以下、各作品の短評です。

「本宮山の雄」

歴史の説明が広範囲にわたり、五十枚ではドラマ性が出ない。

「香港へ」

最後に来て、語り手の視点がどこにあるのか混乱してしまふ。

「符合」

徐々に明かされていく、主人公の境遇と周囲の人々との関係が興味深い。いきなり物語に入ると更に良かったように思う。

「Little Coccons」

本来は現実感のないはずの小さな繭の存在が、学生のジリジリした苛立ち、不快感を逆に実感させる。面白い。

「何も言わない」

構想としては面白いのだが、主人公の行動や生活ぶりが特殊なためか、日常に潜む危うさを感じるまでに至らない。

「呪縛」

短編としてよくまとまっている。登場人物の配置のバランスが的確で、物語の山場や謎の提出など構成が上手い。

「希望という名の施設」

通所介護施設に集まる人々の様々な病状や苦悩を描いている。描く人物を絞った方が、もっとまとまりがよくなったであろう。

「住吉の森語り…古墳」

古代の争いの物語と現代の女性の生活の融合した小説。前作に比べて構成のバランスがよい。

「万石の夢」

郷土の明治期の廃藩置県に関わるドラマの発掘という点が非常に興味深い。やや用語の分かりにくいところもあるが、無駄なく一気に読ませてしまう秀作である。

「触れる」

視覚と触覚について二つの話をまとめて一作品としているが、小説という観点からすると、Ⅱのみを深めた方が良かったろう。

「ボンボン」

次第に年代記風の単調さが出てしまっているのが残念。
「マレーシア異聞―火炎樹のイボーに消えて」

安定感のある描写力で丁寧に書かれている。構成の工夫があるが、時間軸が前後する回数を減らす方が盛り上がるだろう。

「呪いのハサミ」

題名通りのホラー物。構成と肌感覚に訴える描写を工夫して、もっと怖がらせてほしかった。

「幽霊とのたつた一日の思い出」

よくできたライトノベル的な作品。題名に工夫がほしい。

「命日」

主題としてはありがちなものだが、細部の作り込みが適度なリアリティをもたらし、感動に結びつく。

「タルトタンとスコーンと牛乳」

明るい雰囲気が始まりから悲しい結末まで、スマートな表現が作者の力量とセンスを感じさせる。

児童文学

「市民文芸賞」

イチヨウの葉っぱのてがみ

住吉玲子

草原そうげんのまん中に、ポツンと、一けんの家がたっていました。
白いつるバラのかきねにかこまれた、三かく屋根の家でした。

その家には、おじいさんが、ひとりであらっていました。
庭のかたすみに、うすむらさき色のエリカの花がさきはじ
めた、ある秋のおわりのことです。おじいさんは、家のまえ
の一本道に立って、遠くの山にしないでいく、赤い夕日を見
ていました。

おじいさんは、いつも、ひとりぼっちでした。たずねてく
る友だちもいません。

もういく日も、だれとも、おしゃべりしていません。
そう、三かく屋根の家のおじいさんは、

（わしは、みんなにさらわれている）
って、思っていました。

夜、風が、おじいさんの家のまどを、カタカタ、ビリビリ、
ゆらしました。

つよい風が、夜じゅう、草原にふきつづけました。

おじいさんは、なかなかねむれなくて、暗いへやのベッド
の中で、ビュービューと鳴る風の音を聞いていました。

朝になって、風はおさまり、あかるい太陽がのぼりました。

おじいさんの家の庭には、たくさん黄色い葉っぱが落ち
ていました。

ゆうべの風にはこばれてきた、落ち葉です。

草原のはずれを流れている川のほとりの、イチヨウの木の
葉っぱでした。

「こんなにたくさん、落ち葉が舞ってきおって。やっかいも
のめ」

おじいさんは、ブツブツとつぶやきながら、ほうきをもつて庭にでました。そして、おこったような顔で、ちらばった黄色いイチヨウの葉っぱを、かたづけはじめました。しばらくすると、

「ちよっとおたずねします」

と、つるバラのかきねのむこうから、声がしました。

おじいさんは手をとめて、ギロリと、声のしたほうを見ました。

だれも見えません。

「おや、そら耳だったか？」

「あの、そら耳じゃありません。ここにいます」

おずおずと、えんりよがちな声が、また聞こえました。そして、かきねの下から、小さな茶色の頭が見えて、いっぴきのリスが、すがたをあらわしました。

リスは大きな黒いかばんを、肩からななめにかけています。黒いぼうしを手にもって、ぴよこんとおじぎをしました。

「おそうじちゆうにおじやまして、すみませんが、このあたりで、てがみを見ませんでしたか？」

「てがみ？」

「葉っぱのてがみなんです」

「さあて、葉っぱなら、ゆうべの風で、たくさん舞ってきおったが、てがみなんぞは見えておらん」

おじいさんは、口をゆがめていました。そして、庭のすみに集めた、イチヨウの葉っぱのほうを、ゆびさしました。

「わあ、ずいぶんたくさんありますね。ぼくがさがしているのも、黄色いイチヨウの葉っぱのてがみなんです」

リスはうれしそうにいうと、イチヨウの葉っぱのかたまりに、かけよりました。

「ちよっとしつれいして、この中にまぎれこんでいいいか、さがさせてください」

リスはいが早い、ほうしをひよいと頭にのせ、しゃがみこんで、黄色いイチヨウの葉っぱを、ガサガサとしらべはじめました。

「あ、いいわすれました。ぼくは、川ぎしのゆうびん局にとめている、ゆうびん屋です」

リスは、顔だけおじいさんのほうにむけると、ほうしをちよつともちあげ、えしゃくしました。そして、またすぐに、イチヨウの葉っぱのほうにむきなおって、てがみをさがしながら、ことばをつづけました。

「ゆうべ、ゆうびん局のへやで、つぎの日の朝に配達するてがみの、しわけをしていた時のことなのです。まどから見える月が、あんまりきれいだったので、ちよつとひと休みして、まどをあけて、月にみとれていたのです。そうしたら、急につよい風がふいてきて、てがみが一まい、まどからとびだしてしまつたんですよ。それが、黄色いイチヨウの葉っぱのてがみだったのです」

「なんと、まぬけなゆうびん屋だな」

おじいさんは、ひとりごとみたいにいいました。

さいわいなことに、たぶん、リスには聞こえなかったでしょう。

「もちろん、すぐにさがしたのですが、もう外はまつくらで、葉っぱのがみは見つかりませんでした。それで、夜があげてから、川ぎしのあたりからじゅんに、こうして、ゆうべ風が走っていったほうがくを、さがしているというわけです」

リスのゆうびん屋は、はなしながらも手を休めないで、しんけんな顔で、イチヨウの葉っぱを一まい一まいうらがえして、たしかめていきます。

「せっかくそうじをしているのに、めいわくなゆうびん屋だ」「すみません、急いでしらべますので。おお、そうだ。そうじをまっていたいているあいだ、これをどうぞ」

リスは、ふりかえて立ちあがると、うわぎのふくらんだポケットから、ひとつかみのほしぶどうを取りだし、おじいさんにさしました。

おじいさんは、びっくりしたような顔で、手のひらにのせられたほしぶどうを、見ています。

「さつき、川のそばのブドウ畑の、メグミおばあさんからいただいたのです。ああ、だいじょうぶですよ。ほくのぶんは、まだありますから、ご心配なく」

リスのゆうびん屋は、もうかたほうのふくらんだポケットを、ポンポンとたたいて、につこりました。

それからまた、葉っぱのがみをさがしはじめました。

おじいさんはしかたなく、庭のベンチにこしかけて、ほし

ぶどうをたべました。

あまい味が、くちいっぱいひろがって、おじいさんは思わず、「おいしいな」と、いいそうになりました。でも、だまっていました。

「うーん、ないなあ」

さいごの一まいをたしかめると、リスのゆうびん屋は、ざんねんそうに顔をくもらせました。

「ぜんぶさがしましたが、てがみはありませんでした。これから、もう少しさきのほうを、さがしてみます。ごめいわくをおかけして、すみませんでした。それでは」

リスはおじぎをすると、こんどは、かきねではなく、つるバラのアーチをくぐって、庭からでてきました。

おじいさんは、家のまえの一本道のところまでいって、リスのゆうびん屋のうしろすがたを、見おくりました。

リスは、道のあちこちや草むらを、キョロキョロとのぞきながら、とおざかっていきました。

おじいさんは、庭の落ち葉をかたづけおわると、空を見あげました。

青い空がきれいです。やさしい風がふいています。

その時、三かく屋根の上から、一まいの黄色いイチヨウの葉っぱが、ヒラヒラと、おじいさんのところへ舞い落ちてきました。

おじいさんがひろってみると、葉っぱには、なにか字が

いてあります。

おじいさんは、むねのポケットから、メガネを取りだして、読んでみました。

《秋のしゅうかく祭

「ごしょうたいじょう」

満月の日のゆうがたから、

農場の『秋のしゅうかく祭』をおこないます。

ご家族や、お友だちもさそって、

ぜひ、おこしてください。

場所は『まんまる農場ひろば』です。

おまちしています。

ブドウ畑のメグミおばあさんへ

『まんまる農場』より

「これは、リスのゆうびん屋がさがしていた、てがみじやないか！」

おじいさんは、思わず大きな声でいいました。

満月といえば、今夜です。

早くてがみをとどけなくては、『しゅうかく祭』に、まにあいません。

リスのゆうびん屋は、さつき、ブドウ畑とは反対のほうへ、いつてしまいました。

おじいさんは、葉っぱのてがみを手にもって、どうしたら

いいかとかんがえました。

ブドウ畑のメグミおばあさんには、あったことがありません。でも、ブドウ畑がどこにあるのかは、知っていましたし、メグミおばあさんのすがたは、とおくから見かけたことがありました。

今からこのてがみを、メグミおばあさんにとどけてあげるのが、一番いいにちがいないのです。

でも、おじいさんは心配でした。

もしかすると、メグミおばあさんは、おじいさんのことを、いやな人だと思いかもしれません。なぜかというところ、おじいさんは、人となかよくおしゃべりすることが、にがてからです。

おじいさんは、まよいしました。

時間は、どんどん過ぎていきます。

おじいさんは、そそくさと、お昼ごはんをすませると、家のまえの一本道へでて、リスのゆうびん屋がもどつてこないかと、見てみました。

道のどこにも、リスのすがたはありません。

おじいさんは空を見あげました。

青い空に白い雲がひとすじ、川のほうへむかつてのびています。

おじいさんは決心しました。

家の中にはいつて、おでかけ用のうわぎを着て、ぼうしをかぶりしました。

それから、黄色いイチヨウの葉っぱのがみを、ポケットにいれると、家をでました。

おじいさんは、草原の中の一本道を、テクテクと川にむかって歩きました。

道ばたの、秋の色にそまった草の葉が、まるで、おじいさんのせなかをおしているみたいに、やさしく、サラサラとゆれていました。

川がちかづくと、ブドウ畑が見えてきました。畑のわきの小道をたどっていくと、まがりかどのさきに、赤い屋根の家がありました。

日のあたるテラスに、おばあさんがひとり、いすにこしかけているのが見えます。

おばあさんは、空色のブラウスの上に、レースのついた白いエプロンをつけて、午後のお茶をのんでいました。

おじいさんは、まがりかどで立ちどまったまま、声をかける勇気が、なかなかでませんでした。いままで、自分からだれかにはなしかけたことが、あまりなかったからです。

でも、思いきって、かぶっていたぼうしをぬぐと、

「ごきげんよう」と、よびかけました。

「あら」

と、おばあさんが、ティーカップを手にしたまま、ふりむきました。そして、

「ごきげんよう」

と、につこりしてこたえました。

「えーと、あの」

おじいさんが、くちをモゴモゴさせながら、なんていおうとかがえてみると、

「どうぞこちらへ。紅茶をいかが？」と、おばあさんが手まねきました。

おじいさんは、はずかしかったので、しかめつらをして、テラスまでいきました。そしてすぐに、ポケットから、黄色いイチヨウの葉っぱのがみをだしました。

「これをひろったので、とどけにきただけだから。メグミおばあさんは、あんただね」

おじいさんは、らんぼうにいました。

「ええ、わたしはメグミです。まあ、あなたは、三かく屋根のおうちの、おじいさんでしょう？ はじめまして。わざわざとどけてくださって、ありがとう」

おじいさんはびっくりしました。

「わしのことを知っているのかね？」

「ええ、もちろん知っていますよ。お花をそだてるのがじょうずなおじいさんよね。ことしも、かきねの白いつるバラの花が、きれいでしたね」と、こたえました。

それからがみを読んで、

「まあ、しゅうかく祭のしよたいじょうだわ。うれしい。

満月は今夜ね。おじいさん、急いでもってきてくれたのでしょう？ ご親切にありがとうございました」

と、おれいをいいました。

メグミおばあさんは、ほっぺがピンク色をしていて、おしやべりしているあいだ、ずっとニコニコしていました。

おじいさんは、むねの中が、ポツと、あたたかくなりました。

そのあと、おじいさんは、紅茶をよばれて、かるい足どりで家に帰りました。

帰り道で、リスのゆうびん屋が、トボトボと、歩いてくるのにあいました。

おじいさんは、イチヨウの葉っぱのてがみをひろって、メグミおばあさんにとどけたことを、知らせました。

「ああ、たすかりました。もしこのまま見つからなかったらどうしようと、とてもこまっていたのです。ほんとうにありがとうございました」

しょんぼりしていたリスの顔が、みるみる明るくなりました。

メグミおばあさんからも、リスのゆうびん屋からも、おれいをいわれて、おじいさんはちよつとくすぐったい気もちでした。でも、とってもいい気分でした。

おじいさんは、かんちがいをしていました。

だれも、おじいさんを、さらってなんていなかったのです。

おじいさんがかってに

（わしは、みんなにきらわれている）
って、思っていただけだったのです。

その夜、おじいさんは庭のベンチにこしかけて、満月を見あげながら、ワインをのみました。

そのワインは、メグミおばあさんからの、プレゼントでした。

「てがみをとどけてくださった、おれいです。うちのブドウ畑のブドウからつくった、ワインよ」

って、おばあさんは、いっていました。

ひと口のんだ、そのワインのおいしかったこと！
（今ごろメグミおばあさんは、『しゅうかく祭』を、たのしんでいるかな？）

と、おじいさんは、まあい月を見ながら、かんがえました。そうそう、もちろん、メグミおばあさんは、おじいさんを、まんまる農場の『しゅうかく祭』にさそってくれました。でも、おじいさんはことわってしまったのです。

だっておじいさんは、すこく、はずかしがり屋でしたから。

おじいさんは、ベンチから立ちあがると、ワインのはいたグラスを、満月にむかってかかげました。

「うつくしい月と、メグミおばあさんに、カンパイ！」

赤むらさき色のワインと、おじいさんの笑顔が、月あかりに、キラリと光りました。

（浜北区）

「市民文芸賞」

だいこんちゃんのおうえん

河島 憲代

やわらかい朝の日ざしが、ひろい畑にいちめんにあたって
います。

ぽこぽこと、こううんきでほりおこされた畑の土は、金色
の光とかげで、なみもようをつくっていました。

その畑のかたすみに、大根のだいこんちゃんが、たった一
本だけ取りのこされていました。

まだまだつめたい風が、だいこんちゃんの長い葉っぱをゆ
らしながら、ふきぬけていきます。

いままでは、雨の日も、風の日も、雪がちらちらまう日だ
って、たくさんの大根のなかまたちと、体をよせあっていた
のに。

「わたし、ひとりぽっちなんだわ」

だいこんちゃんは、さみしくって、ためいきをつきました。

畑のとなりには、赤いさんかく屋根の小学校がたっています。

した。

休み時間には、校舎から子どもたちがつぎつぎと運動場に
とびだしてきます。

とつてもにぎやかです。

子どもたちのわらい声や、よびあう声を聞きながら、だい
こんちゃんは、

「みんな楽しそうだね」

と、運動場で遊んでいる子どもたちを、いつもうらやましそ
うにながめていました。

ある日のことです。

だいこんちゃんは、校舎の横に立っている太いイチヨウの
木の下に、水色帽子をかぶった男の子が、ひとりでいるのを
みつけました。

イチヨウの木は、もう、枝いっぱいにきみどり色の芽をつけています。

その男の子は、幹に体をはんぶんかくすようにして、じつと見ているのです。

「あの子、なにを見ているのかしら」

だいこんちゃんは、イチヨウの木から少しはなれたところに、てつぼうがあるのに気がつきました。

てつぼうで、四、五人の子どもが遊んでいます。

クルリ クルリ クルリン クルン

てつぼうに足をかけたり、さかあがりをしたりして。

「そうか。あの水色帽子の男の子、みんなといっしょにてつぼうで遊びたいんだわ。あんなところから、ひとりで見えないで『ほくも、いれて』って行けばいいのに」

だいこんちゃんは、つぶやきます。

そのうち、てつぼうからトンとおりの女の子が、男の子の方にかけて行きました。

やつぱり、水色帽子をかぶっています。

うすも色のリボンをつけたおさが、肩のところでぴょんぴょんはねています。

「けいちゃん、けいちゃん。いっしょにてつぼうをやろう」
そういつて、さそいました。

「さっちゃん、ほく……やんない」

けいちゃんとよばれた男の子は、ちよつとうしろにさがつて、首をよこにふりました。

「あの子、けいちゃんというんだ」

だいこんちゃんは、

「けいちゃん」

小さくよんでみました。でも、けいちゃんには、聞こえませんでした。

「じゃあ、こんどね」

さっちゃんが、手を小さくふって、てつぼうにもどって行きました。

さっちゃんは、さかあがりがじょうずです。

けいちゃんは、てつぼうに背なかをむけて、かぶっている水色帽子のひさしを、顔まで下げます。

そうして、足もとにころがつていた小石を、ボンとけりました。小石は、まっ青な空に枝をひろげるイチヨウの木の下まで、ころがつていきました。

夕方、みんなが帰ってしまった運動場に、さつきから、

「エイッ。エイッ」

と、ひびく子どもの声がします。

「あれっ、あの子、けいちゃんだ」

だいこんちゃんは、けいちゃんが、ひとりでてつぼうをやりきたのだなと思いました。

ひるまより、少し強くなった風の中で、けいちゃんは、てつぼうをにぎり、しきりに足をけり上げます。

けれど、足は、バタバタとすぐに地面におちてしまいま

す。なかなか、てつぼうの上までいきません。

「だめだめ、ばく、やつぱりさかがりがりできない。へたつぴいだ……」

けいちゃんは、口びるをかみしめます。なみだが一つぶ目からこぼれました。

そのとき。

「けいちゃん、がんばって！」

かすかな声がしました。

「あれっ、だれだろう？」

ふりむいても、だれもいません。

空は、オレンジ色にそまり、さんかく屋根の校舎のかげが、運動場にのびているだけでした。

「さかがり、できるようにになりたいなあ」

にじんだなみだを、手でこすります。

「なかないで、けいちゃん」

だいこんちゃんは、畑からのび上がるようにして、もういちど声をかけました。

「だれ？」

見まわしても、夕ぐれの間がふくばかり。

「なんだ、気のせいだったんだ」

けいちゃんは、かたをおとして帰っていききました。

それからは、けいちゃんが、さかがりのれんしゅうにくるたびに、だいこんちゃんは、

「けいちゃん、がんばって！」

と、いいました。

畑の中に、ポツンと取りのこされただいこんちゃんは、ひとりでさかがりをれんしゅうするけいちゃんを、おうえんしてやりたくなったのでした。

なん日も、なん日もすぎたあるばん。

空いっぱい星が、だいこんちゃんのいる畑を青白くてらしていました。

「きょうは、けいちゃん、もうちよつとだったのよ。こんどこそ、さかがりできそうっとおもったのに、すぐごんねん」

だいこんちゃんは、ひっそりと星あかりにうかぶてつぼうを見て、けいちゃんのことを考えていました。

うでをぐつとまげ、顔をまっ赤にして足をふりあげ、おなかをてつぼうに近づけようとふんばっていたけいちゃん。

「あしたこそ」

そういつて、てつぼうを、きつとにらみつけて帰っていったけいちゃん。

「あしたは、もつと、もつと、けいちゃんをばげましてあげよう」

そうおもったときです。

だいこんちゃんのそばの土が、いきなり、むくむくと動き、ふせたおわんみたいにもり上がりました。

「ひゃあー！ な、なんなの？」

どきどきして目をこらすと、一ぴきのモグラが、ひょっこり顔を出します。

ぶるんと顔の土をはらったとき、おでこにみごとな星のマークがありました。

「あらあ！ モグラさん、こんばんは」

ふいにあらわれたモグラに、だいこんちゃんは、おもわず、あいさつをしました。

「おっと、だれだい？ おいらをよぶのは」

モグラは、土をはねあげて畑に出てきました。そして、長くとがった口を、あっちにむけたり、こっちにむけたり。

「へんだなあ？ おいらの前にゃあ、大根が一本きりあるだけだい……」

だいこんちゃんは、たのしくなつてわらつてしまいました。

「モグラさん。その大根が、わたしよ。だいこんちゃんていうの」

「うへっ！ 大根がしゃべってくるなんて、おいら、うまれではじめてだい。こりゃあ、おったまげだあ」

モグラがおどけて、シャベルみたいな手をひろげて、だいこんちゃんを見上げました。

「まあっ！ モグラさんの手、なんてりつぱなの。それに、おでこの星マーク、よくにあうわ」

「エッヘン。おいらの手がでかいのは、土の中を、どこまでもトンネルをほつていくのに役にたつからな」

と、むねをはります。それから、星マークのついたおでこを、

ぐいっと上げていました。

「この星マークかい。こいつは、おいらがまだ小さかったころ、なかまたちと、ほりっこきようそうしたときにできたアザさ。どうだい、かっこいいだろう」

だいこんちゃんは、モグラとおしゃべりをしているうち、いいことをおもいつきました。

「星のマークのモグラさん」

「おっと、おいらは、モグラのリーダー・ハイパーモグラのハイモつてんだ」

「ハイモさん。それじゃあ、となりの小学校の運動場まで、トンネルほつていける？」

「もちろんさ。おやすいごようつてもんだ」

「あ、あの、わたしを、トンネルで運動場にあるてつぼうの横へ、はこんでくれない？」

「どうしてさ？」

「いきたいの」

「なにいつてんだい。とつぜん、運動場に大根がニョッキとはえてみる。おおさわぎさあ。たちまち、ひきぬかれて、ほりなげられ、いんやあ、大根じるにされちまわあ」

「それは、ちよつとこまるわ」

そこで、だいこんちゃんは、モグラのハイモに、さかあがりちようせんする、けいちゃんの話をしました。

「けいちゃんという男の子は、あきらめないで、ずつとれんしゅうをしている。だから、わたし、もつとそばで、がんば

れっていつてあげたい」

そういつたけれど、ハイモは、なんにもいわず、だいこんちゃんにおしりをむけて、畑の土をほりだします。

シヤカシヤカ シヤカシヤカ

すばやくあなをあげ、ひっこんでしまいました。あとに、小さな土の山がだいこんちゃんの前へのこりました。

畑は、とてもしずかです。

春の風が、ねむりはじめただいこんちゃんを、ほんのりつつみこむように、やさしくふいていきます。

いつのまにか、まるい月が、高い空にのぼっていました。しばらくして、だいこんちゃんは、

（わたし、ゆめを見ているのかなあ……。なんだか、ゆりかごにのっているみたいだわ）

ほんやり考えていました。

どこか、遠くで、だれかが、歌うような声がします。その声が、どんどん大きくなってきました。

ヤレホレ ヤレホレ

だいこんちゃんのお通りだい

ソレイケ ソレイケ

だいこんちゃんは、びっくり。

なんと、だいこんちゃんは、一〇〇ぴきのモグラたちの上のにって、トンネルの中をはこばれているのです。

トンネルをほり進めるモグラたちの先頭で、モグラたちに

かけ声をおくっているのは、あの、おでこに星マークをつけたハイモ。

「うわあ！ すてき！ みーんなハイモさんのおなかま？」

「エッヘン。そうさ。トンネルほりたのまれりや、ことわれないんで、おれたちゃあ」

「ことわれないんで、おれたちゃあ」

一〇〇ぴきのモグラが、声をそろえていいました。

「運動場まで、つれていつてやるよ」

「ありがとう。いつしようわすれないわ。でも、なんにもおれいできないわ」

「いいってことよ」

ヤレホレ ヤレホレ

だいこんちゃんのお通りだい

ソレイケ ソレイケ

モグラのリーダー・ハイモの力強いかけ声の中を、だいこんちゃんは、モグラたちにはこばれていきます。

ところどころ、トンネルには、月の光が細いすじになってさしこんでいました。

だいこんちゃんは、モグラたちのゆれるせなかの上で、わくわくしていました。

「わたし、朝がくるのが、こんなにもまちどおしいなんて、はじめてよ」

畑の中に、太陽がカッとてりつけて、朝になりました。
だいこんちゃんは、ふわっと目をさました。あのモグ
ラたちは、どこにもいません。

いままでのことは、ゆめの中のできごとだったのです。

「うふっ、なんてたのしいゆめだったんでしょ」

いつものように畑にいるだいこんちゃんは、そうつぶやきました。

土の上に、ふつくと半分ほど出ていた白いだいこんちゃんの体は、うすみどり。少しひびわれ、しわもできていました。

けれども、だいこんちゃんは、けいちゃんの背たけほどのびた茎に、花のつぼみをいっぱいつけました。

「よかった。いつのまにか、わたし、こんなにつぼみができて。花をきれいにさかせて、けいちゃんのさかあがりをおうえんするんだ」

花のつぼみを、ふるとゆらしたときです。

タツ　タツ　タツ

まだだれもない運動場に、はずむような足音がしてきました。

「だれかしら、こんなに早く？」

だいこんちゃんは、足音のする方を見つめます。

「けいちゃんだ！」

けいちゃんが、女の人とならんで走ってきたのです。そし

て、てつぼうの前でとまりました。

「けいちゃん、手のひらに豆がいくつもできているでしょ。だから、むりしないのよ」

と、女の人がいっています。

「へいき。ママ、よくね、ぜったい、さかあがりをしてみせる。みててよ」

「どうして、そんなにがんばるけいちゃんになったの？」

「あのね、ひとりでさかあがりのれんしゅうしていると、畑の方から『がんばって』という声が聞こえるんだ。そうすると、よく、急に体じゅうから力がわいてきてさ」

「そう。だれかしら？　けいちゃんをいつもおうえんしてくれたのは」

けいちゃんのママは、うれしそうに畑の方をながめました。

けいちゃんは、手につばを、ペツ、ペツとかけました。そして、てつぼうをぐつとにぎりかまえます。

「エイッ！」

いきおいよく、足をけり上げました。

けいちゃんの体が、さかさまです。

「あがれ！　あがつてえっ！」

だいこんちゃんの声にも、力がこもります。

いままでのさかあがりのれんしゅうの中で、いちばん、けいちゃんのおへそが、てつぼうに近づいています。

「がんばって！」

だいこんちゃんは、むちゅうでいいました。

「あがれっ！」

けいちゃんが、けんめいに体をまるめたそのしゅんかん、ひよいとおなががてつぼうにのりました。

「あがったあ！」

まるで、自分のことのようにだいこんちゃんは、うれしくつてたまりません。

まっ赤な顔して、地面にストンとおりたけいちゃん目が、キラキラとかがやいて見えました。

「けいちゃん、すごい！」

かけよったママが、けいちゃんをだきしめます。そして、豆だらけのけいちゃんの手を、ママのほっぺにあてました。

けいちゃんは、ママの目を見ていました。

「ママ、もう一回やってみる」

朝の風が、けいちゃんのおでこにはりついた前がみを、ふわりとうかせてふいていきました。

いま、はじめてできたさかあがり。それをたしかめるように、けいちゃんは、ぎゅつとてつぼうをにぎりしめました。

「しつかり！ がんばって！」

だいこんちゃんの声が、とどいたのでしょうか。けいちゃんが、うなずきました。

「エイッ」

力のはいつたその声と同時に、けいちゃんの体が、グルツと、またみごとにてつぼうの上にあがったのです。

風が、けいちゃんのせなかをおし上げたかのように、さら

りと。

「やったあ！ できちゃった。ぼく、二回も、さかあがりやれた」

けいちゃんは、鳥がとまるみたいに、てつぼうの上で体をそらしました。

だいこんちゃんは、おおよろこび。体中がむずむずして、とびあがりたいたいとおもったとたん、つぼみだった花が、いっせいにさきました。

「わあい！ てつぼうの上からだ、むこうの畑がすぐよく見えるよ」

けいちゃんは、てつぼうをにぎった手に力をいれて、うでをぐいと立てました。

「ママ、花がさいているよ。畑にね。大根が一本だけあって、花ざかりの大根だ！」

「大根？ あらほんと。きれいな白い花ね」

ママが、だいこんちゃんを見つけてました。

「『けいちゃん、さかあがりできておめでとう』だって。あの大根が、そういつてお花をふるわせたわ」

「ママったら。へへっ」

けいちゃんは、クルリと前まわりして、てつぼうからおりました。そうして、

「エイッ」

と、三回目のさかあがり。四回目、五回目もやりました。

「さかあがり、かんぺき！ けいちゃん」

だいこんちゃんが、そういつたら、てつぼうからおりたけいちゃん、だいこんちゃんのすぐ近くまでかけてきました。「ほくのさかあがりのれんしゅう、見てたよね。さかあがり、できたよ」と、につこり。

「あのね、きょうのおひる休み、さっちゃんと、てつぼうで遊ぶよ。それから、大根のお花も見にくるね」

けいちゃんは、だいこんちゃんにそういうと、クルンとせをむけてママの方へかけていきました。

「けいちゃん、これから、てつぼうで、さっちゃんといっぱい遊べるね」

だいこんちゃんは、けいちゃんのせなかにむかつていつてあげました。

その声とともに、畑の土がむっくりとより上がり、おでこに星マークをつけたモグラのハイモが顔を出します。

「だいこんちゃん、よかったな。おいらもううれしいよ」

ハイモは、シャベルのような土だらけの手をふり上げました。それから、

「おっとと、いけねえ。お日さまの光は、まぶしすぎらあ」あわてて、土の中にもぐりました。

「ハイモったら、くふっ」

モグラのハイモは、また、小さな土の山をのこしていなくなりしました。

どこまでもすきとおるような青い空を見上げて、だいこん

ちゃんは、いいました。

「わたし、もう、ひとりぼっちなんかじゃない」

だいこんちゃんの、ほんのりうすむらさきの白い花が、こぼれるようにゆれました。

すると、もんしろちようが、ひらひらとんできて、

「だいこんちゃん、あなたのおうえんが、けいちゃんにとどいたのよ」

そっと、風の中でいいました。

（東区）

「入選」

金魚の国の色エンピツ

遠 藤 ゆ き

苦手な小学生用のラジオ英会話の時間が終わった。ユキはほっとした。ユキのお父さんが、毎日これを聞くようにとうるさいのだ。英会話なんて苦手なのに、毎日学校のあとこれを聞かなければいけないのは、大変だ。挙句の果てに、ユキは週一回英会話の教室に放り込まれている。ユキはそもそもおしゃべりが苦手だ。そのおしゃべりを英語でしなければいけないのは、ほんとうに大変だ。しかも、ユキはよく忘れ物をする。学校もそうだけど、英会話の教室でも、よく忘れ物をする。英会話の教室の唯一の楽しみは、教科書の塗り絵をすること。でも、その塗り絵用の色エンピツを、ユキはよく忘れる。おかげで、英語は苦手でも、

May I borrow your color pencils?

だけは、上手に言える。ユキはいつも英会話教室の授業を、借りた色エンピツで乗り切ってきた。家で聞く英会話のラジオは、塗り絵の時間がないだけでもっと苦手だ。その英会話の時間もやっと終わりで。

「ユキちゃん、英会話終わった？ 終わったなら宿題ね。漢字

の書き取りあるでしょう」

お母さんが、台所から声をかける。ああ、いやだ。これから、また宿題をしなければいけない。ユキは漢字も苦手だ。でも、やらないとお父さんが怖いから、仕方がない。仕方がないから漢字ドリルを開く。

あ、ラジオがつけっ放しだった。

「大型の台風十六号は、中心気圧は九百四十五ヘクトパスカル。西北西に向かって進んでいます。明日早朝には、沖縄に到達の予想」

ああ、台風が来るんだ。だけど、ヘクトパスカルなんてなんだろう。きつとお父さんがこのラジオを聞いたたら、

「ユキ、ヘクトパスカルの意味は？」

つて聞くんだ。ユキにはもちろん答えられない。でも、お父さんはそういう質問が好きだ。困ったなとユキは思う。

そんな時だ。外から声がした。

「金魚は、いらんかね。金魚は、いらんかね」

そつと居間の窓から外を眺める。小さなトラックが通っている。トラックの荷台には、水槽が積んであるようだ。赤いひらひらが動いているのが見える。

「金魚は、いらんかね。金魚は、いらんかね」

ユキは、縁日の金魚すくいが好きだ。この間の花火大会のとき、お小遣いで金魚すくいをやった。ひらひら動く赤い金魚。あのひらひらがとってもきれいで、ユキは絵にかいてみたくてたまらなくなった。うちにもって帰りたい。だけど、

金魚をすくつても、逃げられてしまった。紙の網が大きく破れてしまい、結局一匹もすくえなかった。金魚すくいのおじさんが言った。

「はい、残念でした。じゃあ、すくった記念に一匹だけね」

おじさんは、適当に一匹のワキンをすくい、小さなビニールの袋に入れて、ユキに持たせた。本当は、デメキンカリユウキンがほしかったのに。お母さんが言った。

「金魚すくいの金魚なんて弱いよ」

「でも、飼う」

「そう、じゃあ、家に帰ったら金魚鉢にいれようね」

花火大会から家に帰ったユキは、ワキンを大事に金魚鉢に入れた。長生きしてねとお祈りしながら。だけど、翌朝、お母さんが言ったとおり、ワキンは死んでいた。絵にかいてあげる間もなかったのだ。

「ほら、言ったじゃない。だから、金魚すくいの金魚は弱いからすぐ死ぬのよ。もう金魚すくいはいしないの」

ユキは、泣きながら庭の土に金魚を埋めた。小さなつるつるとした丸い石ころも拾い、墓石とした。

「だけど、金魚やさんの金魚なら、金魚すくいの金魚と違って、長生きするんじゃないか」

ユキはあのワキンが、なぜか、金魚やのトラックに乗っているんじゃないかと思った。ユキは、思い切って表に出てみた。

「金魚は、いらんかね。金魚は、いらんかね」

「あの、金魚やさん、金魚がほしいのですが。高いですか」
お小遣いで買える範囲でないと困る。

「ああ、金魚によるよ。このデメキンは、九百円。こっちのリユウキンは、八百円」

「あの、ワキンでいいんですが」

「ワキン？」

「この小さなワキンなら、十匹で五百円」

ユキはじつと小さなワキンの入った水槽を見つめた。だけど、そこには、あのワキンはいないようにユキには思えた。ふと、隣のもっと小さな水槽を見る。片目だけのデメキンが泳いでいる。なんだか、白い斑点が多くて、あんまり赤く見えないリユウキンもいる。そして、その水槽の奥の方には、小さなオレンジ色のワキンが泳いでいた。あの、死んじゃった子にあの子は似ているかもしれない。

「この水槽の金魚はいくらですか」

「これ、これは弱い金魚。屑の金魚。金魚すくいの夜店とかに、二束三文で売るやつ。こいつなら安いよ。二十四百円で十分だよ」

「じゃあ、二十匹ください。あの、小さなオレンジ色のワキンもいれて」

「はいよ。入れ物はあるかい」

「おうちから、持ってきます」

「お母さん、ボールある？」

台所にいるお母さんから、ボールをもらった。

「ユキちゃん。金魚なんて買うの。やめなさいって言っているのに」

「いいの。買うの」

金魚売りのおじさんは、さっとボールに水を張ると、二十匹の屑金魚を入れた。

「はい、百円ね」

百円を支払ったユキは、ボールを大事に抱え、家に入った。

そして、二十匹の金魚をそつと金魚鉢に移した。片目のデメキンも、白い斑点の多いリユウキンも、オレンジ色の小さなワキンも、すいすいと泳ぎだした。ユキはほつとした。

「ユキちゃん、金魚終わったら、漢字の書き取りでしょ」

お母さんが言う。

「はい」

なんだか、少し漢字も書けそうな気がする。金魚鉢を横目に見ながらユキは漢字の書き取りを始めた。

ラジオは相変わらず、台風の情報伝える。

「台風十六号は、大型の勢力を保ったまま、西北西に進んでいます。中心気圧は九百四十五ヘクトパスカル」

ヘクトパスカルって何だろう。漢字の書き取りをしていたユキは、ラジオを聴きながら眠くなってしまった。

「ユキちゃん、ユキちゃん、起きてください」

誰の声だろう。お母さんじゃないな。いけない、宿題をしながら眠りこんでしまったんだ。ユキは慌てて起き上がる。

「だあれ？」

「ワキンのダイダイです」

「デメキンのカタメです」

「リユウキンのシロブチです」

「金魚の国へようこそ」

二十匹の金魚が笑った。

「え、私、今金魚の国にいるの？」

「そうです」

ワキンのダイダイが言う。

「ユキちゃん、私たちを買ってくれてありがとう。ユキちゃんが買ってくれなかったら、私たち、今日の晩、もうあの金魚やに処分されるところだったの」

「えっ、処分ってどういうこと」

「つまり、死んじゃうってこと」

「えっ、そんな」

「大丈夫。ユキちゃんが買ってくれたから、みんな元気で、今日はお祝いのお祭りをするの」

「お祭り？」

「みんなで楽しく遊ぶのよ」

「ユキちゃんは何して遊ぶのが好き？ 歌うのが好き？ 踊るのが好き？」

ユキは、歌うのも下手。踊るのも下手。何をして遊んだらいいのだろう。

「私が、金魚さんたちを好きなのは、金魚さんたちがきれい

だから。赤いしっぽやひれをひらひらさせて踊るから。私は、絵をかくのが好き。もし、金魚さんたちが踊ったり、歌ったりしてくれるなら、私は、みんなの姿を絵にかきたいの」「わかったわ、ユキちゃん、いいよ。私たちは、踊りをするから、ユキちゃんは絵をかいて、遊んでね」

あ、だけど、今ここには色エンピツがない。ユキは思わず言う。

May I borrow your color pencils?

お父さんが、英会話教室なんかに放り込むからこんなところで英語を言ってしまったではないか。でも、金魚たちは笑って言った。

「もちろん、いいよ。いいよ。色エンピツを持ってくるね」「やったー。ありがとう」

金魚たちは輪になって踊り始めた。金魚のしっぽと、ひれがひらひらと宙を舞う。

あれ、だけどおかしいな。金魚さんたちはいつも水の中にいるのに、私、金魚の国でちゃんと息をしている。

「ねえ、カタメくん」

ユキは、一番元気のいいデメキンのカタメを呼んだ。

「ねえ、カタメくんたち金魚は、いつも水の中を泳いでいるでしょ。じゃあ、この金魚の国は水の中にあるのかな。私は、水泳では息継ぎが苦手ですぐに苦しくなるの。でも、金魚の国では、息継ぎをしなくても全然苦しくないな」

踊りの輪から離れて、デメキンのカタメがやってきた。

「金魚の国のお水はね、魔法のお水。僕たちも息ができるけど、ユキちゃんたち人間も普通に息ができるんだよ。ここは宙水そらみずっていう魔法のお水が空気で水なんだよ。この宙水の中で、ユキちゃんと僕たちは普通に話ができるんだよ」

「そうなんだ」

「ねえ、それよりユキちゃん、僕たちの絵は描けた？」

「ううん、まだ」

「じゃあ、僕から描いてよ。僕は、逆立ちして踊るのが好きなんだ」

そういうと、カタメはぴょんと宙返りをして逆さになった。ユキは、カタメが、頭を下にして、自分のひらひらしたしっぽを追いかけるさまを、黒い色エンピツで描いた。片目は、黒デメキンだ。だけど、片目の踊りはなかなか楽しそうだ。ユキは笑顔で必死に自分のしっぽを追いかけるカタメを描いた。

「カタメ、カタメの絵が描けたよ。どう？」

カタメは、じつと絵を見る。

「ユキちゃん、ありがとう。僕、笑っているんだね」

「そう、だって、カタメはいつもにこにこしてるじゃない」

「そう。でも、僕も泣くときがあるんだよ」

「ほんとに」

「ほんとだよ。だって、僕は、デメキンなのに片目が飛び出していないでしょう。それで、駄目な金魚だって思われて、悲しくなって泣くときがあるんだよ」

ユキは黙った。カタメは続ける。

「だから、ユキちゃんが僕の絵を描いてくれるなら、せめて絵の中では、僕をちゃんと両目が出っ張ったデメキンに描いて」

「だけど、カタメは、片目でもこんなに上手に踊れるじゃない。カタメが両目だったら、それはカタメじゃないよ。私が、この国であつたカタメは、やつぱり、カタメだよ。それに、カタメは、この金魚の国のお水が宙水だつて教えてくれたじゃない。宙水の中では、人間も金魚も普通にお話ができるつて。カタメは、両目が出っ張つていなくても、いろんなことを知っているじゃない。カタメは、片目でも十分にいろんなことが見えているじゃない。カタメは片目でいいよ」

「そうなんだ。じゃあ、ユキちゃんがそういうなら、僕は、片目でもいいよ」

カタメは、ユキの手から、うれしそうに「カタメの逆さ踊り」の絵をもらつていった。

金魚たちの踊りは続いている。今度は、その輪から外れて、リウキンのシロブチがユキのもとにやつてきた。

「ユキちゃん、私の絵もかいてね」

ユキは、シロブチはちよつと白いところは多いけれどきれいな金魚だと思う。

「ユキちゃん、カタメを笑顔に描いてくれてありがとう。ほんとうのことをいうとね、カタメはね、私の前では、片目しかない、片目しかないつて、泣き虫なんだ。カタメ、ほんと

うは、笑顔に描いてもらつてうれしいんだよ」

「ほんとうに？」

「ほんとうだよ。だけどね、実は、私もユキちゃんにお願いがあるんだ。私を絵に描くとき、もう少しだけ、赤い金魚に描いてもらいたいんだ」

「どうして」

「どうしてつて、私もね、ほんの少しだけきれいな金魚に描いてほしいの。私は、白いぶちが多いから、赤い立派な金魚たちから、みつともないみつともないつて馬鹿にされるの」

ユキは言つた。

「でも、私はシロブチはそのままでもかわいいと思うよ。もつと赤いシロブチなんて私描けないよ」

シロブチは、しよげて黙り込んだ。

「ねえ、じゃあ、シロブチ。カタメと踊るシロブチの絵だつたらどう？」

「えつ、カタメと踊れるの？」

「そう、カタメと踊っているシロブチの絵はどう？」

「そうだね、カタメと踊れたら、赤くないことも気にならなかな。お願い、ユキちゃん、私を描くなら、カタメと踊っている絵にして」

ユキは、シロブチはカタメが好きなのだと思つた。

「いいよ。もちろん、カタメと手を取つて踊っている絵を描くね」

「ありがとう」

ユキは、カタメと手を取り合って踊るシロブチの姿を描いた。カタメと一緒に、シロブチが嬉しそうにぴよんと宙水の中を宙返りして、笑っている絵を描いた。カタメと手を取り合って踊っているシロブチの頬には、ほんのり紅がさしているのが、ユキにはわかった。ユキは、赤い色エンピツを握り、絵の中のシロブチの頬に紅をさした。

「シロブチ、絵が出来たよ」

「あれ、ユキちゃん、カタメと踊っている私、いつもより赤いじゃない。ユキちゃんは、私を赤く描かないって言ったのに、何で？」

「だって、カタメと踊っているシロブチは、赤かったんだもの」

「ほんとうに？ 何で赤くなつたんだろう。魔法みたい」

おかしい、おかしいと首をかしげるシロブチに、ユキは笑いたくなった。

「ねえ、じゃあ、シロブチはこの絵は嫌い？」

「ううん、すごく好き」

「そうでしょう」

「ユキちゃん、私を赤く描いてくれてありがとう」

そういうと、シロブチは、踊りの輪の中に戻っていった。

ユキが見ていると、シロブチは、カタメを踊りに誘ったようだ。カタメと踊るシロブチは、ますます赤くなったようにユキは思った。

金魚たちは、次から次へとユキの前に絵を描いてくれるよ

うお願いしてきた。どの金魚も、自分たちを素敵に描いてほしいと一生懸命に注文を付けた。でも、ユキには、どの金魚にも、その金魚そのものの絵を描いてあげることはできなかった。

最後にやってきたのは、あのダイダイだった。ユキが一番気になっていた金魚だ。花火大会の夜店から、ユキの家にやってきたあの子に似ているんじゃないかと思ったダイダイだ。

「ユキちゃん、私も描いてくれる」

「もちろん、いいよ。ダイダイ。ダイダイはどんな風に描いてほしいの？」

「ダイダイは、小さくていい」

「えっ、小さくていいの？」

ユキは、ダイダイを小さく描いたら、ダイダイが消えてしまわないかと心配になった。

「だって、ユキちゃん、ダイダイは小さいでしょう。小さいダイダイを大きく描いても、それはダイダイではないでしょう」

「それは、そうだけど、ダイダイが小さくなって消えてしまつたら、嫌だな」

「大丈夫。大きく描いてもらう方が、ダイダイは消えてしまふんだから」

「大きく描く方がダイダイは消えるの？」

「そう、消えてしまうの」

「なんで」

「だって、ユキちゃん、ユキちゃんのおうちの居間の金魚鉢に入っていたとき、ダイダイは、ラジオを聞いたんだ。あの台風のヘクトパスカルのラジオ。ダイダイにはね、ユキちゃんが、あれを聞きながら、お父さんに、ユキ、ヘクトパスカルの意味って分かるかって聞かれたら困るなって考えてたのが分かったの。もし、ユキちゃんが、お父さんにヘクトパスカルってこうなんだよって堂々と説明出来たら、それはユキちゃん？ そんなユキちゃんは、賢いかもしれないけど、でも、それはほんとうのユキちゃんかな？ ダイダイは、違うと思うんだ」

「うん、ダイダイの言うとおりだ。そんなの堂々と答えられたら、私は私じゃない」

「それとおなじ。ダイダイは、すごく小さいんだ。だから、ダイダイを大きく描いたら、ほんとうのダイダイは消えてしまふの」

「ダイダイ、分かった。私は、小さいダイダイの絵を描くよ。でもね、ダイダイ。その小さな金魚はね、とっても優しいの。私は、ダイダイが私にお話をしてくれた時の顔を絵に描くよ。小さいダイダイがにっこり笑って、私にお話してくれてる絵をね。ねえ、ダイダイって、小さいけれどきつと先生の金魚なんだと思う。私、ダイダイが、もっと小さい金魚たちにお話を聞かせている絵を描くよ。その生徒の金魚の一匹が私の顔をしているの」

そういうユキにダイダイは、またにっこりと笑った。

「ユキちゃんは、ほんとうに絵を描くのが上手だね」

ユキは、小さな金魚たちに囲まれた、小さなダイダイを描いた。

「ダイダイ、この絵は好き？」

「うん、もちろん、好きだよ」

「ほんとうに？」

「ほんと。だって、ユキちゃんは、ダイダイがほんとうに小さいことをわかってくれたから」

「よかった。ダイダイがこの絵を気に入ってくれて。小さく描いても消えてしまわなくて」

「ダイダイは、消えないよ。自分の形と自分の色と自分の大きさを知っている金魚は絶対に消えないの。死んでしまってもね」

「えっ、死んでしまうなんて」

「だから、それはもしもの話。今日は、ユキちゃんが私たちを買ってくれたから、みんな元気で祝いのお祭りをしているでしょう。ユキちゃんも今日はたくさん絵を描いてくれたんだ。ほら、じゃあ、みんなの中に入って踊ろうよ。ダイダイが教えてあげるから、踊りの下手なユキちゃんでも大丈夫」

ユキは、ダイダイと手をつないだ。カタメがやってきて反対の手をつないだ。カタメのもう一方の手は、シロブチがしっかりと握っている。シロブチって名前がおかしいぐらい今日は赤いシロブチだ。金魚たちが次々に手をつなぐ。いつの

間にか、ユキも金魚の輪舞に加わっていた。その日、ユキは金魚たちと疲れるまで踊った。

ああ、だけど、もう夕方だ。おうちに帰らなくては。ユキはダイダイに言った。

「お母さんが、心配してると思うの。今日はもうおうちに帰らなくちゃ。どうやって、おうちに帰ったらいいの？」

「金魚の国から、ユキちゃんちにつながる扉があるんだ」

「えっ、それはどこにあるの？」

「すぐここにあるんだけど、その前にね、ユキちゃん、金魚の国から一つだけお土産を持って帰れるんだよ。なんでもいい。好きなものを選んで。それを選ばないと、金魚の国の扉を教えられないから」

「なんでもいいの？」

「そう、なんでもいい」

ダイダイは言った。

金魚の国のお土産。金魚の国には素敵なものがいっぱいある。踊りながら、金魚たちが吹きならしていたトランペットが夕日に輝いている。トランペットのきらきらはとても素敵だけど、ユキはトランペットを上手に吹くことはできないから、お土産にはもって帰れない。金魚たちが踊るときに持つ花輪もある。ユキの家の周りでは見たことのない花で作られたきれいな花輪だ。でも、ユキは踊りも下手だから、花輪を上手にくるくる回せはしない。やっぱ、ユキがもらってうれしのお土産はこの色エンピツだ。

「この、色エンピツをお土産にもらってもいい」

「いいよ。色エンピツでいいんだね。でも、もし、ユキちゃんがほんとうにほしいものがこの色エンピツでなかったら、ユキちゃんは、もう二度とこの金魚の国には来られないんだよ。それでも、いい？」

真剣な顔のダイダイ。ユキは言う。

「色エンピツでいい」

「わかった。じゃあ、扉を教えるね。お母さんが心配しているからね」

ダイダイは、扉を指し示した。その扉は、今まで気が付かなかったが、ユキの真後ろにあったのだ。

「さようなら」

「さようなら。さようなら」

金魚たちの大合唱が聞こえる。ユキは、大事に色エンピツを懷に抱えると、扉をくぐった。

「ユキちゃん、ユキちゃん、起きなさい」

「えっ、だあれ？」

「だあれってお母さんでしょ。やっぱ漢字の書き取りしている間に眠っちゃったのね」

「眠って、なんかいいよ。だって、金魚やさんが通ったでしょう。ユキは金魚を買って、金魚鉢に入れてあげたの。お母さんも知っているでしょう。それでね、その金魚たちは、ユキが買ってあげなきゃ、今晚に処分されることになってい

て、それを助けてあげたお礼に、ユキ、金魚の国にお招きされたんだよ」

「ああ、こりゃ、よっぽど長い間寝てたんだわ。金魚やさんなんて通らなかつたじゃない。何を言っているの？」

「だって、金魚は？」

ユキは、金魚鉢を見た。

「あれ、何でいないの。デメキンのカタメも、リユウキンのシロブチも、ワキンのダイダイもない」

「ほら、だから、いないでしょう。ユキ、眠りこんで夢を見ていたのよ」

「だって、そんなことはないよ。だって、金魚の国からお土産だってもらってきたんだから」

「何を？」

「金魚の国の色エンピツ」

「どこにあるの？ その色エンピツ？」

ラジオが再び台風情報を流す。

「大型の台風十六号は、中心気圧九百四十五ヘクトパスカル。相変わらず強い勢力を保ったまま、沖縄本島に向かって西北西に進んでいます」

ああ、ヘクトパスカルの世界に戻ってきてしまった。懐にしっかりと抱えていたはずの色エンピツもない。ユキはあの金魚の国が夢だなんて悲しくなった。お母さんが言う。

「しょうがないわね。今日は遅いから、漢字は後にして、ご飯を食べましょう。漢字ノートはユキの部屋の机の中にしま

つてきなさい」

「はい」

仕方のないユキは、漢字ノートをもって二階の自分の部屋に上がった。机の引き出しを開いて、漢字ノートをしまおうとする。あれ、でも、ここに何か入っている。

「あつ、金魚の国の色エンピツ」

ユキは、まじまじとそれを見た。それは、確かに、あの金魚の国からお土産にもらってきた色エンピツだったのだ。ユキは、何度も何度も、それを手で触つてみた。間違いはない。金魚の国はほんとうにあったんだ。

「ユキちゃん、ご飯になるよ。早く降りてきなさい」

「はい」

ユキは、慌てて階段を下りて、ご飯のテーブルに着いた。

お父さんは今日は遅くてお母さんと二人の晩御飯だ。

「ユキちゃん、寝ちゃって漢字の書き取りやらなかつたら、ご飯が終わってから、お風呂に入る間に、ちゃんと宿題やるのよ」

「はい」

机の引き出しの中に、ちゃんと金魚の国の色エンピツは入っていたのだ。ユキは、苦手な漢字の書き取りもちゃんとできるような気がした。ご飯を終えて、ユキは、宿題をした。いつも、宿題が最後までできないことがあるけど、今日は違った。最後まで、難しい漢字の書き取りもできたのだ。夜遅く、お父さんが帰ってきた。珍しく、宿題をしつかり

終えていたユキにお父さんは上機嫌だった。ユキは、お父さんに金魚の国の話をした。お父さんは、ユキの話を聞いて、言った。

「ユキ、その色エンピツで絵を描いてみなさい」

珍しく今日は、お父さんは、ユキにヘクトパスカルだと難しい科学の質問をして困らせることをしなかった。

「お父さん、ユキは、金魚の国の色エンピツで、金魚の国を描くよ」

だって、だって、ユキは、金魚の国の色エンピツで絵を描けば、もう一度、金魚の国にいけるかもしれないことを知っているから。

翌朝、台風は沖縄を襲った。ユキの家のあたりも雨交じり風交じりの天気だ。ユキは、朝、学校に出かける前、この間の花火大会の時にすくった小さなワキンの墓参りをした。

「ねえ、小さな金魚さん。あなたがワキンのダイダイだったの？　うちにやってきてくれてありがとう。金魚の国は楽しかった。私は、これから、いつでも金魚の国にいけるから、また、私にお話をしてください。私は、ダイダイのお話を楽しみにしているから」

ユキには、ダイダイの声が聞こえた。

「ユキちゃんには、金魚の国の秘密がわかったんだね。こちらこそ、たった一晩でも飼ってくれてありがとう」

これから、きつと英会話教室でも、

May I borrow your color pencils?

なんて言わなくて済む。だって、私は、金魚の国の色エンピツをもっているのだから。これからは、きつと忘れたりしない。

「行ってきまーす」

ユキは、元気に学校に行ったのだった。

(西区)

「入選」

カッパのモ太郎

金指 芙美代

山おくのひょうたん池に、カッパが住んでいることを知っていますか

冬になると、ふもとは、いちめんの銀世界。

その、まっしろい風景の中に、ポツンと、一軒のわらぶき屋根の小さな家があります。

一人ぐらしの文造^{ぶんぞう}さんの家です。

細く入りくねった川に枯葉が、赤や黄色に色づいて音もな

く流れます。

山の奥に入っていく道に、苔のはえた大きな石があります。

その上に、竹で編んだかごがおいてあり、ときどき、中にキュウリが入っています。

それからずっと奥に入ると、ペンキのはがれた緑色の小さな橋があり、「カッパ橋」と書かれた看板が消えかかっています。

その橋の下丸い池は、ひょうたん池といって、そこには、カッパが住んでいると、昔から伝えられていました。

その話のとおり、カッパの夫婦が、ずっとこの池でくらし

ています。

やがて、カッパの夫婦には、赤ちゃんが生まれました。赤ちゃんの名前は、立派なカッパだった、おじいさんの名前と同じ「モ太郎」と、名付けました。

モ太郎は、短い足に、長くつき出た口もと、あたまの上には、白い小さなお皿、そのまわりから、赤茶色のちぢれた髪の毛が出ていて体は、ピンク色をしています。

「大人になると背中が丸くなり、甲羅が出てきて、体は緑色になるんだよ」と、おとうさんガッパがいました。

それに、甲羅がどんどん重くなり、歩くのがむずかしくなるんだそうです。

モ太郎が生まれて五才になったある冬のあたたかい日、モ太郎は、はじめてひょうたん池から、出てみました。

「わあー、空がひろいなあ」

モ太郎は、短い足でやっと、木に登ると青い空のひろさにびっくり。

そして、遠くをみわたしました。

「あつー！ むこうのわらぶき屋根の家に、雪が積っている、キラキラひかっているきれいなあ」

モ太郎は、ひとりごとをいってみとれていました。

モ太郎が登った木の下で、うさぎの子どもが自分の目のような赤い実を、むちゅうでモグモグと食べています。

モ太郎は、そのうさぎの子どもに、

「こんにちは！ ぼく、すごいだろ、木に登ったんだ」
声をかけました。

うさぎの子どもは、木の上のモ太郎を、キョトンとしてみあげました。

そして、

「こんにちは、あんたはだあれ？ あうの、はじめてね」
と、モ太郎にたずねます。

モ太郎は、もういちど「こんにちは」と、ペコリとおじぎをしてから、

「ぼく、カッパのモ太郎っていうんだ」

ちよっと先にみえる、ひょうたん池を指さし、

「あのひょうたん池にね、おとうさんとおかあさんと住んでいるんだ、よろしくね」

と、いうと、

「わたしの名前は、みみっていうの、仲よくしましょうね」
うさぎの子どもは、口の中を、まだモグモグさせながら、
モ太郎にウインクするように片目をつぶりました。

すると、モ太郎の登っている木の上のほうから、タヌキが、
スルスルリとおりてきて

「おまえ、モ太郎っていうのか。ぼくは、ボンって名前さ、
君、カッパ？　へえ、はじめてみるなあ」

「どうしてぼくのこと知ってるの？」

「だつていま、うさぎのみみちゃんと話をしたろう、ぜん
ぶ、木のとっぺんでさいちやったださ」

タヌキのポンのまるい目が笑いました。

こうしてカッパのモ太郎は、うさぎのみみと、タヌキのポ
ンと、お友だちになりました。

それから毎日、モ太郎は、仲よしになったうさぎのみみと、
タヌキのボンと遊びました。

きょうも、モ太郎はタヌキのボンに木登りを教えてもらい
ながら、とっぺんまでがんばって登りました。

モ太郎は、木のとっぺんに座り、ジィツと目をこらして、
わらぶき屋根の家をみています。

「ねえ、ボン、あのわらぶき屋根の家に住んでるの、もしか
して人間？」

一緒に木のとっぺんに登っているタヌキのボンが、

「そうだよ、文造さんっていうんだよ」

すると、枯葉をおいかけて遊んでいた、うさぎのみみが、
木の上のモ太郎に、

「モ太郎君、わたし、しらがあたまのおじいさんが、あのわ
らぶき屋根の家から出てくるの、このあいだみたわ」

「えっ！　どうしよう、ぼく、みつかったら食べられちゃう
ね、だって、人間は、カッパを食べるって、ぼくのおとうさ
んが言ってたもん」

モ太郎は、こわそうに顔をおおいしました。

そのモ太郎に、うさぎのみみがひそひそこえていいました。
「モ太郎君、気をつけてね、あのおじいさんつりざお持って、

ときどき、ひょうたん池にくるわ」

するとタヌキのポンは、

「きのう、文造さんがね、通り道にある苔のはえた石の上の
かごの中に、キューリを二本おいているのをみたよ、そのと
き、『このキューリでカッパがつれますように』って、おが
んでいたよ、文造さんがいなくなったときぼく、そのキュー
リ食べちゃったよ、残りの一本は、カラスがくわえていつち
やっただけね、キューリ、おいしかった！　ハハハ」

ポンは、おどけてみせました。

そして、うさぎのみみと、タヌキのポンは

「モ太郎君、ちゃんと、おまじないのへんしんの勉強をしと
きなよ、いつ人間にみつかるかわからないからね」
と、声をそろえていいました。

「うん、わかった」

モ太郎は、お友だちのみみとポンと、そんなことを話しながら遊びました。

やがて、日が暮れかかりました。

「モ太郎、モ太郎、早く池に帰りなさい、人間にみつきますよ」

という、おかあさんの小さな声が、ひょうたん池の中からきこえます。

「ハーイ」

モ太郎は、木の上からそろり、そろりと地面におりました。

「みみちゃん、ポン君、またあしたも遊ぼうね」

「うん、またあしたね」

モ太郎は、手をふって、ふたりをみおくと、ゆっくり、ひょうたん池まで歩きます。

そして短い足をそろえると、スゥーと、池の中に消えました。

モ太郎がひょうたん池に帰ると、おかあさんは、夕食のしたくをしていました。

「おかえりなさいモ太郎、おなかすいたでしょう、これ、キユーリっていうの、夕方、カラスが池におとしていったの、キユーリは、モ太郎はじめてね」

「うん、はじめてだよ、タヌキのポン君が、キユーリとってもおいしいっていったよ、ほんとにおいしいの?」

おとうさんは、

「そうさ、キユーリが一番おいしいよ、人間は、こんなにおいしいものを作るんだね、すごいんだ」

「でも、ぼくの大好きなのは、どんぐりさ」

「どんぐり? オホホホ、おかあさんもよ」

カッパのモ太郎は、おとうさんカッパと、おかあさんカッパと、そんなことをいいながら、キユーリを、パリパリ、コリコリと食べました。

はじめて食べたキユーリのおいしかったこと! モ太郎の両方のほっぺが、おちそうでした。

そしてある日、大事件がおきました。

カッパのモ太郎は、いつものように、うさぎのみみとタヌキのポンと木から木へわたり歩き、どんぐりをひろったりして、遊びまわっていました。

「モ太郎君、気をつけろよ、モ太郎君は、二本足だし、足が短いから、そんな大きな木に登っちゃあ、あぶないよ」

「そうよ、ポン君のいうとおりよ」と、みみ。

「へいき、へいき、ほおーら、ひとつとびー」

モ太郎は、いせいよく大きな高い木に、とびうつろうとした、そのとき、

「ドスンー!」

モ太郎は、あたamarca地面に落ちてしまいました。

「ウー、あいたたたあ!」

モ太郎の長くつき出た口に、池のそばの木の根っこにあつたつりばりがささってしまったのです。

「ああーん、ああーん、ああーん」

口もとに手をやり、悲鳴をあげています。

「だいじょうぶか、モ太郎君」

ポンは、モ太郎にかけより、のぞきこみました。

「あつ！ 口に、つりばり、つりばりがささってる」

かけよってきたみみに、

「みみ、つりばりがささってるぞ！ こまつたな」

「どうしましょう、ポン君、早くぬいてあげて」

みみは、なみだ声です。

ポンは、モ太郎の口にささった、つりばりをひっぱりまし

た。でも、なかなかとれません。よけいに痛がるモ太郎に、

「ダメだ、これはとれないよ」

ポンがいうとおり、つりばりなので先がまがつていてとれないのです。

そのとき、

「あつ！ しらがあたまのおじいさん、こちらに向ってくるぞ、たしか、文造さんっていったよな」

そうです、文造じいさんが、つりざおを持って、ゆっくり

歩いて登ってきます。

ポンは泣いているモ太郎をいそいで抱きかかえます。

みみは、

「モ太郎君、人間がきたわよ、早くおまじないして！」

「そうだ、早く、早く、おまじない」

ポンもあわててそういました。

それをきいたモ太郎は、泣きやみ、真剣な顔で立ち上って、

足をかかえて逆回転！

（クルッパへんしん、アヒルのモ太郎）

モ太郎は、おとうさんに教えてもらった、おまじないを自分

にかけ、アヒルにへんしんしました。

みみとポンは、

「モ太郎君、すごい、すごいよ、アヒルにへんしんしたよ」

と、いいながら木のかげに、さっとかくれました。

モ太郎は、おもわず、

「グア、グア、グア」

と、いつてしまいました。

おとうさんは、いつも人間は、このひょうたん池にきて、

カップをつつて食べてしまうと思っているのです。

むかし、むかし、陸に上ったカップが姿を消したのも、人

間につかまえられたのだという、うわさがいまでも信じられて

います。

だから、モ太郎は、小さいときから、人間に見つかりそう

になったとき、カップからアヒルにへんしんする、おまじない

をおとうさんから、教えられていたのです。

「グア、グア、グア」

文造じいさんは、その声に気がつきました。

「おや？ あんなどころにアヒルの子どもがいるぞ」

「グア、グア、グア」

「どうした？ 泣いているではないか、あつ口から血が……」

文造じいさんは、アヒルに近よって、よくみると、

「やや！ つりばりがささっているぞ、なんてことだ、これは、きつと、わしがひょうたん池の岸に忘れたつりばりにちがいない」

文造じいさんは、アヒルのモ太郎をそつと抱きおこし、

「悪かったなあ、痛かっただろう、ごめんよすぐに、わしの家で、ささったつりばりをぬいてあげるから、少ししんぼうしておくれ」

アヒルになったモ太郎をしっかりと胸に抱きかかえ、急ぎ足で山をおりていきました。

木のかげにかくれて、それをみていた、タヌキのボンと、うさぎのみみは、

「たいへんだ！ モ太郎君が、文造じいさんに連れていかれちゃった、たいへん、たいへん」

ボンとみみは、オロオロしながら、

「モ太郎君のおとうさん、おかあさん」

ふたりの叫び声に、ひょうたん池の中からぼつこり、ぼつこり、顔だけだした、モ太郎のおとうさんとおかあさんは、

「なんだろう？」

「なにかしら？ さつき、モ太郎の泣き声がかこえた気がしたわ」

そこへあわてて、ボンとみみがひょうたん池にやってきました。

「あのね、モ太郎君がね、文造じいさんに連れていかれたんだ、モ太郎君、口につりばりがささっていて、泣いているところに文造じいさんがきてね、だ、だから、お、おまじないをしてといったらね、モ太郎君、アヒルにへんしんしたの、アヒルになったモ太郎君は文造じいさんに連れていかれたったの」

一気に、そういったボンは、フウーと、深呼吸をして胸に手をやりました。

ボンのとなりでみみが、うん、うんと、うなずいています。

モ太郎のおかあさんは、

「えっ？ モ太郎が人間に連れていかれたって？ ああー」

おかあさんは、気絶してしまいました。

「おい、大丈夫か？ かあさん、しっかりと」

おとうさんが抱きおこすと、

「ふうー」

うすぐ目をあけたおかあさんは、ふかく、ためいきをつきました。

そして、

「あーモ太郎、もうだめだわ、モ太郎は、人間に食べられてしまうのね」

「安心しておかあさん、モ太郎君は、カップからアヒルにへんしんしたんだ、だから、きつと、大丈夫だよ」

タヌキのボンがいうと、

「そうよ、大丈夫よ」

と、うさぎのみみもうなずきます。

「そうか、モ太郎、おまじないが、うまくできたんだ」

おとうさんは、

「成長したなあ、モ太郎は」

と、ほっとしたように空をみあげてつぶやきました。

モ太郎が文造じいさんの家に連れていかれて、どれくらい時がすぎたのでしょうか

つりばりがささった傷口もすっかりよくなりました。

「ありがとう、おじいさん、ぼく、もう、傷は、なおったよ、痛くないよ」

「そうか、そうか、よかったなあ」

文造じいさんは、いろりに火をたき、アヒルになったモ太郎を、そつと抱きかかえるとあぐらをかいて、タバコをふかしました。

そして、

「傷がなおって本当によかったよ、アヒル君わしは、カッパをつろうと思つてな」

そういう文造じいさんに、

「えっ！ カッパ？ カッパをつるの？」

モ太郎は、びつくりして、文造じいさんのひざの上から落ちそうになりました。

「そうさ、あの、ひょうたん池には、カッパがいるらしいのだ」

「カッパなんていないよ、カッパなんてみたことないよ」

「いや、いるのさ、実はな、山の奥に入る、通り道にな、苔のはえた石があつてな、その上のかごの中にもキュウリを置くのさ」

「キュウリ？」

「そうだ、だがな、そのキュウリが、いつのまにかなくなつていふのだよ」

モ太郎は、ボンがキュウリを食べたことを思いだしていました。

ふいに、文造じいさんは、タバコの火を消し、そのタバコのけむりをジッとみながら、

「カッパだ、カッパが食べにくるんだ、だがカッパは、つまらないな」

「おじいさん、カッパは、いないんだよ、キュウリを食べたのは、ポツポツボン」

と、アヒルにへんしんしたカッパのモ太郎は小さな声で、そういういけてあわてて口をふさぎました。

そして、

「ねえ、おじいさん、カッパをもし、つかまえたら食べちゃうの？」

モ太郎は、心配そうに、文造じいさんをみあげました。
「食べる？ 食べるって？ 食べるもんか」

「じゃあ、なぜ、カップをつるの？」

「あのな、村のみんなは、カップなんていない、そんなのつくりばなしだというんだが、わしは、いると思うんだよ、むかしから、カップをみたという、いい伝えがあつてな、だから、わしは、一度でいいから、カップをつつて、カップにいたいんだ」

「それつてほんとなの？ おじいさん、カップを食べないんだね」

「ほんとだ、だから、カップをつつて、カップと友だちになつて、村のみんなに紹介したいのさ」

「食べないんだね」

もう一度、きました。

「アヒル君、そんなに心配なのかね、やさしいんだね」

文造じいさんは、につこり笑つて、

「いいこだ、いいこだ」

アヒルのモ太郎のあたまをなでました。すると、

「クック、クック」

おや？ ふしぎ、アヒルのモ太郎が笑つたのです。

文造じいさんは、

「アヒル君、どうした？ わし、アヒル君をくすぐつたかい？」

モ太郎をのぞいて、そうきました、そして、

「急に笑いだすなんて、おもしろいアヒルだ」

何度も、モ太郎のあたまをさすります。

「クッキヤ、クッキヤ、クッキヤ」

モ太郎は、あぐらをかいている文造さんのひざの上で、体をうごかして、大笑い。

モ太郎は、文造じいさんがカップをつりたいという、ほんとうの意味を知つて、うれしくて、うれしくてたまりません。それに笑いがとまらなくなつてしまつたのです。

実は、カップは、あたまのお皿をなでられると、笑いたくなる、くせがあつたのでした。

「クッキヤ、クッキヤ、クッキヤ」

モ太郎は、お腹をかかえて、何回も大笑い。

文造じいさんも、モ太郎の大笑いにつられ、

「ワッハッハ、ワッハッハ、ワッハッハ」

と、笑いこらげます。

灯のついた文造じいさんの家から、寒い夜空に、その笑い声が流れていきました。

こうして、カップのモ太郎は、アヒルにへんしんして、文造じいさんの家で楽しくくらしていました。

そのころ、ひょうたん池では、文造じいさんのところから、いつまでたつても帰つてこないモ太郎が、おとうさんとおかあさんは、心配で心配でなりません。

おかあさんは、毎日、泣きくらし、おとうさんは、おかあさんを励ましつづけました。

そしてとうとう、ふもとの文造じいさんの家にでかけるこ

とにしました。

その日は、雪の降る日でした。

ようやく、ひょうたん池の外に出た、カッパのモ太郎のおとうさんとおかあさん。

「おかあさん、きょうこそは、モ太郎を連れて帰ろう」

「はい」

大人になってから、ふたりとはじめて池の外に出たので、口を一文字にむすんで、ヨロヨロしています。

「かあさん、いいか、へんしんするぞ」

「はい、わたしも、とうさんにつづいて、へんしんします」

(クルツパへんしん、アヒルのおとうさん)

(クルツパへんしん、アヒルのおかあさん)

と、みごとに逆回転のおまじないをかけ、アヒルにへんしんをしました。

アヒルの姿になっても、ほんとうは石のような甲羅をつけているので、体はとても重たいのです。

「いいか、いくぞ、かあさんしつかりついてきておくれ」

「はい、おとうさんのあとを、たおれないように、がんばってついでいきます」

一歩、あるいては、ヨタヨタ、一歩、あるいては、立ち止まり、そして一歩、あるいては、フラフラ。

こうしてアヒルになった、モ太郎のおとうさんとおかあさんは、ヨタヨタ、フラフラ、長い時間をかけて、歩いて、文

造じいさんの家につきました。

すっかり、日が暮れかかってきました。

文造じいさんの玄関先には、つりざおが、立てかけてありました。

おそろしくなつて、にげかえろうとしましたが、おとうさんは、ゆうきをふるいおこして、

「グアグア、こんばんは、グアグア」

と、戸をたたきました。

その音に、気がついた文造じいさんは、

「こんな寒い日にだれだろう」

アヒルのモ太郎を抱いて戸をあけました。

屋根から雪がはらりと落ちました。

家の外では、モ太郎のおとうさんとおかあさんが、体に雪をかぶり、こごえそうに立っていました。

「グアグア、この家に私の子どものモ……」

ふるえる声でそっくりかたおとうさんは文造じいさんが抱きかかえていた小さなアヒルをみると、

「あっ！ モ太郎！ 私の子どものモ太郎です」

おかあさんは、

「助けてくださったのですね、ありがとうございます」

なみだを流して、何度もあたまをさげました。

「アヒル君、おまえのおとうさんとおかあさんが迎えにきたよ、良かったなあ。でも、わしは、ずっと一緒にアヒル君とくらしかったのになあ」

モ太郎は、文造じいさんをみあげ、

「おじいさん、助けてくれてありがとう」

「いいさ、わしも悪かったなあ、つりばりを落したりして。もうカッパはつらないよ、つりばりを落すと、アヒル君がケガをするものな」

「うん、つらないでね」

「よしよし、わかった、元気でくらせよ」

文造じいさんは、アヒルのモ太郎のあたまを、また、なでました。

「クックツ」

モ太郎は、文造じいさんに手をふりながら、

「クックツ、クッキヤ、クッキヤキヤ」

と、笑いながら、山へ帰ります。

文造じいさんは、かたに落ちた雪を手ぬぐいではらい、アヒルの親子が山に登っていくうしろ姿をいつまでもみおくりました。

カッパのモ太郎とおとうさんとおかあさんは、夜中じゅう歩いて、やっと、ひょうたん池に帰ってきました。

もう東の空があかるくなっています。

(クルツパへんしん、カッパのモ太郎)

(クルツパへんしん、カッパのおとうさん)

(クルツパへんしん、カッパのおかあさん)

そうおまじないをかけ、カッパにもどると三人でしつかり

手をつないで、ひょうたん池の中に、足からスゥーと、静かに消えていきました。

やがて、ひょうたん池の中から、カッパの親子のたのしそうな笑い声が、きこえてきました。

ほろほろと静かに雪が降る、山奥のひょうたん池で、カッパの親子は、いまもしあわせにくらしています。

(南区)

「入選」

小さなめだかの大ぼうけん

宮島 ひでこ

ぼくは、めだかの赤ちゃんです。生まれてすぐ、母さんと別れて赤ちゃんだけの水そうで、三十ぴきの仲間といっしょにくらしています。

近くに見える大きな水そうには、おとなのめだかたちが、大ぜいでくらしています。

ぼくは、おとなたちの水そうをながめると、

(母さんに会いたいな)

と思います。

でも、ぼくたちをいつも世話してくれているにんげんのおじいちゃんのお話をきいて、なぜ、母さんとはなれているのかわかりました。

おじいちゃんは、こういったのです。

「いいか、大きくなったら、おとなの水そうで母さんたちといっしょにくらせるからな。今はまだだめだ。おとなのめだかたちは、小さいめだかを、食べものと思って、パツとのみこんじゃうものもあるんだよ。みんな、大きくなるまでがまんするんだぞ。いつか母さんや父さんにあえるからね」

（そうなのか？　なんだか、かなしいな。でも、おじいちゃんのこととおり、がんばろう）
と、ぼくは、思いました。

ある日の朝早く、おじいちゃんがやってきました。

「やあ、みんな元気でいるかな？　きょうは水そうの水を、あたらしい水と、とりかえる日だ。用事があるから、いそいで水をかえるからね」

おじいちゃんは、家のそばをながれる小川からバケツで水をはこんできて、それから、ぼくたちがいる水そうのふちを右手で、ひよいともちあげ、ぼくたちがおちないように左手のゆびをひろげるようにして、水そうの水を少しずつこぼしはじめました。

そのとき、きいろいちようちよがとんできて、おじいちゃんの顔のまわりを、とびはじめました。おじいちゃんは「うるさいな」と、はらいのけようとしたとき、うっかり水そう

から左手をはなしました。そのときに、水そうからこぼれおちた水といっしょに、ぼくと友だちのめだかは、水そうのそばの水の中におちてしまいました。

「あーっ、たすけてー」

あつというまのできごとでした。

おじいちゃんは、水たまりのぼくたちに、気がつきません。

「たすけて、おじいちゃん、ぼくたちここにいますよ」

けれど、おじいちゃんは、水たまりにおちたぼくたちには気がつかず、あたらしい水をいれ、めだかのなかまたちに、えさをふりまくと、急いで出かけていきました。

「こまった、どうしよう。ぼくたちどうなるの？　こわいよー」

友だちは、水たまりの中で悲しくて泣きだしました。

ぼくは、友だちにからだをくつつけるようにしていいました。

「なんとかなるって。ほら、きこえるよ。いつも、おじいちゃんが水くみに行っている小川の水の音。ぼく、その川へ行つて、どんなところか見てみたいなあ。だいじょうぶだよ。ぼくがいるから」

ぼくは、友だちにむかって、元気よくいいました。

「よーし、がんばるぞー。ぼうけんだ。川の中がどんなところか、みてくるぞー」

と、ぼくがいうと、

「うん、がんばるぞー」

と、友だちも少し大きなこえでいいました。

しばらくして、大粒の冷たい雨が、ぱらぱらとふつてきました。空全体がどんよりとして、まっ黒い雲もあらわれはじめています。

「どうなるのかな？」

ほくたちは、重なるように水たまりの底の深いところでじっとしていました。

雨が、あとからあとからおいかけるようにふつてきます。

そのおかげで、いつのまにか、ほくたちがいる水たまりと、小川へつづく道が、ほそい水の道になりました。

その水の道をほくと、友だちは、すすいとおよぎながら小川へとむかいます。

「なんだか、たのしいね」

「うん、たのしい。水がほくらははこんでる。ふしぎだね」
ところが、急に流れがはやくなりました。またたくまに、

ほくたちは水に流されて小川のそばにきました。

「あーっ、こわいよ」

「おっこちやうよー、たすけて！」

小川の土手の草たちが、流れ落ちていく水をせき止めていました。その草たちに、ほくらはひっかつたのです。

「だいじょうぶ？」

ほくは、つかれた顔の友だちにたずねました。

「ほく、こわかったけど、だいじょうぶだよ」

ほくたちは、ほそ長い草の葉っぱの上でしばらくじっとしていました。

どのくらい時間がすぎたのでしょうか。

雨があがり、西の空の方にしずもうとしておるお陽さまが、やさしいオレンジ色の光を、あたりいちめんでらしてはじめています。

草の葉っぱの先から、

「ポトン、ポトン」

とすべりおちてくる水の玉を、からだいっぱい浴びたほくたちは、また元気をとりもどしました。

「さあ、小川にとびこむよ。たんけんにくんだよ。エイ！」

ほくが、からだをひねりながら先に小川にとびこむと、あとから友だちが、いきおいよくつづきました。

小川は、あちらこちらで、土手の草たちが流れをせき止めているので、ゆつくりと流れています。

ほくらは、そのゆるやかな水の流れの、大きな石のすきまにほらあなのようになっているしずかな場所を見つけました。

「ここに、いよう」

「うん、ここは、しずかだね。あれは、なんだろう？」

「あれは、おじいちゃんの家近くでみたことあるよ。カニさんといっていた」

そのとき、カニさんが、ゆつくりよこぎつていきます。

ほくは、大きな岩の底に、やわらかそうな草をみつめました。

「おなかすいたね」

「これたべよう、おいしそう」

ほくらは、草をたべました。

水の上の方にうかんでいる小さなあわもバクリ、バクリとたべました。

ほくと、友だちは、いつもいっしょです。ねるときは、川の底の穴の中でならんでねむりました。

そして、次の日も、また次の日も、ほくたちは川の中をおよいだり、白い砂をみつけては、もぐってひと粒の砂を口にくわえ、ブーツとはきだして、どこまでその砂がとんでいけるかきようそうしたり、石と石のあいだをかくれんぼしたりしてあそびました。

でも、何日たつても、おじいちゃんは、きてくれません。ほくが、ころほそく、ちよつと泣きそうになっていた、ある日のことでした。

一羽のきいろいちようちよを先とうに、赤や青や、白のちようちよたちがとんできました。

きいろいちようちよが、すまなさそうにいました。

「わたしが、とつぜんとんでいったので、おじいちゃんが水そうの手をはなしたすきに、あなたたちがおちてしまったのね。ごめんなさいね、でも元気だしてね」

きいろいちようちよのあとから、赤や青や白いちようちよたちが、水の上で、円をえがいたり、ダンスをはじめました。それをみているうちになんだか、ほくも、友だちもうきうきしてきました。

すると、きいろいちようちよが、スーッとちかくへとんできて、草の上にとまっていきました。

「お陽さまが、あかるくてらしはじめたとき、おじいちゃん は、バケツをもって水くみにきますよ。そのバケツは、青色でゆつたりと大きいから、その中にとびこんでかえりなさいね。この大きな石のそばで、おじいちゃんはいつも水をくんでいきますよ」

そういうと、きいろいちようちよは、ほかのちようちよたちと、歌をうたいながら、くるくるまわつてとんでいきました。

ほくたちは大きな石のそばにある穴にもどり、おじいちゃんが川へやつてくるのをまつことにしました。

穴のそばをカニさん親子が、のそりのそりと岩のあいだをぬけていきます。

ほくたちには、気がつきません。

次の日のことです。青空がみえます。川の水が少しなくなり、流れもゆるやかになりました。

お陽さまが、上の方に近づいているようです。ほくと友だちは、おじいちゃんが水くみにくるのを、今か今かとまっています。

『パタ、パタ、パタ』ききおぼえのあるおじいちゃんの長ぐつの音です。ほくと友だちは、バケツが川の水の中へザブンと入れられるのをまっています。すると、おじいちゃんの足音が止まり、青いバケツが、ピシャツという音をたてて水

の中に入ってきました。おじいちゃんのしわのようになってつかしい手がみえます。

「いまだ!」

ほくと友だちはいそいで、その青いバケツにむかっておよいでいって、さつともぐりこみました。

「ああ、よかった。やっと、かえられるね」

「みんなどうしてるかな。はやく会いたいね」

ほくたちは、ペチャ、クチャとおしゃべりしながら、バケツの水の底にいました。バケツの中の水は、おじいちゃんが、歩くたびに、びしゃん、びしゃん、とゆれます。

おじいちゃんは、ほくたちのはいった水のバケツを、あかちゃん水そののそばへもちこみました。

そのとき、おじいちゃんは、びっくりしてすわりこみました。

「あれ、小さなめだかが二匹いるぞ。おまえたちどうしたんだ。どうしてこのバケツにいるの?」

腰をおろし、うでぐみをしてじっと考えこんでいたおじいちゃんは、水そのの水の入れかえのとき、きいろいちようちよに氣をとられていたことを思い出しました。

「あー、そうだったのか。あのとき、地面におちてしまったんだね」

あの日から、三十匹いためだかの赤ちゃんが二十八ぴきしかいないので、ずーっと心配していたのです。

「よかった、よかった」

やさしいおじいちゃんの声に、ほくと友だちは、ほっとしておじいちゃんの方へ近づき、ひらり、ひらりと体をうごかしました。

「このめだかたち、しばらくみなかったら、こんなに大きくたくましくなつて。何をたべていたのかな? ほうけんして広い世界をみてきたね。さあ、みんなといっしょになろうね」

あかちゃんめだかのなかまたちの水そのの中にはいったほくは、うれしくてなかなかねむれませんでした。

あしたはどんなたのしいことが、まってるのでしょうか。それから、あのきいろいちようちよさんに、またあいたいなあと思いました。

きいろいちようちよさんのおかげで、ゆかいなぼうけんの旅ができたのですから。

(中区)

「入選」

友達の自転車

関根栄二

放課後、校庭にある鉄棒で、博が、けあがりの練習をして

いた。「けあがり」とは鉄棒の技のひとつで、ぶら下がった状態から両足をけるようにして反動をつけ、上体を鉄棒の上にもっていくことで、特に難しい技でもなかった。しかし、あまり運動神経のよくない博にとっては、けあがりとは、とても難しい技だった。

「最初にもっと足を振り上げて、反動をつけないと、だめだよ」

鉄棒の脇で指導してくれているのは、同じクラスの友達の、健一だ。二人とも、小学校五年生だ。博は、あまり運動神経はよくないが、学校の成績は優秀だった。健一は、勉強はだめだが、運動はよくできた。こんな、正反対のような二人にも、共通することがあった。それは、二人とも家が商売をしていることだった。博の家は自転車屋で、健一の家は鍛冶屋だった。

「あゝっ、まだだめだ」

足の振り上げがたりなくて反動がつかないのか、博の上体が、どうしても鉄棒の上にあがらない。博は鉄棒から手を離し、地面に降りた。

「どうして、できないのかなあ。けあがりっていうぐらいだから、ただ、けって、あがればいいんだよ」

どうやら、博の運動神経もよくなければ、健一の教え方も、あまりいいとは言えないようだ。

「結局、今日もできなかったなあ。学期末の体育実技のテストに、間に合うかなあ」

博は心細くなって、そうつぶやいた。

「まあ、オレが教えているんだから、大丈夫だって。……たぶん」

健一は、自信があるのかなのか、わからないような返事をした。

博と健一は校門を出て、いつものように、吉田屋へ向かった。吉田屋とは、小学校の通学路沿いにある駄菓子屋で、この通学路を通って下校する小学生たちの、たまり場になっていた。しかし、何人かの男の子たちにとっては、駄菓子以外にも吉田屋へ行くお目当てがあったのだ。吉田屋の娘で、高校生の明美である。博と健一は、その何人かの男の子のうちの二人だった。博も健一も、明美のことを素敵な人だなあと、思っていて、憧れていたのだった。その点でも、二人は共通していた。

「ガラガラガラ」

二人そろって、吉田屋の戸を開けると、

「いらっしやい」

と、明美が、いつもの笑顔で迎えてくれた。夕方の時間帯は、いつも明美が店番をしているのだった。

「今日も遅かったのね。また、けあがりの練習？」

「うん、そうだよ。今日もずっとオレが、教えていたんだよ」

健一が、得意げに言った。

「それで、できるようになったの？」

「いや……まだです」

博は、きまり悪そうに答えた。明美は、クスツと笑った。

博は、自分の顔が火照ってきているのを感じて、少し下を向いた。そして、

「これ、ください」

と、カルメ焼きを買った。健一は、

「オレはやっぱり、これだな」

と言って、ビンのふたを開けて、ゼリービーンズを取り出した。

「二人とも、お勉強のほうは、どうなの？」

明美にきかれて、今度得意げになったのは、博の方だった。

「僕、テストでまた百点取ったんです」

「へえ、すごいじゃないの。健一君は、どうだったの？」

「オレ、勉強嫌いだから、まあ、それなりの点数だよ」

年上の明美に対して、博はしっかり敬語を使うが、健一は友達言葉のままだった。

「あら、悪いことしちゃったかしら。でも、健一君は運動が得意だし、博君は勉強が得意だし、二人とも、得意なことがあっていいな。私はあまり得意なことってないから、二人が羨ましいな」

そんなことを言ってくれた明美に、博は、

「いいじゃないですか。明美さん、きれいだもん」

と、心の中で、つぶやいた。

博が家に帰ると、台所の方から、栗の甘い香りが、ぷうんと漂ってきていた。今日は、栗ごはんだと、すぐにわかった。博は台所へ行って、さっそく母に、テストの答案用紙を見せた。

「はい、おかあさん。また百点だよ」

博がテストで百点を取ってくるのは、いつものことだったので、母の良江はただ、

「あ、そう。よかったね」

と言っただけだった。そして、

「もうすぐ、ごはんだよ」

と言って、せつせと晩ごはんの支度を続けた。それから博は、店の作業場にいる父に、百点の答案用紙を見せに行った。博の家は、自転車屋の店を兼ねていて、道路に面した側が店で、奥の方が家族の住まいになっていたのだった。

「おとうさん、テスト、また百点だったよ」

「おう、そうか。よかったな」

父の久は、仕事の手を休めることなく返事をした。その時久は、お客さんから預かった自転車の、パンクの修理をしていた。タイヤのチューブをバケツに入った水に浸けて、穴のあいてるところをさがしていた。チューブからプクプクと小さな泡が出ると、久は、

「よし、ここだな」

と言って、その、穴のあいたところを、軽石で磨き始めた。

「どうだ、博、やってみるか？ここにゴムを貼って、パン

クの穴をふさぐんだ。そんなに難しくないぞ」

「おかあさんが、もうすぐごはんだって言っていたから、やめとくよ」

博はそう言うと、居間の方へ戻ってしまった。博に断られた久は、

「ふうっ、またか」

と、小さくため息をついた。

晩ごはんになって、家族でちゃぶ台を囲みながら、久は博にきいた。

「博、自転車の修理のやり方を、覚えてみる気はないか？」
不意にそんなことをきかれて、博は面くらった。

「えっ、だって僕、まだ小学生だし……」

「小学生だったって、もう五年生なんだから、早すぎるってことはないぞ。何でも子供のうちから始めたほうが、覚えも早いんだ」

「だって、自転車の修理を覚えたからって、べつに……」

博の煮え切らない返事に、久は、だんだん腹が立ってきた。

「自転車の仕事なんて、覚えてもしようがないってことか？」

博は、何と答えていいかわからず、返事ができなかった。

「おまえ、自転車の、どこが気に入らねえんだ！」

久は、ついカッとなって怒鳴ってしまった。

「やめてよ、おとうさん」

ついに、堪忍袋の緒が切れてしまった久を良江が止めに入った。

「もういい」

久は、吐き捨てるようにそう言うと、さっさとごはんを食べ終え、作業場へ戻ってしまった。ちゃぶ台に残された博と良江は、しばらくの間、黙ったまま食事を続けた。柱時計が、ポーンと六時半を打った。二人がごはんを食べ終えるころ、良江が話し始めた。

「やっぱりおとうさんは、博に自転車を継いでほしいんだね」

「まあ、博もまだ小学生だからね、自転車を継ぐかどうか、今すぐ決めなくてもいいんだよ」

「うん」

博は、ちよつとばつが悪そうに返事をした。

「自転車で以外に、何かなりたいものがあるの？」

「……ないこともない」

博は、言葉をはぐらかした。

数日後の昼間、博が学校へ行っている間に、店には珍しいお客さんが来ていた。健一の父、正一である。正一は久と同級生だったそうで、博とも顔見知りだった。

「もうすぐ健一の誕生日でね、それで、自転車をねだられちゃって……」

正一は、頭をかきながら、そう言った。

「誕生日のプレゼントが自転車とは、気分がいいねえ」

久が、冷やかすように言う、正一は、

「健一が今乗ってる自転車、もうガタガタでね、去年の誕生日にも、新しい自転車をねだられたんだ。去年はまだ我慢させたから、今年はまあ、買ってやることにしたんだよ」と、照れくさそうだった。そして、

「じゃあ、日曜日に取りに来るから、ハンドルは上向きにしておいてね」

と言が残して、帰っていった。当時（一九七〇年代）、小学生の男の子たちに人気があった自転車は、スポーツタイプの、五段変速で下向きのハンドルが付いたものだった。ハンドルを握る位置が低いので、自転車に乗る姿勢が前かがみになり、それが格好いいとされていた。しかし、たいていの親たちは、ハンドルが下向きの自転車に乗るのは、危ないからと反対していた。博の自転車も、五段変速ではあるものの、ハンドルは上向きだった。もともとは、ハンドルは下向きだったのだが、久が上向きに直したのだった。ハンドルが下向きになっていったほうが、自転車自体の見た目も格好いいので、博も最初のうちは不満に思っていた。しかし、見た目は今ひとつでも、ハンドルが上向きになっていたほうが乗りやすいのは確かだった。それで博は、まあこれでいいかと思うようになっていたのだった。

学校から帰った博は、正一が来て、健一の誕生日プレゼント

トに自転車を注文したことを、良江から知らされた。晩ごはんが済むと、久はさっそく、健一の自転車のハンドルを、上向きにする仕事に取りかかった。良江は、

「お友達の自転車なんだから、おとうさんの仕事、手伝ってあげたら？」

と、博に言った。今までに何度も、久から仕事を手伝うように言われ、そのたびに何だかんだと理由をつけて、断ってきた博だった。しかし、良江から言われるのは、あまり抵抗がなかった。そしてやはり、健一の自転車だからという理由が大きかったのだろう。博は、

「そうだね」

と、自分でもびっくりするような、素直な返事をした。そして、店の作業場へ向かった。

「おとうさん」

「なんだ？」

「手伝おうか」

博がそう言う、久は驚いて仕事の手を止め、博の顔を見て、言った。

「博が手伝ってくれるなんて、どういう風の吹きまわしだ？」

「それ、健一の自転車なんだから、手伝ってあげたらって、おかあさんが」

博がそう言う、久は少し笑って、

「そうか。よし、じゃあ手伝ってくれ」

と言うと、手に持っていたスパナを博に渡した。

次の日、学校へ行く途中で健一に会うと、博はさっそく、昨日正一が自転車注文しに来てくれたことを話した。そして、

「ハンドルを上向きにするのは、おとうさんに教わりながら、僕がやったんだよ」

と、自慢した。すると健一は、

「そうか、ハンドルはもう、上向きになったんだな」

と、がっかりしたような顔をした。

「ハンドルが上向きなのは、嫌なの？」

博がきくと、健一は、

「だって、格好悪いし、なんか、おばさんたちが乗ってる自転車みたいじゃん。でも、ハンドルを上向きにするのが、新しい自転車を買ってもらう条件だったから、しょうがないんだね」

と言って、小さくため息をついた。博は、昨日、久に教わりながら自分がしたことは、健一をがっかりさせることだったと気付いて、健一に申し訳ない気持ちになった。

「僕も、今乗っている自転車で、ハンドルが上向きなのが嫌だったけど、そのうちに気にならなくなったよ。健一もきっと、そうなると思うよ」

博が健一を慰めるように言うと、健一は、

「そうかなあ」

と、さえない返事をした。

「それに、やっぱりハンドルは下向きよりも、上向きのほうが、ずっと乗りやすいよ」

博がそう言うのと、健一は、

「そうかもな」

と言って、ちよつと笑ってくれたので、博は少し安心した。

日曜日、正一が健一と一緒に、注文した自転車を取りに来た。新しい自転車が手に入るというのに、健一はあまり嬉しそうな顔をしていなかった。久が、

「いいなあ、健一君。新しい自転車でさあ」

と声をかけたが、健一はちよつと、作り笑いを浮かべただけだった。正一が、

「健一、どうした。嬉しくないのか？」

と問いかけると、健一は、

「嬉しいよ。もちろんね」

と、あまり嬉しそうな顔のままで答えた。博は、健一が心配になって、何度も健一の顔をチラリと見たが、健一は、博と目を合わせようとはしなかった。

新しい自転車を手に入れてから何日かたっても、健一の表情は、晴れないままだった。その日も、博のけあがりの練習に付き合っはくれたのだが、なんだかボウツとしていて、あまり指導に熱が入ることはなかった。そして、帰り道、いつものように吉田屋に寄ると、明美が、

「健一君、新しい自転車買ってもらったんだって？」

と、声をかけてきた。

「えっ、なんで知ってるの？」

と、健一がきくと、

「昨日、母が店番をしている時にね、健一君のおとうさんが、いらっしやったんだって。それで、新しい自転車を買ってやつたんだって、おっしやつていたそうよ」

と、明美が答えた。

「ちえっ、親父のやつ、おしやべりだなあ」

健一は、舌打ちして言った。

「今度、乗ってきて、見せてよ」

「いや、やめとくよ」

「どうして？」

「だって、ハンドルが上向きだから」

「ハンドルが上向きって、どういうこと？」

「おばさんたちが乗ってる自転車みたいにさ、付け根から、少し上の方に曲がっているハンドルのことだよ。スポーツ自転車だったら、やっぱりハンドルは下向きでなくっちゃあ、格好つかないよ」

「ふーん、やっぱり男の子にとって、そういうことって、重大なのね」

「そうだよ、重大なんだよ」

健一と明美との話を聞いていて、博は、下向きのハンドルへの健一のこだわりは、ただものではないなと思った。

吉田屋を出ると、冬が近付いている帰り道、風が少し冷たかった。

「健一、僕が、ハンドル下向きにしてあげようか？」

健一の落ちこんだ様子を見かねて、博が申し出た。

「えっ、博、できるの？」

「だって、下向きだったハンドルを、上向きにしたのは僕だから。そりゃもちろん、おとうさんに教わりながらだったけどさ」

「ああ、そうか。でも、一人でできるのか？」

「ハンドルを外して、向きを変えて、元通りに取り付けられればいいんだ。おとうさんに教わった時と、同じことをやればいいんだから、大丈夫。できると思うよ」

「本当に、やってくれるのか？」

「うちのおとうさん、明日、商工会か何かの行事で出かけるから、うちの自転車屋、明日休みなんだ。おかさんも出かけるって言っていたから、明日なら、大丈夫だ。だからさ、明日学校が終わったら、すぐに自転車に乗って、うちに来いよ。そうしたら、ハンドル、下向きにしてあげるよ」

「うん、わかった」

健一の顔に、ようやく笑顔が戻った。

次の日、学校が終わると、健一は博に、
「じゃあオレ、家に自転車取りに行ってくるから」

と言うと、飛ぶようにして、家に帰った。博が自分の家に着いた時には、健一は、もうすでに自転車で乗り付けて、博の家の前で待っていた。冬も近いというのに、健一は、汗びっしょりになっていた。そして、ハアハアと息を切らせながら、「遅かったじゃないか」

と、博に言った。ハンドルを下向きにするのを、健一は、よほど待ち遠しかったんだなあとと思って、博は、ほほ笑んだ。そして、健一が、こんなにも自分に期待をしてくれていることが、とても嬉しかった。

「まあ、そう慌てるなよ」

博はそう言うのと、店の戸を開けて、健一の自転車を中に入れた。

「ええと、まずは、ハンドルに付いてるグリップや、ブレーキレバーを外してと……」

この前、久から教わった手順を確認しながら、博の、自転車ハンドル向き変え作業が始まった。久がいつも使っている、工具に浸み込んだ油の匂いが、ぷーんと漂った。いい匂いだなど、博は思った。

それから、かなり時間がかかったが、博の、自転車ハンドル向き変え作業が、ようやく終わった。ハンドルが下向きになった自分の自転車を、しげしげと眺めて、健一は、とても喜んだ。

「うーん、格好いいなあ。やっぱり、スポーツ自転車は、こ

うでなくっちゃなあー」

と言って、サドルにまたがり、ハンドルのグリップを握りしめた。健一が喜ぶ顔を見て、博は、今までに感じたことがないような、充実感と満足感を感じていた。健一は自転車から降りると、下向きになったハンドルを、大切そうに手でなでた。そして、博のほうに向き直って、

「いくら？」

ときいた。

「いいよ、そんな、お金なんて」

博がそう言うのと、

「いや、そういうわけにはいかないよ」

と言って、首を振った。

「いって、いって」

博が笑いながら言うのと、健一は、ちょっと怒ったような表情になった。そして、きっぱりとした口調で、こう言った。「おまえんち、自転車屋だろ？ 商売としてやっているんだから、ちゃんと代金を受け取らないと、だめなんだよ！」

健一の、きっぱりとした態度と口調に、博は少し驚いてしまった。

「じゃあ、十円もらおうかな」

と言うと、健一は、

「これだけの仕事で、十円ってことはないだろ。百円にしとけよ。なっ、百円でいいだろ」

と言って、ズボンのポケットをガサガサとかき回して、百円

玉を取り出した。

「百円も出したら、こづかい、なくなっちゃうだろ？」

博が心配してそうきくと、健一は、

「大丈夫だよ。はい、百円。ハンドルを下向きにしてくれた、工賃だ」

と言つて、博に百円玉を渡した。

「じゃあ、ありがとう」

そう言う博は、百円玉を受け取った。その百円玉は、色があくすんでしまつていて、もう銀色の輝きがなかった。だけどそれは、博が生まれて初めて、自分の力で稼いだお金だった。

「工賃……か」

健一が帰ったあとも博は、その百円玉を、指先でくるくると回しながら、眺めていた。

次の日の学校帰り、健一は、家に自転車を取りに帰つてから、吉田屋へ向かった。その間、博は、吉田屋で待つていた。吉田屋に着いた健一は、さっそく明美に自転車を見せて自慢した。

「今までは、ここの付け根のところから、ハンドルが上を向いていたんだよ。ねっ、今のほうが、ずっと格好いいだろ？」

「そうね」

明美は笑いながら答えた。そして博に言った。

「博君、よくできたね。ハンドルの向きを変えるのなんて、

大変だったんじゃない？」

「そうでもないですよ。一度、父に教わりながら、やりましたから」

博がそう答えると、明美は感心して言った。

「さすがは、自転車屋さんの息子さんね」

憧れの明美にほめられて、博は自分の心が、大きく揺れ動くを感じていた。

その日の夜、晩ごはんの時に、博は久に叱られた。

「博、おまえ、健一君の自転車、ハンドルを下向きにしたんだってな。おかあさんが、健一君のおかあさんから聞いたそうさ。どうしてそんなことをしたんだ？」

「だって健一が、ハンドル上向きなのが嫌で、落ちこんでいたから、かわいそうだと思つて」

「店の道具を、勝手に使つたのか？」

「ちよっと、借りただけだよ」

「ばか野郎！ 誰が使つていいと言つたんだ！ 大切な、商売道具なんだぞ」

すると、良江が、

「おとうさん、怒らないって、約束したでしょ」

と、たしなめた。しばらく沈黙が続いたあとで、久がぼつりと言つた。

「よく、できたな」

「えっ？」

博が驚いて、聞き返した。

「ハンドルの脱着なんて、なかなか一回で覚えられるものじゃないんだぞ。やつぱりおまえには、素質があるのかもしれないな」

そう言う久は、にっこりほほ笑んだ。それで博もほっとして、久にきいた。

「健一が工賃だと言って、百円くれたんだけど、もらってよかったかなあ？」

「おまえが、払えと言ったんじゃないのか？」

「違うよ。商売でやっているんだから、ちゃんと代金受け取らなきゃだめだって、健一が」

「健一君が、そう言ったのか？」

「うん」

すると久は、少し驚いた顔をした。

「そうか。まあ、友達なんだから、そのぐらいいは無料でもよかったんだけどな」

そして久は、博にこう話した。

「でもな、博。健一君が言ったことは、正しいぞ。商売屋はな、ちゃんとした仕事をして、それに見合った代金を、お客様からいただくんだ。商売つてのは、そういうものなんだ」
それを聞いて、博はなぜか、身が引き締まるような思いだった。

「健一君は、おまえと同一年なのに、ずいぶんしつかりしているじゃないか」

久は、博をからかうように言った。博は、

「どうせ、健一のおとうさんの受け売りだろ」と、少しムツとした表情になって言った。

「それはまあ、そうかもしれないけどな」

久は、そう言って笑った。

「商売つてのは、そういうものか……」

博は、久の口調をまねてつぶやきながら、健一から受け取った百円玉をポケットから出し、手に取って眺めた。

「さあ、もうひと仕事してくるかな」と、久が席を立った。

「おとうさん」

不意に博が、久を呼び止めた。

「なんだ？」

「仕事、手伝おうか」

博の思いがけない申し出に、久と良江は、顔を見合わせた。博は、さらに言った。

「パンクの修理のやり方、教えてよ」

「そんなこと、覚えてどうするんだ？」

久はわざと、意地の悪い返事をした。

「健一の自転車がパンクしたら、僕が修理してやろうと思つて」

博がそう答えたので、久と良江は、顔を見合わせて笑った。
「よし、じゃあ、教えてやろう」

「じゃあ僕、先に行つて、道具を準備するよ」

博はそう言うのと、店の作業場へ向かつて駆け出した。

「おい、おまえ、わかるのか？」

久が問いかけると、

「だいたい、わかるよ」

と、返事が返ってきた。久と良江は、また顔を見合せて笑つた。そして、久が良江に言つた。

「明日、健一君の家へ行つて、百円返してきてくれないか？」

「今日、返そうと思つたんだけどね、健一君がとても喜んでゐるからつて、受け取つてくれなくなつてね」

良江は、ほほ笑みながら言つた。

「どうやら、健一君の自転車が、博の将来を決めることになりそうだねえ」

「さあ、どうだかな」

久は、ぶつきらばうに答えると、嬉しそうな顔をして、作業場へ向かつた。

それから数日後の放課後、いつものように博が、けあがりの練習をしていた。今日も健一が、練習に付き合つてくれていた。すると、不意に博が鉄棒から降りて、口を開いた。

「健一」

「なに？」

「僕、うちの自転車屋を継ごうかと思うんだ」

「えっ？」

健一は、驚いた。

「だって博、今までずっと、科学者になりたいって言つてたじゃないか」

「うん。でも、やっぱり自転車屋つて、僕に向いてるような気がする」

「そうか。この前、明美さんにもほめられたもんな。『さすがは、自転車屋さんの息子さんね』つて」

健一は、明美の口調をまねて、ちよつとおどけて言つた。

「あはは、そうだったな」

博は、照れ隠しにそう言うのと、また鉄棒につかまつた。そして、足を振り上げて、つま先を鉄棒に近付けた。

「そこだ、体を離すな」

健一が叫ぶと、博の体は鉄棒から離れることなく、クルリと上体が起き上つた。

「できたー」

博と健一が、同時に叫んだ。自分の上体が、初めてこうして、鉄棒の上に出て、今、鉄棒の上で静止している。博は、感激で腕がガクガクと震えた。そのあとは、何度やってみても、ほとんど失敗することなく、けあがりができるようになっていた。今までできなかったのが、嘘のようだった。

「なつ、べつに難しくないだろ？ コツさえつかめば、簡単なんだよ」

健一が、満面に笑みを浮かべて博に言つた。

「健一、ありがとう。本当に、ありがとう」

あまり運動神経のよくない自分に、今までずっと、根気よく教えてくれた健一に、博は心から感謝した。

博は鉄棒から降りると、

「よし、じゃあ、明美さんに報告だ。けあがり、できるようになりましたってね」

と言つて、鉄棒の脇に置いたランドセルを背負つた。

「もうひとつ、報告することが、あるんじゃないのか？」

健一が言つた。

「自転車屋を、継ぐつてことだよ」

博は、ちよつと考へて答へた。

「今日は、けあがりができるようになったことだけで、十分だよ」

博は、改めて決意したように、

「よし、明美さんに報告だ」

と言つて、吉田屋へ向かつて走り出した。

「オレも付き合うぜ」

健一も、急いでランドセルを背負うと、博のあとを追つて走り出した。もう、冬がすぐそこまで来ていたので、日暮れが早かつた。

(浜北区)

「入選」

父の日の贈り物

生 崎 美 雪

六月の日曜日の朝、美咲は、目をさましてそつと、部屋の窓の白いレースのカーテンをあけて、庭をながめました。

「まあ、いつのまに……」

昨日までは、緑一色だった庭に、いろとりどりのきれいな紫陽花の花が咲いていたのです。水色、薄紫色、ピンク色、白。小さな花がたくさん集まつて、大きなまるい紫陽花の花が、緑色の葉っぱの間から、いくつも顔をのぞかせています。「きれい。昨日の夜、雨が降っていたけれど、もしかしたら、そのおかげで、こんなにたくさんさんの紫陽花の花が咲いたのかしら？」

紫陽花の葉っぱの上で、雨粒が、おひさまの光をあびて、きらりと光りました。

雨の日は、いつもなんとなくゆううつになってしまふのですが、きれいに咲いている紫陽花の花を見た美咲は、ちよつと楽しい気持ちになりました。

「今日は、いいことあるかな？ あるといいな」

美咲は、きれいな紫陽花の花を、わくわくした気持ちで、

見つけました。

今日は、6月の第三日曜日、父の日です。美咲は、昨日の夜、お父さんに手紙を書きました。

「お父さん。いつも家族のために、一生懸命お仕事してくれて、ありがとうございます。夜、遅い日があったりして、お話できないこともあるけれど、学校の勉強や、お友達の話を書いてくれてうれしいです。お父さんの面白い話をきくのが大好きです。体に気をつけて、これからも元気でいてください。」

また、お母さんと一緒に、東京の美術館に絵を観に行こうね。美咲」

美咲のお父さんは、中学校の美術の先生です。美咲が小学生になったときに、新幹線に乗って、東京の美術館へ、連れて行ってもらったことがあります。初めての美術館で外国の絵画を見た美咲は、なんて素敵なんだろうと、心ときめきました。美咲が特別に好きになった絵は、クロード・モネの描いた、睡蓮の絵でした。モネは、一〇〇年前に生きたフランスの画家です。

「私も、いつかこんなふうな素敵な絵が描けたらいいな……」

美咲は、池の水面に浮かんだ、やわらかな色彩の睡蓮の花に、静かな優しさを感じたのです。

その時のことを思い出した美咲は、庭に咲いている紫陽花の花を描いてみたくなりました。

「そうだ、紫陽花の絵を描いて、お父さんにプレゼントしよう」

美咲は、机の引き出しから、お誕生日にお父さんが買ってくれた、水彩色鉛筆と、黄色い表紙のスケッチブックをだしました。窓をあけると、おひさまの光の中で、紫陽花の花が、美咲のことを見つめているようです。美咲は、スケッチブックをひらきました。

まっ白いページに水色の色鉛筆で、小さな紫陽花の花をたくさん描きました。緑色の葉っぱに、雨粒をのせて、花の周りをとり囲むように、描きました。

それから、水筆で、紫陽花の花と葉っぱにそっと筆をすべらせました。すると、やわらかな色の紫陽花が描けたのです。

「紫陽花の花、描けた」

美咲は、自分の描いた紫陽花の花の絵を、窓のそばにおいて、少しはなれた所から、見てみました。すると、窓の向こうに咲いている庭の紫陽花と、美咲の描いた紫陽花が、一緒に輝いています。美咲は、うれしくなりました。

「お父さん、この絵見て、なんて言うかな？」

そのとき、

「美咲、朝ごはんよ」

お母さんの声がしました。

「はい」

美咲は、あわてて、お父さんへの手紙と絵を持って、部屋を出しました。

階段の壁には、お父さんの描いた絵が飾ってあります。

赤や黄色、青色の旗がかかっているお城の庭で、子供たちや犬や猫が遊んでいて、ピエロが踊っている絵です。その絵の子供たちの中には、美咲にそっくりな女の子がいます。

空には、白い雲が浮かんでいて、赤いおひさまが輝いています。

美咲は、毎朝、学校に行く時に、この絵を見るのが好きです。どうしてかという、この絵を見ると、なんだかとても楽しく元気になるからです。

美咲は、ゆかいなピエロの絵を見ながら階段をおりて、リビングにはいりました。

「おはよう、美咲」

「おはよう、美咲ちゃん」

お父さんとお母さんが美咲にむかってにつこり笑いしました。

テーブルには、お母さんの作った朝ごはんが並んでいます。日曜日の朝は、いつも、ふわふわのスクランブルエッグとベーコン、トマトとキュウリのサラダ、コーンすうぷ。焼き立てのバタートーストです。トーストには、美咲の好きなイチゴジャムがのっています。

「おいしそう。でも、その前に……。今日は、父の日でしょ。

これ、父の日の贈り物よ」

と、言っ、ちよつとはずかしそうにお父さんに手紙と絵を渡しました。

「やあ、ありがとう。美咲からの贈り物かい。うれしいな、どれどれ」

お父さんは、美咲の描いたお父さんの顔とアジサイの絵を、テーブルに並べて置きました。

「あら、上手に描けているわね」

お母さんが、言いました。

「ほんとだ。お父さんの顔によく似てる。紫陽花の絵もきれいだね。水彩色鉛筆で描いたんだね。上手に描けてるな」

お父さんは、美咲の描いた絵を、うれしそうに見て、

「ありがとう。」と、言いました。

美咲も、うれしくて、につこり笑いしました。

お父さんは、リビングの白い壁に、美咲の描いた絵を飾りました。それから、美咲の書いた手紙を読みました。読み終わると、優しく美咲を見て、

「うれしいよ。美咲、絵と手紙、ありがとう。そうだ、今度の日曜日に、久しぶりにみんなで東京の美術館へ行こう。仕事が忙しくなってしまっ、なかなか連れて行ってあげられなかったからね」

「ほんと？ お父さん。私、ずっと行きたかったの」

美咲は、目を輝かせました。

「お母さんも久しぶりに絵を見てみたいわ」

「今、美術館でどんな展覧会が開催しているか、お父さんが調べておくよ」

「モネの絵が見れるかしら？」

「どうか？ 美咲は、モネの絵が好きなんだね」

「うん。一年生の時、東京の美術館で見たモネの睡蓮の絵、とっても素敵だったわ」

「そうかい。美咲の描いた紫陽花も、モネの絵のようにきれいだね」

「えっ？ほんと？ ありがとう」

美咲は、モネの絵みたいだとお父さんにほめられて、とてもうれしくて、うれしくて、たおれそうになりました。

「美咲は、昔から絵を描くのが好きだったわね。きっと、お父さんに似たのね。また、いろんな絵を描いてみせてね」

お母さんが言いました。

「うん」

美咲は、また絵を描きたいなと思いました。

「ワンワン」

美咲の足もとで、マルチーズのナナが、鳴きました。美咲はナナを抱き上げると、ひざにのせて、

「ナナの絵も、今度描いてあげるね」

と、ナナの白い毛をなぞました。

「くーん、くーん」

ナナは、美咲のおひざの上で、気持ちよさそうです。

「いろんな絵を描くといいよ。お父さんは、美咲が絵が好きになってくれてうれしいよ」

「ほんとね。小さなときに、美術館へ連れて行ってあげてよかったわね」

お母さんがほほえみます。

「そうだな、あのときは、美咲は、まだ小学校へあがったばかりだったのに。モネの絵が好きになるなんて、やっばり、美咲は、ほくの子だね」

お父さんが得意げにそう言いました。

「楽しみだな、美術館」

美咲は、わくわくしました。

「美術館で絵を見たら、デパートのレストランで、食事しよう」

「そうね。そうしよう」

「ナナも一緒に行けるといいのに」

「犬は無理だな。かわいそうだけど、お留守番だね」

「そっか……。ごめんね、ナナ」

ナナは、ちよつとくびをかしげて、さみしそうにくーんと、鳴きました。美咲は、ナナの白い毛を優しくなでました。

「ご飯と、おやつクッキーをちゃんとおいでいくわね。それから、お土産買ってくるからね」

「ワン、ワン」

ナナは、ほんととは、お留守番は嫌だけれど、クッキーがあるならいいかなという顔をして、まんまるの黒い目で、美咲を見つめました。

朝ごはんを食べ終わると、

「さあ、みんなで庭に出て、紫陽花を見よう」
と、お父さんが言いました。

美咲はナナを抱いて、お母さんとお父さんと一緒に、庭に出ました。

雨あがりの庭、紫陽花の花が、とてもきれいに咲いています。

お父さんとお母さんと美咲は、しばらくのあいだ、庭に咲いているたくさんさんの紫陽花の花を見ていました。

ナナも、目をさよろきよろさせて、紫陽花の庭を見まわしています。

やわらかなおひさまの光が、優しい家族と一匹の犬のいる、紫陽花の庭を照らしました。

(中区)

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

児童文学選評

那須田 稔

今回の応募数は、今まででもっとも多く、内容も、幼・低学年、中学年、高学年と、バラエティに富み、選考に楽しい時間を過ごすことができました。児童文学は、子どもの成長に寄り添いながら、自然への愛、友情、家族、隣人愛などを描き、生きていることのすばらしさを描きだしていきます。応募作の中から特にすぐれたものを「市民文芸賞」「入選」に選びました。

市民文芸賞「イチヨウの葉っぱのてがみ」

みんなから嫌われていると思ひこみ、ひとりでひきこもっているおじいさんの心をひらいてくれた一枚のイチヨウの葉のてがみ——。なんというやさしさに包まれた物語でしょう。

市民文芸賞「だいこんちゃんのおうえん」

一人ぼっちのだいこんちゃんが、やはり孤独な少年をはげます物語。大切な友情、心のふれあいを描きだしていきます。

入選「金魚の国の色エンピツ」

亡くなった金魚の思い出をたどりながら、金魚たちの不思議な世界に遊ぶ少女のやさしさに感動しました。

入選「カッパのモ太郎」

好奇心の旺盛なカッパの男の子と、老人の心のふれあいを描いたユニークなファンタジー。発想のユニークさに拍手をおくりまします。

入選「小さなめだかの太ぼうけん」

高学年向けの作品が多い中で、幼年の心に寄りそうものとして選びました。ふとしたチョウのいたずらで、冒険の旅に出てしまっためだかの物語。よみきかせにいい作品です。

入選「友達の自転車」

家の職業を継ぐことに自信を持ってない少年が家業に誇りを見つけるまでの友情物語。

入選「父の日の贈り物」

少女が絵を通して父への愛をたしかめる。感情表現が、ややオーバーな点などが修正されれば、更によくなったと思います。

その他、「住吉の森語り…あつし」「太陽のとなりで」は、ストーリー展開や、文章表現が今ひとつなのが、惜しい。

評論

〔市民文芸賞〕

続 キリシタン大名 高山右近

中谷 節三

巡察師 ヴァリニャーノ

巡察師とは、キリスト教修道会へカトリックイエズス会の総長から布教地の会員（宣教師たち）を指導し、布教事情を調査報告するために派遣される者の職名である。その権限は大きかったが、日本からでは本部との連絡に日時がかかるので、ある程度まで本人にその権限が与えられていた。ヴァリニャーノはナポリ王国（スペイン領）の生れで、来日は天正七年（一五七九）四十才の時であった。九州島原半島の南端、有馬領口ノ津に上陸した。ザビエルの来日以来三十年経っていた。

当時、日本はキリシタン管区として三ヶ所に別れていた。長崎、豊後（大分）、高槻（大坂―右近の支配地）であった。夫々一人の長が居り、司祭館、修院、キリスト教徒及び教会の指導権を持っていた。

ヴァリニャーノは日本教会の財政の基盤を確立せよ、との総長の指示も受けていた。

上陸した年を有馬領で過し、翌天正八年（一五八〇）の年初、大村領長崎に移った。長崎は良港で已に十年前に開港して海外の物資の集散地となっていた。

ヴァリニャーノが仕事が一応落着いたある日、藩主の大村純忠（キリシタン大名第一号で洗礼名はバルトロメオと言った）にあいさつに赴いた。その時、彼は意外なことを言った。「長崎港を協会に寄付したい」と懇請されたのである。このことは軽々しく独断では決め兼ねる重要な問題であった。当時、肥前の豪族、龍造寺隆信氏の勢力が強く、大村氏側はそれに対処し兼ねる状態であった。教会側は大村氏を物資的、精神的に援助していた。

イエズス会は知行地を受け取ることを禁止されていた。日本側の間に流布していた、宣教師の領土的野心が深まる事が察せられた。最終的には受理することに決ったが、そのスペイン語による訳文がローマのイエズス会総長のところに現存している。(訳文は略)

秀吉が発令した伴天連追放令(市民文芸61号P177)の二回に亘る使者に対し、右近が棄教の選択は否定して「信仰」に迷いはなかった。これにより領国、明石六万石と領民を失ったが、「精神」までは失っていないかった。右近このとき三十五才、十二才のときの入信以来、右近の「精神」に変わりは無かった、

右近の一生は、狭い「日本的視野」では理解出来ないことが多い。

ヴァリニャーノは天正十年(一五八二)に日本を離れ、第二次来日は八年後の天正十八年(一五九〇)で長崎に上陸した。長崎は既に秀吉の「伴天連追放令」により、教会領より日本領土に戻り、秀吉が管理していた。信念によりキリシタンを棄教しなかった右近は、茶道の朋友、前田利家の招致により北陸・加賀藩の金沢に(秀吉は勿論、了承の上)一族郎到を引きつれて在住していた。

高槻城主だった天正九年(一五八一)の復活祭をヴァリニャーノ、フロイスと共に祝ったことを想起して、彼の再来を

風のたよりに聞いた右近は、彼との再会のため、冬の北陸路を父と共に大坂へ出た。彼に会うのは実に九年ぶりのことであつた。彼の精神はまだ死んでいなかった。ヴァリニャーノは再会を大変喜んで、イエズス会総長から託された「聖母マリア像」の油絵を右近に賜った。この油絵は殊の外、右近を喜ばせた。ポルトガル語が話せる右近とヴァリニャーノとの話はいつまでも尽きなかった。

イエズス会の宣教師たちは、日本語習得と説教のためにポルトガル語の『日葡辞書』(二六〇三年)を編んだ。

同行した右近の父は、年老いて元気が無かったが、その四年後に亡くなった。遺骨は長崎に送って葬った。

ハツの宗教

フロイス(日本滞在三十四年『日本史』の著書)は、宣教を行う司祭は、日本のハツの宗教の宗旨を学び、研究することとその信奉者たちと議論するのに必要である。日本人の多くは仏教の教理をよく知っていた。ハツの宗教とはどれを指すのか不明であるが、一応次のようにまとめた。

宗派	本山	開祖	特徴
・曹洞宗	永平寺	道元	座禪
・臨済宗	鎌倉五山	栄西	
・浄土宗	知恩院	法然	南無阿弥陀仏
・眞言宗	高野山	空海	弘法大師

・眞宗（大谷派） 新らん 石山本願寺
 ・黄檗宗 万福寺 隠元 中国系
 ・天台宗 比叡山 最澄 法華経
 ・日蓮宗 安房清澄山 日蓮 南無妙法蓮華経

何れの宗派も、第一人者である。教理的学問と信仰が「都の国」すなわち京都では多くの人々が宣教師の話しを聞きにきた。そして洗礼を受けるまでに、デウスの教えを大変深く理解しようと努力する。イエズス会宣教師は、日本在来の神・仏を悪魔として排除し、それらの信仰を異教として撲滅を期したが、日本人の祖先崇拜の姿に直面して対応方法に困惑した。また亡き先祖を悲しみ、仏教の盆行事などを外国の宣教師たちは迷信と、同じく仏僧たちのお布施を物慾と感じて否定した。しかし、日本人はイエズス会が説くキリスト教が日本の仏教に似ているものと考えた。

「心霊修行」約三十日の修養、外界から断たれて毎日四、五回の黙想やその他の祈りにおいて人生の目的と、自分のこの世における使命について反省する「イエズス会」の根本精神となっている。日本の座禪と似ている。右近たち重だった日本の信者たちもこれを受けた。キリシタンにとってキリストこそ最高の主君であり、すべての物の捧げる者であった。

金沢

右近は天正十六年（一五八八）秀吉の伴天連追放令により、

北陸加賀藩主前田利家公の金沢に居た。利休七哲の一人とも言われた右近であったが、師の説得にも応ぜず、信義を守り抜いた。右近三十五才であった。

利家は右近がキリシタンであることを知りながら、武將として救いあげた。二万七千石を禄した。秀吉もそれを了承したのである。

賤ヶ岳の戦い（後述）に於て、利家は柴田勝家側に属しながら、秀吉の要請に応じて、戦わずして戦場を去り、国（その時は能登であった）へ戻ったいわくがある。そのため戦後、秀吉より後に百万石といわれた加賀（金沢）に転封されたのである。右近はこの金沢に、家康の禁教令で、マニラに追放されるまで、戦国時代の二十四年間を上廻る二十六年間を家族共々平和裡にキリシタンとして在留した。

キリシタンに同情的であった利家は、右近の武勇だけでなく、茶の湯、連歌、俳諧にも達せし人であると彼を称賛した。利家からの招待を受けた右近は、家族と共に前田氏預けの形で、客將として金沢に至ったのである。

「禄は軽くとも苦しからず。邪蘇教会一ヶ寺建立下されば参るべし」と。利家も了承した。

右近はどこまでも一般民衆と共にあるということを心掛けていた。宗教は「心の病い」を救うことにある。右近の正義感。自分の理性と良心に恥ずべきことはしない。多分、彼の少年時代、父親からの感化と自身の教養と信仰は、当時の武將としては批判的なものを持っていた。信仰は自己犠牲によ

る社会正義の実現へと彼を開眼させた。封建的武士に対して批判精神を持たせた。秀吉はその性格を見ぬいていた。

右近は誠に思慮深く、傑出した人物である。その人となりは勇敢無双、教養あり、また廉直である。彼は全国一か二の大名であろう。然しキリシタンを捨てぬため秀吉も迷った。

家康の禁教令

慶長十八年十一月二十一日（一六一四年元旦）右近は元旦恒例の初釜を自宅で開いた。金沢に来てからは茶人南坊みなぼうとして客人を招いた。床の間には兼ねてより考えていた「悲しみのサンタマリア」という南蛮画を掲げた。しばらく時を忘れてそれに見入っていた。この絵は、ヴァリニャーノと大坂で会ったときの贈物で、聖母マリアが、十字架より降ろされたキリストを、かがみこんで見ている図である。

右近の初茶会と思われるのは三十七年前の天正五年（一五七七）十二月六日夜、伊丹城での荒木村重が主人の千利休、天王子屋宗及、右近と思われる。高槻城主四年目、二十六才であった。金沢では、しばしば茶会が開かれたようであるが、記録が残っていないので不明である。

慶長十八年の右近が初釜を開いているとき、越中の高岡（利家の長男利長公城主）より早馬が入った。昨年暮、家康が出した『切支丹禁教令』であった、

排吉利支丹文

乾（天）を父となし、坤（地）を母となし、人その中間に生じ、三才（天・地・人）これに定まる。それ日本はもと神国なり。また仏国と称す。仏法の昌盛なる、異相に超越す。ここに切支丹の徒党たまたま日本に来る。みだりに邪法を弘め、正宗を惑わし、おのが有となさんと欲す。これ大禍の萌しなり。制せすんばあるべからず。（中略）

日本は神国、仏国にして神を尊び、仏を敬い、仁義の道を専らにし、善悪の法を匡す。

かの伴天連の徒党、みな件の政令に反し、神道を嫌疑し、正法を誹訪し、義を損ふ、善を損ふ。刑人（キリシタンにおける殉教者）あれば、即ち欣び、自ら拝し自ら礼す。これを以て宗の本懐となす。実に神敵かみき仏敵なり。急ぎ禁ぜすんば後世必ず国家の患うれひあらん。（略）

經（法華經）に曰く「現世安穩、後世善処」（死後極楽浄土に生れること）。孔子また曰く「身体髮膚、父母に受く、あへてき損せざるは孝の始めなり」世すでに澆季（人道すたれ風俗が軽薄になった末の世）に及ぶといえども、ますます神道仏法紹隆（前のものを受けついで盛にすること）の善政なり。一天四海（天下）よろしく承知すべし、あえて遺失するなかれ。（以上）

一般にはわかりにくい排教書であったが、為政者自身は自我自讃したであろう。

家康の排教書では禁止一点張り、貿易についても一切ふ

れてないが、秀吉の時の排教令では、

黒船は商売のために来るのであるから別である。今後とも、長い年月貿易をやつてよい。と布教に關係ない限り、カトリック教国民でも、その来往と通商貿易を許可することを明示している。その対外政策は第一步を踏み出したのであった。神社・仏閣を打ちこわしたのは前代未聞のことであつた。

家康の排教令には（明朝十時、出立せよ）という別紙が付いていた。伴天連のみでなく、信者も信仰を捨てよ、というきつい達しであつた。入相（夕暮）の鐘が鳴る頃、南蛮寺で最後のミサが行われた。主だった信徒が集まり、いつにない眞剣なミサとなつた。

冬の北陸路

冬の北陸路は雪と寒さとの斗いである。慶長十九年正月十七日十時（一六一四）右近親族一同は追放未知の旅へ第一歩を踏み出した。金沢での二十六年間の平和だった生活に別れを告げた。右近は已に六十の坂を超えていた（六十二才）がリーダーとして気を配らねばならなかつた。右近には駕籠、女子供たちには馬が用意されたが、馴れぬため、途中で皆歩くようになった。事故を防ぐため、加賀藩士が同行して護つてくれた。

加賀と越前の日本海側の境に吉崎御坊があつた。親らん開祖の浄土真宗の八代目の蓮如が開いた道場である。文明三年（一四七二）開くと信者が押しよせ、宿坊が軒をつらねる寺

内町に變つてしまつた。『朝には紅顏あれど、夕には白骨となれる身なり』——蓮如はこの有名な「白骨の御文」で、世の空しさや人間のはかなさを説くが、ずっしりと胸に響く。

眞宗門徒による一向一揆は百年近く加賀を支配したが、最後は信長配下の柴田勝家らによつて壊滅した。その柴田勝家も近江の「賤ヶ岳の戦い」で秀吉のためにとどめを射された。その賤ヶ岳は琵琶湖の地にあり、余吾湖との間に挟まれている小さな山である。

天正十一年（一五八三）信長、本能寺に討たれた翌年、越前北ノ庄（福井）にあって、北陸の経営に當つていた四十九万石の柴田勝家が動き出したという情報が見え、秀吉の耳に入った。勝家との対戦を予見して、秀吉は部下に命じて戦場となる土地を精査させて置いた。

天正十三年（一五八四）四月、賤ヶ岳に対峙した兵力は、秀吉方六万、勝家方三万であつた。その後、秀吉は二万の兵を率いて美濃に行つた。岐阜城にいる信長の三男信孝を攻めるためであつたが、敵をあざむくための一つの作戦であつたかも知れない。

その賤ヶ岳の決戦の跡地へ右近たち追放された一行がやつて来た。右近生涯で只一つの敗戦の地——岩崎山の砦は資材が少く充分でなかつた。生命からがら後退したとき、従者は僅か二、三名にすぎなかつた。右近戦死の報が五畿内から九州辺りまで拡がつたという。

岐阜の織田信孝（信長の三男）を攻めていた秀吉は、すぐ

さま取って返した。「美濃返し」である。秀吉側が賤ヶ岳の周りに軍をまとめかけると、柴田勝家側は退却を始めた。その夜おそく勝家は北の庄（福井）に帰りついた。北の庄域は天正三年（一五七五）に築いた城で九重の天守閣を持っていた。城に集った兵は僅か三千であった。

勝家夫妻の自刃（妻のお市―信長の妹）により賤ヶ岳合戦は秀吉側の勝利を以て終了した。残された三人の娘（実父は浅井長政）―お茶々（のちの淀君）、初姫、お江姫は秀吉が保護した。秀吉側に助勢した前田利家には、加賀国を加封して、加賀前田家百万石の基礎となった。

十日程の苦しい雪の北陸道の旅であったがやっと京都へ入った。京でしばらく旅の疲れをいやした後、京都所司代の手力に江戸幕府からの通告を達せられた。「右近外男性三名は長崎へ移送、婦女子は解放、京に留まることを許す」と。しかし、婦女子たちも長崎への同行を希望して、結局全員長崎行きとなった。大阪までは陸路を、長崎までは瀬戸内海と九州北部を約一ヶ月の船旅で過した。四月になった。金沢より四ヶ月かかった。長崎ではトドス・オス・サントス教会に迎えられた。日々祈りのところと時を得たことは、最も喜び感謝するところであった。

マニラへ

いつしか夏の日が去り、秋晴れの日が続いた。長崎には全

国から宣教師や信者たちが集まって来たが、大立者おだてものはやはり、右近という名で知られていたジェスト南坊であった。国外追放されることになっていたが、船の都合が着かず、その間病院など看護の助手などを手伝っていた。

「信者たちを輸送することになっていた三隻の船は、小さく且つひどいものであった。ステファノ・デュアスタの船は、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会の修道者、並びに二十三人のイエズス会の人々、数人の修道士・又数人の日本人、即ちジェスト右近殿、ほか数人の信者たち、婦人たちをマニラに送ることになっていた。船は小さくて他の二隻の船は、イエズス会の人々十三人、修道士、信者、その他日本人の残りを輸送する手筈になっていた。」（『日本切支丹宗門史』―レオン・バジェス著、吉田小五郎訳）の著者バジェス氏はパリ生れのフランス人であるが公使館勤務のとき、中国駐在の経験はあるが、日本のことは文献資料の徹底的研究によって著作したとのことである。事実は大体この通りである。船は全部で五隻で、そのうち三隻はマカオ行でマニラ行は二隻であった。十一月七日、長崎を出帆した。どの船もボロ船で、水夫たちは対策にかけめぐり十日程の日程に、天候の悪化の故もあつたが一ヶ月かかった。

老朽船に三百五十名程が詰めこまれた。苦しい航海であったが、その中でも右近の生活は一同の畏敬の的であった。四、六時中、オラショ（いのり）と読書に詰めていた。右近は乗船のとき、書籍を多く持ち込んでいた。女子供たちは勿論、

男性でも船酔いに苦しめられた。食事でも難しかった。しかし、毎日の生活に馴れるにしたがい日は過ぎていった。嵐にも会った。やがてルソン島が近づいてくるに従い、心身とも安定して来た。フィリピン政府の総督はスペイン人のファン・デ・シルバ氏であった。

「右近殿の名前は、マニラでは有名です。日本のキリシタン大名の代表である。秀吉大王と家康大王の伴天連追放と迫害の時代に信仰を守って生きぬいてきたことに敬意を覚え、ぜひともマニラ全市をあげて歓迎したい。」

右近は言った。

「それはかたじけないし、名誉なことであるが、拙者はそのような歓迎に値しない」「それに旅の疲れもあるし、いささか休養を欲してるのです」 本当のところ、横になって休みたいが、異国に来たら、その国の要請に従うのが礼儀であろうと思った。

総督と右近は、握手して固く抱き合い、お互いの健康を祝した。メトロポリターナ大聖堂―マニラ最大の教会―で食宴が開かれた。日本人のために主として魚と野菜を使った料理であったが、右近は疲れと緊張の故かさっぱり食欲が出なかった。

右近の死

右近にとって連日の客人や招待は、身心にピリツと響き、彼の健康は年の故もあり金沢を出発したときより悪くなっ

た。彼一人だけでは無いが、馴れぬ船旅に特に疲れを増して体力がおとろえた。それに今まで経験したことのない南国の暑さが右近の身体を襲い、熱病を発症した。心配した総督は医師を派遣して治療に当たさせたが、その甲斐もなく慶長二十年（一六一四）正月八日未明、静かに息を引取った。六十三才であった。

一般市民も参加して盛大な葬儀が教会で行われ、追悼ミサのあとサンタ・アンナ聖堂の主祭壇の傍らに埋葬された。七十年前の大戦で行方不明になっていた右近の遺体はケソン（マニラの北部）市のイエズス会教会の修道院に埋葬されている。右近の像がマニラに建立されたとのことである。

右近の「福者」認定

高山右近が、カトリックで最高の崇敬対象とされる「聖人」に次ぐ「福者」に認定されることが日本カトリック協議会の話で明らかになった。

「列福式」は、平成二十九年（二〇一七）二月七日に大阪城ホール（大阪市中央区）で開催される予定である。

右近は物質的な豊かさや権力ではなく、信仰が人を幸せにすると確信していたと指摘、右近の生き方は現代に生きる人々を照らす光となる。

（各新聞記事より）

（中区）

「入選」

大化の改新の謎

滝澤 幸一

(一) 歴史教科書と講談社学術文庫の記述

学校での歴史は、

1. 蘇我氏が天皇に代わる野望を持ち、宮廷に代わる豪華な建物に住み、我が子を皇子の如く呼ばせたと説く。この野望を防ぎ、政治の改革のために、

2. また山背大兄皇子が入鹿に殺されると危険を感じた中大兄皇子は中臣鎌足と謀り、朝鮮の使者が貢物を持って来た日に大極殿で、乙巳の変を起こし、蘇我入鹿を誅殺。それを知った蘇我蝦夷は屋敷に火を掛け自殺した。

次に講談社学術文庫「日本の歴史」③の記述は、(抜粋)
 厩戸の皇子は法隆寺金堂の釈迦如来像背銘などによると六二二年(推古三十年)に没し、六二六年(推古三十四年)には蘇我馬子が、翌々年には推古女帝が亡くなり、推古王権の中樞人物が相次いで他界すると、王位継承をめぐりもめにもめた。推古は病床に田村皇子と山背大兄皇子を呼び、それぞれに自制を求めたという。当時は群臣が推戴するのが原則であったから、前大王が後継に関して発言することは異例で

あった。推古天皇は三十年以上女帝として君臨し、大きな権限を持っていたことでそのようなことが出来た。これは讓位実現の一手手前といつてよい。

(中略) 推古天皇の死後、蘇我蝦夷が舒明天皇擁立に動いたということは、蘇我氏が上宮王家と決別し、非蘇我系の押坂王家と提携したことを意味する。舒明天皇の没後皇極天皇を担いだのは山背大兄王の即位を阻止し、蘇我の血を引く古人大兄皇子の即位の芽を摘まれないのが目的と記す。『日本書記』を引用して、皇極天皇は蘇我蝦夷を大臣に再任するが「大臣の兎入鹿、自ら国政を執り、威父に勝れり」とあるように実権はすでに蘇我入鹿にあり、蘇我の専横ぶりを書き立てた記事が目立つようになる。曰く、蘇我蝦夷は「祖廟」を葛城に建て、八佾の舞いをしたなど当時の倭国にあったとは考え難いものまで出て来るので、大分誇張された話にはなっているが、蘇我氏が横暴になり、次第に孤立していったことは認めてもよいと思われる。と記し、蝦夷の家を「上の宮門」入鹿の家を「谷の宮門」といい、子供たちを皇子と呼ぶなど、蘇我氏の専横に加え、伴造トモ・部制度の行き詰まりからの刷新が急務であり、乙巳の変に向かったと記す。

(二) 洋泉社「日本書紀の虚構と史実」の記述

この書では仏教伝来の際、親仏・廃仏で争った対物部・中臣と言われているが、百濟から伝来した仏教は「蕃神(外

国の神」と呼ばれ、崇りを為す存在として畏怖されていた。この神の有め役として天皇から蘇我が祭祀を委託されたものとだとする。

天皇から祭祀を与っていた物部・中臣は、蕃神の祭祀を任せて貰えなかったことへの憤懣を持ち、天皇に不満をぶつけることが出来ない故に、蘇我に反感や敵愾心を煽らせる結果になったとする。

そして蘇我入鹿が勝手に、国政に参画したとはしない。病身の蘇我蝦夷が辞退し、新しい大臣に就いた子の入鹿に、皇極天皇は自身が飛鳥川東岸に新都市（飛鳥藤原京と呼ばれる）を建設しようとするに当たり、それと同様の都市空間である飛鳥の斑鳩京に君臨する山背大兄皇子を疎み、蘇我入鹿に殲滅を命ずる。

入鹿は巨勢徳太らを使って果たす。この恩賞として、入鹿の望む古人大兄皇子を次期天皇にと認めた。

これを知った皇極の同母弟の軽皇子は自分への芽が摘まれると焦燥し、軽皇子はブレーンである渡来系の僧旻や帰国した高向玄理らを使って、政権公約（改新之詔）を作成。皇極の熱望する新都市建設に積極的ではない蘇我に代わり、推進するとして皇極に翻意を促す。同時に部下であった三十一歳の中臣鎌足に目的達成のための手段を検討させた。

鎌足は蘇我倉山田石川麻呂、十九歳になっていた中大兄皇子を誘う。中大兄は叔父軽皇子に従うことで活路を見いだそうとした。

乙巳の変は皇極天皇の了承のもとで、三韓の使者が貢物を奉ずる儀式に合わせ、次期天皇を古人大兄皇子と指名するという口実で、古人大兄皇子と蘇我入鹿と呼ばれた。

蘇我入鹿は中大兄皇子や中臣鎌足に斬殺され、古人大兄皇子は一旦は逃げ帰ったが、翌日飛鳥寺へ投降。出家を願い出て、出家するも三カ月後には妻子ともども殺害されるのだが、この様子を見て、また説得されて蘇我蝦夷側の軍備は解かれる。（概略）乙巳の変の翌日皇極天皇は軽皇子に譲位をし、孝徳天皇が誕生する。

この事実は皇極も同意の事件であったことの何よりの証明になるとする。

《これらの書の他では、「三韓の儀」と偽って入鹿と古人大兄皇子を招き入れたと説く書が多い。外交の使の面前に於いての斬殺では、百済に対しては言い訳も立とうが、新羅に対しては考え難い。と私は考える。偽りの儀式であれば、皇極天皇は共同正犯とも言える》

多くの書は、皇極天皇は中大兄皇子に譲位をしようとしたが、中臣鎌足の助言を入れて軽皇子に皇位を譲ったとする。

この書は中大兄皇子が断ったとしても、鎌足の助言を受け入れたのでもなく、当時三十歳以上での即位が一般的であり、二十歳に満たない中大兄皇子は即位の条件を満たしてはいなかったとしている。

更にこの書は、古人大兄皇子、蘇我倉山田石川麻呂、有間皇子の謀反について、中大兄皇子が謀略を以って、殺めたのではないとする。

中大兄皇子は孝徳政權下では軍事担当でしか無く『書記』においても、密告の窓口であったり、尋問に関わるだけで、これは軍事担当としての役職の立場でしかない。古人大兄皇子や蘇我倉山田石川麻呂を怖れていたのは孝徳天皇であり、鎮圧に向かったのは全て孝徳天皇の手者だとし、有間皇子に狙われるとするなら父の仇となる斉明天皇だとする。

中大兄皇子（天智天皇）を冷酷非情としたかったのは、天智の子大友皇子を破った天武天皇や持統天皇が、一連の行為を当然とする空気を創りたかったとする。その一方で、天武天皇が造営した藤原の宮の大極殿の中軸線をはるか北に延長した線上に、六九九年（文武三年）持統天皇を継いだ文武天皇により天智陵が山背国の山科に造営される。「藤原京の北にあつて天皇を護る特別な御方」として古代中国における北極星を居所とした宇宙の支配者、地上を支配する皇帝を指名する天帝とされた。天智天皇を「王朝の開祖」に祭り上げる必要があつた人物が、「王朝の開祖」に成敗される大罪を犯したという筋書きを創りだしたとして、持統天皇の名を挙げ

る。

天智天皇の諡号「天命開別」天皇。「天命を受けて王朝を開いた御方」の意味であるが、これは天武天皇、持統天皇夫妻の歴史的犯罪である壬申の乱の真相を隠蔽するために捻り

だされたものであると記される。

『日本書記』からの引用として、舒明十三年（六四一）舒明天皇葬礼の際「東宮開別皇子」すなわち中大兄皇子は僅か十六歳で弔辞をのべたとするが、東宮とは皇太子のことだが、この時代皇太子の地位・制度は成立していない。その上、中大兄皇子（後の天智天皇）の諡号の一部が使われているが、死後の名前で呼ぶのは不自然だとする。

これは何を語ろうとしているのか。『書記』の改竄を疑つてくれというようにも取れる。

私の独断で少し横道にそれるが、穢多という差別民を作ったのは天武天皇と持統天皇ではないかと疑っている。壬申の乱までの推移、大友皇子（弘文天皇）や大津皇子の非業を語り伝わらぬように、天皇の穢れを生きている人間に移し、天皇を生き神様とする一方で、近づいただけでも穢れが移るとし、官衣を剥奪し、薄汚れた黒衣に無理やり着替えさせ、家族郎党をいわる鬼門の方角のあばら屋に隔離して伝承を防いだ。一瞬の間の暗転は、仲間うちにとつて壮絶な威嚇であつたであろう。

天武天皇以降この祭祀は繰り返し行われているとするのは、国書刊行会『被差別民とその部落の起こりと歴史』であるが、その記述は推測を期待するように読める程度である。もしそうであるならば、穢多とされる者は、天智・弘文帝の忠臣であつたとか、大津皇子の側近であつた者の可能性が高く、天武・持統が反抗の怖れがあると感じた者ではなか

ろうかと考える。これらの差別民は近畿地方に多く、この頃の大和朝廷の施政権の及ぶ、北は福島県あたり、南は宮崎県辺りまでに分布すると言われる。少なくとも沖繩などには存在しない。後の世に、豊臣秀吉が賤民までも機多と一緒にする事で拡大している。

後の時代、番太と呼ばれる村境を警護する差別民が姓を記した提灯を下げ、所轄する寺社から禁止される事例が江戸時代までに何回か確認できると年号、寺社名を入れて述べる。

脱線してしまったが、(1)(2)の書は、蘇我氏の罪に対しては在否、正反对だが、「改新之詔」があつたことでは一致する。

(2) によつて蘇我は大罪を犯してはいない。そして中大兄皇子の冷酷非情と言うか、非道が冤罪かもしれないと思うようにもなつてきたが、まだ、たくさんの疑問が残る。

(3) 蘇我の排斥は外交上の政争ではなかつたか

蘇我入鹿を斬殺し、すぐに蘇我蝦夷を討つたのは改新の爲だつたのだろうか。

伴造・トモ・部制の限界から、改新が必要であつたとしても、それは本当に蘇我入鹿が改新を拒んでいた訳ではなさそうだ。また、蘇我一族の責任に帰するものだろうか。

後に見る「部」を廃止して「評」を立てないと財務上立ち行かない状況であつたならば、蘇我の役職が大臣(現在であれば総理大臣?)であることを思えば、新しい宮殿造営に消

極的になるのは当然ではないのか。

中臣鎌足が百済からの渡来人説は多数の書が示す。中には百済からの人質として来日していた王子だと説く書すらある。乙巳の変後、難波に遷都し白村江の戦いに向かつたように、百済救済の手を差し伸べる。

乙巳の変は三韓の使者が貢物を持ってきた(三韓の調々貢物と言うより税に近かつた?)。新羅や高句麗との交流もあつただろうが、大和朝廷は百済との交流を大切にして来た。

私は蘇我が、大臣として新羅からの情報を、中大兄皇子や中臣鎌足よりも多く持ち、唐軍の強さを熟知していたとみたい。その為には百済からの救済要請に反対を唱えたのではないかの思いがある。この思いを強くしたのは、平凡社新書『神仏の起源と古代朝鮮』の中に「新羅から来た神―宇佐八幡をめぐって」があり、こう記されている。

「用明天皇の二年に内裏に入つた豊国法師はすでに神仏習合していた宇佐八幡の僧では無かつたかと考える。この僧を内裏に導き入れたのは蘇我馬子であり、大神比義なる人物を八幡宮に送り込んだのも馬子だからである」の記述がある。蘇我一族は大臣として、外交を進める上で他の政権中枢にいた人物より、外交・他国に関する幅広い情報を得ていたのではあるまいか。仏教を畏怖の対象から、親しまれる宗教にするため神仏習合を模索し、日本人の他国には見られない宗教観を導きだしたのは、蘇我によるものではないか。

当然それは宗教に限定されない、外交上の情報の収集もあつてしかるべきだ。百済の敵対する新羅・唐の連合軍の強大さを知り得る立場だったと考えるべきである。私は百済の救済要請は六六〇年（白雉三年）の一回だけとは考えない。五四八年新羅と連合し、高句麗へ攻め込むも、五五四年新羅と決裂、任那の高霊加羅、安羅と倭国の応援を得て戦うが、奇襲を受けて聖王は戦死。五五五年新羅真興王は任那の領土化を進め任那は滅亡。五七一年倭国は新羅に抗議し、領有権は失うも調の献上を約束させるなどの経緯があるが、百済は新羅に劣勢となっている。蘇我が百済救済要請に異を唱えても不思議ではない。百済一本槍の鎌足とは敵対する。鎌足は輕皇子の部下であり、中大兄との親交もあつた。

乙巳の変の後、第一番目の行事は難波への遷都である。私はいこれを百済救済の手付けとみたい。蘇我であれば防御の要害を築きたい場所であつたであろう。

白村江で敗北した朝廷は、庚午年籍の制度を創り、徴兵制度を採用すると同時に、百済からの逃亡將軍の協力を得て、朝鮮式水城や山城を築き、唐軍の来襲に備えることになるが、それに近い構築物がそれ以前に見られる。それが神護石と呼ばれるもので、福岡、佐賀、山口県に存在する。朝鮮式山城と異なるのは、木柵を巡らせていない事と、礎石のある建物が無いことだけで、類似の遺構である。

これを学研新書『戦国の城』は「神護石のことは『日本書紀』などの文献には全く出てこず、また発掘調査によつても、

いつ、誰によつて築かれたのかがわからない。これまで出されている説では「倭国大乱」の頃とするのが最も早く、次に五世紀頃、大和朝廷に反抗した地方の「クニ」の王が築いたとする。そしてもう一つの説は、次にみる朝鮮山城と同様、七世紀後半唐や新羅の侵攻に備えて築いたとするものである」として、「倭国大乱の時期では可能性が低い。地方のクニの王が築き、征服された後、七世紀になって朝廷が再利用したとみることが出来る。というのも神護石の分布状況を地図上にプロットすると、両者補い合っている関係がはっきりよみとれるからである」と、此処まで記述しながら、著者の感想としては宗教的な遺構ではないかと結論付けている。

朝鮮式水城・山城が主に瀬戸内にあるのに対し、神護石は外界に向けて造られている。蘇我馬子が物部守屋を滅ぼしたのが五八六年。乙巳の変で蘇我宗家の滅亡が六四五年。蘇我が物部の財を私物化との記事に対して、蘇我の邸宅、「上の宮門」「下の宮門」の発掘調査で、唐・新羅の侵攻から斑鳩の宮を護る位置に防御の設備を築いたものとするNHK・TVの特集があつた。この報道のように危機感を持っていたならば、遺構の形状などから唐・新羅の侵攻を恐れた蘇我が、知り得た情報から和式の山城を築こうと、この財を使って構築したのではあるまいかの念を持つ。

『日本書紀』は蘇我氏の功績を抹消する改竄を数多く行っているのは周知の事実である。その結果が聖德太子の偉大な功績となり、同時に七人の話を聞く事が出来たとされる。蘇

我が、唐・新羅の侵攻を憂慮し、対応していたなどと書けるものではない。地方の王の遺構を改造したのであれば、朝鮮山城の構築と併せて記載されていてもいいのではあるまいか。それは孝徳天皇や中大兄皇子の施策になるからである。

このように考えて来ると、乙巳の変で蘇我を倒したのは、大化の改新のためであつたとする教科書や従来の説は間違っている。蘇我が倒されたのは外交をめぐる意見の衝突から、百済を救援するための事件とみたい。『日本書紀』に古人大兄皇子が逃げ帰つての言「韓人が鞍作臣を殺しつ、吾が心痛し」は実行犯に韓人はいなかったとされている。その時代に於いても、天武天皇・あるいは書紀編纂者の中に「外交上の意見に食い違いがあつた」と暗示する者がいたのではなからうか。

孝徳天皇は中大兄皇子の策略で力を削がれる。皇極天皇による重祚、斉明天皇の登場となる。こんな頃に中大兄皇子の近辺では火災が相次ぐ。そして信州善光寺縁起には、皇極天皇が地獄で苦しむ図があり、善光寺の建立者が祭祀して救うがある。女帝としての斉明天皇から、権力は中大兄皇子へ既に移つていて、民衆は決して中大兄皇子を善者と見てはいなかったと思える。

(4) この稿を終えるに当たつて 講談社学術文庫②では、北九州で石斧の分業・流れ作業による優秀な製品が、北九州一円ばかりか、瀬戸内沿岸各所、

近畿難波あたりまで広く流通し、この稼ぎが大陸と外交を始められるような資財・軍事力を持てるようになったとの記述がある。私はこれに加えて、大陸を含めた寒冷化の波と、西日本でのカマドの発明による燃料需要の波が合ったように思うのだが、このような今迄知らなかった、具体的な指摘記述から学術文庫に惹かれた。

私は、乙巳の変や大化の改新の真相を③に期待したが、『日本書紀』の記述に沿った内容で落胆せざるを得なかった。同様に小学館『日本の歴史』や研秀出版『日本の歴史』など開いたが、この殻を破ることが出来ず、私の求める(虚構と史実)を鉄の歴史における百済や新羅との関わり。百済からは鉄塊として・製品としての交流であつて、製鉄、精錬の技術伝授は新羅から出雲、越前、琵琶湖から大和への道を知る。朝鮮の宗教、大陸と朝鮮の政情と倭国の事件との照合などを為して私の論を構築した。

大和と出雲の国譲りの話などは、天武帝の指示による『古事記』の記載だ。『日本書紀』もまた、同時期の天武帝の指示による。
おおくにぬしむこと

大國主命は大和の主権者で、東征して来た倭に敗れたのである。出雲大社の伝説は、倭の、いや、大和の政治の巧妙さを感じて余りある。ついでに言えば、伊勢神宮の外宮は、皇族ではなく地方の国の王を祭る。そして神宮の朝は外宮の神に食物を献上することに始まる。外宮の神の「その元」とは何か？

私は狗奴国^{くわこく}の王ではないかと考える。狗奴国は何処に。愛知、静岡西部、そして三重も含むのか。そう、三遠式銅鐸圏ではなからうか。大和との戦いは尾張一宮や渥美半島に残る戦禍がそれではないか。出雲同様敵対した王を神に祭り上げ、講和を得たのではなからうか。狗奴国の仲介を得て大和の支配は一挙に関東に及んだという想定である。まあ、今回はここまで話を抜けるのは止めよう。次の課題だ。

しかし、これは史実に基づいたものではないし、推理・推測の組み合わせでしかあり得ない。いつの日にか、こんな学説が陽の目を見ることを祈ってこの稿を閉じる。

参考にした書籍、他

○講談社学術文庫『日本の歴史』③大王から天皇へ 熊谷公男著を主とする各刊

○洋泉社『歴史新書』日本書紀の虚構と史実 遠山美都男著

○平凡社新書『神社の起源と古代朝鮮』岡谷公二著

○学研新書『戦国の城』小和田哲男著

以上を主として次の書籍も参考にした。

○小学館『日本の歴史』

○研秀出版『日本の歴史』②飛鳥古京

○学習研究社『グランドハイベスト』⑦日本の歴史

○学習研究社『エリア教科事典』①日本史

○祥伝社新書『謎の古代豪族葛城氏』平林章仁著

○新潮文庫『蘇我氏の正体』関裕二著

○新潮文庫『藤原氏の正体』関裕二著

○新潮文庫『物部氏の正体』関裕二著

○角川書店『古代天皇の誕生』吉村武彦著

○日本実業出版『日本・中国・朝鮮 東アジア三国志』田中俊明監修

○国書刊行会『被差別民とその部落の起こりと歴史』山中順雅著

○吉川弘文館『古代の天皇継承』遠山美都男著

○中公新書『壬申の乱』遠山美都男著

○その他複数の書の記憶など

○NHK・TVの特集番組など

(北区)

中西美沙子

思想家鶴見俊輔は「書くこと」の意味を度々説いています。「紋切型」にならない文章。「いわないこと」と「いえないこと」の根にあるものを考えて文章にする。書きたいという「駆り立てる力」に惹かれて書く。だが書くためのプランが、その通りにすすんだら失敗だ。そのようなことをいっています。

言い換えれば、文章が平明で分かり易いこと、世界を抑制の利いた目で見ること、そして書くことに恐れを持つことを鶴見はいつているのです。

評論部門を担当していて、「書くこと」の大切さと同時に「論ずること」の困難を感じてなりません。それは投稿者の作品を、どのように消化して昇華できるかということです。また自分の中にある「思い込み」や鶴見の嫌う「紋切型」で投稿者作品を見ていないかという恐れです。

大震災や戦争などをテーマにした「小説」や「随筆」、「評論」にも「紋切型」の思考が窺えることがあります。震災や戦争体験を文章化することに意味が置かれていて、書かれていることの通俗性への批判が薄いと思われるのです。

時代や歴史が強く表れる処に焦点を当てることは、魅力ですが、危険でもあります。それは得てして「情緒」に傾いて

しまうからではないでしょうか。どの時代に生きる人も「歴史」の「当事者」であり、市井の人々の何気ない平凡な生き方を貫徹しているのも「歴史」の重さだと思えてなりません。震災や戦争という「大きな枠」にだけ文学に興味があるのではなく、その枠から外れた処にこそ文学の意味があると。今年の応募作品は、すべて歴史に関わるものでした。今を見つめるには、遠い時への視線が求められているからでしょうか。

「続 キリシタン大名 高山右近」

筆者の文章から受ける印象は、削ぎ落とされた精神性です。キリシタン大名である高山右近の生涯を抑制のある文章で描くことで、右近にとつての「信」への強さと筆者の透明な精神が重なるような世界が見えてくるようでした。文章は「人」そのものを表すといいますが、筆者の「書くこと」への意志の強さを、私は読みながら「贈与」されたような思いに捉われました。

要望ですが、右近が関わったその当時の合戦模様を簡略にして、茶会や家族関係など「人間的」な世界を丁寧に描くことも、右近の生き方、そしてキリスト教への思いが、より理解されることになるのではないのでしょうか。

次にどのようなテーマで論がなされるか、たのしみです。

「大化の改新の謎」

日本の歴史の中でも「大化の改新」は極めて重要な事件でした。定型化した「大化の改新」への疑問を分析したもので、読み進めて行くと、魅力的な処が幾つか置かれ歴史の重層性が改めて理解されました。古代史の魅力はその重層性を拓くところにあるのでしょう。

蘇我入鹿と藤原鎌足という帰化人同士の確執。百済と新羅を巡っての政争などが、種々の引用を基に論じられていきます。筆者が「大化の改新」が成された真実に迫る意気込みを感じました。天武時代に「被差別民」が作られたという論や朝鮮式水城・山城への見解など興味深いものでした。

知識を援用するのは、歴史論にとって重要なものですが、論点を絞らないと、重要なテーマが疎外されます。論じられているものは、どれも興味深いものですが、筆者の「大化の改新」への疑問が、どこか散漫になったように思えます。以前三韓時代の仏教を読んだことがあります。仏教が国家に与えた力とその背後にある権力への意志を中心にして「大化の改新」を論ずると、より真実に迫ることができるのではないかと考えます。

「敗者の心理」

戦国時代から現代まで「敗者」とそこに在る「精神の機微」を筆者は論じています。小説や評論などの優れた文学は、「負」への魔力と憧憬を根にして描かれています。そこに描かれる人物の多くは「敗者」です。私たちが「敗者」に惹かれるのは、人間の心の中にある挫折と抗いにあるといえます。

筆者は「敗者」であった武田勝頼を中心にして論じ、なぜ「敗者」となったかを丁寧に考察しています。歴史的資料を使って武田家が滅ぶ要因を分析しているのですが、「敗者の心理」が、いまひとつ明確に見えてきません。理由は論述の方法にあるようです。歴史的通史が網羅的に表現されていて、武田勝頼の「敗者の心理」が普遍的なものとなっていない処です。

論の構成を考えて推敲していけば、より「敗者の心理」が理解されたと考えます。今の時代はどこか「勝者」への思いが強く表れています。危険な兆候でもあります。筆者が描こうとしていた「敗者の心理」は、これからの私たちの未来を指し示すものとなるでしょう。再度「敗者の心理」にトライすることを期待します。

随筆

〔市民文芸賞〕

片瀬の思い出

中津川久子

かれこれ六十年も前の話だ。実家は純農村地帯にあつて、畑のある平^{ひら}に出るにはどこの家も裏山の急坂を登らなければならぬ。車はもちろんのこと、耕運機もない時代である。

ある朝、肥出しの臭いで目がさめた。自分の排泄物も含まれているとはいへ、強烈な臭いを放っている。だが、これはどこでも日常的なことであつて、臭いにも慣れ^{なれ}つた。

「ひさこ、片瀬^{かたせ}まで後押ししとくりよ」
四年生ぐらいになると父からたびたび声がかかった。当てにされていると思うと、少し大人になれた気がする。片瀬と

は地名で、平にあと一歩という地点である。手ぶらでも大変な坂道、荷を運ぶとなると二十分はかかった。いつもそこまですと決まっていた。

父はしょう油で煮しめたような手ぬぐいで汗を拭くと、手ぬぐいの両端を持ってクルクルと縋り、ひょいっと鉢巻きにしてしまう。その早技は見事なもので、手品師のようにみえた。私も見よう見真似でやってみるのだが到底かなわな

い。
「うん、いいよ」

ゴム草履をつつかけてリヤカーの後に回る。肥桶を、三、四本積んだリヤカー

は予想以上に重い。石ころだらけの道がいつそう力を奪う。なんども石ぐるまに取られて、そのたびにひざ小僧をすりむく。

「唾でもつけとけえ、すぐ治るずらに」
後方にいる私が見えるはずがないのに、いつも見えていた。父の特効薬はふしぎと効いた。特効薬は、後に自分の子育てにも発揮する。小柄な父はいつそう小さくなって地面を這う。頭の鉢巻きが肥桶のあわいにちらちらと覗く。

大雨の後などは、まさに悪路との闘いだ。道が大きく窪んでいたり、木々の根がむき出しになっていたりして容易に進めない。

最初の曲り角には同級生のなっちゃん家がある。いつもドキドキする場所だ。子どもながらに、肥の後押しだけは恥ずかしいものであつた。どうかなっちゃんに見られませうように、と祈りながらもただ身を低くする。それでなくても肥の飛沫を浴びるのに、さらに浴びやすくなるというものだ。

「ひさこー、押してるかー」

どこにそんな力が潜んでいるかと思うくらい罵声が飛んでくる。押してるよう、と返答したところで、父にはお見通しだった。

なっちゃん家を過ぎると、左側ののり面に二つの防空壕が大きな口を開けて待っている。草木の蔓が簾のように塞いでいた。高学年ともなると、背丈ほどの高さまでよじ上って怖いもの見たさに侵入だ。なっちゃんとの探検、こっことも懐かしい。

この辺は、椎や、くりの木などの雑木林に覆われていて昼間でも薄暗い。そこへ、この壕がさらに不気味さをあおっている。

雑木林を抜けると、ぱーっとひらけた片瀬に出る。眼下には部落が臨め、斜面には千枚田が広がっている。ここで、人も牛もみなひと息つく。

片瀬は野良に出た父母の帰りを待つ所でもある。部落にたった一軒だけサラリーマンの家があって、その家の煙突からは早い時間から煙が上がっていた。

ことに、夏の日がまだ沈まないうちか

らゆつたりと流れているさまは、ひどくうらやましく思えた。明るいうちの夕餉、家族そろつての夕涼みなどはあり得ないことであったから。

「百姓はさらいだ」

にらみ返した煙に、また目が沁みた。片瀬まで来ると、父はようやく白い齒を見せた。

「ひさこ助かったよ、頑張ったなあ」

あの手ぬぐいで顔をひと撫でして労ってくれる。なんだか気恥ずかしい思いと、力になったことの嬉しさがごちゃまぜになった。

「うん」

飛びつきりいい顔して、くるつと背を向けると一気に駆け下りた。

朝食前のひと仕事を、この地の百姓ことばでは、「おちやのこまーに、ちよつくらやつて来すよ」となる。

おちやのこまーに働いてきたことを兄に自慢すると、必ず、

「お父っさと浜松の高町まで肥取りに行つたとき、『天ぷらでも食べてくか』と言つてくれて初めて食堂に入っただよ。」

あんときの天ぷら、うんまかったなあ」と、目を細めるのであった。

裏山の急坂は、もうコンクリートで固められ、千枚田は東名高速道路にもつていかれてしまった。

けれども、今も片瀬に立つと、おさげの自分が、そして、あの肥の臭いまでもが妙に愛おしく思い出されるのだ。

(南区)

家族通信

大庭 拓郎

かみさんの月命日に捧げる冊子が八十三号になった。近況報告を兼ねた家族通信だ。いつの間にか、作文と絵手紙のコラボになった。息子一家と義姉に読んでもらっている。

家族通信には、かみさんが残した絵手紙に自作の短歌を五十首ほど添えている。この六年間の累計が三千六百首を優に越えた。一念発起して、「紙飛行機」と名付けた歌集に収めることにした。「おじぎ草」「秋明菊」「寒椿」に続く手作り歌集の第四弾である。

読み返しながら選歌するのてなかなかはかどらないが、楽しい作業だ。紙切れに書き出して編集し、パソコンに打ち込んで作る。ご飯を供えながら朗詠してい

る。声を張り上げるので、晩酌がすこぶる旨い。ぜひ、お盆に間に合わせたい。かみさんに約束した週三日の休肝日も定着した。お陰で、日々の生活に張りが生まれた。

初めて投稿歌が入選したのは十六年前で、かみさんが手巻き寿司で祝ってくれた。葦原の池に戻った鴨の青首を詠んだ一首である。見よう見まねでやる拙いものだから、まさに奇跡としか言いようがない。かみさんは絵手紙を描いて、「おかえりなさい。元気で楽しんでいってね」と添えてくれた。

生れる歌は紙切れに書いて、雑記帳に貼り付けておく。かみさんは手ごわい病魔と闘いながら、この歌を繰り返し何度

も読んでくれた。「お父さん、歌をやめないでね」が遺言になった。

かみさんが原稿を読んできた作文が文芸誌の特賞に輝いた。かみさんがこしらえた月見団子を窓辺で覗き込むカマキリのことを書いた。旅立ちの一年後だった。崇高なパワーを注入してくれたのに違いな。家族通信の増刊号に賞状のコピーと一緒に掲載した。

憧れの高倉健主演の『あなたへ』に、主人公夫妻が訪れた竹田城址が映った。かみさんの雰囲気によく似た女優さんに見惚れて、荒城の月短歌大会に投稿した。半年ほどして、藪から棒に招待状が無い込んだ。応募の歌が特選になったのだ。是非とも表彰式に来て下さいとのことだった。かみさんの写真を懷に、浜松から汽車を何度も乗り継いで出掛けた。朝六時に発ち、午後三時過ぎに着いた。きらびやかに飾られた壇上で、格別大きな賞状が授与された。狐につままれな思いで頂いた。「お母さん、もらったぞ!」と叫びそうになった。市長さんが何を話し掛けてくれたのか、全く覚えて

いない。賞状を抱えて、竹田城址と滝廉太郎記念館を訪ねた。四泊五日の大旅行を終えて茶の間で飲んでみると、副賞の久住高原肉が届いた。息を呑む霜降りの超高級品だった。家族通信は荒城の月短歌大会一色になった。

歌碑探訪もライフワークになった。県内を踏破して、旅先の歌碑巡りを楽しんでいる。岡山の後樂園で出会った中村憲吉歌碑に魅せられて、山深い生家を訪ねた。日本平山頂の歌碑も忘れられない。英訳の副碑が並び立ち、防人の歌が刻まれている。かみさんと息子一家の車で訪ねた釈迦空歌碑は、我が短歌の源泉になった。佐久間ダム近くの峠に建っている。車で半日の山奥だ。

今もなお健康寿命を享受出来るのは、かみさんが残した「お父さんの料理帳」のお陰である。かみさんの牡丹餅を書いた作文も文芸賞になった。かみさんが透明な存在になった五年目の春だった。牡丹餅のレシピを子孫に伝えることが出来て、本当に嬉しい。

不思議なことに、家族通信が打ち出の

小槌になった。表彰状が十五枚も生れ、入選歌の合計が百八十三に達した。文芸作品は然る事ながら、友達の輪がぐんと広がった。文芸誌を読んでもくれた友人と公民館を訪ねた。平均年齢が七十を超える人達のサークルだった。早速、英語クラブに加えてもらった。

毎月二回だが、日常の些事を離れて忘我の境に酔いしれる。初めて英語に出会った少年時代のわくわく感が鮮やかに蘇る。停年後の余暇に挑む仲間と昔取った杵柄を磨き合う。今日は、「I have a sweet tooth」を辞書で発見した。甘党の英語版だ。心地よいカルチャーショックが、何とも楽しい。ルーベを片手に辞書と格闘するのは、心身の鍛錬になるに違いない。これからは、英語の日記にも挑戦したい。

きらめくビッグバンに触発されて、貝殻絵を始めた。かみさんの絵手紙に閃いて、編み出した画法である。浜辺で拾った貝殻を、カナヅチで小突いて粉末にする。そして、絵の具に混ぜて木工用接着剤で練り合わせる。それから、竹串で塗

り絵の要領で下絵に彩色を施す。程良く乾いたら、更に塗り重ねる。いくら塗っても崩れないので、えも言われぬ立体感が醸し出される。

今年も、かみさんのおじぎ草が咲き出した。種子を春先に蒔くと、秋彼岸の頃に絶好調になる。そっと触れて話し掛けると、爽やかな会釈を返してくれる。しつこいと、そっぽをむいて眠ってしまふ。狸寝入りの名人である。しばらくすると、また笑顔になる。ベそをかくと、優しく寄り添ってくれる。

祥月命日号は、おじぎ草の貝殻絵が満載になる。家族通信が息子と作った棚をほのぼのと彩る。読む度に、勇氣と元気が湧いてくる。いつしか、茶の間のオアシスになった。

(南区)

「入選」

痛みが転移

石山 武

残暑きびしい八月末のこと、妻とスーパーへ買物に行く。妻とも「平成二十八年四月七日」で結婚五十年の金婚式を迎えた。

娘も嫁いで二人暮らしも十五年を過ぎたその娘に、

「お母さんたちね！ 四月七日で結婚五十年の金婚式になるよ！」

妻が電話したところその反応は？
「ふーん、そうなの！」

何んとも素つけ無い短いコメントに
「ね！ 親が金婚式って言ってるだにね！」

「まあ！ そんなもんだよ。金婚式なんかより子供のことが気になるら、俺たちだけの地味な二人だけの金婚式祝をやるか！」

私なりの気遣いをしたが、言葉だけで何んの祝もしていない。

娘との電話から四カ月も過ぎたが、スーパーに着くまで妻のボヤキは消えなかった。

金婚式？ も過ぎて、七月には私も七十五歳の後期高齢者となった。

この為に最近骨のある魚はあまり食べることが無い。

此の日のスーパーは平日の午後のせいか、買物客も少ない店内に入ると、骨を取った魚が並ぶコーナーに行く。

「どれにしようかな！」と、アジ、サバ、カレイと骨無し魚を見ているうちに、骨付の魚を敬遠するきつかけになった二年ほど前の「赤魚骨騒動？」の悪夢が蘇ってきた。

いつもながらの妻と夜の食事中であった。

此の後にやってくるハッピーングを知る由も無く久しぶりに魚の煮付を食べていた。

「こりゃ！ 美味しい魚だなんて言う魚

だ」

「そう！ これ赤魚って言う魚だね、安かったけど本当に美味しいよね」

「安物買いの追っかけ」を自認する妻の手料理だけに「美味しい」の三文字は減多に言ったことが無い。

私の久しぶりになる褒め言葉に満更でも無い顔に、私の箸は次の赤魚へと移って行く。

久しぶりの幸福ムード？ も「ハイこまで」。「美味しい」と食べていたが急に喉に違和感を覚える。

「何んだか喉が変だな！ 骨が喉に引っかかったみたいだな！ こりゃ！ おかしいぞ」

これ迄の笑顔が突然に消えた亭主に、
「お父さん、それじゃあ！ 御飯を丸呑みにしてみたら、そうすりゃ！ 取れるで」

「そうだったな！ 前にもそうだったからな」

過去の体験を思い出して飯粒の丸飲みを始めしてみる。軽く考えての飯粒丸飲みを繰返してみるが、前回と異り喉の違和

感は無くならない。

だがこんな状態でも一晩寝て朝には痛みが無くなったことを思い出して、翌朝に望みを託して床に着く。

喉が気になって、いつもより目覚めは早い。痛みはどうかと「ゴクリ」とツバを飲み込んでみるが痛みは昨夕より増している。

朝から再び飯粒の丸飲みを繰り返している亭主にウンザリしたのか、

「お父さん、夕迎からやつても駄目だからお医者さんへ行くしかないって」

妻の駄目押によって漸く近所の耳鼻科に初めて行く。待合室には数名の人が診察を待っている。三十分ほどして名前を呼ばれた。

喉を診察した医師から、

「これは喉の奥になりますから、カメラを使わないと骨は取れませんね!」

医師の言葉に、数年前の声が枯れて別の耳鼻科を受診した悪夢が蘇って来た。

まだ開院して日が浅い故か患者の姿も見られずに診察室へ。病状を訴える

と若い医師は鼻からカメラを入れたが、

喉をカメラでいじくり廻すが、時間が長く咳込みそうになるのをじつと「ガマン、ガマン」。

やっとカメラが出た所で、

「まあ! 心配は無いと思いますが、様子を見ましょう。何かあったらまた来て下さい」

だが二度と行かず仕舞に、声枯も数日後には回復する。

その後、耳鼻科医も病気で亡くなり病院の建物も取り払われて現在は三軒の住宅にと様変わりしている。

カメラと言われて声枯の悪夢が蘇って体を固くして目を閉じた。その心配も取越苦勞でカメラもスムーズに入り始めてからわずかの時間で、

「終りましたから胸元の処に右手の平を上にして出して下さい」

看護師さんの声に、何十回目の唾を飲み込んでみるが、あれほどに悩ませた痛みは嘘のように消えているのを確認してから、「そうーと」目を開けて手の平を

見る。

そこに超ミニサイズの骨の一つ確認したと同時に「こいつが痛みの発信元か!」と骨を見ているうちに無性に腹が立った。

すると医師が申訳なさそうに、

「石山さんの場合は、カメラを使って骨を取ったから手術ということ、ちょっと高くなって七千円です」

後期高齢となり、これまでに行った病院数は沢山あるが、診察後の医師から診療費を告げられたのは初めてだ。

更に医師の言った七千円に、財布の中が気になり再び体が固くなる。同時に喉から財布に痛みが転移した。

診察を終えて、改めて財布を確認すると五千円札だけ。痛みは更に増してきた。

待合室の人たちを気にしながら、受付で裏事情をボソボソと伝えると。

「良いですよ、支払いは別に今日で無くても」

女の子の声に、私は一斉注目をされ痛みは更に増して来た。

私は下を向いて逃げるように家に帰

り、金額を用意して病院への支払いを済ませた。

喉と財布の痛みから解放された日の夕食、その夜も粗食の並ぶテーブルを見て、「七千円もありや……もつと上等な魚が食べれたのにな！ まったく赤魚野郎はまいった」

「そうだよね！ 七千円って言やあ……赤魚ならどれくらい食べられるかわからんものね」

共に仇敵とも言える赤魚に、まだ未練タップリの女房殿の言葉に、私は喉のあたりが気になってきた。

(東区)

「入選」

一人勝手に直虎フィーパー

北山七生

平成二九年のNHK大河ドラマが、自分の居住地である地元・井伊谷の女城主だった井伊直虎を主人公にした物になると発表されて以来、俄かに気分が高揚してきた。

金は無いが暇だけはたっぷりとある年金生活者の小生のことである。連日、近所のゆかりの地を訪ね歩いては、日増しに熱くなってきた。

そもそもこの辺り一帯は、今でこそ龍潭寺を筆頭に奥浜名湖の観光重点地区となっているが、今から三六年前、妻の地元だった当地に転入して来て家を構えた頃は、まだ引佐郡引佐町の一つの字に過ぎず、なかなか浜松市内の者にさえも馴染みの薄い土地柄だった。

当時、勤務先の旧市街地の同僚達から

「イイダニって何処？ あっ ごめん。イイノヤか……」「追分、三方原より、まだ奥の奥だよねえ？」と、小馬鹿にしたように言われ、マイホームの完成時も、「だいたい、そこらの土地ならバカ安いだら」なんて陰口を叩かれ、悔しい思いをさせられたものであった。

小生は、そんな連中に、「コラッ 井伊谷は恐れ多くも、徳川四天王の井伊家発祥の地でなあ。よっぽど曳馬だかへチマだか、そんな浜松より歴史があったでな」と、言い返していたが、それでも、「うんっ？」と首を傾げられるのが、関の山だった。

かように由緒ある土地柄ながら、つい近年までは浜松市内の者にさえも「井伊谷って何処？」なんて言われていたのが、こうして一躍、全国に名を知られるようになるのだから、一昔前のことを思うと、まるで夢みたいいな痛快な話であった。

小生ほどの熱気は無いが、元々、井伊谷生まれで育ちの妻も少なからず興味は抱いているようで、ゆかりの地巡りには

一緒に付き合ってきたし、妻は妻なりに主な登場人物と、それをドラマで演じる俳優のリストを作成したりして、それに楽しんでる様子だった。こうして共通の話題は夫婦円満にも、一役買ってくれているのであった。

ドラマの内容は、井伊家のお家断絶の危機に家督を守るために、女の身ながら便宜上、直虎と男名を名乗り出家し、自身の結婚は諦め、まだ幼少だった元許嫁の子、後の井伊直政を徳川家筆頭の重臣になるまでに育て上げた女の物語である。因みにその主役の直虎は、柴咲コウが演じる。

★

その大河ドラマで数年前には、やはり女性を主人公にした「八重の桜」というのがあった。綾瀬はるか主演で京都の同志社を設立した新島襄、八重夫妻を題材にしたもので、その時、インターネットの関連資料の中に、その八重と元同志社女子専門学校（現女子大）の校長だった小生の大叔母が、肩を並べて一緒に写真に納まっている一枚を発見した。

自分の幼少期に京都の実家で、この大叔母と一緒に暮らしていたことがあった小生は、この時も少し興奮して、このことを周りに吹聴してみたくて、うずうずしていた。

だがこの時は息子から「それは下手に口に出さない方がいいよ。博士の伯父さんが言う分には、まだ解るけど、オヤジが言うのは恥ずかしいだけだろう」と窘められて、とうとうこの件を口外するとは叶わなかった。

たしかに大学教授だった兄が語るのならまだしも、ずっとしがない安サラーマンだった小生が、そんなことを云っても「うんっ？ で、そう言うお前は何だ？」と嘲笑されて、気恥ずかしい思いをするだけだろうという理屈だった。

しかし、そういう意味でも今回の件ばかりは、甲子園へ初出場を決めた地元の高校を、同じ郷里の一員として純粹に郷土愛として応援する様なものなのである。従って、この件に声高になる分には、何らおこがましいことでも後ろめたいことでも無いのであった。

現に妻側の地元の親戚同士の法事の席や、班（隣組）の奉仕作業で近所の人達と顔を合わせる度に、必ず直虎のことも話題に挙げ盛り上がった。勿論、この話題で不愉快になる人もいなかった。

★

ただここにきて一抹の心配もある。今流行りの若者向けのゲームで、戦国物が好きなゲーマーとか、歴女たちには直虎も魅力的なキャラクターとして、よく知られているらしいが、端から「うんっ、直虎って？」なんて年寄も全国には数多くいることだろう。

かくなる上は、せめて、NHK大河ドラマ史上、最悪の視聴率。唯一、高いのは、浜松市のしかも北部限定の一部地域だけ……なんてことになるまいことを、陰ながら切に祈るばかりである。

また、これは余談だが、「そう云えば、家には昔から、ひとり強くて怖い直虎がいたなあ……」と、つくづく感慨深く思っている今日この頃である。

（北区）

「入選」

四国遍路

サルレン カムイ

四月。東京に住む娘から電話がかかった。妻が出たのだが、会話しないまま受話器を私に渡した。

「お父さん、赤ちゃんが出来ました」
私が、四国霊場八十八ヶ所、
巡礼の旅に起つ前夜だった。

私は五年前、松山の51番札所、
「石手寺」の前で暮らし、長男が産まれた。あれから三十年余り、
その地を訪ねてみたくなったからだ。

春

渦潮を跨ぐと、

夾竹桃、枝垂れ桜、菜の花

身も心も洗われる気。

杉木立の間に延びる参道を歩き、

沢山のお遍路さんが

踏みしめたであろう石畳を、ゆっくりと登る。

〳四国路の春は

お遍路さんの

鈴の音と共に やって来ます〳

周りは一ダースの絵具色

夏

汗汗々々 首に巻いたタオルが重い。

接待所で出会った、

白装束の若い女性が呟く。

「裏切られたから……」と。

足袋と草履は泥まみれ、遠くを見ていた。

八十八ヶ寺を100回以上も巡ったという

老婆に出会った。

「讃岐うどんを食ってけ……」

極彩色の納経札を頂いた。

〳ゆらゆらと

木洩れ日揺れる

遍路道〳

周りは一ダースの空と海

秋

石手寺は寂しかった。

土産物を売る店に客は居なかった。
88番札所、「大窪寺」で満願成就。

〳結願も

別れ難しや 秋遍路〳

周りは一ダースの紅葉色

海を渡って高野山へ。

瀬戸内海の風は冷たかった。

でも、出会った人達は皆暖かった。

宿坊に泊り「授戒の儀」を受け、

弘法大師の弟子を許された。

十一月、一年近くの四国遍路を終え

浜松に戻ると、間もなく

ピンクに瞬く留守番電話、

はずんだ娘の声

「女の子が産まりました。」

赤ちゃんも私も元気です。

お父さん、お母さんありがとう〳

(南区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

一病息災

阪口佳寿子

「あなた、私が命の恩人になるかもよ。今日行くのよ。今日よ」

その日、朝一番の電話は検診を済る私へ友人Kさんの、私の身を心から案じてくれている強い言葉だった。何とも無ければ、それはそれでいいのだから、とも。

もしかしたら……と私が少しだけ危惧しているのと同じ病気で、以前手術した経験を持つ彼女なればこそその言葉だった。六月末、重い腰をやつと上げ受診した。

さあ、それからが大変だった。私の大腸の中に、癌が実に立派に育っていることが判明したのである。ただの体調不良と、その都度何とかやり過ごしていた腹痛が、この腫瘍のせいだったなんて……。少しだけ危惧していた病が的中し

ていたなんて……。

更に幾つかの検査を経て、「腹腔鏡下右半結腸切除術」という手術を受けることになった。七月、猛暑のさなかでのことである。

食事、運動、ストレス等、生活習慣のどれをとっても合格点のつもりでいたから、私の体に癌ができる訳が無い、と半ば信じ込んでいた。丈夫で元気な体で永い年月を過ごしてきたので、健康ということに対して、自信過剰というか、不遜ともいえるような思いを持っていたのだ。

しかし、内視鏡検査によって撮られた大腸内の写真を見ればもう疑う余地はなかった。

日本人の二人に一人は癌になると言われて久しいが、私もその、癌になる方の「一人」になっていたのである。あらあら……と思うしかなかった。

早速、Kさんにことの次第と感謝の電話をしたのは、言うまでもない。

夫を六年前に送り、二人の子供たちは、それぞれ家庭を持ち、独り暮らしの

身軽な中で、入院することについての気掛りはない。七十年を越えて生きて来た人生を見つめ直す良い機会になるのかも知れない、と自分自身にゆったり向き合ってみた。

詳しい検査結果が出てから入院する日まででありがたいことに十日ほどあった。体調は最悪だったけれど、その間にその先に向かつての「準備」のようなことができた。

もしも、何らかの理由で生還が出来なかった場合のことでも当然考える。それぞれ多忙な子供たちに寄ってもらった日もあった。

棺に寝かすには、この着物を着せてね。帯はこれを。副えるものはこれとこれ……。厳しい現実が目の前に迫っているから、とても手際よく事が進む。

夫を送った後、時々エンディングノートに書き込んだりしていたが、更に詳しく具体的に書き加えることもできた。

病室の窓の下に、炎天の中花壇の整備をする人がいる。生還したら、あんなことも、こんなこともしようなあ……。で

きるなあ……。何か他に、し残したことであるかな……。そういえば、今の私に、生きていなければならぬ程のことは何もないな。

ふと、そう思いついた時、なんだか気分がとても軽くなって、運よく生還できたなら、新しい自分（ちよっと大げさだけれど）になれそうな、そんな気さえして、楽な気持ちで手術室に向かうことができた。午後一時半だった。

人の声が聞こえる。遠くから私を呼ぶ声がある。その声がだんだん近づいてくる。ふう……と意識が戻ってきた。

看護師さんが「手術、無事終わりましたよ。お疲れ様ね」と、眠っていただけの私を、搞ってくださいました。長時間の手術に良く耐えた、と褒めてもくださった。当初の予想より随分時間がかかってしまったそうで、終わったのは深夜になっていた。

こんな時間まで、先生も看護師さんも私のために心血を注いってくださいている。そして、子供たちも心細かっただろ

うに、終わるまで待つてくれた。ありがとう……。

生還できたことは勿論嬉しいが、それ以上に、こんなに皆さんが私に濃く関わってくださいていることが嬉しくて、涙が溢れ出た。感謝の念でいっぱいこの想いを、感覚を、決して忘れないよう、そして、折々思い出そうと、再び遠退いて行く意識の中で心に固く誓った。

お蔭さまでその後、順調に快復の一途をたどっている。「一病息災」っていうものかも知れない、と素直に思えるようになった。これは私の中の、大きな気付き、である。何より、病氣や健康に対して、思慮深く謙虚になれるのだ。

以前、無病息災も勿論いいけれど、一病息災のほうが云々……と聞いたことがある。しかし、その頃は、何か腑に落ちない想いがしていた。「一病」が無ければそれに越したことはないのではないか、と思っていたのだ。

いつも健康（なつもり）で元気だった私は、それが自信過剰となってしまう、今回の受診の遅れを引き出してしまった

のだから。

手術する前に想った、「新しい自分」というものにはなかなかないけれど、この夏のこの一大体験は、先々に続く「老後」という永い永い（だらう）時間を、より濃く、より深く過ごして行けるような気がする。

（中区）

「入選」

隣のお爺さん

前田 繁喜

小学校低学年だった一九五〇年代前半、隣のお爺さんが、自分の家の玄関の横にドカッと腰を下ろして座っていることが多かった。遊ぶとき、その前を通った。お爺さんは、手拭いでねじり鉢巻きをして、白い無精髭を生やし、頭の毛は短く、白かった。お爺さんの歳はハッキリわからなかったが、七十歳は過ぎていたと思う。耳が遠いこともあり、大きな声を出して話し、大きな声で話さないと聞こえなかった。あのようなお爺さんにはならないし、なることもないだろうと思っていた。

二〇一六年六月、ムハメド・アリが七十四歳で亡くなった。一九六四年に世界ヘビー級の王者になった。私が二十代前半の頃である。世界で敵なしの強さを

誇った彼が、晩年にはパーキンソン病になり、杖をつかなければ歩けない状態になった。

「銀も金も玉も何せむに、勝れる宝子に及かめやも」と山上憶良が歌った。彼は晩年、小さい子どもが世の宝に見えてきたという。方丈記を書いた、鴨長明の随筆「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」を思う。

人は誰でも歳を加えれば病気になる、体が衰えて、やがては亡くなっていく。私もそのような歳になった。既に七十歳を過ぎて、耳は遠くなり、頭の毛が白くなり、薄くなった。ムハメド・アリや山上憶良や鴨長明のことがよく分かる年代になり、「隣のお爺さん」のようになってしまった。その頃、想像もできなかったことが今、現実となっている。

「与えられた命や、一つ一つ、一時一時を大切にしていかなければ一生を終えない」と思っている。

(中区)

たかはたけいこ

書く力

毎年、応募原稿を下読みするのだが、今年ほど時間を費やしたことはなかった。そうして選考に今年ほど悩んだこともなかった。粒ぞろいだったからだ。文章力、表現力がこまで高い作品群に出会ったのは選考委員を引き受けて以来、初めてのことだった。

このため例年なら、入選できる作品を落としてしまったことがもったいなくてたまらない。選にもれた方は懲りずに来年も挑戦して欲しい。

原稿を読みながら、改めて「生きることとはなにか」を自分に問いかけていた。老い、病、死……。

産れてきた人はやがて死ぬ。当たり前のことが頭ではわかっていても感覚ではわかっていない。けれどその事実が気づいた人がペンをとり、自分が生きてきた証しを残そうとしている。

今年度の選考で、私は文章を書き残そうとする人たちの思いが、なんと力強いものかを改めて知り、惜しくも選外の人たちのタイトルと講評を共に掲載させてもらった。筆者が書

き残したという印を、なんとしても今年度の浜松市民文芸誌のなかに残したかったからだ。

市民文芸賞

片瀬の思い出

蛇口をひねると水だけでなく、お湯も出る。ガスコンロのスイッチを入れればガスに火が点く。壁のスイッチを押せば夜、明りがともる。用を足した後、レバーを引けば排泄物は下水へと流れていく。道路は舗装されている。

今、私たちが当たり前に享受しているインフラはここ六十年間で整備されたものだということを、本編を読んで改めて気づかされた。そうして私もまた六十年前の暮らし、家族、周りの人たちがよみがえってきた。

私たちが得たものと失ったものを本編に教えられた。

家族通信

講師を努めさせてもらっている文章教室で、私は「自慢話を書かないでください」と言ってるのだが、この文章には負けた。いかに妻を愛していたか。筆者に文章力があるか。継続力があるかが、すると描かれていて、なんとまあ、いけしゃあしゃあと描くことかと思うのだが、つい読んでしまう作品だ。筆者の文章力はもちろん、肩に力が入っていない等身大の生き方が描かれているからこそ、読者を納得させる。

入選

痛みが転移

筆者と結婚五十年を迎えた奥さんとの絶妙なやりとりが巧みな作品に仕上がった。共に生きてきた五十年の年月のなかに、本編に描かれていない夫婦や家族の事件が起きた。ひとつひとつを乗り越えてきて、今をこれからをこのご夫婦は生きていくだろう。

一人勝手に直虎フイーバー

大河ドラマの舞台になった今年、筆者だけでなく多くの人が同じ思いになったのではないか。筆者はゆかりの地を訪ね歩きながら考える。過去を、今を、これからを。そうして家に直虎と同じ、女城主がいることに気づく。

四国遍路

随筆というより、詩のようであるが四国遍路の春夏秋冬が描かれている。娘に子供が産れるということは筆者がおじいちゃんになることであると同時に生命が受け継がれていくことである。遍路の記憶と時の流れが絶妙なタッチで描かれている。

一病息災

検診を渋っていた筆者はガンの告知をされる。その後の闘病記と筆者そのものが死に向かい合う姿勢がなんとも清々し

い。そうしてタイトルにあるように病気をもっているからこそ、大事に生きられるのだという言葉が心に響く。

隣のお爺さん

筆者の子供のころの記憶の隣のお爺さんが生き生きと描かれている。子供だった筆者は自分がお爺さんになるとは思っていなかった。けれど時を経て、自分もまた誰かにとって隣のお爺さんになったことに気づく。

惜しかった作品

私のよみ・かき・そろばん

定年退職した筆者が自分の新しい居場所を見つけ出していく様がいていねいに描かれている。ひとつひとつの小さな積み重ねが一番早道で確実なのだよと、筆者が教えてくれている。

余生三分割

仕事人間だった筆者が定年退職を迎えた。

やがて息子夫婦との二世帯暮らしになり、筆者は新しい家族との暮らしのなかで、自分の役割を見出し、これからを生きていく。

カンガルー裁判

ひよんなことから、知り合った女性から裁判の傍聴に来

てくれと頼まれた筆者は裁判所にでかけていく。過失とはいえ罪は罪なのだが、検察官と参考人として呼ばれた女性の母親との会話が生々しく描かれている。

素直でなくても

筆者の六歳の息子さんは照れ屋さんらしい。素直にお母さんが好きだと言えない。お母さんも実はわかっていて。けれど好きという言葉を書きたい。そんな母と息子の心のすれ違いがよく描かれている。成人になった息子はこう言うだろう。「お母さんのこと、大好きだったけれど言えなかった」と。

びっくり仰天ヤアコちゃん

筆者の母親であるヤアコちゃんは静岡市内の高級住宅地にあるお医者様の家に住み込みで働き始めた。田舎と都会の暮らしのなかで戸惑いながらも明るく、たくましく生きているヤアコちゃんが描かれている。

もうひとつの吾家

長年住んできた家から、介護施設に移り住んだ筆者が、ここを吾家と呼ぶようになった日常が描かれている。施設内での暮らしぶりの描き方もうまい。筆者の精神力の強さを感じさせる作品になった。

拾年

ユーゲン肉腫というガンに罹った筆者が、診察直後に余命半年と言われる。術後、治療を繰り返し、自分なりのリハビリを開始し、生きていく様子が順を追っていいに描かれている。生きようとする力が素晴らしい作品。

日々是好日

五十一歳から大学に通い始めた筆者の大学生生活が描かれている。同じ年齢の頃、私もまた社会人入試を受けて大学にかよっていた。そうそうと膝を叩きながら読み進めた。

八十歳を超えた筆者の挑戦は俳句になり、今日に至る。生涯現役と高らかに宣言しているようだ。

定年女子の思い

保健婦として社会人をスタートさせた短い自分史である。働く女として仕事と家庭を両立させて生き抜いてきた筆者の人生の第一幕が終わった。これからどんなドラマが始まるのか、とても楽しみだ。

詩

「市民文芸賞」

ゆずりは

竹内としみ

ぴんと張りつめた空気の中
やさしげな春の匂いがかすかに混じる
すべての世界が
春の訪れを息をひそめて待つている

そんな季節のある朝
ほのかに明るくなつていく空
朝のしじまの中で動くものは何もなくて
ひそかに時を刻む空気感だけが漂う

消えそうに小さな声が耳に届く
道路沿いで眠りの中にいた彼は
ゆっくりとまぶたを開く

その声は確かに自分の名前を呼んでいた

ぼたり

声の後には何かが落ちていった感覚

目の前にはいつもの風景

あと一時間もすれば

車や人がせわしく通りすぎていくだろう

一日が始まる前のわくわく感さえ見える

あれはなんだったのだろう

緑色の体は昨日よりさらにたくましくなり

強い力がみなぎって空がまた近づいている

なんの不安もない

あなたは何も考えなくていいの

私は今にもバラバラになりそうな枯色の体で

静かに地面に横たわり

やがて風に吹かれて粉々に散っていく

なにも怖くない

彼の姿はかつての私そのもの

ただただ上を向き

みなぎる力を持て余していた

その力は私をひそかに支えてくれた

あのひとのものだった

だからあなたにもわたしの力を

せい いっぱい 送ってきた

あなたにもこんな朝がくる

その時知るだろう

私たちにつけられた名前の意味を

朝の通勤の往来の中

信号で停まった車から

気まぐれに小さな家の軒先に目をやるひと

地味な緑の庭木につけられた木札

風に揺れる木札に書かれていたのは

やさしい四文字のひらがな

「市民文芸賞」

ママとパパへのQ

清泉陽子

仮想産業がふくらみつづける

とどまるところをしらず大きくなりつづける

年端もいかぬ子らが予知されていた波にのみこまれていく

キケン キケン キケン キケン ハザード点灯

ほんものはどこ ほんものつてなに

ほんものなんて わたし しらない

(中区)

○

こわれるよ こわれていくよ 脳海馬

スマホあればおとなしいし楽だからって

無制限垂れ流しじゃ 前頭葉こわれちゃうよ

そうじゃなくて

ちゃんとみつめてよ うたつてよ あいしてよ

ずっと叫んでるのにきこえないの ママ

窓の外には ちょうちょ とんでるのに

○

ちゅうりつぶさいた あかいね

ちゅうりつぶの花の中に てんとうむし

ちゅうりつぶの上には みつばちとんで

春だね 春になったね

これは指先操作で変わっていく映像

ほくらは手触りも香りもない世界にいるんだ

玄関の扉など開けなくても

○

森へ行こう どんぐりひろいしよう

どっちがたくさん拾えたか

あとで数えっこしようね

だけどこごもふくろもつてないよ

これは画面の中のはなしだもの

歩かないから汗もかかない けど

このどんぐりひろいじゃ永遠にどんぐりごまはつくれない

○

おにごっこもかくれんぼも指先の娯楽

たとえばモンスターを集めに街に出たとしても

視線は手放せない小箱の光る画面の上

まっさらなこどもたちの頭は

生命のない知ったかぶりであふれかえっている

ねえパパはんものって本当にどこかにあるの

(南区)

〔市民文芸賞〕

ミイちゃんの雨

遠藤 ゆき

だって、僕は

長い長い雨が上がった日に
おねえちゃんと出会ったのだから

僕はあの日、草むらにいた

雨上がりの草むらは、まだ寒くて

僕も切なかったよ

誰か、僕をあたたかいところに連れて行って

おとついても雨
昨日も雨
今日も雨

おねえちゃんは

長い長い雨にそつとため息をつく

雨は、寒くて寒くて

切ないって

まるで、土砂降りの

おねえちゃんのジンセイのようだった

だけどね、おねえちゃん

僕、猫のミイちゃんにとつて

長い長い雨は

お空が降らしてくれた

魔法の涙なんだよ

だって、僕は

長い長い雨が上がった日に
おねえちゃんと出会ったのだから

僕はあの日、草むらにいた

雨上がりの草むらは、まだ寒くて

僕も切なかったよ

誰か、僕をあたたかいところに連れて行って

そんな僕を抱き上げて覗き込んだ

おねえちゃんの目

そのおねえちゃんの目には

長い長い春を待つ雨のような

あたたかいあたたかい涙の跡があった

ねえ、あの長い長い雨は

おねえちゃんが流した魔法の涙だったの

だったら、僕は思うよ

長い長い雨の向こう側には

きつといいことがあるんだって

だから、僕は、おねえちゃんのために

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

お空に魔法をかけるよ

チンパイパイ、パイパイ、パイ
雨、雨、降れ、降れ、もつと降れ
雨、雨、降れ、降れ、もつと降れ

長い長い雨の向こう側で

おねえちゃんの手をそつととつてくれる

あたたかい涙をたくさんたくさん流した

あたたかい手にきつと出会いますように

(西区)

「入選」

青い海

石黒 實

とことこと館山の冬枯れの道を行く。

サワサワと落ち葉を踏む足音が心地よい。

それでも最初の六十七段の石段は、今の君にはきつかったかも知れない。

「疲れない？」僕が声を掛けると「ハアーハアー、少し……」君の息は少し上がっていて顔も紅かった。僕は足を止めて君の息が落ち着くのを待った。

ーピーピーピーー小鳥の聲が突然葉陰から鳴り響き、君はその姿を追う。小鳥は囀りながら木々の間を飛び交う。

「メジロかな？」「羽が緑ほかったもんネ」

シイ、コナラの林が切れて青空が覗くとそこは山頂、浜名湖が見渡せる富士見岩がある。

「ホラ、真つ青だぜ。素敵なお眺めだ」

僕は促すように湖面を指して君を見る。

君は流水の流れ着くオホーソクク海を見て育った佐呂間の生まれ。重く沈んだ灰色の北海道の海は、寂しくなるから嫌いだと言う。

浜松に移り来て浜名湖を見た時、コバルト色の空を映した様な湖面の青さに驚いたと言う君。

そう遠くない時期に君はホスピスの白い病室に入る。自分で歩けるうちにもう一度青い海が見たいと、今朝はリュックを背負い、赤いトレッキングシューズを履いた。

「頑張つて来て良かったね」僕は言葉を掛けて富士見岩の上に腰を下ろした。

眼下に走る遊覧船から手を振る子供客の姿が見えた。僕が手を振り返ると君も一緒になつて手を振った。

湖面の光りがキラキラと波間に揺れて、その上を若者が操るヨットが滑つて行く。東名の赤い橋の上を何台もの車が走り抜けた。

僕より少し離れて座る君の視線が、湖面より遙か遠くにあるような気がした。君の瞳には嫌いだと言うオホーツクの海が重なっているのだろうか。僕は掛ける言葉が見つからずボンヤリ浜名湖を見ていた。

黙ったままの二人を置いてさばりにするかの様に、冬の寒さを残す風が時間を引き連れて通り過ぎて行く。

「私、もうそんなに時間が無いネ。これが最後に見る海の色かな」君の言葉はそのまま風に消えてゆく。鳶とんぼがクルーと弧を描くと湖面めがけて滑るように飛び去つて行つた。

「私を背負える？ 倒れたらお願いネ」

君より小柄な僕は少し迷つて、それでも黙つて頷いた。

湖面を吹き渡る風はさざ波をつくり、浜名湖の水の色はま

だ冬の青さのままだつた。

(中区)

「入選」

障害者

加藤貴代美

障害者は生きていてもいい。周りに遠慮せず、堂々と生きていればいい。

どうして偏見の目で見えるの？

どうして殺されなければいけないの？

ひどいよ！

障害者は、自分の障害と闘いながら生きています。

みんな、一生懸命なのです。

バカにしたい人は、バカにすればいい。

笑いたい人は、笑えばいい。

子供の頃から障害を持っている人は、

もまれているから強い。

でも、私のような中途障害者は弱い。

誰も、障害者にはなりたくない。

健康でいたい。

辛いよ。

でも、私の宿業。

障害者になる前の私は、生意気だった。

自分がたいしたことがないのに、自分より

レベルが低い子をバカにしていた。

今になって言えば、私がバカにしていた子の方が

私より、はるかに良き妻で良き母親。

その方が、よほど立派。

社会で上手に生きている。

私は、病気で社会に出ていけない。

仕事も病気で続かない。

結婚も、病気で失敗。

でも、障害が私の生意気を教えてくれた。

障害者になって、人の苦しみ、悩みが分かる様になった。

それに気付き、今の私がいる。

昔は、痩せたい、キレイになりたいと

言っていたが、そんな事よりも今が大事。

生意気な自分を振り返り、今を生きる。

今を生きて、悩んでいる友と一緒に泣いて

話を聞いてあげたい。

障害は恥ずかしい事ばかりではない。

いい所を伸ばして、生きていたい。

(中区)

「入選」

伐採

金子千江子

バリバリと音が

麻酔もなく

山の木々が次々と

伐採されて行く

痛いと小声で言った

木々の血管はすべて切れた

辺りは森の精でいっぱいだ

怒りだろうか

木々の香りが強くて苦しい

祈った

数ヶ月後伐採の後から新芽が

手術は終った

(北区)

「入選」

想い人

久野悦郎

君は黙って去って行ったね

私の手に温もりを残して

はじめて出会ったのはマロニエの花の下

君は輝いていたね風景画のように

幾星霜が流れていた

私は久しぶりにバスで街中に行った

老婦人がいた

ベンチで文庫本のページをめくる女性の横顔が気にかかるね

「はつ恋」かしらそれとも村上春樹かな

そして彼女は街角のオープンカフェで

コーヒーを飲んでいた

顔を上げた時以前の君だと私は気付く

彼女も気付き前の椅子を指さす

私は彼女の前にすわる

顔をあげた時以前の君だと私は気付く

彼女も気付いて前の椅子を指さした

私は彼女の前にすわる

君は杏里の「オリビアを聴きながら」を口ずさんでいた

君は私にジャスミンティをすすめてくれた

彼女のエルメスのスカーフ姿に良い人生を歩いて来たと思ひ

私はほっとする

私は君との再会を夢ではないかと想いながら君を残してバスの人となる

(北区)

「入選」

八ミリムービー

滝澤 幸一

長女が生まれて
八ミリムービーセットを求めた
一本が三分の短いフィルム
編集してつないで
私の活力源だった

もう四十年前も前のこと
この時代は過ぎ、部品もない
再生できない、お蔵入りのフィルム
DVDに焼き直し出来るんだって

三歳の長女が
一つ上や下の従兄弟たち
ちよこちよこと走る 笑う
シャボテン公園も懐かしい
もう、孫が大学受験という

いにしえの映画に
娘たちは見向きもしないが
私には蘇える
あの時の一挙手一投足
あの時の全て

「入選」

はりねずみ

早川 奈美江

昔は尖って針だらけだった
傷つかないように自分の心を防御して
誰かを傷つけていた
今は円くなった針で誰かを傷つけないよう
自分の心も防御している

時間^{とき}を経て分かったことがある
きつい言葉は自らを傷つけ
優しい言葉は心を包んで癒してくれる

(北区)

人には優しく、自分にはもっと優しく

誰かに伝えたいことがある時は
本音を伝えることにしよう

優しい言葉で時には厳しく

それはお互いのため

今後のよりよい関係が続けるため
そう信じている

そう気付いた今の私

素敵な大人になれているかな？

(袋井市)

「入選」

ごめんね ミミちゃん

松田 健

ミミちゃん ミミちゃんは
まだまだ若かったのに ごめんね。
昔から 美人薄命とは 云うけれど
器量よしだった ミミちゃんも
本当に 薄命になっちゃいましたね。
最期には 延命治療を断ってしまったね。
小生の所為だったんだけど……。
本当に ほんとうに ごめんね。
もっと お金持ちの家で
飼われていれば 良かったかも
知れないね。
口にこそ 出されなかったけど
ママからも こんなケチで
薄情な夫だったとは……。 って
小生は もの凄く 軽蔑されて
恨まれていたと思います。
ママは ミミちゃんのことを 一番

可愛がつて いたからね……。

ママは 小生は ストレスだけど
ミミちゃんは 一番の癒しだつて
何時も 云っていました。

だけど 言い訳になるけど
背に腹は 変えられなかつたんだ。
年金生活の身の上では

苦渋の決断だつたんだ。

小生は 恥を忍んで
動物愛護センターや いろんなところに
経済的な実情を訴えて 相談したんだ。
だけど 結局は 飼い主に
経済力が無いのなら そつと 優しく
背中を摩つて 見送るしかないつて
云われて しまつたんだ。

考えてみれば ミミちゃんだつて
うちに来た頃は もう既に
すぐにでも 死にそうな 弱つた
野良猫だつたんだよ。
それを その時 すぐに病院に
連れてつて それから よくここまで
頑張つて 八年間も

生きてきたんだよ。

だから これからは 天国で
もっと楽に 愉しく
過ごして 欲しいです。

天国では 先輩になる ミミちゃん。
今に 小生たちも 行きますからね。
それまで 小生たちのことも
忘れずに 待っていてください。

(北区)

「入選」

夢

水川 亜輝羅

夢の中で 夢を意識したいと思った
夢であれば面白いことも出来るのでは
なからうか との姑息な下心からである
この試みは悉く失敗する
すぐに覚めてしまうのである その渦中にて一切 夢の中で

の存在そのものを
自覚出来ないのである むしろ想像を越えた状態に出会って
しまったりする

毛むくじやらの猿なのか熊なのか得体の知れない怪物に襲わ
れたりする

周りを見ても棒切れすら見当らない

徒手で相手するしかない よく見ると

相手の動きがわかる 思いつ切り蹴つとばす

布団が足にからんでベッドからずり落ちる

怪我をする場合もある 夢から瞬時に

現実の世界に引き戻されるのである

生きて八十年になるが夢で記憶しているのは極く少ない

その多くは体調のよくない頃のものか 予程 興奮した事例
のものかに依る

中学時代の夏休みに黒鯛（チヌ）の夜釣りに行った事がある
大人達より少し離れた場所で 六十センチ程のを三匹釣った
かなりの鰹を買った 何十年も経ってから
今では釣りもしなくなつたのに

釣りの夢を見た 当時と全く同じ引きの

感覚があつて全く驚いてしまった

正確な記憶に依るものか 感覚的に身体に

刻み込んで覚えているものなのか

不思議でならない

（南区）

「入選」

白い魔女

花 信 栖

眠れるままに窓の外を覗いたら

蒼い闇にそれは突然現れた

星が降っているかの様に 黄色や赤の沢山の天使たちが

クルクル舞い降りてきて 遠くで歌が聞こえている

「忘れないで 想い出してね 幸せな優しい時間のあったこ

と もうすぐ氷の魔女がやってくる」それらは小さく小さく

遠く遠く 最期は吐息の様になり闇の中へと消えて行くの

だった

触ろうとしても決して触れることのできない距離であつたこ

とが「悲しいさようなら」を私の心に位置付けるのです。

しばしの静寂 沈黙の中

窓の向こうから月光を背に受けその人はやってきた 白い霧

を蹴散らし、冷たい風を引き連れて 張り詰めた空気の中を

弛まず

凜々しく 氷の魔女が進んでくる

その白さと冷たさは深く深くしみわたり

数千数万もの鐘がいつせいに鳴り響くような音を立てて熱

い心までをも凍らせ打ち砕くのです

その砕けた痛みに流れ落ちる白い涙を

一滴また ひとしずくと吸い込む台地

吸い込むたびに広がる白が

台地も空をも一つにしてしまう

決して境界なんて見つからない

怒りも悲しみも喜びも何もない

憎むことも愛することさえも見つけられない

白く冷たく果てしない世界

その白の中へ羽ばたいて行くのだろうか

堕ちて行くのだろうか

それとも夢を見ているのだろうか

いつかこんな時をすごしたような

既視感なのだろうか

霧の向こうからやってくる白い朝

現実へと引き戻される瞬間

「待って」と伸ばした腕に白く冷たいものが後から後から

落ちてくる

いつまでもこのままでいたいのに

どうして 時間とはこんなにも容赦のないものなのだろう

(中区)

詩選評

埋田昇一

詩の題材はいろいろある。

自然や日常の日々、さらに夢や記憶、また想像の世界など無数にある。問題は作者の視線がどこにあるか、新しい発想があるかが詩の成り立ちとなる。

第一位 「ゆずりは」

作品は、ほのかに明るくなつていく春の朝。誰かが確かに自分の名前を呼んでいる。自分とは何か。緑色の体とあるから、それは植物であることが分かる。作品は初め何のことか分からない。読み進めていくうちに自分は庭木のことだと分かる。そして、「ゆずりは」という名前の意味をつけられた庭木と自分とが重なることを知る。作品は、読んでいるうちに惹き付けられる。発想の展開が素晴らしい。

第二位 「ママとパパへのQ」

作品の第一連で仮想産業の危険性について「本物はどこ、本物って何」と書く。特に子どもたちに語る。「指先操作で変わっ

ていく映像」の怖さについて。「まっさらなこともたちの頭は生命のない知ったかぶりであふれかえっている」と。こどもたちには本物を教える必要があるね。この詩は仮想産業への警告として意味がある。しかし、大人たちには例えば顕微鏡でしか見ることができない医学の世界には大いに意義があると思うよ。

第三位 「ミイちゃんの雨」

ミイちゃんは子猫のこと。長い長い雨は寒くて寒くて切ない。抱きかかえてくれたおねえちゃんにとって、長い雨はおねえちゃんの人生のようだったと書く。あの長い雨はおねえちゃんの流した魔法の涙だったと書く。猫とおねえちゃんの温かい涙がやさしく包んでくれるいい詩だ。

その他、数十年ぶりに再会した彼女への想いを記した「想い人」、山の本々を伐採した「伐採」、優しい言葉で時には厳しくしようと気付いた「はりねずみ」、薄情で恨まれていた猫のミちゃんに謝る「ごめんね ミミちゃん」、得体の知れない怪物に襲われる「夢」、冷たい風を引き連れてくる「白い魔女」などの作品が印象に残った。

短 歌

〔市民文芸賞〕

村一つ沈めて抱くダム湖なり蜻蛉つと来てやがて飛び去る
 精悍な鶏が群れ立つ日本画の脚に掴まれ眼に射られ
 横たわる叔父の亡骸ひんやりと白菊の花耳元へ置く
 産直の野菜買い秋空は群青色に白雲流す
 列なしてやつとありつくかき氷盛りの大きに歓声あがる

中区

猫田

伸

処分して洗濯もしてこの家にあなたの匂いを消してしまった
 あなたならどうするかしら…お鈴打ち香を燻らせ耳傾ける
 部屋中を白檀の香で満たしおり明日はあなたの七回忌です
 独り居は楽よと友に話すとき言葉の半分じぶんに言いおり

中区

高畑かづ子

遠ざかる夜汽車のきざみ聴きながら真夜に励みし人あるを想う
 冴えし月心の奥を見透かして言わず語りに気づきを導く
 如何ともしがたき老の寂しさを温めてやりたき心に添いて
 力量も方策もなくいらだちて我の小さを身に沁みて知る

中区

鳥井 美代

「入選」

南区 杉山 勝治

戦地へと行く我を見る母上の悲しきひとみ今も離れず

戦地よりいのち拾いて履きてきた軍靴そのま
ま下駄箱（さだばこ）にあり

母上は七所参り我が無事を祈りてあれば我見て泣けり

中区 福田美津子

茶碗を洗い洗濯物を干し終えてさてと手にとる新聞温し

待合室ではほ笑みながらその人は認知症らしき妻に付き添う

桜並木の絵に描かれた少年は木に寄り添いし
まま傾いて立つ

西区 岡部 政治

癌告知受けたる心ぬばたまの闇より小さき未来
みること

窓揺らす風の音にも雨音も聞ける喜び生きる
よろこび

にちにちに明日もあると信じてる冷たき褥に
横たう今日も

中区 高橋 幸

独り居の卒寿の兄は鬘（まげ）と畦の夏草刈り込み
ており

あるがまま飾りも構えも無くていいとは云え
描けぬ絵手紙教室

茨城産浜松産と同じネギ価格違いに被災地憂
う

中区 宮本 恵司

衣装とは心を整へ行くものか作務衣まとへば
背筋のびたり

舞台上に坐りていざや吹き出さむこの束の間
の緊張ほぐせ

吹き始めは唇をかたくかまへるなと心に命じ
歌口に当つ

中区 知久とみゑ

ハグすれば背骨の感触手に残る好きな彼女は
九十五歳

天竜の朝霧こめる杉木立縞はななめの光の絵
画

飛行機雲ふわりほどけるそのはるか高きに羊
雲の輝く

東区 鈴木 壽子

敬老の案内吾に來し夕べしみじみと聞く遠音
の花火

朝より来る弟子を待つ整へし土風炉に藤灰静
かに蒔きて

釜の煮え電熱よりもやさしきと炭点前好む弟
子一人をり

中区 松浦ふみ子

昔より豪快だねと言ふ君に向かつてくしやみ
もうひとつ出る

無料パス、無料検診のお知らせとともに
「七十歳」しづかに來たり

弁当の宅配増えたり今のうちに味噌汁くらゐ
君に教へむ

西区 野島 謙司

門ごとに二本の桜咲きにけり桜通りは開拓の
村

五月雨るる温見峠を下り来て薄墨桜は天に広
がる

車道をも遠く押しやり山高の神代桜気高くも
咲く

中区 中村 弘枝

お化粧はせずとも先ずは髪を梳くさっぱり綺
麗晩節を生く

秋晴に手を上げ空の水色を吸いて心身清浄と
なる

点眼しばつと明るき視野なれど人の心が見え
難くおり

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

中区 安藤 圭子
 新しい家建ち並び幼な子の遊ぶ声して町廻る
 ここまでとどめておけとわかりつつ母の私
 は娘にさえすりぬ

東区 飯田 裕子
 晩鐘が秋の音色で渡り来る湖畔湯街は旅情一
 入
 ひたすらにサシバの群は天空へ旅風乗らむと
 怯むものなく

中区 石原 シズカ
 元カレの元カノというポジションにおしりは
 まって抜けなくなつた
 のか。という終わりがあなたそのもので私は
 ちよつと怖いと思う

中区 石原 新一郎
 一日が小さな一生 アマゾンの先住民の揺る
 ぎなき〈生〉
 陳列のガラスケースの『古事記伝』風ぎをる
 海のごとき草稿

西区 犬塚 賢治郎
 留年を告げて去る子を見送れば友禪流しの川
 は凍れり
 濁流が襲いし那智のバス停に『家も人も流れ
 た写すな』のビラ

中区 今駒 隆次
 此の道よ果てなく続けと願ひつつ夜の並木路
 ふたりで歩む
 朝日さす遠州灘を借景に浜松の街今起きんと
 す

浜北区 岩城 悦子

薄墨の雲の割れたる八月の夢いよいよに船出
とならむ
二十五の外つ国巡る船の旅夫の遺影の笑みし
顔連れ

中区 内田 一郎

保護司ゆえ胸に止めて少年の言い分を聞く夕
やけこやけ
窓に寄り少女は母の繰り言をリストカットの
腕組みて聞く

南区 内山 智康

長静の川沿いゆかば冬枯れの桑畑越しに桃花
咲き見ゆ
一の目潟たたえる水に影落し寒風山にゆく雲
速し

北区 鵜原 伸代

テレビ前座りし姿寝姿に変わりゆくかな卒寿
の義父よ
しなるほど枝先ゆらす百日紅縮緬に似た咲き
様が好き

南区 太田 静子

火を使うことが怖いと独り住む媼の食事は今
日も宅配
今日ひと言葉交せし誰彼を想い出しつつ指
折数ふ

中区 小笠原 靖子

タグ付けし越前蟹は焼網の上に泡吹き我を見
返す
甲羅酒熱くすすれば亡夫の顔うつし身我が代
わりに酔えり

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

鬼のゐぬ少年のゐて鬼のゐる少女は咲ふ青春
 綺談
 ひいふうやんぞうこんぞうみいよおこんぞう
 やんぞうあまたあまた秋
 中区 岡部 博和

霧晴れて緑の茶園が若者の息吹で揺らぐ五月
 の半ば
 閉校を惜しみて集う卒業生山にこだます最後の校歌
 天竜区 恩田 恭子

たんぼの綿が飛びゆく広い空幼き頃の友を
 探して
 精いつぱい日々をすごした友逝きぬ笑顔の遺影
 影声聞こえる
 中区 岡本 蓉子

物忘れいつものことと笑っている珈琲カップ
 の小さな渦は
 裡深く陽の射す森に分け入りてわが拘りに一息入れる
 西区 河合 和子

立冬の朝かすかに色付きて緑の葉陰に甘夏あらはる
 中区 織田 恵子
 庭隅の石路の花に黄蝶来て母の遠忌の静かなりけり

粧ひし九十の女の凛として歴史講座をみじろ
 ぎもせず
 炎昼にバスひとり占め図書館にリュック背負ひて返却にゆく
 中区 倉見 藤子

中区 小林 和子

ワン切りの電話に謎をかけられて脳内レーダー
ーしばらく廻る
ジョブ交わしパンチを凌ぐ会話終え汗の滲み
し受話器を戻す

東区 佐藤 彰一

断捨離の極め付けかなマイカーを捨てて歩く
はこの先続く
街角を歩く姿はミスマッチむかし懐かし麦わ
ら帽子

東区 寒風澤 毅

つれづれに「心は事に触れてくる」鎌倉の世
の英知に脱帽
注文は飲み放題に一決す「おかわり」少いシ
ルバーの会

中区 清水 紫津

思い出は馬酔木の花の咲く頃の静かにゆるる
花房の影
赤き糸結びし亡夫は先立ちて紅糸紡ぐ夢の中
でも

中区 新谷三江子

この国の唯一渡りをするというアサギマダラ
夢に見えぬ
食草と知りて植えにき藤袴アサギマダラの飛
来待ちつつ

浜北区 すぎきとしやす

還暦を山に還ると決めし日より散歩いつしか
ジョギング日課
決意満ち山小屋出づる午前二時白き吐息に拳
固める

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

中区 鈴木由紀子
 お六櫛立てたるやうな稲架並べ連なる棚田天
 へと続く
 コンバイン動かす夫に助く妻共に曲がりし腰
 を伸ばせり

浜北区 橘 すず音
 天高くそびえる三輪の大鳥居社の向こう御山
 麓し
 山の辺の道の端近い陵の緑に濁る堀空映す

南区 鈴木 芳子
 車窓より海征く夫と見た富士よ夫は帰らで富
 士は変らず
 世界中平和の風よ吹いてくれコレヒドールで
 散った夫にも

中区 田中 貞夫
 木枯の吾より先にころがりて春まだ遠し寒き
 風立つ
 カラ松の芽吹く緑のいやまして尾根空高くつ
 つむ富士見台

北区 滝澤 幸一
 遊歩道乾かすための掘割か幾多の岩魚動くを
 知らず
 郭公の啼き音湖面に響きたり揺れて答える焼
 岳の影

中区 寺田 久子
 認知症に塗り絵療法よしと聞く色無き紙は
 『業平朝臣』
 今年また徐々に疲れのくる身体文字摺草は捻
 れつつ咲く

東区 長浜フミ子

久々に宮尾登美子の書に触れて友に感謝のメールを送る
衣替え貧乏性は健在で捨てる物なし買う物もなし

浜北区 ち 浜 美乃里

ケアハウス入居決まりしこと話す亡父よ亡母よと墓洗ひつつ
住み慣れしこの地離るゝ日も間近夕焼けの町
ゆっくり歩く

浜北区 松島 良一

いつも来る猫が窓から覗き込む私の視線を上から見据ゑ
物干しに陽を浴び揺れる白いシャツ取り込みながら陽の匂ひかく

浜北区 峯村友香里

「未来ってどこにあるの」と問う君の今の姿がああ頃の未来
手を繋ぎこのまま千キロ歩きたい自分を「オレ」と言い出した君と

東区 宮澤 秀子

ふる里の地名を聞けば懐かしくテレビ画面に釘付けとなる
戦争を知らぬ子ばかり西瓜食ぶこの平穏の永遠にと願う

東区 村木 幸子

車椅子にてマヒ側かばひ茶をいれるかつての羽振り語りはじめぬ
飛びながら空に眠るとふ穴燕われは羽毛の布団に眠らむ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

北区 山田 文好
 不自由な身体ねじりて空に笑む少女の顔に秋
 日あふるる
 父親の腕に少女はつかまりぬステップ踏むごと
 と爪先立ちて

東区 飯尾 八重子
 美容院すましてお部屋たどりつく九十八才心
 はれやか

南区 赤堀 進
 うたこそが五感を通りて声になりリズムをま
 と言葉が踊る

浜北区 池 靖 蛉
 岩と雲つなげることく日輪の出でし道行く輝
 きの中

西区 渥美 進
 気賀関の桜並木に君がいて道中踊りカンザシ
 揺れる

中区 石井 泰子
 ごめんねと勇気を出してあやまった自分を褒
 めて爽やかな朝

北区 あひる
 認知症サポートなりし早や十年未知の世界に
 おののきながら

中区 石黒 實
 これと言う得ても無ければ自負も無く老後に
 向かう備えも無くば

西区 伊藤 友治
リオパラのブラインドスポーツ語らえば学生
達の瞳輝く

北区 伊藤 美代
あと一歩あと一押しと腰痛耐え魔物のごとき
夏草倒す

南区 井浪 マリエ
焼夷弾降り来る中を小川沿い必死に逃げし鮮
烈な過去

中区 内山 文久
万年の人史を捨てて生き抜かん「遠き明日の
こと」流浪民の如く

南区 太田 あき子
老齡か継ぐものなきか田畑には雑草しげりて
黄蝶とび交う

天竜区 太田 初恵
如月の雪舞ふ庭の檜嫩葉吾が眼疑ふ紅の華や
ぎ

南区 大庭 拓郎
地にしみて月おし照れば木香薔薇ひかりの中
に浮き上がってくる

東区 岡本 久榮
漁火の淡い光に影の浮く沖に往き交ふいか釣
る船か

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

南区 加賀の女
村瀬さんって呼んだら君は八重子なの窄めす
ばめて唇を囁む

中区 川上とよ
祝寿会若さ溢れる赤き虎中高生の摩登なダ
ンス

南区 影山ふみ
草いされ埴輪焼かれし窯のあと古代の時を
現代の時とし

浜北区 川島百合子
若き日に習いし茶道今一度心静かに正客とな
る

中区 加藤貴代美
点滴を打ちし間に考える我の病は自分で治す

中区 河田琴栄
漱石も「罪悪です」とをしへきと身を焼きて
こそおどろかれぬれ

中区 神谷敦史
電灯も天井さえもうらめしく車窓から見る満
点の星

東区 北島はな
病む友の久しぶりに聞く笑声心明るく車イス
こぐ

中區 木下 文子
水を欲る夫をなだめて嗽さす術後肺炎絶食続
く

南区 久保 静子
初摘みのほうれん草の濃き緑夕餉に添える今
日のよこび

中区 畔柳 晴康
由緒ある女城主の龍漂寺うぐいす張りを踏み
て詣でる

西区 近藤 茂樹
石路の花咲く道を歩みきて君のファイト貰う
この頃

中区 佐野実 佐代
花の鉢上げる約束した友よ病みて逝きたり果
たせぬままに

北区 清水 孜郎
的射れば女子高生の応援の一斉の一声「よー
しっ」の清し

南区 白井 忠宏
小学生学校帰り寄道し明日もいてねと犬に念
押す

中区 鈴木 和子
シベリアに続く線路を見おろして夫と合掌口
シアの丘に

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

つぎつぎに激戦の地を巡りゆく陛下の胸は戦
後が続く
中区 高橋 紘一

朝ごとに笛吹きケトル笛吹かせ緑茶一服いつ
もの椅子に
中区 手塚 みよ

待ちに待つ過半世紀の同期会懐かしの声話し
弾みて
中区 高山 紀恵

参加せし卓球大会で撮られたる写真で気付く
我が猫背有り
中区 鵜多 健

眼を病みて日々の暮らしの愛しきをしみじみ
思う晩夏の朝に
浜北区 竹内オリエ

藤袴わが庭に咲きアサギマダラ異国の香のせ
はるか飛び来て
中区 戸田田 鶴子

木漏れ日に目を細めたる横顔をこっそり見つ
め蟬しぐれ聞く
中区 土屋香代子

ほうせんか芽を出す五月嬰兒の産声あげて生
まれ出するよ
南区 中村 淳子

中区 中山 和
誰れからの便りのなくばその誰れも独りなり
やと思ひて隠し

中区 新田 えいみ
曾祖母をまねて二才児腰深くまげてあとより
よばよば二才

浜北区 野中 睦己
懐しき桜の名所岩水寺参道またぐ高速道路

南区 袴田 成子
母であり祖母でもありて慌し妻でもあると傍
の声

浜北区 橋本 まさや
霧雨のファゴット色に灯の滲むわれは静かに
歩を運びゆく

中区 坂東 茂子
じゃあまたねと手をふり別れる同窓会会ふ予
定はほとんどないけど

中区 飛天 女
身の丈の暮らし探しに足運ぶ再就職は夢の始
まり

北区 平井 要子
白髪のパールックの老夫婦待合室に春風の
立つ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

青春の想いが詰る本に合い改めて見る赤線の箇所
 中区 平野 旭

寝転ろびて青空見れば作詞でもしたい気になるそんな日もある
 南区 水川あきら

折鶴やオバマのスピーチ被爆者に核無き未来の夢を授けし
 北区 藤生 好則

咲き極む河津桜を本年も茶の間で賞づる媼と翁
 東区 森 安次

柿の実をひとつ残しておしまいに自然のめぐみお礼の気持ち
 南区 堀内 独行

点滴の落つる音をも聞かむとす術後の姉の眠る傍へに
 西区 八木 若代

ヨシキリのさえずる声に見送られ浜松祭り今年も終る
 中区 前田 繁喜

結婚を決めたる娘と歩みゆくものみな芽吹く奥入瀬の道
 中区 柳 光子

西 区 谷 野 重 夫
ベランダに朝顔ゴーヤ繁らせて花と実りと
もに楽しむ

中 区 山 本 勝 彦
夾竹桃は楽しい思い出の花言葉ブルーの見える公園に咲く

中 区 吉 野 正 子
カリフラワー・パプリカ・大根マリネにし早春の色夕餉に添へる

中 区 米 澤 寿 鶴 子
将棋さし魚も釣りし獺もせし賭ごとダケはせぬと言ふ夫

短歌選評

村木道彦

今年度の市民文芸賞は次の三人の方を推す。

猫田 伸

- ・村一つ沈めて抱くダム湖なり蜻蛉つと来てやがて飛び去る
- ・精悍な鶏が群れ立つ日本画の脚に掴まれ眼に射られ
- ・横たわる叔父の亡骸ひんやりと白菊の花耳元へ置く
- ・産直の野菜賸い秋空は群青色に白雲流す
- ・列なしてやつとありつくかき氷盛りの大きに歓声あがる

一首目、「村一つ沈めて抱く」がダイナミックな表現。二首目、「脚に掴まれ眼に射られ」が「鶏」の「精悍」さを表して余りある。二首目「亡骸ひんやりと」の「ひんやりと」が「白菊の花」の冷たさとタブって活きてくる。三首目「産直」と「群青色（の秋空）」とがおのずから響きあっている。

高畑 かづ子
・処分して洗濯もしてこの家にあなたの匂いを消してしまつた

あなたならどうするかしら：お鈴打ち香を燻らせ耳傾ける
・部屋中を白檀の香で満たしおり明日はあなたの七回忌です
・独り居は楽よと友に話すとき言葉の半分じぶんに言いおり
四首目、「言葉の半分じぶんに言いおり」が哀切。分かつていても口にしないではおれないのである。

鳥井 美代
・遠ざかる夜汽車のきざみ聴きながら真夜に励みし人あるを

想う

- ・冴えし月心の奥を見透かして言わず語りに気づきを導く
- ・如何ともしがたき老いの寂しさを温めてやりたき心に添いて
- ・力量も方策もなくいらだちて我の小さを身に沁みて知る
- 二首目、冴えわたつた月の光によつて自分の心が「気づき」に導かれたというのである。

入選上位は次の十人の方。

杉山 勝治

- ・戦地へと行く我を見る母上の悲しきひとみ今も離れず
- ・戦地よりいのち拾いて履きてこし軍靴そのまま下駄箱にあり
- ・母上は七所参り我が無事を祈りてあれば我見て泣けり
- ・戦後七十年以上を経た現在においても刻み付けられた体験には、なまなましいものがあつた。

福田美津子

- ・茶碗を洗い洗濯物を干し終えてさて手にとる新聞温し
- ・待合室ではほほ笑みながらその人は認知症らしき妻に付き添う
- ・桜並木の絵に描かれた少年は木に寄り添いしまま傾いて立つ
- ・さりげなさのなかに血の通った描写は、作品を暖かくし読者の心を温めるのかもしれない。

岡部 政治

- ・痛告知受けたる心ぬばたまの闇より小さき未来みること
- ・窓揺らす風の音にも雨音も聞ける喜び生きるよろこび
- ・にちにちに明日もあると信じてる冷たき褥に横たう今日も
- 二首目の「聞ける喜び生きるよろこび」が実感として納得

される。

高橋 幸

・ 独り居の卒寿の兄は鬘鏤と畦の夏草刈り込みており
・ あるがまま飾りも構えも無くていいとは云え描けぬ絵手紙教室

・ 茨城産浜松産と同じネギ価格違いに被災地憂う
二首目、こういうことはよくあることで同感。

宮本 恵司

・ 衣装とは心を整え行くものか作務衣まとへば背筋のびたり
・ 舞台上に坐りていざや吹き出ださむこの束の間の緊張はぐせ
・ 吹き始めは唇をかたくかまへるなど心に命じ歌口に当つ
一首目、経験者でなければ語れぬ言葉。

知久とみゑ

・ ハグすれば背骨の感触手に残る好きな彼女は九十五歳
・ 天竜の朝霧こめる杉木立縞はななめの光の絵画
・ 飛行機雲ふわりほどけるそのはるか高きに羊雲の輝く
一首目「ハグすれば」という若者言葉の効用に注目。

鈴木 壽子

・ 敬老の案内吾に来し夕べしみじみと聞く遠音の花火
・ 朝より来る弟子を待つ整へし土風炉に藤灰静かに蒔きて
・ 釜の煮え電熱よりもやさしきと炭手前好む弟子一人をり
一首目「しみじみと聞く遠音の花火」が秀逸。

松浦ふみ子

・ 昔より豪快だねと言ふ君にむかつてくしやみもうひとつ出る
・ 無料パス、無料検診のお知らせとともに「七十歳」しづかに来たり
・ 弁当の宅配増えたり今のうちに味噌汁くらゐ君に教へむ

二首目「しづかに来たり」に込められた余韻を味わいたい。

野島 謙司

・ 門ごとに二本の桜咲きにけり桜通は開拓の村
・ 五月雨るる温見峠を下り練て淡墨桜は天に広がる
・ 車道をも遠く押しやり山高の神代桜気高くも咲く
一首目、最後の一句「開拓の村」で奥行きのある深い作品となつた。

中村 弘枝

・ お化粧はせずとも先ずは髪を梳くさっぱり綺麗晩節を生く
・ 秋晴れに手を上げ空の水色を吸いて心身清浄となる
・ 点眼しばと明るき視野なれど人の心見え難くおり
一首目「晩節を生く」のすがすがしさは、三首目「人の心見え難くおり」という、酸いも甘いも噛み分けた経験の豊かさに依るものであらう。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

猫の四肢伸びきつてゐる敗戦忌

浜北区

松本 重延

振花の天衣無縫の螺旋かな

西区

平 幸子

蟻の道じつと見てゐる反抗期

南区

杉本 たつ子

忘れ潮のひとつに海鼠死んだふり

中区

中村 瑞枝

ざわざわ風吹きやまず沖縄忌

西区

山本 ふさ子

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

蛇穴に入る呼ばるるがごとまつすぐに

中区

吉野 民子

古ベンチひとりぼっちで秋座る

西区

松永 真一

櫓より関所破りの蝶の影

東区

山田 眞二

友を追ふ雪駄のひびき在祭

西区

松本憲資郎

又三郎の落とす木の実か木の実落ち

中区

大平 悦子

「入選」

浜北区

蟪蛄の斧をりたたみ枯れにけり

松本 重延

南区

しばらくはひとりの世界大枯野

杉本たつ子

野分けだつナウマン象の大腿骨

水昏れて確かに秋の風なりき

石器人の小さき骨盤雁渡し

椎の実落つ山乾きゆく寂けさに

遠州の空青ければ大根引く

長き夜や開きしままの世界地図

西区

戦なきまほらに生きて初日記

平 幸子

中区

新しき生氣立ちたる枯木立

中村 瑞枝

突堤の父と子と犬大夕焼

蕎麦湯注ぐ湯桶の體の黒子めく

宵闇のひかりたゆたふ千灯会

暮れぎはのびんづるさまの冬帽子

省略の一句立ち上ぐ今朝の秋

子を高く挙げ満月へ近づけぬ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

西区

秋の蛇遊行柳の下に見し

山本ふさ子

西区

空蟬の涙の跡の冬木立

松永 真一

祭神は須佐之男やんま風を裂く

なぜかふと父の面影鬼やんま

直虎の湖てんと浮寝鳥

赤とんぼ右往左往の広い空

パツと散る水面を撃てり寒椿

中区

武人埴輪笑顔で迎ふ御慶かな

吉野 民子

東区

かはほりやブルース響く港町

山田 眞二

小豆粥漆の椀のぬくきかな

漣は秋の思ひのはじめなり

托鉢の僧の行列虎落笛

秋爽の草に寝てみる空無限

舞方の鈴に合はせて神楽笛

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

西区

ふらここの足元に在り水溜

松本憲資郎

一様に南を仰ぐはちすかな

もこもこと包る夢や鯛雲

水鳥の水輪つぎつぎ離水かな

北区

言魂のさきはふ国や梅真白

安間あい子

霾やふる里の山烟らせて

南国に果てし遺影や曼珠沙華

ピカッと来て二百十日の雷一つ

中区

パナマ帽父の煙草の匂ひして

大平悦子

サルビアの盛りや雨の降りやまず

それなりに生きていけさう金魚なら

見送りの展望デッキ良夜かな

中区

実石榴やゆつくり母性生まれ来る

澤木幸子

花野より素焼のままの少女来る

駅頭にひとときわ目立つ春帽子

木蓮のとどまる雪の白さかな

以上、市民文芸賞受賞者入選句

首傾げはにかむ幼女すみれ草

中区

小川 恵子

さくらんぼ白磁の皿の音符かな

コスモスの柔軟性を見習へり

刻々と冬立つ気配近づきぬ

チューリップ大きく咲かせ独り住む

西区

鈴木 智子

水尖る高飛込みのプールかな

落し蓋ほとほと大根煮る夜かな

遠富士のくつきりとあり女正月

石路の茎のすずしき高さかな

西区

岩崎 芳子

木苺を含めば野の香ひろがりぬ

心折るる日も赤々と茨の実

雲間より春の光の梯子かな

人日もすぎていつもの朝となる

西区

佐久間 優子

豆撒けど身ぬちの鬼は居すはりて

ひたひたと春の気配の舟溜

流灯のしばし水際にとどまりて

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

歩き初む素足大地を掴みたる

中区

大村千鶴子

初秋刀魚背骨一本残すのみ

一徹を通して来しが振れ花

中区

長谷川絹代

ジープンに付きにつきたる草虱

紫陽花の暫しの色を惜しみけり

大花野翼あるもの羽あるもの

異国僧さくら紅葉の彩を掃く

白昼のひとりの至福春こたつ

南区

渡辺きぬ代

南区

金子典子

電線のいつもの場所に初鴉

ふらここを漕ぎて宇宙を引き寄する

花昌蒲風くれば水匂ひけり

突つかかり転がり遊ぶ落葉かな

帰省子のぐんと伸びたる背丈かな

大欠伸大伸びの猫冬日向

秋風やピエロのかくす涙あと

鬼やんま翅の向かうに男の子の目

中区

ルノワールの絵のごと白き項かな

勝田 洋子

南区

産土の澄みし川底水温む

金田 みき

睡蓮の茎をぐいと伸ばしけり

本尊は巨大な巖南風吹く

仏頭の眼のような寒の月

見晴かす甲斐よ龍太よ夏蕨

弟を恋う大伯おおくの皇女ひめや花あせび

敗蓮田立ちて残りし青さかな

東区

芋の露小さき球に宇宙あり

池谷 俊枝

北区

青葉風巡る血潮の確かなる

梶村 初代

巨き樹に耳寄せ秋の声を聴く

銀杏黄葉皆しなやかに過ぎにけり

枯蟪蛄に刃向ふ気配まだありぬ

冴ゆる夜や小面の目の炎の揺らぎ

冬の朝風ぎし湖面に鳥数多

冬蝶の傷みて零す光かな

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

南区
プラタナスの茂る八月十五日

袴田 吉一

鬼灯を鳴らして見せる母の母

西区
久に來し故山の森のほととぎす
故郷の李を穫りし兄弟

桜木に指輪のやうな返り花

コンバインの音のひびきや秋うらら

鬼やんま降りて電車のドア閉まる

池田 智子

西区
分け入れば森のトトロの落とし文

縣 裕子

コスモスの摘み放題に兎の笑顔

西区
花の雨きよう父母に会いに行く
園児らの声跳ね返る夏帽子

母と見し土手に群れ咲く花カンナ

もう少し走りたくなる秋の風

西区
街騒や並木設ふ鳥威し

浅井 裕子

西区
夏の夜音なく進むたきや舟

池谷 和廣

御朱印帳古刹の池の未草

かぎろひて単線列車の近づけり

道祖神蘇鉄の花のどつしりと

緋鳥鴨鳴きてしらじら夜の明ける

遠足や父子の絆作り上ぐ

中区

池谷 静子

やどかりを尻ぬらし追う四才児

豊の秋田んぼアートに古老燃ゆ

北区

一 灯

身構へてゐて拍子抜け万愚節

百合開く思ひのたけを吐くやうに

稜線に漲る力寒の入り

南区

伊藤 久子

嬰の春全身ばねにして歩む

花付けて気付く十葉昼の闇

新松子子らの遊びの変はりけり

朝顔や共に学びし種の起源

中区

伊藤 斉

石榴割れ星くずのごと種出づる

柿の種子規の遣せし詩の広場

浜北区

岩城 悦子

蟬時雨吾が魂の声と聞く

八月は少し淋しき色をなし

終戦日生きとし生けるものに愛を

中区

岩崎 五郎

母と子が和讃うたふや報恩講

滴りの光一瞬野面積

お薬師を咫尺に拝す秋彼岸

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

皮笛の色煌めけり風光る

中区

岡部 博和

居酒屋の品書太きもち鰯

西区

刑部 末松

風止みて葎の内に音の死す

金秋の風天楽を奏でをり

鯖酒に話題のはづむ番屋かな

一本がはみだしてをりどんどの日

東区

岡本 久榮

秋風が季節のしらべ奏でてる

中区

加藤貴代美

無量寺の格天井や寒の冷え

ペダルこぎ遅刻しそうなからつかぜ

火渡りや無病息災秋深む

次々と野わけが暴れ過ぎた空

藍絞り母の匂いの浴衣かな

中区

小楠 恵津子

年新た大正・昭和遠くなり

西区

加藤 新恵

稲穂波一反ごとの色模様

湧水の流れの辺り螢舞ふ

天高くマストに昇る練習生

若僧の頭真青や盆供養

石垣の陽は淡淡と石路の花

南区

神谷知恵子

晩秋や素朴な顔の道祖神

百年の社の軋み初時雨

茶の花や内緒話は聞かぬふり

東区

川口八重子

手花火の闇を散らして静まれり

吹流し五色の風のありしかな

溪深き伊那を彩る柿暖簾

南区

河嶋美智子

数珠玉を首飾りにし幼児笑む

荒地野に泡立草の群れてあり

バスを待つ次の約束白日傘

西区

川瀬慶子

ひと箱のミルクキャラメル終戦日

コンサート果つ駅前の夕月夜

老いてなほ固めの柿を好みけり

南区

金原はるゑ

稲実り赤石岳を真向ひに

小春空ついつい歌を口ずさむ

空き室の多くなりたり豆を撒く

西区

倉田たか

初蝶と遊ぶ米寿の童女かな

忘ること多くなりたり花の雨

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

卯波立つ砂丘のほとり命山

中区

倉見 藤子

親王の漂着の碑や新松子

つづれさせ仕事一途に生きた妣

花辛夷言葉少なく別れけり

中区

佐藤たえ子

消印のかすれし葉書走り梅雨

よく通る刺し子の針や十三夜

原人のロマンの里や昼ちちろ

南区

佐原智洲子

月光にひとりの母の命つぎ

五右衛門の唸る絶景もみぢかな

着ぶくれの一人となりて受診待つ

西区

柴田ミドリ

裸木の一步踏み出す構へかな

圏外といふ自由席葱坊主

雨上り五色にひかる葉鶏頭

西区

清水よ志江

ゆつたりと流る白雲秋うらら

漆黒の闇に一閃秋螢

炎暑にも青い地球のまはりをり

中区

白井 宜子

思案さなか不意討ちにあふ秋の蜂

いつさいの未練を捨てし蛇穴に

雷^{いかずち}の弾けて辺り透けて見え

南区

白井 忠宏

立ち葵咲いて季節を先走る

あの暑さ何処へ消えたか毬を踏む

父の日や遺した言葉生きつづけ

西区

鈴木 和

囀りや山小屋に時刻む音

鎮魂の一つ二つと蚩かな

昼過ぎの閉ち始めたる花芙蓉

天竜区

鈴木 利久

秋鮎を網打つ腰に力入れ

滑空機と共に飛び立つ草の絮

生きものを育む湖や小鳥来る

南区

鈴木 秀子

蒼天や棒稲架の立つ静けさよ

新藁の青極めたり路地匂ふ

月欠けて月の兎の零れ落つ

中区

鈴木由紀子

土の香を抱きて凜と稲架襖

薄氷に風のしはぶき残りをり

歓声の響くプールの飛沫かな

西区

鈴木 嘉子

沼の面を覆い尽くして蓮浮葉

胸もとに小粋に決めたサンングラス

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

踏みしだく路傍の小さき薄氷

西区

高橋 久子

春を告ぐ道の辺の瑠璃色の花

手拭の鹿の子絞りのなつかしく

耀る声のひときは高き桜鯛

西区

高林 ちゑ子

鯉群るる水の都の青葉映ゆ

臥す窓に命はげます小鳥かな

初場所や相撲甚句の粋な声

西区

竹内 定八

一陣の風に舞ひ上ぐ花の雨

さはさとはと森林浴の青葉かな

冷房の待合室にブルームス

中区

竹田 たみ子

目測で長さ云いあう藤の花

クリスマス手話の子供の笑顔かな

春風や夫に介護手帳くる

西区

竹平 和枝

本堂に尺八らいぶ十三夜

寒椿一輪ほどに残る恋

霊前に供養のごとく蟬しぐれ

中区

土屋 香代子

彼岸花葉見ず花見ず迷い花

草ひばり静寂を破り高く鳴く

内海の色を染めたる桜鯛

西区

徳増 貴子

一斉に陽に立ちあがる雪間草

残照の刈り終へし田の静寂かな

寒満月男の背中丸く見え

中区

戸田 幸良

家中の窓開け放つ梅日和

ベランダにやさしい冬の来ていたり

幼子をまあるく囲んで小春かな

南区

中津川 久子

地下足袋のこはぜ外して三尺寝

針穴のしかと決まり二月尽

ホスピス棟大根煮てるおかあさん

東区

長浜フミ子

トキの森静かな秋の日本海

春うらら少し不安な新講座

夏祭急に華やぐ女子高生

北区

西尾虹之助

夏祭金魚すくいの指ほそし

しゃべる母だんまり息子風香る

テロップにまた地震の文字冴へ返る

西区

西尾 わさ

突く杖の初冬の音を返しけり

群れ立ちて日を散らしけり初雀

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

中区

二橋 記久

西区

野中美美子

しゃぼん玉風に逆うこと知らず

公園の丸太のベンチチユーリップ

虎落笛おのづと足の早まりぬ

荒彫りの円空仏や青嵐

濃紫陽花湯浴みの火照り癒しけり

サルビアの真赤少年音楽隊

西区

野島 謙司

浜北区

浜 美乃里

修道女も弁当広ぐ桜かな

凍雲や被災地のこと子等のこと

金色を空に残して夕桜

梵鐘の音聞かせやう雀どち

枅形を埋め尽くして桜散る

井の国の言の葉やさし法師蟬

東区

能勢亜沙里

中区

林田 昭子

葉牡丹や雨の明るきカフェテラス

お手玉の絵手紙とどく初便り

秋灯の人肌色の順恵器かな

春の鴨相寄り眠る橋の下

青空の付いて来る日や日記買ふ

海の日や特攻の兄海に死し

縄文の天窓ぬけし春一番

中区

伴 周子

秋晴れや有松絞り花開く

心経の和音揃ふや冬立つ日

年々に親し雛の下脹れ

南区

藤田 節子

飛ぶ虫も飛ばない虫も梅雨晴間

鉄塔の等間隔や冬ざるる

廃校の桜が招く同窓会

中区

藤本 幸子

水鳥にゆらりと届く舟の波

今日もまた肩に寄り来るゆり鷗

歩いても歩いてもまだ花の中

南区

古谷 とく

全景を見せて秋富士暮れにけり

刻々と遠州灘の初明り

アネモネやわらんべの母笑ひをり

南区

堀川 千代子

かくも温し母炊きくれし栗の飯

爽やかに逝つてしまひしひとのこと

里祇園出引太鼓のかけ上る

中区

松本 賢藏

原爆忌鎮魂の鐘胸を打つ

芭蕉忌や水の流れと舳舟

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

西区

風車かたこと鳴らし鯉のぼり

松本みつ子

南区

遊ぼうと幼より来る年賀状

八木 裕子

ひとさまの西瓜叩いてみたりして

豆ほどの花のかたまり百日紅

読み返すわだつみの遺書敗戦日
拾ふ人なき椎の実の掃かれけり

東区

夏祓悔い多き身を正しけり

宮澤 秀子

西区

人生に卒業はなし日記書く

谷野 重夫

帰省子の大き鞆につまる夢

母の日やホームの母と笑い合ふ

大家族たりし日もあり零余子飯

役目終へ畦に横たふ案山子かな

南区

柿若葉声の華やぐ山ガール

森 明子

西区

畑を鋤くカンカン帽の耕耘機

山口 久江

岩魚釣り父の遺影のベレー帽

聴き做してなほ聴き做してほととぎす

生涯に秘めごとひとつ酔芙蓉

渾身の残る蛭のひとり旅

ポロシャツのイニシャル刺繍風薫る

西区

山崎 暁子

背番号無くも青春鰯雲

希望詰め新入学のランドセル

西区

横井弥一郎

大吉を引き当てたりし神の留守

一生を己がベースのかたつむり

風船や顔赤くしてふくらます

西区

山下美恵子

ぶらんこや母子語らいつつ揺らす

かまきりの見得を切つたる面不敵

西区

和久田雅広

短日や山にストーンと日が落ちる

曼珠沙華護摩の炎の化身かな

ほむろ

秋色のダム直線の水放てり

中区

山田 知明

西区

和久田りつ子

気が付けば早も暮れ入る冬至かな

大皿の伊勢海老威儀を正しけり

春泥の靴や客間に友の声

天地の静まりて待つ初日の出

夏めきて座せば畳の匂ふなり

よく笑ふキャベツ畑の若夫婦

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

記念日や桜の見ゆる席に座し
南区
 寝転べば入道雲と余花一枝

赤堀 進

かじかみしハガキを書く手や富士山頂
浜北区
 池 蜻蛉
 夜更けには星々の降る山の宿

蝉しぐれ一瞬の風吹き消しぬ
北区

あ ひ る

玉砂利の足の記憶や初詣
中区
 石井 泰子

彼岸花どこまで続く斜面かな

枝伐りて近くなりたる秋の空

車イス押されて廻る薔薇の園
東区

飯尾 八重子

囀りはデュオにコーラスソロも有り
西区
 石塚 茂雄

柿若葉一句さずかる今朝の窓

天高く女城主の町おこし

藁ぼつち「もういいかい」の皆逝けり
東区
 飯田 裕子

軒下の光る氷柱を仰ぎ見る
北区
 伊藤 アツ子

睨つこ青大将と測量士

風なくていつしか落ちし榎植かな

残菊や昭和の西陽ほしいまま

中区

伊藤サト江

冬ざれや地震続く地を思ひやり

夕立や埃の匂ひ連れてくる

西区

伊藤しずゑ

藁草履藁の匂ひの敗戦忌

ほととぎす連れて回りしゴルフ場

東区

伊藤 倭夫

夕闇を部活帰るか蓮白し

ひらひらと吹きぬけゆくや秋の色

中区

伊藤清太郎

流れ星遙けきこえは父の声

墨の香を命毛にのせ年賀状

北区

伊藤 美代

緑陰をえらんで遊歩老いふたり

砂丘へと浜豌豆の道標

南区

井浪マリエ

海原の遙か灯台浜昼顔

木下闇懷手して通りけり

西区

犬塚賢治郎

蘆の間に田鴨三羽が見え隠れ

這うがごと歩くが如く蝸牛

中区

今駒 隆次

蟻五匹寄って談合何話す

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

老いふたり雑煮の餅を小さく切る

西区

岩崎 良一

夏の大岩^{いわ}ずぶ濡れの子ら甲羅干す

中区

内山 文久

父の日や甘き銘菓の贈り物

夕風にたゆたふ突堤^{みさき}魚を釣る

中区

右崎 容子

中区

梅原 栄子

青林檎真つ正面に津軽富士

風出でて潮の香渡る夕花野

どの人も未来は白紙雲の峰

散り敷いて風の匂へる金木屋

中区

内田 一郎

北区

大木 たけの

天守閣登れば秋の風光る

窓ごしに今日一日の蟬の声

花の舞う老人会の宴かな

小春日や吹矢に挑戦日寿かな

北区

内山 恭子

南区

太田 勝子

いつ来ても正体見せず牛蛙

花は葉に老いの指先透き通り

秋暑し魚臭込めたる船溜り

母の忌のお鈴の響き涼しけり

十葉や前だれあらた六地藏 西区

太田 沙知子

手を挙げて駆け来る日傘バス待てり 中区

小楠 達司

押し花の緑残せし古日記

雲の端に金線描き初日出いで

うれしい事日々草に癒される 南区

太田 静子

回廊を火の粉翳してお水取り 中区

小野田 みさ子

雪国の一夜で変わる景色かな

長閑しや縁側の猫伸びしまま

香り失せ乱れし梅に朝日出ず 中区

大屋 智代

コスモスも小さき庭ではおひなさま 南区

影山 ふみ

休耕田うずめつくすや秋桜

柿おちばすぐ額に入れかざりおく

寒風の中でも凜とさくら草 中区

岡本 蓉子

コスモスや嫁ぎし頃の風手繰り 東区

春田 さかえ

つゆ空に咲きほこりたる立葵

秋夕焼四駆走らす千里ヶ浜

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

あさがおや今を限りと咲き誇り
追われし日娘の笑顔とからつ風

中区

糟谷 修子

打たるるも香の残りをる走り蕎麦
野紺菊一句もならぬ坂の上

北区

金子千江子

ジューパンのいなせな案山子走るかに

中区

加藤 和子

若き日の淡い香りや沈丁花

浜北区

金子眞美子

芳香の散りても美しく金木犀

知る人も遠ざかり行く冬景色

風を得て人呼ぶ姿芒かな

中区

加藤 政子

秋夕焼目を細めれば古寺の鐘

中区

神谷 敦史

再婚の仲良き二人返り花

初明り旅行ガイドに夢馳せて

風鈴や自由と孤独奏でけり

中区

金取ミチ子

野仏の小春日和の笑顔かな

北区

加茂 桂一

大空のキャンバス秋の雲眺め

子に合わす親の歩みや七五三

ぬり絵ぬる幼き頃を思いつつ

東区

川合 妙子

金メダル米寿の私夢を見る

草笛を子に吹く息の短かさよ
音だけで山うき上る遠花火

北区

北村 友秀

慈善鍋硬貨の音の響く宵

中区

川合 泰子

虫の声野菜作りも無農薬

東区

切畠 正子

終戦は遠き日となり桑実る

黙黙と大地を這つて草取女

浜北区

川島 百合子

北区

久野 悦郎

秋風やハーモニカの音運び来る

朝餉には妻のひと手間落ごはん

日溜りや手編みセーター針すすむ

足るを知る暮らしの中に秋の月

綱渡る道化の顔に滲む汗

中区

川島 泰子

春の風万歩計伸ぶ白き靴

中区

畔柳 晴康

ト口箱の芝海老跳ねし秋の色

遠花火光を音が追いかける

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

盆提灯姉の面影走馬灯

北区

後藤 とも

幼子の指さす先に曼珠沙華

落葉搔若葉の果てを弔へり

中区

佐野 朋旦

垣を縫ふ朝顔の紺十二輪

中区

斉藤 三重子

微笑んで雪に埋もれし野の仏

東区

しおくろう

老体に怖きものなし年の暮

釣り竿にとんぼとまれり昼餉時

西区

坂田 松枝

北区

清水 孜郎

郭公を聞きつつ植うる小豆苗

押せば閉じ引けば開くも初輔

電子辞書電池のきれてちちろ鳴く

錚錚の淙淙として百合の花

(東京都知事)

東区

佐藤 彰一

西区

清水 康成

弓張りの照らす姿に酔う夕べ

菜の花や赤き帽子がみえかくれ

夕餉にて戻り鯉とめぐりあう

縁側に冬日射しけり猫とねる

風のなき朝と夕べ神無月 南区

下位 満雄

師の教へ胸に刻んで巢立つ春 西区

新村 幸

一筋のレール敷かれし蜜柑山

杜の蝉短き時を鳴きしきる

中区

不知 火

南区

菅沼 静子

草泊り馬と添い寝の星の宿

プロペラを磨きし学徒敗戦忌

盆踊り混じる訛と肌の色

迷ひ込む袋小路や秋惜しむ

西区

新村 ふみ子

東区

鈴木 節子

秋雨に濡れし石仏伏目がち

菖蒲湯にはいりて邪気をはらいけり

友よりの絵手紙にあり額の花

友といく傘寿のちから大根ひく

西区

新村 八千代

中区

高鳥 謙三

元気です久しき友の年賀状

立冬や信号と夕陽重なりて

大根ぬく一月の空一月の土

チィーと鳴き電柱のモズ睥睨す

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

中区

青柚子や香りただよう茶懷席

高橋 常子

東区

鈴虫の棲家となりし荒地かな

高林 よ志子

木洩れ日や秋風吹きぬ道祖神

年の瀬や地下道の口大きくあけ

中区

一人来てただ念入りに墓洗う

高橋 敏彦

北区

刈り蘆やまだ草色の残りたり

滝澤 幸一

解いた帯そつと置かれし秋扇

白鷺の嘴魚の光りけり

西区

さよならを言はずに駆ける夏帽子

高林 文博

浜北区

年重ね心まろやかかまど猫

竹内 オリエ

古民家の大樹の青葉若葉かな

貝殻を耳に当てれば夏の波

南区

赤白黄ドレミドレミのチューリップ

高林 佑治

中区

屋台湯気両手に温き蜆見汁

竹下 勝子

夏兆す駅前演奏中高生

グループにラムネ開けるの上手い人

障子貼るボコボコボコと砂時計

中区

竹田 道廣

下校の子ランドセルまで春の泥

南区

坪井 いち子

木馬道轍の窪のすみれ草

きんまみち

天高し青を横切る飛行雲

下萌や日ごとに増ゆる試歩の数

西区

竹山 すず子

色褪せし写真の母へ桃の花

北区

鶴見 佳子

リハビリの吾を励ますかたつむり

人去りて枯木にのこる雨しずく

懷手笑顔絶えず聞き上手

東区

田中美保子

甘酢煮の蓮根好み供うなり

中区

手塚 みよ

競技了ふプールの中へ涙して

茱萸の実や熟し渋味に落ちしまま

川面覆う桜吹雪の花堤

南区

黒葛原千恵子

夏富士の絵ハガキ選び子へ便り

中区

寺田 久子

去り難く振り返り見る花の道

くもの巣に光る雨粒住み古りて

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
我が畑菜の花二本主張せり				戸田 田鶴子				
さわやかにグラスに映ゆる紫蘇ジュース				中区 鵜多 健				
くちなしのいつもこのみち足湯かな				中区 徳澄 英樹				
紫陽花やいろあざやかに雨あがる				中区 満月と対話も忙わし芋煮箸 輪を描く鳶に心をゆだねけり				鳥井 美代
満目の青葉若葉の野山かな				南区 佐鳴湖の水面に映える花火かな				永井 眞澄
鍬取りの後ろを歩む白鶴鴿				亡き父と投網鮎取り懐かしき				
西瓜割り右だ左だ大燥ぎ				南区 田原港小鰯の群れの回遊す				永田 恵子
風鈴や風が恋しか音合せ				人生を語るがごとき大花火				

中 区
嬰兒の汗ふと乳の匂ふかな

中 村 貞 子

西 区
退院は四温の一日賜りし

野 嶋 薫 子

どの風も皆コスモスに寄りたがる

得々と語る翁の菊作り

北 区
目ざむれば遠き山並み雪化粧

名 倉 み つ ゑ

北 区
ままならぬ絵筆持つ手の鯛雲

野 末 法 子

秋の空ぐんとのびたる飛行雲

初詣何を願うかもみじの手

北 区
春の湖だんだんずれる鳶の円

西 尾 淳 子

北 区
背負いかご姉さかぶりの新茶摘み

野 末 初 江

湖の岸みんな西向き赤蜻蛉

梅雨晴間白衣の天使まぶしけり

中 区
駆けてゆく先にあるもの青嵐

猫 田 伸

北 区
ありありと勝気の性や夏痩せて

野 田 智 恵 子

行列の美術館前夏兆す

あたたかや万葉仮名の母の文

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

天道虫色鮮やかに七つ星

西区

袴田 定代

ふくよかな母の温もり干し布団

中区

平野 旭

浴衣着て涼みに行きます下駄の音

香煎に噎せて咳する日暮かな

浜北区

橋本まさや

北区

藤生 君江

美容院ガラスの窓に春の雲

祭のみ生き甲斐という男おり

吾が背より高く咲きたるカンナかな

戦死せし義兄と似て来し敗戦忌

西区

浜名 湖人

南区

堀内 独行

国破れ田に鋤入れし父憶ふ

山しずか鶯の声近く聞く

列伸びる白髪の群れ秋野ゆく

青空に取り残したる柿ひとつ

西区

晴 詩

中区

松江 佐千子

十六夜やビルの谷間の影法師

噴水の折れたるあとの静寂かな

手を伸ばし掴んでみたい雲の峰

もう蟬の鳴き止んでいる朝かな

あした

ぼんと開くワイン栓や春動く

中区

松本 緑

宝くじ買う大安の春の風

一鉢の菊に夢見る子らの顔

北区

山岡 照彦

幼な児の線香花火に家族の目

北区

馬淵 文夫

饒舌は快癒のしるし木の芽晴

北区

山口 英男

初音きくなごみの風に運ばれて

翡翠の玉となりたる木立かな

河口辺りエノコログサの背の高さ

南区

水川 放鮎

露の朝鎌の切れ味鮮やかに

中区

山下 静子

用水は水面を下げて稲刈らる

小鳥来るシャッターチャンス絞りけり

鮎を釣る天竜川は空低し

中区

宮本 恵司

卒業式プラスバンドのドラムかな

西区

山下 昌代

目印を睨みつつ聴く蟬のこゑ

懐しや風鈴屋台のリヤカーよ

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

木犀のほのかな香り風はこぶ

中区

山中 伸夫

なおもまだ働ける身のうれしさを

野分過ぐ野菜の高値続きけり

爽やかや富士の高嶺に陽のリング

中区

和田 有彦

雛祭絵手紙にして異国まで

西区

山本 晏規子

曳馬野に天守そびえて桜舞う

西区

渥美 進

裏木戸に蛸の声遠ざかり

中区

川上 とよ

竜の玉探せば遠き日のありき

中区

横田 照

天王の音のみを聞く遠花火

浜北区

紺田 みどり

まくなぎに道ふさがれてしまひけり

うろこ雲ランドセル押す帰路の道

西区

和久田 しづ江

卒業や八十年が過去となり

櫓田も宴席となる村まつり

北区

鈴木 章子

鯉織緋鯉に真鯉老いるまで

寂しさと香りをはこぶ金木犀

南区

すみれ

初詣で杖をたよりの秋葉山

中区

錦織 祥山

除夜の鐘更にいとしい逝きし人

中区

高山 紀恵

冬空に光り輝くオリオン座

南区

水野 健一

一人寝の寒さこたえる歳になり

中区

田中 貞夫

柿実り枝一杯の力瘤

中区

山下 宏

庭のビワたわわに実り時期を待つ

南区

ツタモン

秋時雨もうすぐ冬へのお告げ雲

南区

和 季

窓ごしのみごとにみんな花の庭

東区

時久シヅ子

爪跡を残して去りぬ春の風

東区

名倉 太郎

九鬼あきゑ

本年度は昨年より十六名増え、内容的にも質の高い作品が多く見られたことは嬉しい限りであった。熟慮の末、最終的に次の十句を第六十二集の市民文芸賞とした。

・猫の四肢伸びきつてゐる敗戦記

松本 重延

敗戦日だと言うのに、我が愛猫は堂々と安心仕切つて爆睡中。「四肢伸びきつて」がそれだ。敗戦日への作者の思いとは真逆の行動だが、これも平和なればこそと微笑禁じ得なかったのだろう。他の四句も単純明快な文体で、事物の核心に迫る作風がいい。更なる深みを目指していつて欲しい。

・振花の天衣無縫の螺旋かな

平 幸子

振花を詠んで異色の作品。「天衣無縫の螺旋」などと誰が言えよう。確かによく見れば、その振れかたは実に多彩だ。こんなところにも目配りできるこの人のシャープな写生眼に驚くばかりだ。今後の活躍に期待したい。

・蟻の道じつと見てゐる反抗期

杉本たつ子

自我の芽ばえた三、四歳の男の子か。真剣な眼差しで「蟻の道」を見据えている。両親の声掛けにもなんのその。人間

こう言う時期を得て成長していく。この子を見つめる優しい眼差しが背後にあるのは言うまでもない。俳句巧者の作家だ。

・忘れ潮のひとつに海鼠死んだふり

中村 瑞枝

「忘れ潮」とは、海水が満ちた時、岩の窪みなどにたまったものが干潮になつてもそのまま残っていることを言う。そんな忘れ潮の一つに「海鼠」がいたのだ。しかも死んだふりをして。透徹した写生の眼が捉えた佳句である。

・ざわざわ風吹きやまず沖繩忌

山本ふさ子

今でも沖繩は基地問題でゆれている。その沖繩に寄り添う作者の心がこの句を作らせたのだろう。砂糖黍畑を渡る風の音だけでなく、沖繩の民の声も聞こえてくるようだ。

・蛇穴に入る呼ばるるがごとまつすぐに

吉野 民子

秋の蛇を詠んで秀逸の作。蛇が穴に入る一瞬をこれほどリアルに描いた作品に驚いた。「呼ばるるがごとまつすぐに」が眼目。神が呼んだのだろうか。まつすぐとんと消えたのだ。

・古ベンチひとりぼっちで秋座る

松永 真一

公園の一角に古びたベンチが一つ。そこに腰掛ける人もひとり。みんなひとりぼっちなのだ。しかしこのベンチは何故か存在感がある。下五の「秋座る」が寄り添ってくれている

ようで、このほっこり感に惹かれた。

・櫓より関所破りの蝶の影

山田 眞二

これは関所の高楼だろう。一瞬そこを過ぎる黒い影。黒揚羽だ。それにしても「関所破り」とは大仰なとも思うが、このくらい飛んで詩想を膨らますのもまた一興ではないか。

・友を追ふ雪駄のひびき在祭

松本憲資郎

前句とは対照的な一句。遠州地方の秋祭の様子がありありと見えて来る。太鼓を叩く人。笛を吹く人。「雪駄のひびき」が心地よい。これからも遠州の風土と向き合ってご精進を。

・又三郎の落とす木の実か木の実落ち

大平 悦子

「又三郎」は宮澤賢治の『風の又三郎』に出てくる不思議な少年のこと。空から落ちてくる木の実か又三郎の落としたものかと言う発想が面白い。これからも自由自在に挑戦していつて欲しい。

今年は上位にいい作品が集中し、選句が難航した。いろいろ傾向の異なる作品や、やや欠陥があっても将来性のあるものを選んでみた。「選は創作なり」と言ったのは高浜虚子だが、私もまたその通りだと思う。皆さんの作品と真剣に向き合う時間が得られたことに深く感謝している。これからも「継続は力なり」の精神を忘れずご精進して下さい。

最後に一つ。投句の前に必ず誤字、脱字、季重なり等、今一度ご確認を。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

追い越せない道が山越えて行く秋

浜北区

木俣とき子

追伸 雨の匂い同封します

南区

中津川久子

一羽来てまた一羽来る夕焼を見に

浜北区

岩城悦子

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

「入選」

踊る枯れ葉が浴びる月のスポットライト
東区 生田 基行

寒のなか白月を細い指が支える

ポケットに仕舞い込んだ今宵の上弦

地平線に赫味の月追えば家路

滲んでいる葉書の文字が北海道の雨
天竜区 伊藤 有美

誰も知らない時間があつて野蒜ゆるゆる伸びる

雨持つ雲のすき間の青空を金木犀匂う

指先に残るポップコーンの塩味も二人で観る
ロードショー

秘やかに秘やかに花開く青春の霜
中区 河合 文子

驟雨あがり白^{オシロイ}粉花の頬の涙

春風ひらりとかわして微笑^{わけ}んでいた理由

梅雨明け鍵ゆつくりはずして青空

通り一本入ると何と平穏寺町成子の佇まい
浜北区 木俣 史朗

わさび添え夏男には奴豆腐がよく似合う

落鮎へ陽を跳ねおどらせて過疎の籐

パズル解くロボットが首傾げるそんな夢

年賀状墨色豊かで今年も元氣

中区

戸田 幸良

すべての灯消えて天上の満月

幻の如くに飛び立つ蛍の余熱

南区

大庭 拓郎

夕散歩月の出に間に合う

生産に遠く暮らしてキャベツ選る

風の顔描き飛び立つハングライダー

誰かが来て誰かが帰る夕暮れの寺鐘の音

中区

小笠原靖子

少年蟬の声掴んで木から降りた

東区

飯田 裕子

大きな梅雨月高層ビルに引っ掛っている

山ぼうしの真赤な一樹君の手強く握る

コンバインが秋を刈っている平和な音

空蟬も一緒に埋めて春の種を蒔く

浜北区

岩城 悦子

露草や手を降る君が影ばかり

浜北区

木俣とき子

編み上げの脚半の舞ひ立つ盆の月まで

もつれて蝶々想い出せない夢のあとさき

花ローソク瑠璃に浮かぶは天の川

黄蝶たわむれ乍らコスモスへ沈む真昼

中区
倉見 藤子
星月夜ノートの余白に一行詩

貝風鈴グアムの風を呼びさます

老の春いつまで続く一輪草

浜北区
竹内オリエ
形見のアメジストに夏雲の誘惑

マツリカの香り漂う駅携帯かけて電車待つ

薄陽てらてら木々照らして風を呼ぶ

東区
長浜フミ子
四年目もシクラメン咲いて部屋明かるい秋

流れる様にメロディを歌う秋の合唱祭参加

散歩道いつもの猫にいつもの挨拶赤まんま咲く頃

浜北区
橋本まさや
三日月はカミソリのように青空の頬に刃を当てる

心電図の針のように上下乱舞する紋黄蝶

夏めくや少女は白きスカートを穿く

中区
藤本ち江子
ブランコの少年天蹴り上げて宇宙への夢

掌の錠剤数へて口に今日が始まる祝日の朝

池の小波に刻まれた満月に枯落葉の囁き

天竜区
岩本多津子
五十年を歩み来し高砂謡う

ジャズ一筋尊き人よ卒寿に乾杯

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

北区

シラスの匂い同封して宅配便届くよ

大道くにを

東区

望まぬ殺生で生きているいわし雲

周東 利信

ひと休みしたらと木陰の白い花の風

自問自答が燃えながら沈んでゆく

中区

檜にむせる鈍彫は怒髪で笑む

嘉山 春夫

中区

曲げた道曲がつた道に草萌る

竹田 道廣

この疎水が黄色い亀のふるさと

野に在れば野仏

中区

句のテーマ拾った文字で今日活きる

畔柳 晴康

東区

子供が亡夫の歳になる師走をむかえる

手塚 全代

又同じ場所で吸い殻拾い一つ散歩する

カラス鳴いて夕空

西区

鏡の中のおんなは今のわたしです

鈴木 あい子

中区

イルミネーションは紅く夜の街をいろどる

寺沢 純

帯を気にして出かける夕べの茶会

朝の風胸いっぱい吸って仕事初め

中区
戸田田鶴子
駅ごとに違う花咲くローカル線の旅

正倉院は森の中秋天平の香りあり

南区
中津川久子
止まりそう廻り出しそう風車の気まぐれ

風船かずらばちつと割って今日の私になる

南区
中村 淳子
山桜咲きみちている弟の三回忌

遠花火聞きながら赤子ねかせる

浜北区
浜 美乃里
水槽の亀と目が合ふ長寿の予感

あした
カラフルな園バスが行く楽しい朝

北区
原川 泰弘
冬は鍋囲み家族揃って息災

今年も謹賀新年とだけの賀状十枚

南区
水川 彰
巾広くダレてしまった飛行雲

夕日に染り工場の窓ガラス真赤

湖西市
石田 珠柳
ラッパに合わせリズムとる背中の子

北区
伊藤 美代
翳しみる貴女の絵手紙声弾む

南区
太田 静子
ガード下暖簾のように蔭垂るる

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

遠ざかる昭和の日々を語りつく
中区 岡本 蓉子

影ぼうしわらつている十三夜
北区 鈴木 章子

また明日影が去りゆく秋の暮れ
中区 花 信 栖

亡妻^{つま}の生れ替りかアサギマダラ蝶が訪ねてく
中区 高鳥 謙三
れる

探せども探せどもムラなく空の青さは
中区 神谷 敦史

民の意志格差に隠くれ読みちがい
中区 高橋 紘一

「もういいわ」錯乱の語尾搔き消して冬の雷
中区 河村 かずみ

静かなる眼差し注ぐ御本尊
南区 黒葛原千恵子

とらわれぬ形に素直な気持ち乗せて詠む
東区 しおくろう

工夫する眠れぬ対策プール・風呂等
中区 鴫多 健

神様は弱い所を見通すか水害の所に雨降り続
南区 白井 忠宏
く

今日は十三夜未来に夢を安曇野の秋
中区 錦織 祥山

古里に八十才乙女^{ヤツ}らと言祝^{イハ}ぎにけり
西 区 浜 名 湖 人

気配なし迷い込んだり秋茫茫
西 区 松 永 真 一

一人待つ坂下のバス停空缶を蹴る
中 区 宮 司 も と

グラスに透く琥珀色の想いが聖夜の祈り
中 区 山 内 久 美 子

山頭火も味わったという山の水をいたたく
中 区 渡 辺 憲 三

自由律俳句選評

鶴田育久

自由律俳句は『一つの段落を持ち一息で言える程度の一行の詩』をコンセプトとした二句一章の詩型を基本とする俳句です。五七五というかたちには縛られませんが、韻文ですから、内在律といってリズム、つまり言葉の響きを大切にします。

予選句として十五句を採りました。(○印二次予選句)

風の顔描き飛び立つハンググライダー

○一羽来てまた一羽来る夕焼けを見に

檜にむせる鈍彫は怒髪で笑む

○秘やかに秘やかに花咲く音春の霜

望まぬ殺生で生きているいわし雲

駅ごとに違う花咲くローカル線の旅

通り一本入ると何と平穏寺町成子の佇まい

○追い越せない道が山越えて行く秋

過不足なく一日を重ねていく金木屋

○掌の錠剤数へて口に今日が始まる祝日の朝

○追伸 雨の匂い同封します

誰も知らない時間があって野蒜ゆるゆる伸びる

三日月はカミソリのように青空の頬に刃を当てる

○寒のなか白月を細い指が支える

空蟬も一緒に埋めて春の種を蒔く

今回の市民文芸賞の選考は大変難渋しました。それは實に相応しい意欲作を期待していたのですが、今回は総じておとなしい作品が多く、選者としてはかたちに捉われない自由律俳句の特性を生かした作品を求めていたものですから、とて

も残念に思いました。今回はむしろ型破りなものを望むものです。

市民文芸賞に次の三句を推しました。

追い越せない道が山越えて行く秋

追い越せない道とは、人生を暗示しているもので、それを山越えていく秋と実に印象的に表現しています。生きているうちは、絶対に越されぬものですが、やがて秋から冬へと移る必然性を自分を通り過ぎて行くものの比喩として、巧みに漂泊(表白)しています。

追伸 雨の匂い同封します

作者の気持ちをさり気なく、追伸として、せめて雨の匂いを同封しますと、切ない想いに重ね合わせている作者の切なさを感じます。余分なことは言わず、追伸としたところが秀逸です。

一羽来てまた一羽来る夕焼けを見に

ごく当たり前の光景ですから、見逃してしまうような句材ですが、また一羽来るとしつかり観察しています。それも夕焼けを見に来るということです。夕焼けですから多分カラカと思いますが、赤と黒のコントラストで、夕景を美しいメルヘンチックな絵に仕立て上げています。

次位として三句

寒のなか白月を細い指が支える

細い指とは、何を指しているのか。はつきりしないところが面白いのです。このように後は読者の想像に委ねるところこそ、文学を文楽として楽しむ所以にもなるのです。

秘やかに秘やかに花咲く音春の霜

秘やかにのリフレインが利いています。

過不足なく一日を重ねていく金木屋

過不足なく一日を重ねていく、それは金木屋に重ね見る自分の生きるよすがなのかも知れません。

川
柳

〔市民文芸賞〕

棘のある言葉ひとつが残る皿

東区

竹山恵一郎

グーの手をそつと開いて仲直り

南区

鈴木千代見

コンビニの夜に孤独な葦揺れる

東区

しおくろう

新薬の代価に変わる母の汗

西区

竹川美智子

「入選」

翳す手に明日を夢見る風見鶏

中区

浅井 常義

普段着の亡母は笑顔で会いに来る

自慢話轍に残す影法師

少年の思い出宿す万華鏡

日陰でも自分らしさの実を付ける

おぼろ月小さなうそを隠してる

中区

有本 千明

秋晴れに湿った心天日干し
孫帰りひとり静かな時と居る

空耳の母が呼ぶ声曼珠沙華

天高くおひさまたたむ衣替え

スーパームーン無情の雨で棒に振る

西区

恭 子

満月を隠して知らんぷりの空

澄んだ空涙隠せる場所がない

涙目で仰いだ空の蒼いこと

泣きべそも茜の空が包み込む

年金で幸せごっこしています

中区

馬淵 よし子

褒められて一日耳がこそばゆい
親切に甘え足腰弱くなり

補聴器に内緒話をキャッチされ

鳥籠の鳥大空を飛びたがる

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

針運ぶ母の教えの指使い

中区

伊熊 靖子

この汗が明日に繋がる糧となる

自己主張少し虚飾の彩添える

保護の殻脱いで夢抱く独り立ち

母恋えば海鳴り母の声に似る

西区

竹川 美智子

父母居ないふる里に待つ吾亦紅

温もりが恋しく招く窓明り

譲られた座席が温い異国の地

へそくりで合わすと家計簿がわらう

東区

内山 敏子

ひょうたんのぶらりぶらりと秋最中

友情が握り潰した友の過去

月世界お伽ばなしが消えてゆく

耐え抜いたあの苦しみが今光る

北区

山口 英男

合槌は荷を背負わない程にする

どん底で夢のかけらを追いつづけ

錆びさせてならぬ五体へ捻子を巻く

西区

困難の一つや二つ買って出る

山田とく子

東区

穏やかな土壌で育つ子の素直

木村 民江

明日の夢かなえる努力苦にならぬ

恋してる心を覗くコンパクト

平凡な暮らしに謙虚忘れかけ

泣き虫も今は気丈夫なため役

お互いにジグソーパズルして夫婦

湖西市

漕ぎだせば風は稀なる夫婦船

石田 珠柳

中区

鎧ぬぎ素になってゆく酒二合

小島 松太

入門書ばかりが増える定年後

すんなりと心に響く糸電話

咀嚼した言葉が喉に引っかかる

菜の花畑深呼吸する青の空

南区

母白寿背負い軽さに胸詰まる

伊藤 信吾

浜北区

花嫁の光る涙に願う幸

鈴木 覚

生かされて父母の墓前に花たむけ

鍬を振る溢れた汗に満ち足りる

紅葉が見に来てくれと招く山

夕日背に農婦の影が長くなる

里の母サンマ一匹焼く便り

南区

鈴木千代見

手作りの母の手紙をそつと抱く

口下手の流れる筆が喋り出す

嬰兒の大人顔負け大放屁

西区

竹平 和枝

再起する夫と一緒に前を向く

独立し知った自由という孤独

黙祷の向こうに眠る八月忌

東区

竹山恵一郎

伸び縮みしながら丸く住む夫婦

真っ白な器に盛れぬ過去の悔い

いい人にされて仮面が外せない

南区

中津川久子

生命線夫にこっそり足しておく

グラスの底溶けないウソが透けて見え

諍いの無い世祈つて鶴を折る

東区

中村 雅俊

琴線に触れると心打ち解ける

人類のルーツ遺跡に知る文化

行く末を介護の父に教えられ

中区

馬渕 征稍

散歩道夫の唄う戦中歌

カップするピアス輝くハイヒール

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

喰い散らす^{ひなとり}鴨憎し木守柿

南区

水川 彰

牛蛙鳴き止みにけり稲刈らる

どんな子も先に死ぬなと母の愛

金取ミチ子

青汁を飲まされている野菜高

足腰の立たない分^{ぶん}を歌で生き

河村 幸

笑われて磨く技術と負けぬ意地

東区

宮澤 秀子

無関心関心に替え句が生まれ
葉牡丹の衣装ととのい春を待つ

東区

皺は増え年金は減るばかりなり

畔柳 晴康

もう一步踏み出せないで日の暮れる

災害やテロで地球は揺れている

中区

抱擁と折鶴のこす平和の手

中区

荒木いつか

心より身体が弱音吐いている

長生きの情報溢れ戸惑えり

中区

斉藤三重子

年寄もたまに威張ってみたくなる

疑いが検査検査でやつと晴れ

東区

しおくろう

子宝に恵まれやめたハイヒール

忍びよる老いの衰え巡る四季

高柳 龍夫

人生の旅は中程まだ傘寿

東区

鈴木すみ子

七十年戦争語る人わずか

浜北区

竹内オリエ

子に渡す三原色は無限大

解散後寂しさ連れて町をゆく

西区

鈴木 均

中区

鶴見 芙佐子

知った振りするよりせこい知らぬ振り

強がりへ貼った湿布が匂い出す

極太の出る杭と成れ我が息子

何度でもスタートライン引き直す

支え合い流した汗で育った子

中区

高橋 博

中区

寺田 文子

思い出を辿る旅路は杖二人

病院をはしごしている保険証

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

作ってもテレビ観ながら味どこへ
蛙の子こんなとこまで似なくても

中区

徳田 美知子

大あくび顔口だらけ眠気覚め
ゴミ出しをして近隣とご挨拶

西区

谷野 重夫

ごめんねのその一言が丸くする

中区

戸田 田鶴子

舌足らず君の言葉を鵜のみする

西区

渥美 進

出番無き鯨尺あり文化の日

東区

飯田 裕子

初蝶に目線ジグザグ連れてかれ

中区

戸田 幸良

吹き溜まり枯葉同志の持つ温み

中区

池田 みのる

意地張って一人に別の寒さ来る

ダイエットたった一キロ騒ぐ妻

東区

堀内 まさ江

余計なこと言わぬが花と口を閉じ

北区

伊藤 美代

古里に飛び込む母の膝がある

新酒樽舌で転がす味香り

浜北区

猪原 萱風

今日も又人生劇の役者する

夏料理得意な夫の割烹着
浜北区

岩城 悦子

友達とケンカしないが火付け役
中区

加藤 貴代美

ふりかけがないとご飯を食べない子
南区

太田 静子

伝統を守る市民に誇りあり
北区

加藤 典男

座敷までくれないに染め立冬の空
天竜区

太田 初恵

歳だよと逃げる理由は身の保身
中区

加藤 弘

行く年も来る年もある独居かな
南区

大庭 拓郎

一升餅背負う歩きに拍手わく
浜北区

金子 眞美子

庭すみに雨にうたれしねじり花
中区

岡本 蓉子

盆帰りテールランプの数珠光る
中区

神谷 敦史

孫連れて生き生きしてる爺と婆
東区

影山 京一

リハビリの健康体操日々務む
中区

川上 とよ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳											
小	説	評	論	随	筆	詩	短	歌	定	型	俳	句	自	由	律	俳	句	川	柳
卒寿でも胸ときめかす大相撲	南区																	高鳥謙三	
沈黙は金胸の内溢れそう	中区																	高橋紘一	
満月をみる目年ごと変りゆく	北区																	高山功	
法師蟬夏の暑さに別れ告ぐ	東区																	高山紀恵	
傷ついた羽を休める母の胸	西区																	田中恵子	
真夜中に雷一つ目が醒める	南区																	辻村栄市	

当中区
当て外れ老後に生きる独り道

手塚 美誉

中区
免許証賞味期限は大丈夫

仲川 昌一

南区
自分史を思い巡らし書いてみる

寺田 喜代子

中区
散歩中会話はずんで雨に逢う

中村 禎次

中区
過去形で話の弾む緑陰下

寺田 久子

東区
良い事をして行動が軽くなる

長浜 フミ子

西区
長患いカメラ飲むのが上手くなり

遠江 竹庵

東区
儘ならぬ手足の動き老の道

名倉 太郎

南区
白い鳩この頃羽先黄ばんでる

ど ぜ う

北区
秋最中腰をかばいて遊歩道

野末 法子

中区
ほんのりとフォークダンスで染めた頬

戸塚 忠道

浜北区
恋の花散らすばかりの若き日々

橋本 まさや

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

へらず口たたき存在示す人

西区

浜名湖人

お悔み欄自分の年と比べ見る

中区

山下 宏

ケアハウス若いと言われ笑みこぼる

浜北区

浜 美乃里

新調の眼鏡字も見え皺も見え

中区

米澤寿鶴子

鍬入れの蚯蚓くねくね目覚め瞬間

西区

晴 詩

熟し柿風に揺れたる廃虚の地

中区

平野 旭

年とれど介護受けまいスクワット

東区

馬塚 五朗

居座ってしがみついてる空蟬よ

西区

松永 真一

川柳選評

今田久帆

今年は昨年より応募者数が六名増えた九五名の四六一句の中から私の心を捉えた二〇句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきます。

川柳を始めてから、何げない一日のちよっとした出来事が心に留まるようになってきました。何げなくやり過ごしていた日日の一片を切り取って句にすることにより、日常を別の角度から覗くことができるようになったのです。角度が違くと、こんな一面もあったのかという気付きが生まれます。そんな気付きを五七五のリズムに乗せると川柳に仕上がっていきます。その時は必死に想像している状況にどっぷり浸かっているの、他の人も理解してくれるだろうと思っているのですが、一、二、三日寝かして読んでみると、意味がわからないこともあります。そんな時は前後を入れ替えたり、他の語に変えてみると、自分の思いに近い句に近付いていくと思います。

市民文芸賞予選句

グラスの底溶けないウソが透けて見え

咀嚼した言葉が喉に引っかかる

盆帰りテールランプの数珠光る

保護の殻脱いで夢抱く独り立ち

補聴器に内緒話をキャッチされ

鎧ぬぎ素になつてゆく酒二合

孫帰りひとり静かな時と居る

どん底で夢のかけらを追いにつづけ

普段着の亡母は笑顔で会いに来る
へそくりで合わすと家計簿がわらう
恋してる心を覗くコンパクト

花嫁の光る涙に願う幸

お互いにジグソーパズルして夫婦

笑われて磨く技術と負けぬ意地

母白寿背負い軽さに胸詰まる

琴線に触れると心打ち解ける

市民文芸賞

◎棘のある言葉ひとつが残る皿

棘がなければ、そのまますりなり受け入れてしまうが、棘があると口当たりが悪く、食材を十分に味わうことができないので、最後まで残り、その意味を考えさせることになる。「棘」がうまく使われている。

◎グーの手をそつと開いて伸直り

怒りのままに拳を振り上げていては対立したままになる。まず拳を降し、掌を開いてお互いに握手して、その温もりを感じると、互いがぐつと近くなる。「手を開く」をうまく使って意味を深めている。

◎コンピニの夜に孤独な葦揺れる

二四時間営業のコンピニがいたる所に存在し、夜の活動を可能にしている。夜の明りに引き寄せられた若者がそこでたむろしたり、孤独な青年が腹を満たしたりして脱げ殻を置いていく。

◎新薬の代価に変わる母の汗

難病をわずらう私の治療費のために、母は必死になって働いているが、母が苦勞して稼いだお金は、私の飲む新薬の薬代として、すぐに消えていく。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸 第63集』作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品（未発表）を募集して、「浜松市民文芸第63集」を編集・発行します。

二 発 行

浜松市

三 編 集

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

四 応募資格

浜松市内に在住・在勤・在学されている人（ただし、中学生以下は除く）

五 募集部門及び応募原稿

部 門		枚数等（一人）	部 門		枚数等（一人）
小説（戯曲を含む）		50枚以内（一編）	児童文学		30枚以内（一編）
評論		25枚以内（一編）	随筆		7枚以内（一編）
詩（漢詩を除く）		50行以内（一編）	短歌		5首以内
定型俳句		5句以内	自由律俳句		5句以内
川柳		5句以内			

※ 原稿用紙はB4判（四〇〇字詰め、縦書き）を使用してください。

※ ワープロ・パソコン原稿（二〇字×二〇行・縦書き）A4判でも結構です。

六 選 者

選者の氏名は、平成二十九年七月配布（予定）の「浜松市民文芸第63集」の作品募集要項に記載します。

七 募集期間

平成二十九年九月一日（金）から十一月二十日（月）まで。（必着）

八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
 - ② 部門ごとに、規定の**応募票(コピー可)**を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所文化政策課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
 - ③ **応募原稿の書き方については、別紙募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。**
 - ④ 応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、82円切手を貼って**、作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品のジャンルの数に関係なく一通で結構です。
 - ⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
 - ⑥ 応募原稿は必ず**清書したもの**を提出してください。
 - ⑦ 作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。
 - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
 - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとり願います)
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で平成三十年二月初旬までにお知らせします。
- 市民文芸賞及び入選の作品は、平成三十年三月発行予定の第63集に掲載いたします。
- 市民文芸賞の方には、平成三十年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
- 市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸第63集」を一部贈呈いたします。
- 購入される場合は、一部五〇〇円です。

九 発表

十 表彰

十一 その他

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒四三〇〇一九一六

浜松市中区早馬町二一 クリエイト浜松内

☎〇五三一四五三一三九三三

「浜松市民文芸」第63 集応募票

(短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに◎を)

部 門		小説・児童文学・評論・随筆・詩・ 短歌・定型俳句《旧かな・新かな》・ 自由律俳句・川柳 (部門に1箇所○をお付けください)		小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください		原稿枚数 (ページ数) 枚	
ふりがな							
氏 名				年 齢		歳	
ふりがな				(平成29年11月20日現在)		男 ・ 女	
発 表 名 ペンネーム				名 称 所在地			
住 所		〒				電 話 番 号	

文芸館使用欄	受付月日	受付番号	
--------	------	------	--

編集後記

春来る童子の群れて来る如く

瓜 人

春の足音に耳を澄ませ、春の兆しに心弾ませる頃となりました。今年も、「浜松市民文芸」第六十二集を春の到来と共に皆様のお手元にお届けいたします。多くの方々のご厚意に支えられ発刊の運びに至りましたことを、心からお礼申し上げます。

さて、今回投稿いただいた作品総数は、一、四三〇点、投稿者数は延べ五七二人でした。投稿者の年齢も十六歳から百歳と幅広く、ご高齢の方の投稿が大変多いのも「浜松市民文芸」の特徴といえます。また、五十代六十代の方や高校生の投稿が増えてきたことは、今後の「浜松市民文芸」の発展につながるうれしい傾向です。

いずれにしても、年代や性別等を越えて、どの作品にも皆様の熱意と瑞々しい感性が感じられ、感心するばかりです。選者の先生方が作品の優劣をつけることに苦慮し、今回は質がたいへん高かったと言っておられたことも印象に残っています。

思うに、「書く」という行為は、苦しみを伴う作業といえるかもしれません。否が応でも自分を見つめなければなりません。時に自分をさらけ出し、問わなければならぬ。だからこそ、読む者の心を動かし考えさせる。そして、様々な壁を乗り越えて一つの作品が生み出された時、自分の分身ともいえる作品の完成は、喜びと共に次への創作の意欲へとつながっていくのでしょうか。こうして、毎年、多くの方々に投稿していただけるのは、皆様に飽くなき自分への挑戦の思いがあるからだと思えます。

折しも、この第六十二集の表紙を飾った酒井伴治氏作の

壺を拝見しながら私は、こんなことを考えました。この壺の中に、いろいろな思いを言葉に託して投入し、じつくり寝かせて熟成させ、やがて時期がきたら取り出し掌にのせるのです。そして、その手で言葉の布を紡いでいくのだと。次集では、どんな作品に出合えるのでしょうか。また、楽しみにになりました。

今後とも、この「浜松市民文芸」が、市民の皆様の文芸発表の場として活用され、皆で感動を分かち合う場となりますことを願っております。

最後に、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、御協力に厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館 館長 下石精子

浜松市民文芸 第62集

平成二十九年三月十八日 発行

発行 浜松市
(公財)浜松市文化振興財団

編集 浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一

☎〇五三一四五三三三三三

印刷 杉森印刷株式会社



アクトシティ浜松友の会

vivace club

アクトシティ浜松友の会「ビバーチェクラブ」
芸術をもっと身近に

会 員
募集中!!

アクトシティ浜松を中心に繰り広げられる芸術を皆さまにより身近なものとしていただけるよう発足したのが、アクトシティ浜松友の会「ビバーチェクラブ」です。

世界中から集まる一流のアーティスト、エンターテナーが創り出す感動のステージをお楽しみください。



様々な公演のチケットが24時間オンラインで購入できます。

HCFオンラインショップ

<http://www.hcf.or.jp/>

= システム手数料 0 円 =

= 発券手数料 0 円 =



2017年5月よりタブレット端末、スマートフォンからもチケットの購入ができます。

チケットの委託販売も受付中。

お問い合わせ



公益財団法人
浜松市文化振興財団
Hamamatsu Cultural Foundation

■アクトシティ浜松友の会

電話 053-451-1115 ✉ vivace@actcity.jp まで

■HCFオンラインショップ

電話 053-451-1131 ✉ web@hcf.or.jp まで